一月十五日増刊

女學世界

光榮ある人生の春

第十一巻第二號



明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十四年一月十二日印刷納本（毎月一回十八日印刷納本）

博文館發行

子寶

出産の贈り物としては、此上もなき
奇麗で重寶なものであります。

巖谷小波先生の編、畫は杉浦非水先生の描かれたるもので、善盡し美盡し、我國に未だ見ざる立派な畫本なり。



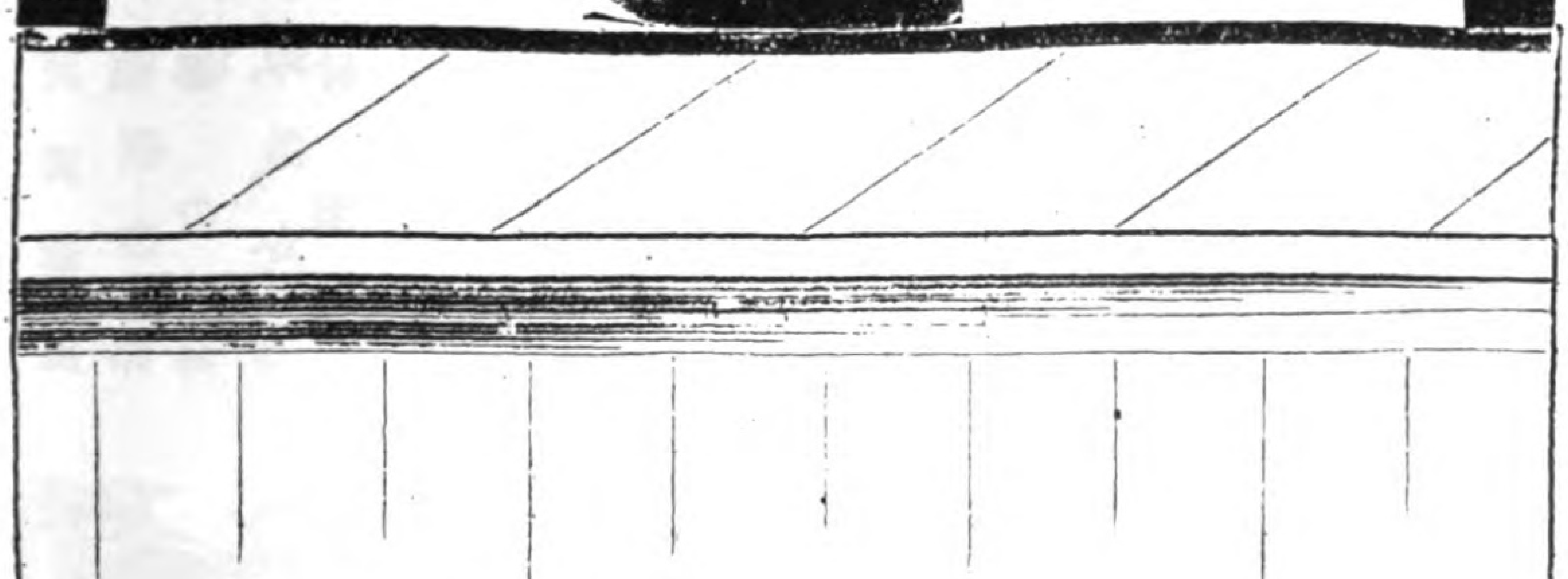
「要するにこの本は、子供の誕生の當時から、修學の初めに至るまでの間の、重なる出來事を書き集むる爲めの一種の畫帖であります。」

（正價一冊金五圓…量目四百八十匁、小包料內地廿四錢）

東京日本橋駿河町　振替貯金東京三〇〇番

三越呉服店

女學世界 第拾壹卷第貳號 光榮ある人生の春目次



人生の春



立身出世の活法

◉蘆川忠雄著

洋裝四六判全一冊

新處世術

定價金四拾五錢

郵稅金六錢

本書は著者獨特の健筆を揮つて、青年子弟のために、立身出世の活法を示したる新著なり、學校卒業後の青年にして、處世の術を解し得ず、他人と交際しても圓滿に出づること能はざるやうにては、折角會社官廳に奉職する身となりても、失敗蹉躓して一身の不利を見るに至るべし、若し一たび本書を繙讀して、處世應對上の急所根本とする所を學び得て、之を實際に活用せば、其圓轉滑脫と斬新奇拔の頓才とを修養して立身活躍の光明忽ちに開くに至らん

發賣元 東京本町 博文館

女(甲の一)

星野麥人君編

類題百家俳句全集

全四冊
洋裝四六判紙數各約七百五十頁
每卷故人筆蹟數葉挿入

俳句の天地拓けてより三百年、此間に輩出せる大家名人百家を選んで彪然たる此の句集は成れり。守武宗鑑以降、芭蕉の元祿、蕪村の天明を經て近く明治に及ぶ。之れに依て各家の特長を窺ふべく、時代の風調を悟るべく、かれて又俳壇の歷史を說かずして語るものたるべし、即ち謂ふ俳人の座右常に必須必要の書と。

夏之部…正價六十五錢　郵税八錢
秋之部…正價六十五錢　郵税十二錢
冬之部…正價六十五錢　郵税八錢
（續刊）……◁春之部……近刊

女（甲の二）

今井柏浦君選

榊原蕉園女史口繪

古今女流俳句集

全壹冊
菊半截美本
貳百五十頁
正價卅五錢
郵税四錢

女流の俳句は、男子の俳句に較べて放膽豪宕の氣に乏しいが、纖細、優婉、溫情自然に溢る、天眞流露の趣は、到底男子の遠く及ばぬ處がある、畢竟女子は男子に比べて、思想の緻密なると共に、感情の溫柔なる處が多いから、俳句なり歌なり、女性的と男性的とは、歷然した區劃があつて、其觀察點も抒情の徑路も違つてゐる、即ち女性的俳句の特色は、男性的よりも多く同情に富める點にある。この書に蒐めた俳句は、古今を通じて女流の佳吟名什約三千其秀逸なるものに至つては優に男子を凌駕するものがある、俳句を學ばんとする婦女諸君は固より女性の俳句を究めんとする人は是非一本を備へねばならぬ。

東京本町　博文館　振替口座東京二四〇番

にきびとり……化粧水

本品は有名なる獨逸専門大家の調劑にして多年の經驗と最新の學理により精製せる化粧水なり常に本品を愛用すればいかなる吹出ものと雖ども二三瓶にて必治は實驗者の證明なり幸に御試用あらん事を乞御一報次第速に郵送す定價郵送料共一瓶三十錢（但郵便切手は一割增）

化粧水パピロン 發賣元 東京淺草千束町二丁目二三五 小林榮進堂

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本●東京市下谷區上根岸町 衛生書院

男ちゞれ 女くせ毛 赤毛

は何程の難毛も直に根本的矯正黑化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に教授し誓て美髪に治して差上升

東京麻布區材木町 岩阪澄子

梅どく りん病 ぢ疾 わきが 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人科

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横●朝八時より夜九時迄

中央醫院

子宮諸病 子なき人 月やくとまりたる病 ヒステリー 血の道 にきび

梅どく諸病 りん病 消渇 わきが ぢ た蟲等

生殖器病 神經衰弱記憶力減衰萎縮遺精早漏夢精發育不充分症等

▲病狀を記し郵券六錢を送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京淺草區瓦町廿八番地淺草橋通り瓦町電車停留場横

中央藥院

謹賀新年

（登錄商標）

玉おしろい



發賣本舗

東京市京橋銀座三丁目

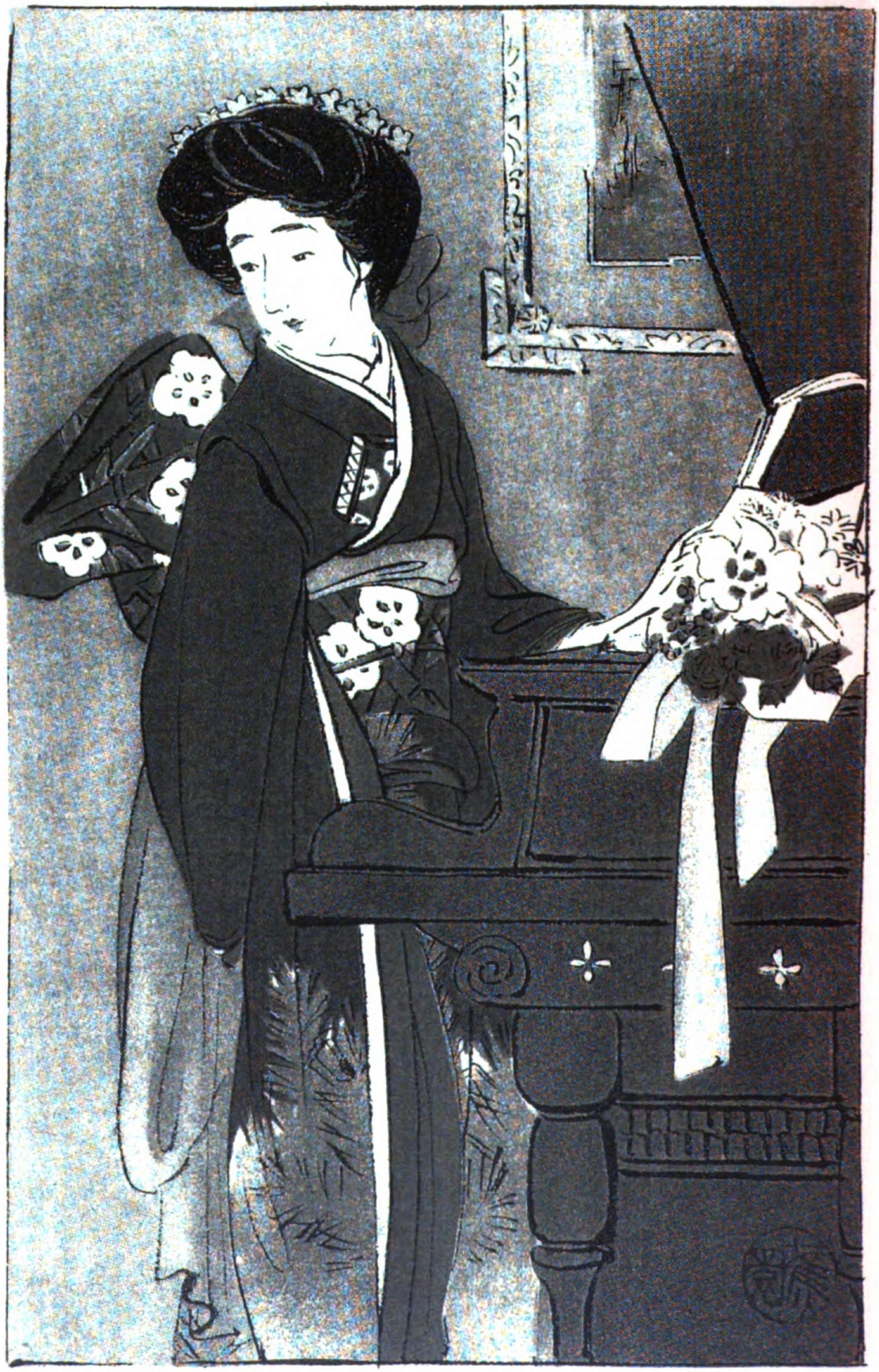
松澤商店

女（甲の三）


最上醬油
元祖
開業貳百六拾七年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番　振替口座五〇二一一番

(甲の四)

青春の誇り



榊原蕉園筆

婦人畫報增刊

現代名流婦人

十一月一日發行　臨時增刊一冊廿五錢　郵税貳錢

畫報

母の留守　彩色石版畫　井川洗厓筆

▲九條公爵夫人と大谷伯爵夫人
▲毛利公爵母堂と鍋島侯爵夫人
▲二條公夫人と鍋島侯嗣子夫人
▲岩倉公未亡人と大山侯爵夫人
▲德川伯爵夫人と小笠原伯爵夫人
▲前田侯爵夫人と松原伯爵夫人
▲阿部伯爵夫人と岡部子爵夫人
▲戸田伯爵夫人と寺島伯爵夫人
▲伊達侯爵夫人と池田侯爵夫人
▲德川侯爵夫人と四條侯爵夫人
▲大隈伯夫人と澁澤男爵夫人
▲尾崎氏夫人と新渡戸博士夫人
▲後藤男夫人と金子子夫人
▲德川侯夫人と松方侯嗣子夫人
▲千家男夫人と目賀田男夫人
▲三井男爵夫人と佐藤男爵夫人
▲樺山伯爵夫人と長谷川子爵夫人
▲濱尾男爵夫人と鳩山博士夫人
▲跡見花蹊女史と三輪田眞砂子女史
▲下田歌子女史と棚橋絢子女史
▲山脇房子女史矢島楫子女史嘉悅女史
▲閨秀書家跡見奧原野口榊原吉田女史
▲音樂家幸田柴田安藤神戸頴木橘女史
▲三宅花圃女史と宮川井口兩教授
▲鷲山井上兩女醫と書家多田合女史
▲佐方櫻井武田松岡の四女史
▲琴曲名手山室小井出町田丸田女史
▲喜多都築武田女史と北川女史
▲萩原看護婦と山階明子女史

讀物

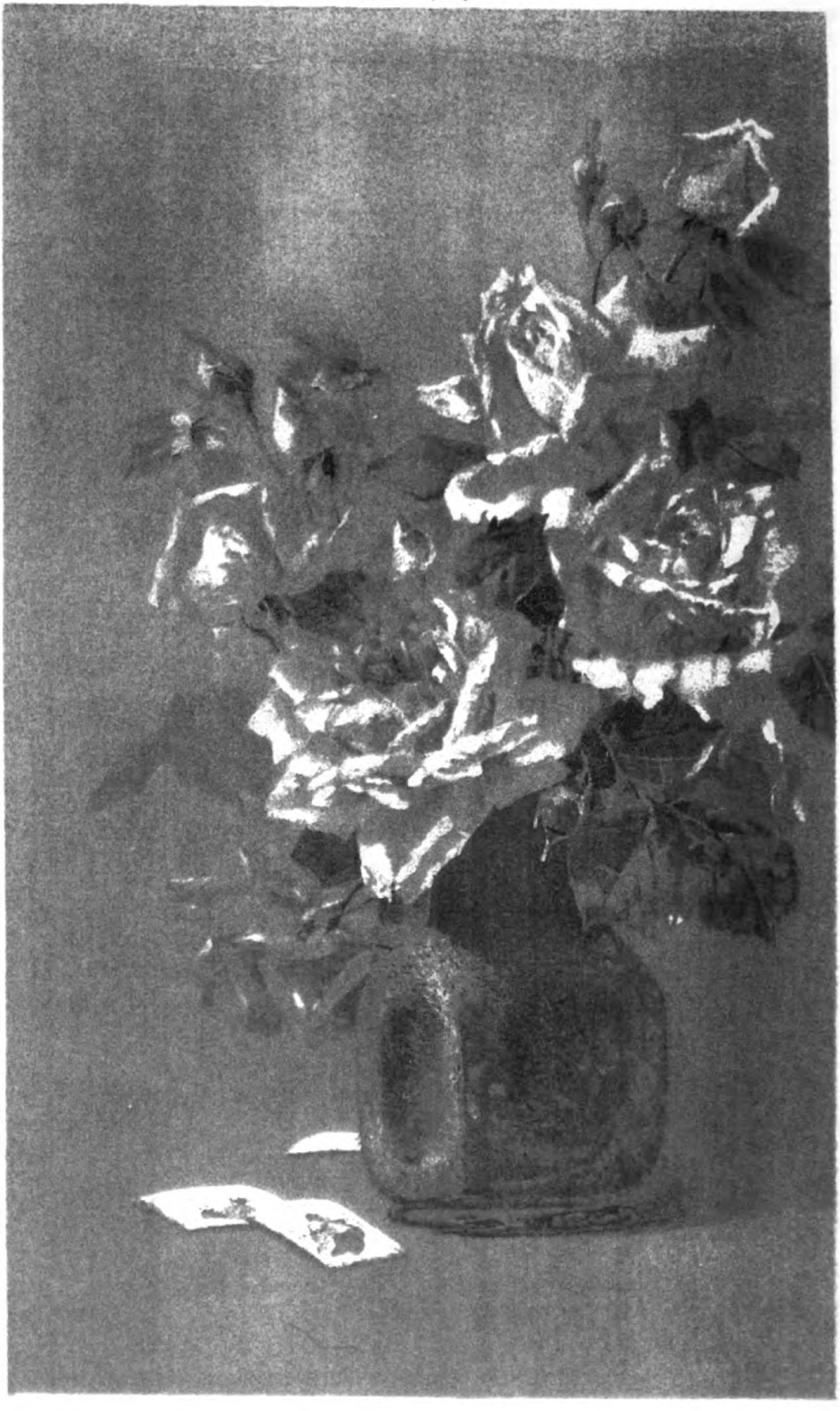
⊙昔時を思ひ出で丶……跡見花蹊
⊙辛酸は我身の教訓……三輪田眞砂
⊙語る事もなき經歷……棚橋絢子
⊙酒に泣いた十年間……矢島楫子
⊙死後の名……下田歌子
⊙忍耐と實地……山脇房子
⊙怒るな働け……嘉悅孝子
⊙音樂と家の空氣……幸田延子
⊙獨逸の三年……安藤幸子
⊙橘糸重女史と神戸絢子女史……
⊙私の苦しい經驗……頴母木駒子
⊙教授も修業の一つ……山室千代子
⊙琴彈いて五十年……町田杉勢
⊙師匠に教へられしま丶……丸田島能
⊙早くから上京を……小井出とい子
⊙南畫より動かぬ……奧原晴翠
⊙前半生……[illegible]見玉枝
⊙畫の旅……吉田ふじを
⊙我師榊原蕉園……小蘇女史
⊙亡き兄の爲めに……三宅花圃
⊙書くは私の癖……小金井きみ子
⊙英語を覺えた若い時……櫻井ちか子
⊙書を讀む女……武田きん子
⊙私の受けた精神教育……宮川すみ子
⊙父の急死……佐方鎭子
⊙嬉き事悲しき事……井口あくり
⊙看護婦二十年間……萩原竹子
⊙納豆賣までして……北川はつ
⊙圍碁修業……喜多文子　都築よね子
⊙醫師として……鷲山彌　井上友子
⊙其他松岡止波子、野口幽香子、山階明子
⊙多田合子小松崎こと子諸氏の談話如山

東京飯田町四町の四　東京社　電話番町二三三八番　振替口座一一八一八

女(乙の一)

女（乙の三）

長春



日曜畫報

□ 四六判四倍大本◎文（光澤紙）廿四頁● 寫眞版數十個刷込本文二色乃至六色刷 正價金十錢 郵税一錢 □

第一卷第三號（春芝居號）一月十五日發行

女（西の一）

博 文 館

故新岡久賴君筆

いろは三體帖

半紙判折本　正價四拾錢　郵税四錢

本書の書體は下の如し當今婦人の手簡詠歌の認め方には斯くの如き書體尤も歡迎せらる。



博文館發行　東京本町

水田榮雄君譯述

男の好く女　女の好く男　兩性觀

男に取つては、女は不可解の魔性なるが如くに、女に取つては、男はスウフヰンクスの謎也。女を解せんと欲する男は本書を讀め!!!本書は女性の顯微鏡也、不可解の魔性は、此顯微鏡に依つて正體を顯はす。男を解せんと欲する女は本書を讀め!!!本書は男性の淨玻璃の鏡也、スウフヰンクスの謎は此淨玻璃に映じて忽ちに解けん。結婚前の青年淑女は本書を讀め!!本書は青年淑女に幸福なる配偶の選擇を教ゆ。結婚後の紳士貴夫人は本書を讀め!!!本書は紳士貴夫人に如何にして幸福の家庭を作る可きかを示し、父には兒女教養の秘訣、母には賢母の秘傳を諭ゆ。本書の如きは上下貴賤貧富老弱に係らず男女必讀の珍書也。

洋裝三六版美本
紙數二百五十頁
定價金三拾錢
郵税金四錢

東京本町　博文館　振替口座東京二四〇番

女(丙の二)

女（丙の三）

女（丙の四）

寒汀



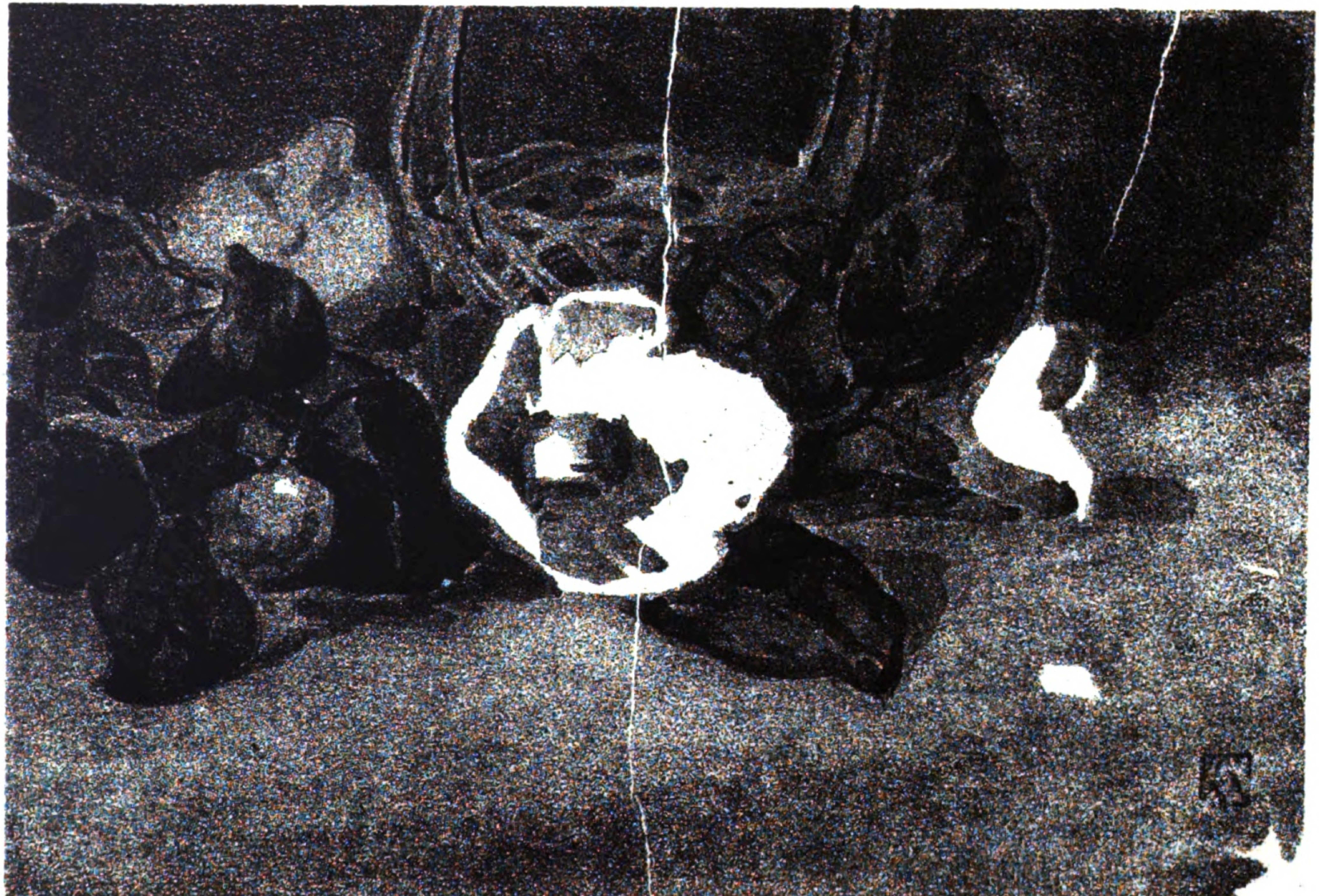
加藤南山筆

雪の日



大下藤次郎筆

寒椿



赤城泰舒筆



織田一磨筆

家庭整理の指導——

當代第一流の女子教育家編著

家庭百科全書

全部五十册——每月一回發行

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女子學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

和裝美本◎紙數各二百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫數十個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

第一編 新家庭訓 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著
第二編 四季料理 宮中臣民府御料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著
第三編 裁縫指南 女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著
第四編 和洋菓子製法 東京割烹會講師 龜井まき子女史著
第五編 茶道と香道 水原翠香女史著
第六編 諸流生花指南 琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著
第七編 育兒の務 醫學士 田村貞策君 朝夷孤舟君 共著
第八編 簡易治療法 新潟縣高田高等女學校教諭 藤井靜子女史著

第十四編 女德の養成 前田長太君著
第十五編 家屋と庭園 内山正如君著
第十六編 魚鳥家畜の飼養 農業世界記者 鹿野化骨君著
第十七編 女子作文法 遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著
第十八編 子女の教養 私立高等女學校長 棚橋絢子女史著
第十九編 家庭の趣味 文學士 大森兜山君著
第廿編 家庭遊戲法 高橋忠次郎君 松浦政泰君 共著
第廿一編 書道手引 欧道書道專攻大和會々長 井田秀生君著

東京日本橋 發行所 販賣用電話 本局二六二〇

女（丁の二）

婦女必讀の大全書

第九編 **禮式と作法** 女子高等師範學校教授 佐方鎭子女史著

第十編 **惣菜料理** 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著

第十一編 **編物指南** 女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十二編 **婦人の生理と衛生** 青山學院教授 牧野濤子女史著

第十三編 **教育お伽噺** 少年世界記者 木村小舟君著

第廿二編 **歌の手引** 大和田建樹君著

第廿三編 **刺繡術指南** 刺繡術專門 磯村大次郎君著

第廿四編 **摘み細工指南** 山田興松君著

第廿五編 **新式化粧法** 藤波芙蓉君著

第廿六編 **室內裝飾法** 近藤正一君著

第十七編 **衣服の調整** 石崎篁園君著

第十八編 **洋樂手引** 東京音樂學校助敎授 前田久八君著

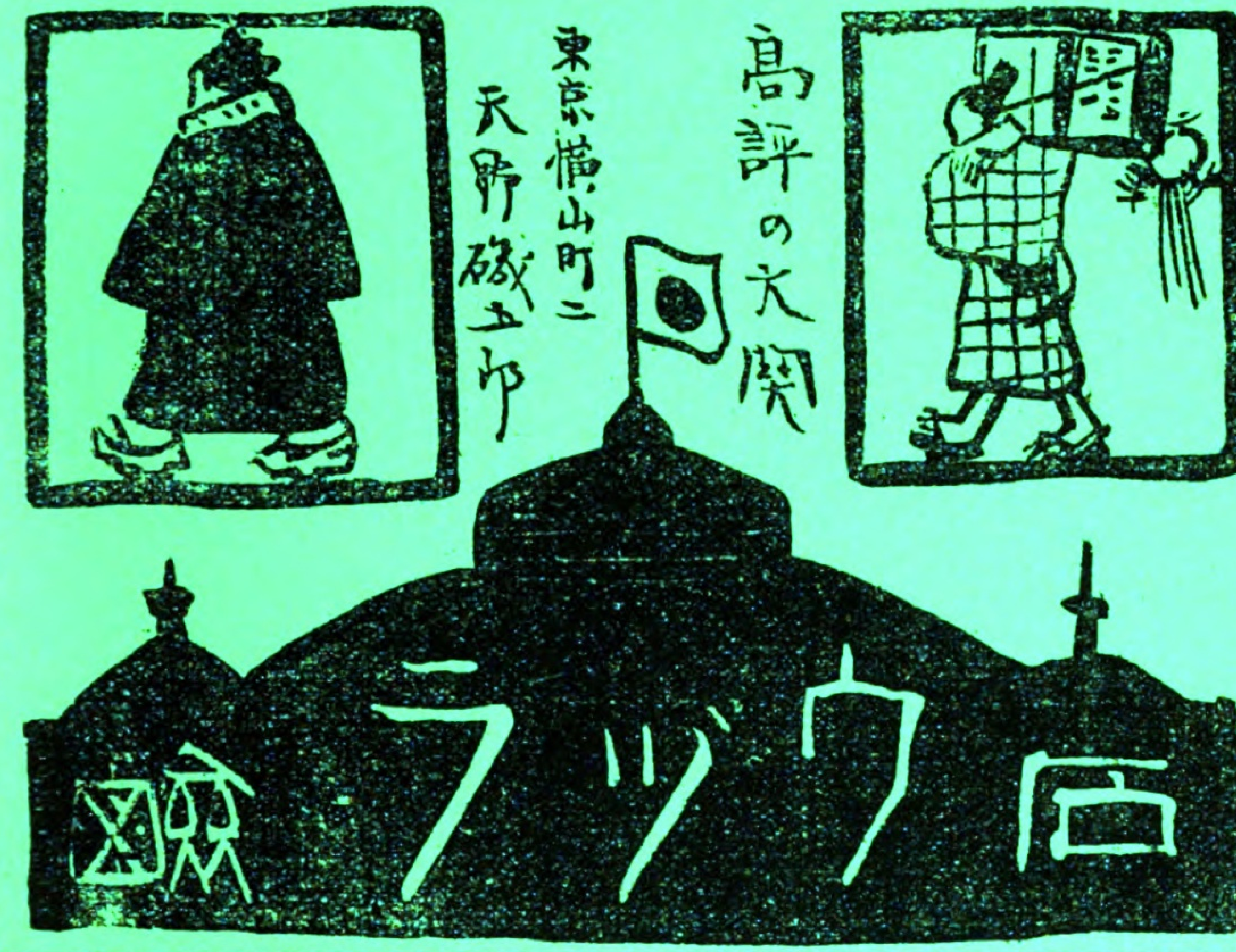
●總說 音樂とは何ぞ〇音樂の起原〇音樂の發達〇音響大要〇音樂と家庭●樂典篇 樂譜〇拍子〇拍數計算法〇鍵板〇變化記號〇音階〇音程〇諸記號及樂語●聲樂篇 唱歌〇聲樂の種類●器樂篇 樂器總論〇樂器の種類〇オルガル〇ヴアイオリン〇ピアノ〇器樂の種類〇著名音樂家小傳

第十九編 **兒童訓話 母の智識** 少年世界記者 木村小舟君著

本書は子女の敎養に資せんが爲に、四季日常の科學問題を、最も趣味ある筆致を以て記述し、之に加ふるに適切なる寓話、及び唱歌をも挿入したれば、讀聞の裡知らず識らずに、一般の常識を涵養せしむべく編纂したり、世の母姉諸君は必ず一本を備へざるべからず。

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座東京二四〇番

女（丁の三）



脚氣胃腸病者に告ぐ

村井弦齋先生命名 糠精

大…金四拾錢、小…金拾七錢 送料各十錢

純糠精……五日分金四拾五錢 送料四錢

脚氣に糠の有効なるは最早斯界の定論とも云ふべく現に時事新報紙上志賀醫學博士の脚氣と糠報知新聞紙上村井弦齋先生の廣告及鈴木農學博士の脚氣と糠何れも皆其有効を證明せられたり而して糠は新く無砂等面倒なる定規あり本品は化學を應用して不用物質を除き其有効成分のみを美味なる製品となせり本品製造の動機としては昨年來臨時脚氣病調査會の囑托を受け脚氣試驗鷄飼養に從事中發見せるものにして其特効を保證す村井先生は本品を賞賛して『糠精』と命名せられたり

特約取次所 東京丸之内 報知社代理部 〜〜 東京京橋 實業の日本社代理部

販賣元 東京麻布霞町 電芝四壹八貳 南信堂藥舗 振替口座東京七八五〇番

●賣捌店は全國到る處の藥店及食料品店に有御最寄にて御購求乞

千代田女學校の同窓會



前列右より有島武氏夫人、有地男爵夫人、寺內總督夫人、梅上連枝裏方、大谷法主裏方、（校長）大谷新法主裏方、木戶侯爵夫人、平田內相夫人、小澤男爵夫人、佐野男爵夫人、橋本圭三郎氏夫人、其他後列名流婦人令孃

令嬢鑑（二）



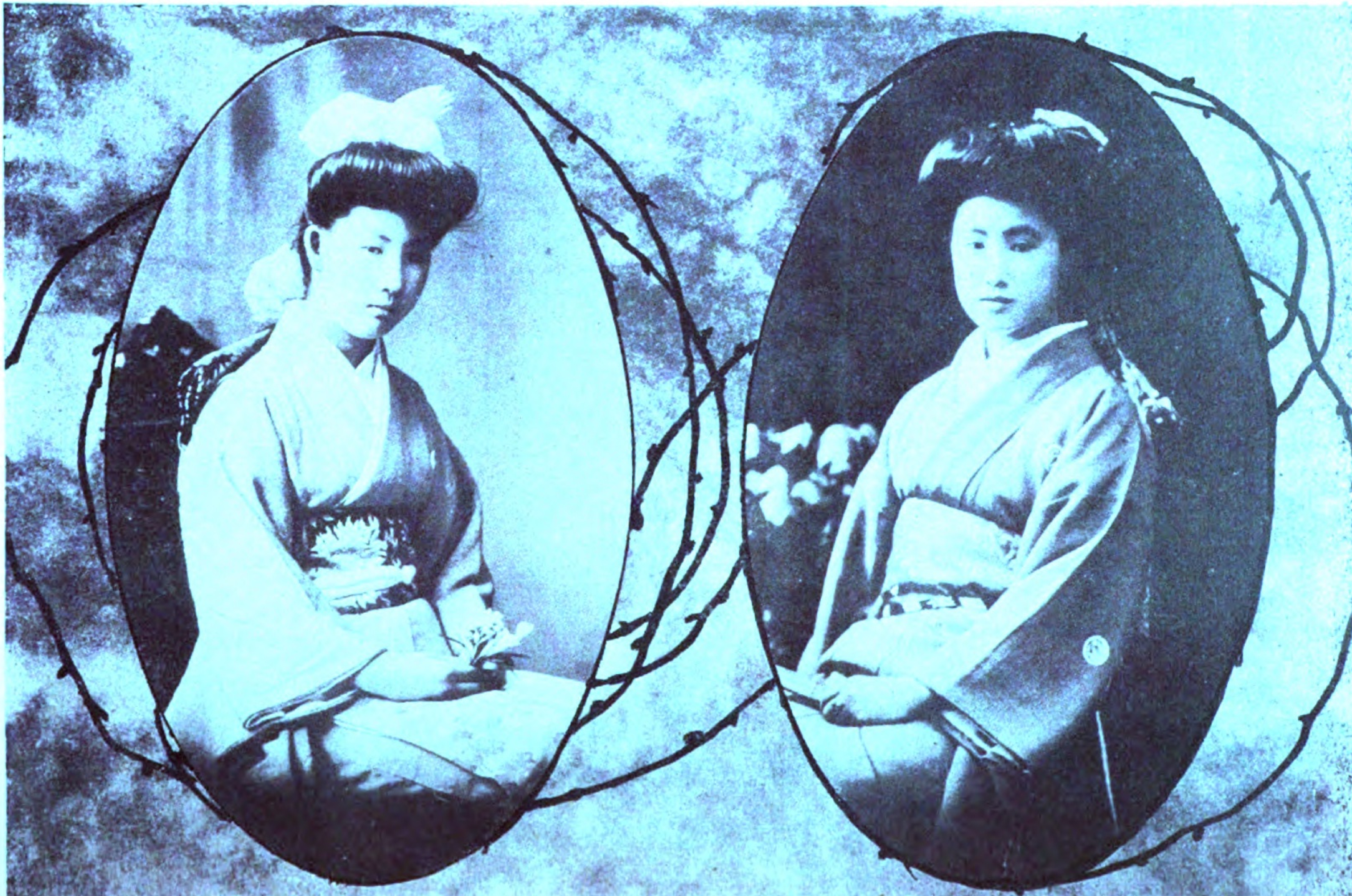
上圖、子爵 山内豐尹氏令嬢禎子。 下圖、衆議院議員 金子元三郎氏令嬢みよ子

玉の御影



本圖は久邇宮邦彥王殿下の二王女にましまして御姉君は第二王女信子殿下御妹君は同第三王女智子殿下

初春の令孃



右、子爵毛利元敏氏令孃泰子
左、子爵毛利元忠氏令孃美保子

★

明治四十四年度の新學期入學者は今より準備に著手するの必要あり

東京に遊學せんとする者は本書に就き慎重なる調査を要す

最近調査

女子東京遊學案内

文學博士 醫學博士 森鷗外君序文
巖谷小波君序文
坪谷水哉君序文
今井翠巖君著

(附錄) 最新東京實測明細地圖

洋裝四六判美本
紙數七五〇頁
正價五拾八錢
郵稅拾錢

(口繪)……各學校寫眞版十五頁挿入

((萬朝報評))

曩に好評を博せる『男子東京遊學案内』の姉妹書にして、またこれ好評を博すべきものたらずんばあらず、苟くも都下の學校養成所講習所私塾と稱するものはその何種たるを問はず網羅して痒き所に手の届きたる心地す……

森鷗外君 巖谷小波君 大町桂月君序
今井翠巖君著

最新増訂 男子東京遊學案内

(附錄)····最新東京實測明細地圖
四六判美本紙數八五〇頁 正價七拾五錢郵稅拾錢

本書は四十二年三月を以て初版を出し東都遊學者の便に資せしが多大の好評にて一時に數萬部を賣り盡し久しく讀者の望みを缺きたりしが今玆に本書に訂正を加へ最近に於ける各學校の興廢盛衰を明かにし且つ著者が新に得たる知識に依り案内記を增補し以て四十四年度新學期に就學せんとする者の好指針たらしむべく改竄せり

◁東京 博文館 本町▷

女(弍の二)

女(戊の二)

令嬢鑑（三）



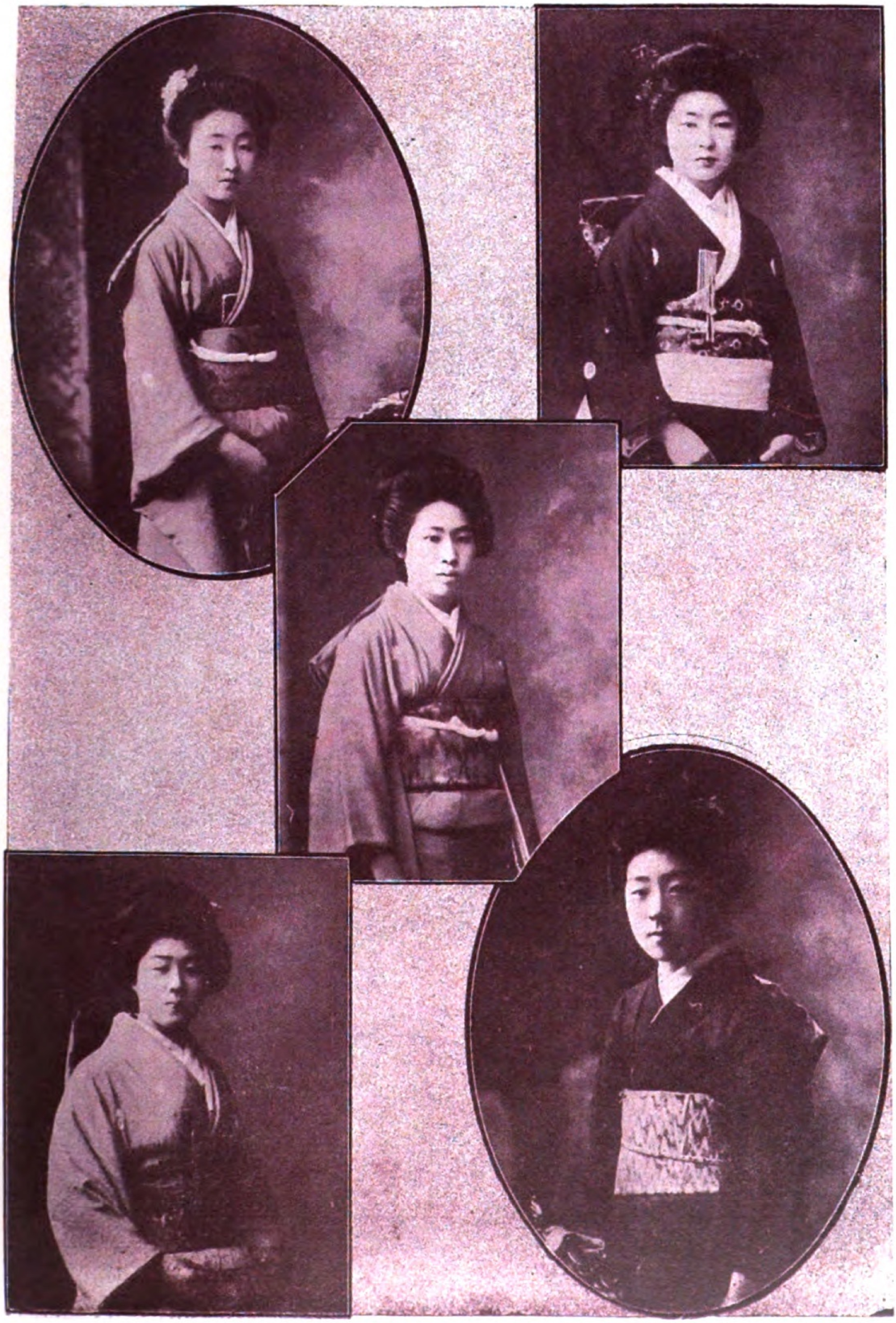




右、篠野靜江子（大使館一等書記官篠野乙次郎氏令孃）
中、廣田しづゑ子　高田商會事務長廣田利太郎氏令孃）
左、西村春子（東京株式取引所仲買西村覺藏氏令孃）

令嬢かゞみ

右上圖、牛込村山はる子。中圖、牛込早矢仕龍子。下圖、牛込森田はま子



左上圖、牛込和田民子。下圖上澁谷岩下近子

洋琴大家音樂家招待會

獨逸國洋琴大家キャンペルマン、ローエル夫人は觀光の爲來遊、築地セントラルホテルに於て音樂家招待會を催したり、出席者幸田延子、橘糸重、安藤幸子、柴田環、久野久子、川久保みす子、原みち子、杉浦ちか子



キャンペルマン夫人

キャンペルマン氏

令嬢かゞみ（四）







右、實業家　中上川治郎吉氏令妹
中、鐵道院技師　木下淑夫氏令嬢
左、滿鐵副總裁國澤新兵衞氏令嬢富美子

東京帝國大學講師 佐佐木信綱君著

日本歌學史

全一册

洋裝菊判上製函入 紙數六百餘頁
正價金貳圓五拾錢 郵税二十錢

本書は、著者が、東京帝國大學文科大學に於ける講義を修正增補したるもの、平安朝以來、鎌倉足利時代を經て、明治以前にいたる歌學の歴史にして、歌論を中心として一般の和歌に關する研究の變遷發達を審かにせり。而して一方よりいへば文學論の歴史にして、また和歌史の一部たり、一事苟くもせざる著者が、精到なる研究の結果に成れるもの、我が國文學界に多大の貢献をなすべき好著なり。

東京本町
博文館

●○●○● 中村秋人君著 ●○●○●

名媛と筆蹟

洋裝四六判美本紙數三百頁 正價金四拾錢 郵税六錢

▲孃ちゃんも見るべし姉さんも讀むべし

東京
本町
博文館

▲お母さんも味ふべし教育家亦一讀を要す

■冒険世界第四巻第二號増刊■

膽力なくして天下を取らんとするは火藥なくして發砲せんとするが如し

一年の計は新年にあり。正月は屠蘇に酔ぱらつたり、加留多を取つたり、女子供と羽根を突いたりして、魂を天外にフツ飛ばし「何て問がいゝんでせう」など下卑た事を言ふべきにあらず。時は初春、猪の歳旦也。青年は宜しく褌を締めて大活躍の準備を為すべしだ。本誌こゝに見る處あり、膽力養成號を出だして世に問ふ。讀者はこれにより娯樂の内に利益する處多かるべし。重要目次左の如し。

◎巻頭小説 膽力倶樂部……押川春浪

膽力養成號

大判百二十八頁 口繪大形石版畫 寫眞版數葉挿入

一月十五日發行

正價拾五錢 郵税壹錢半

◎奇怪事實 日米油膽力戰爭……河岡潮風

▼吾輩の膽力養成苦心 大隈重信

▼明治年代唯一の豪膽兒 伊藤痴遊

▼處世秘訣膽力か腕力か 記者

▼練膽無錢旅行記 山口獨眼龍

▼成吉思汗豪膽錄 井澤衣水

▼維新志士の膽玉 老壯士談

▼學生膽力養成法 河野廣中

▼東西二十四傑度胸くらべ 鐵血書生

▼十二名士膽力増大法實驗記

▼禪學と膽力 大石正巳

▼戰時膽力强弱譚 阿武少尉

▼寄宿奇談膽ためし會 てうふう

美麗なる口繪挿繪と壯快なる記事みな青年の膽力を増大せしむ

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

女(巳の二)

文章世界‖第六巻第二號……一月十五日發行

青年文藻

菊判紙數二百四十頁
口繪、石版寫眞版豐富
正價廿錢郵税二錢

定期増刊黄鳥號

新年は來れり。新文學は現はれざるべからず。黄鳥號は天下の青年文士の玉什を蒐集せるもの、即ち新文學の展覽場也。本誌を見ずして新年の新文學を語る能はず。見よ！見よ！『青年文藻』の一巻を見よ！



内容

小説、評論文、叙事文、抒情文、小品文、はがき文、長詩、短歌、俳句、韻文、凡て是れ新時代を双肩に荷はんとする青年文士の作也。右の外附錄として左記諸氏の苦心に成る創作を掲載す。

窪田空穗、秋田雨雀、小川未明、白石實三、前田晁、

尙ほ右の外に、**新年文學の總評**を掲載す。

東京 博文館 本町

一月十五日發行

少女世界 第六巻第貮號 增刊



菊判紙數百廿八頁

口繪 原色版一枚 石版畫一枚
光澤紙寫眞版四頁挿入

正價十錢　郵税一錢

寒紅梅

雪中に蕾を破つて、春のさきがけをする梅の花、その色その香、ともに優れてめでたいのを、美しい少女の心にもと、新春早々にあらはれる增刊『寒紅梅』が、いかに充實して居るかを見て下さい。

表紙は新進畫家太田三郎氏の筆、口畫には鮮明美麗なる三色版と、寫眞版八ページとを入れます。また記事には

▽少女對話 誕生日……巖谷小波

▽少女訓話 身繕ひの標準……學習院女學部長 松本源太郎

▽少女雜感十題……沼田笠峰

▽少女小説　▽少女會の開き方　▽少女史談
▽京都の女學校　▽先生の評判　▽誌友だより
▽新少女日記　▽讀者より記者に

これ等の趣味ある記事の外、讀者の和歌、文章、俳句も發表されますし、また

◉少女小説の募集

があります賣り切れぬ中に御覧下さい。

東京本町 博文館

女(己の四)


少年世界
福引號
第拾七卷第貳號增刊
▼內容▲
△坊ちやん百談…さゝなみ
△日本歷史畫卷…三百六十圖
△名刺交換會發表…數千名
△福引一千題……斬新奇拔」
之に配するに『お伽小說』『歷史噺』『學校雜話』『冐險小說』など、趣味と利益滾々として盡きぬ初春の嬉しさに、さあ〳〵引たり〳〵、何があるのか未だわからない、讀み給へ〳〵賣り切れぬ內に讀み給へ！
一月十五日發行
笑ふ門には福が來る、福引號は我愛讀者諸君に、趣味豐富なる福を授くべく、新年早々生れ出たもの、すべて定期號に倍大して、外觀の美は言はずもあれ、內容の面白きことは之までに例のなき所、其重なる物丈を洩らせば先づ表紙は武內桂舟氏の彩色、口繪には泰西名家の『三少年の歡語』と、平福百穗氏の『福笑ひ』二色刷寫眞版口繪の美は天下に比なしだ
菊判紙數二百五十八頁
口繪彩色石版及寫眞版澤山
正價貳拾錢
郵稅（本號に限）貳錢
東京日本橋區本町三丁目
博文館
振替貯金口座東京二四〇番

女（己の五）

女(己の六)

を述べたる二大少年叢書生る

現代專門諸大家執筆　博文館編

少年百科叢書

少年は修學の時代也、故に其一日を怠れば、百年の悔を殘さん、殊に學海の波浪滔々として漲り、嶮山幾重に峙ちて、其前途や又決して安心すべからず、然るに學海の燈臺となり、學山の栞となすべき健全なる良參考書に乏しきは、亦昭代の一缺點にあらずや。即ち此缺陷を補ふべく茲に創刊さるもの我少年百科叢書なり。嗚呼修學の一路を求むる帝國幾萬の少年諸子は、此書によりて文明の新智識を享受し、學校の敎科と相俟って更に偉大なる効果を收め得るや必せり。少年机上の寶典之を措て他に求むべからず。讀め天下の少年諸君！

洋裝細長形頗美本
紙數每編二百八十餘頁
美麗口繪數葉挿入
定價一冊金廿八錢
郵稅一冊金四錢

第一編 先哲至言 **勉學訓** 近刊

第二編 **讀書法** 二月發行

第三編 **世界名君傳** 三月發行

第四編 **世界名臣傳** 四月發行

第五編以下每月一冊又は二冊宛續々發行

振替東京二四〇　**博文館** ◀

女 己の七)



女學世界

第拾壹卷第貳號

光榮ある人生の春



晴れたる日の囀り



高松操子

舊き思想の方々が御覧なすつたら、妾の樣なのがお轉婆なんて呼ばるゝのでせう。

厭な名ね、お轉婆なんて——ですが何と呼ばれても構ひません、妾達の行くべき前途には若い華やかな、百鳥の歌ふ樣な春の歡喜の聲々が、妙しき調べをなして響いて居るのですもの。妾にはどうしても世の中は妾達若き女等の爲に作られてある樣な氣がしてなりません、よしさうでないものとしても、さう思ひ得るのは若き人々の光榮ある特權だと思ひます。まあ妾をして若い考に耽らして下さい。妾達は女だと云つて毬をついたり追羽子をしたりばかりは致しません、雨が止んで夕日が障子にあたつて書齋がぱつと明くなつた時白薔薇の花瓣が一片二片音もなく落ちる机の上を眺めながら、香水の薫やお白粉の香の漂ふ中から、いろいろな思想を産み出して居るのです。

誰ですか？　難産だらうなんて冷笑すのは、ジヤンダークだつて女でせう、纎弱い女子の唇が一度動けば昔だつて戰慄した國があつたぢやありませんか。と云つて妾が何も偉がらうとするでも何でもないですよホヽヽ、直ちやん眼を圓くしてゐらしやる、何か上げませうか、玩具の軍艦？　サーベル？

妾達は失禮かは知りませんが、男子の方が眞黑になつて働いて、妾達の顔を白くして居るのだと思つて居ます。女は男に報償として、美といふ慰安を男の方の疲れた胸に注いでやれば、それで立派に生きて行かれるのだと、かう思つて居るのですよ。

そりや社會には男子の方の仕事で、美を供給する美

術家といふものがあつて、其方面の婦人よりも幾倍かけて偉い方が澤山居りますが、妾はそれ以外美術家として女子は高等な務がなされなければならないと思ふのですよ。

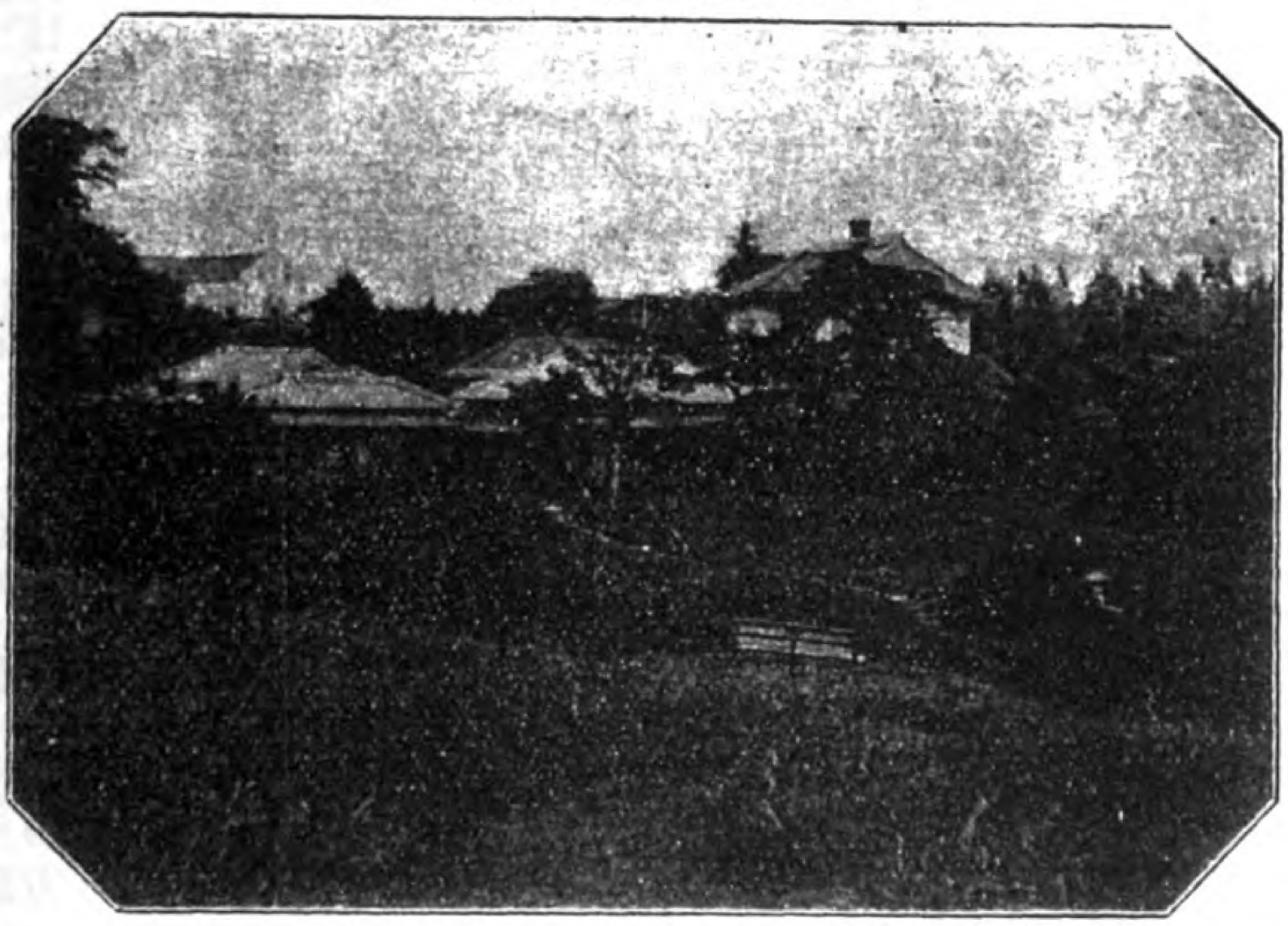
どんな務かと申しますと、男の方が開拓して下さつた美術を綜合して、女の理想にかなつた本當の美と致したいのです。妾の考では男子の方は渾然玉の如しとでも云ふべき美は、先天的の體質からして解らないだらうと思つて居るのです。而して妾は今迄のすべての美術を未製品として、これから妾達が女の理想にかなつた美を發見して、それからして世の中へ眞正の美を供給致したい覺悟で御座います。鑛山へ這つて原鑛を取つたり精錬したりする事は、丁度今迄なし來つた美術家の仕事であつたとして――中には女でも美術界の眞暗闇に這入つて腕に任せて採鑛した方が御座いましたが――妾達の任務は其精錬したる金物から、いろいろな精巧で綺麗な細工物を造つて、世の中へ擴めたいと思ふのであります。

ですから妾はこれからの女子の中から、決して閨秀畫家や閨秀作家の出る樣にとは希ひません。どうしてもこの點は男の方にはかなはない事だらうと思ひますが、中に腕の達者な男子を凌駕する方があつたとしたら、妾はさう云ふ人には男子と同じ樣に活動して貰ひたいのですが、妾達の希むのはかうした方面で、男子の方と競爭したいのではありません。もつと女のしなければならない美の仕事があるのです。

それには男と女との社會の位置といふ處から見て參りましやう。第一人間は神樣ではありませんから、自然と戰つて生活し得る道を開かなければなりません。これはどうしても男子の方の領分であります。而して此體質上の相違は藝術界にも及んで來て、力強い描寫とか、非常に凄凉な光景とか、若しくは甚だしい恐怖と云ふ感覺は男子でなくては出來ない仕事であります恰も人間が住む事の出來ない荒野をも男の力で住む樣にさるゝ樣に、藝術の荒野へ先づ鍬を入れるのが男子の務です。むづかしい事を云ふ樣ですが、外界の事象

から美の範圍を擴めて行くといふ事は男の方の仕事で鳥渡例を引いて見れば　和田三造といふ人の南風や煒燻や、近くは青山熊治といふ人のアイヌや九十里の畫題を現實に於て婦人が見たら、實際の漁夫や勞働者の物恐しき形裝に誰だつて快く思はないでせう、屹度心弱い方でしたら顏を蔽つて了ふのでせうが、展覽會へ行つて藝術化されたのを御覽なすつたら眉を顰めなさる樣な方はないだらうと思ひます。かやうに男の方は勞働者を見ても、溢るゝ樣な藝術的歡喜の血汐が沸くといふに、女は僅にカンバスの上へ現れたものに依つて、それ等を味ひ得るに過ぎないと云ふ相違があります。

山縣公爵目白椿山莊の庭



文學の方ですと、生意氣の樣ですが、妾達はゴルキーとかアンドリーフとかメテルリンクとか云ふ方々の樣に、妾達が眼を蔽ふ樣な事象に對しても平然として、實社會を味つて感興を得ると云ふ態度を取る事は出來ません。

妾達はどうしてもミケロアンゼロの樣な力强い描寫に安じて居る事は到底出來ない、まあラアフェロの樣な行き方を喜ぶものであります。つまり妾達は男子方によつて擴げられて行く藝術の領域にあつて、其内から渾然たる女の理想を發見いたしたいので御座います。

妾達は繪筆を取つたり、文筆を取つたりして、男子方を凌駕しなければならぬ務は御座いませんが、男子の方が開拓して行つて下さつた藝

術から味ひ得た純粋の感情を以つて、社會に和ぎと、美しい婦人の感覺を漂はせなければならぬ務があります。

有史以來五千年――なんて學校の先生の眞似をするぢやありませんが其間随分多くの人が藝術界になした試み、妾等は今日の婦人の立場から見て、すべて未製品と考へたい。婦人の正しい感情を養ふ道具としたい而してこの情を以て社會に臨みたい――人事にも、自然にも。これから次の時代の婦人によつて形成らるゝ女の心といふものを一層純の純なるものにしたい。絶えず耳には音樂が囁いて居る様・始終胸には濃やかな情操が高鳴りして居る様、眼に見ゆる自然はすべて繪畫の如く美しく、緑の木立も、曠野の流れも、其間に點綴さるゝ人も牛も犬も皆清い歡喜の涙を持つて見る様にありたい。かうした情を抱いて鍬取るべく銃取るべく餘りに其指の纖弱い妾等は、妾等が生活して居る此争闘に滿ちた淒慘の漂ふ社會を、和ぎに滿ちた快い天地となすだけの力を現したいのであります。いくら男の方が多能であつても・此點ばかりは婦人の勢力範圍ですから、眞似をしやうと思つても出來なく、もしさう云ふ方があつたらそれは男子の本分を忘れて、女の道に憧るゝ弱い人達である。妾達はそんな人は男性として尊敬すべき價値はないものと思ひます。



澁澤男爵王子邸の庭

よく今の男子方は――或は少數の女の方も――灰色の空氣だとか、デカダンの氣風だとか云つて苦悶して居るらしい聲を放つて居りますが

あんな渦巻に入る婦人がありますとしたら。妾はそんな方を女の本分を忘れたものとして憐みます。あれはね、男の方が鍬を振つて藝術の荒野へ向つて進む中に木の根、岩角に當つて思ふ儘開拓する事の出來ない苦悶の聲です。男子としては脱るべからざる運命でせうが、女子として携る道ではないだらうと思ひます。もしそれが女にも必要だとしたならば、あゝ造化が人間の中から女と言ふ美しかるべき幸福なる生を特に造へて與れた微妙な恩典を潰すものであります。

何といふ幸福な日に生れたのでありませう、妾等は恣に歌つてこの若き日を味ひたい。

和ぎに滿ちた空氣の中に生存して美しい瞳を輝して、磯邊に立つて眞美の貝殼を拾ひつゝある妾等は幸福である。眞砂路は水晶の樣に綺麗だ。南に聳ゆる白い雲とコバルト色の空、大海原は紺碧の色を湛へて居る。風の薫り、浪のさゝやき、其間にあつて白い素足を砂地に印する妾等、ああ妾等の生活はかうした樂しさではあるまいか。

かくの如き空氣の間に育まれたあの可愛らしい無邪氣なお子さんは、どんなに美しいでせうか全で天使の樣でせう。女の理想が最もよく現れたものが、子供で御座います。


佐夫利貞雄氏（外務參事官）夫人ふみ子（小村伯爵令孃）

妾達は必ずしも大野さんや榊原さんや河崎さんの樣にピヤニストとなつたりアーチストにならなければ、ならないと云ふ理由はありませんが、社會に一種の愉

快な空氣を漂せる義務のある事は何人もある事だらうと思ひます。

それから妾の様なものでも、理想もあるのでのす。五分の魂だなんて笑つちやいけません。これでも妾はどうかして女の理想とも云ふべき感情を文學に現して見たいと思つて居るのですよ。醜惡なる現代の空氣から脱かれて何人も微笑むべき感情を世の中に擴げやうと思つて居ります。が皆さんと違つて天分の少い妾は自ら努力して進む外ありません。それですから前に述べた様な女としての純美なる感情を暇さへあれば養つて居ります。

近頃は千里眼といふ事が流行で、熱心に研究してゐらしやる方が多い様ですが、妾はまた一生懸命に女の特有な世にも清き涙をもつて人事と自然に對したいと努めて居るのです。而して自然の中から音樂を聞いたり、繪畫を見たり、文學を見たりして居るのです。散歩しても、机に坐つて居ても絶えず美感に酔ふ事が出來ます。殊に悲哀の空氣の中に深刻なる囁きを聞きます。けれども餘り生を喜ぶ妾はかゝる時死の谷から脱れてつとめて喜ばしい感覺を求めて其中に生活して居るのであります。

妾は天國も憧れません極樂も望みません、妾のためには此世が既に樂しむべく歌ふべく作られてあります。

里には今よき冬が來た、畑に飛んで居る鳥等のうば玉色の羽毛は快く光つて居ります。

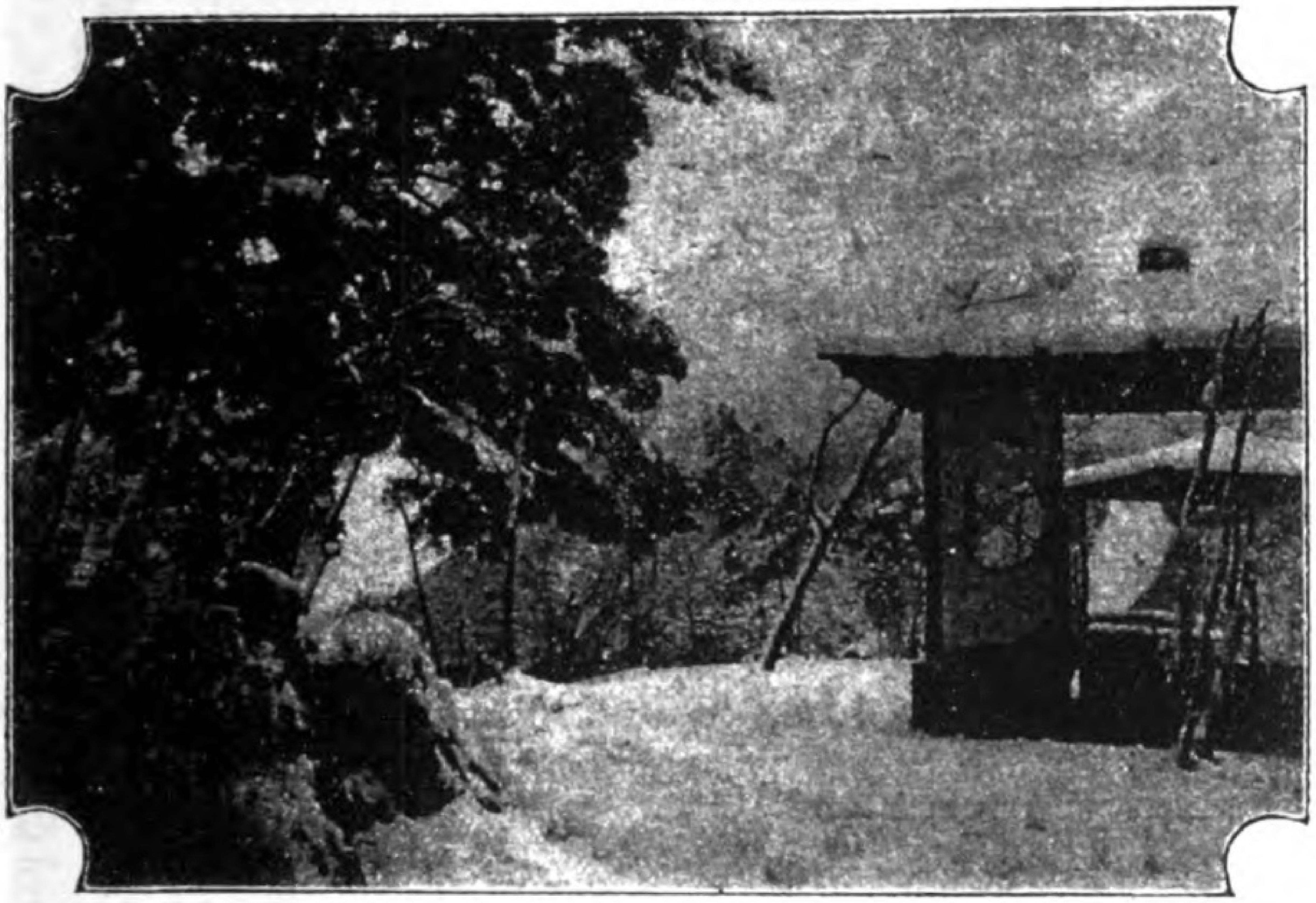
前伊國公使大山綱介氏夫人



かゝる時、妾は詩集を袂にして自分の村へ歸りつゝ思ひに耽るのです。

遙向ふには小松原を距てゝ十分ばかり前に女生徒等と出て來た小學校の屋根が見える。黄い葉をふるい落した白揚樹、櫻はもういつの昔に落葉して了つたか忘れた樣な態をして居る。新築の第二部の屋根の白い漆喰に華やかな夕日がさして居る。其處の土橋で別れた女生徒等は、皆一樣に包を脊負つて家路の遠い細徑を樂しげに歸つて行く。右手の方には母校のあるS町の白堊が丘の間から見える。

妾は思はず手にして居た蛇目傘を片手で擴げて、子供らしく振つて見た。而して一日の勤を了へて美しい自然のうつろひ行く冬景色を眺め〳〵歩いて居るのが、何より樂しかつた。



楠公千早城の址（雪景）

＊　＊　＊　＊　＊

まあ知さんが長く書いたわ書いたわ展覽會印象記なんて、——あれでも美術家氣取りで通な事を云つて居るから可笑しいわ。日本畫の撰科なんぞ馬鹿馬鹿しい、妾ならどんな事をしても西洋畫へ這入るんだが、屹度生意氣になつたでせう中學の二年で末から五番だと云つて威張つて居た位だから。日本畫の眞髓は云々なんてまあ今年の夏までは、代數の問題で毎晩困つて居た癖に、——其口裏には田舍なんぞに居てはいくら利口振つた事を云つても駄目だと云つた樣な意味が見透い

て居るから憎らしい。

でも解らない問題を妾の處へ持つて來るのが極り惡くて、あの房々した毛をいぢりながら、『藝術家は代數に於て喜ばれず』なんて豫言者めいた事を云つて嫣然して居る處を思ひ出すと可愛らしい。近くだと今夜あたりは此方から押掛けて行つて議論でもして負かしてやりたいのですが――あゝ東京へ行きたい。

知さん、道さん從弟等は皆東京へ行つて了つた。道さんは何故此頃手紙を寄さないだらうか、大方試驗で忙しいからでせう。道さんへは冬期休業には是非入つらしやい――兄さんが二連銃を買つたからと書いてやろ。知さんはお母さんが戀しくて吃度歸つて來るに極つて居るから態と未だ歸つて來るではありません、來年の夏まで我慢しなさい。我慢出來ないならこれですよと拳骨の處を描いてやりませう」ですが妾の拳の寫生では左張り睨みがきゝませんね、――はてどうしませうか。

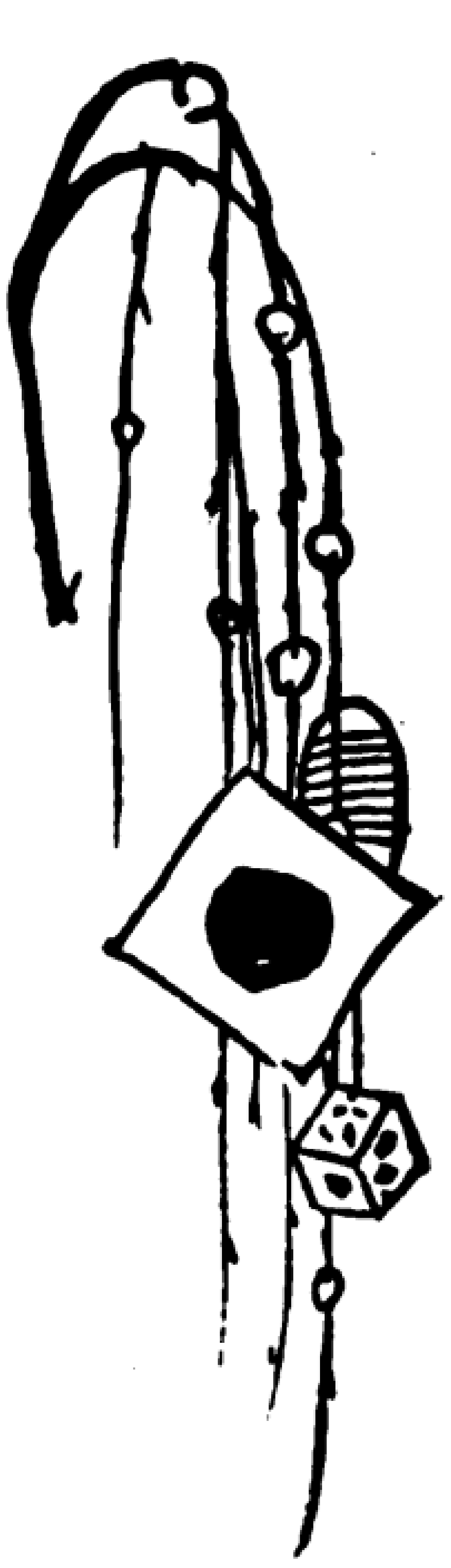


京都北野の社（雪景）

早梅

露子

母の命で今日は何時もより早く歸つた。姉樣はお里へいらしつてお留守。美代子がゐないから家中火が消えた樣だ、二言三言母樣と話して部屋にはいつた。誰が手によつて運ばれたか一輪挿に梅の花がさしてあるには驚いた、吃度母樣に違ひない何時の世何れの世界にも親以上難有いものはない、袴もとらず其儘机に向つて沁々眺めた、白てふ色は染み易いと恐れた人もあるが、私は何れの花にも白きを愛する、まして白梅は何時迄見ても見あかぬ、眞紅の毒々しいのは一時人の目を惹くけれどあき易い、人の裝も此花の樣に氣高くさつぱりとしたいものである。



一生涯の記憶のページ

宇佐川　登志子

面白い夢からさめて、天井を見つめて居ると、菊花形になつた、赤い電燈が、座敷の隅まで、輝いて、違棚にのせた、セコンドがコチ〳〵とよく聞える、もう何時だらうと思つてる間に、パツと電燈が消えてしまつたので、あたりは眞黒暗になつた、あゝもう六時前だわ、まあけふの靜かですこと、外は雪でも降つてるのかしら、ピユーといなゝく風が、電柱に當つて、一しきり止むと、今度は戸や障子がガタン〳〵とふるへる音がして、世間がしんとなつてくる、こゝ郊外の朝景色、物思ひや、勉強には實以て適當の場所、併しこう靜かなことも少いが、こんな日はきつと、雪降りよと思つて起きて見ると、まあ綺麗、松にも梅にも時ならぬ眞白の花、石燈籠や手水鉢まで何だか、趣がちがつて日毎に眺めあきた平凡な庭とは、思はれない位、それにまだ綿のようにちらついて居る。

どうぞもう降つてくれなければいゝが、火鉢かゝへて硝子越しに見てる私はいゝけれど、會社の御用で金澤へ御出張なすつた旦那様、どんなに御寒いことであらう？　時候なれば致し方ないけれど、まあ四五日はどうか、暖くしたいものだ。

午後御葉書が着いた、寒さにも障りなくて、無事、成べく早く都合して明後日は是非歸宅するとの御文面まあ一日でも早ければうれしいわ。

なぜ私はこんなに旦那様の御留守が嫌ひなのでせうお留守だつて誰に氣兼をするといふぢやなし、勝手氣儘に女中を使つて氣樂に居るのだけれど、何だか物足りない心地がしてならぬ、あの從妹の君さんなんか、勳さんが二週間毎に週番だとかいつて七日づゝ御留守になられるつて、よく淋しかないことね、つていつて

上げたら、だつて軍人ですもの仕方がないわ、まだ週番丈だといゝですが、其間には演習やら行軍やら出張やら大かた留守勝ですのよ、始は淋しくつてたまらなかつたけれど、もう大分なれてよ、と仰しやる。

とう／＼一日降つてけふも暮れてしまつた、あんまり早く休むと夜中に眼がさめて尚淋しいからせめて十時迄起きて居ませうと琴を出して見る、きのふ直させた眞黄な糸がよくしまつて、柱がたてられない位、同じく琴を出すのでも、三の糸がゆるんだり、八の糸がすれかゝつたりしてると、何だか便りないやうな氣持がして、十分に腕を奮うて見ようと思ふ心が起らない、中途で此糸が切れやしないかしら、かへちの時に次の柱が邪魔にならないかしら、と思ふと、ま一つ指が派手にと思ふても、もう力が出なくなつて、一通りで止めてしまふけれど、こんなに新らしい時だと思ふまゝに彈かれる。



旭にかゞやく日の御旗

戸をしめてしまつたし近邊といつても、そんなに近くはなし、今宵こそ心のまゝに、かなでませうと久し振に大きな聲を出して歌ふ。松竹梅の半までゆくと、

「君が代は……にごらですめるみかはみづ…………末すみけらし國民の……」

歌つてるのか彈いてるのか、自分でも別らなくなつて、花やかな電燈が天井の高い十疊の室をてらしてると思ふ外に無念無想、我もなく、人もなく、苦もなく、

憂もなく、全くの無我の境、ひいてしまつて、ほつと息をついて、考へると只こう餘韻がかすかに殘つてるといふ外に、影も形もないけれど、一種何ともしれない感じがして、ほんに藝術の樂みつて、口でも筆でもいひあらはす事の出來ない深い／＼味があるものだと悟りました。千鳥だの根引だの四つ五つしらべるとはや十時、いゝ運動になつたと見えて眠くなつたから床につく。

けふはいゝお天氣、きのふの雪も大かたとけてしまつた、朝お友達へ二三通手紙したゝめて、其序に寫眞ブックを出して見る、新婚の時のうつしゑ、まあ此旦那樣の氣どりよう、あらお羽織の衿に惡くせがついてるわ、今でもかしら見て置きませう．私も何だかいつもよりは格好が惡るい、此寫眞屋が下手なのだわ．旦那樣だつて其まゝの方がよほどお立派ですもの、あゝ此可愛い春子樣今どうして入らつしやるかしら、三年の時に半途退學して、十六の若いお嫁さんつて、皆にひやかされ、眞つ赤なお顏になつて學校の門をお出なすつたお姿、まだ眼に見えてるようだのに、もう三人もの御母樣ときゝました、どんなに御變りなすつたでせう。

百合子樣此方こそ校中第一の美人御家は名高いお物持で、兄樣とお二人きり工學士、御兩親の寵愛の花といつく／＼しまれ給ひ、其上學科の成績もいつも首席ばかりなので、まあ未來の幸福者の第一等よと皆々に羨まれ、ふる程もあるお婿樣の候補者の撰擇にまよつて


土井子爵家の二令孃

入らしたのに、美人薄命の例にもれず、只かりそめのいたつきから、今は鳥邊山の露と消えて、淋しき野邊に殘るは只一基の墓標ばかり、ほんに惜い人でしたわ。オ・こゝに旦那樣の御寫眞がある、之はまだ學生時代の此あどけなさ、こちらのは人樣にはいはないが、見合の時の御寫眞、私は此寫眞と幾百度キッスをしたでせう。思ひ起す、一昨年、庭の櫻もうつろひて、靑葉若葉の新緑にはまだ早い晩春の夕まぐれ、何心なくおばしまに、おぼろにくもれる夕月を眺め居れる折しも、父樣の召しますといふ下女の知らせに、何だらうと御伺ひせば、思ひもかけぬ縁談のこと、私は其まゝ眞つ赤になつて何と御返事申上たやら。

許嫁の約束とゝのひて未來の夫は此人ぞと定められた其時には、さすがに胸の動悸がはげしくうちました幼な馴染の、兄樣のお友達の健兒樣の奥樣にならうとは、——人の運命もはかられぬものと思ひました、そうしていさゝ小川に鮒すくふ、かりそめの遊びの時にも内の兄樣よりも、いつも私を愛してくれた其意味が初めて別りました、併し早くより君は東都へ妙齡のおもかげは知るよしもなかりしかど。當時赤門の秀才とたゝへられて、前途有望の御身とか業終へ給ふ一ヶ年間のまち遠しかりしこと、樂しくもあり樂しくもなき許嫁の時代よ。



流行の子供服

嘗て女學校の校庭で、心あへる友びとゝ、未來の理想だの、目的だのを語り合つた時、登志さん、春本樣はね、もうちやんと、未來の良人が定つてあるのよと

さゝやかれたので、すぐお顔を眺めると、丁度春の花のやうな活々とした樂し相な體度で色の白いお顔に美くしい笑をもらされる其有樣が如何にも羨ましくて、當節は女學校出身でも、どし／＼と小學敎師の妻にならねばならぬのよと誰やらの言葉を思ひ起し、まあ幸福な春本樣未來は立派な醫學士の令夫人……許嫁の時代の相思の人の境遇つて、どんなに心丈夫にどんなに樂しいものだらうとほと／＼と思つて居ましたが、めぐる車の運命は、今其境遇を私に與へられて、眞情を味へとや、あゝ今迄の想像は、皆、皆、だめでした、許嫁なんて、樂しいといふよりも、むしろ苦しみの方が多いものです。



よく似合ひました

「健兒樣は今頃何をして入らつしやるだらう」こんな考へが小さな胸に浮ぶと、もう何も外の事を考へる餘地がなくなつて、すきな／＼讀書も、いつもは獨りでほゝゑみつゝする裁縫も、妙に手が動かなくなつて、ぼんやりと、空行く雲を眺めたり、柘榴や櫻の枯葉が木がらしに散りゆく數をかぞへたり、机の上に顏をかくして、物思ひに沈んだり、只々茫然となるのです、それから寫眞を出して見たり、手紙を書いて見たり、それもポストに入れる勇氣はなくて書いては丸め、丸めては書き、やがて作るべき未來の家庭を想像したり、自分はこゝに居つても、心はもぬけのからですもの。

登志さん何してるの――とふいに母樣に驚かされてとんちんかんの御返事をして、まあおかしな子だね、

お晝間からとぼけて――と笑はれた事も度々、けれど實際こんな境遇は經驗した人でなければ分りませぬ、どんなに苦しんでもいゝ、どんなに困つてもかまはない、早く卒業して新家庭を作るようになりたいと思ひました。此時分の考へと今の考へと比較したらば如何でせう、四五日の御留守を淋しいなんて、あんまり意氣地がなさすぎると、自分で叱つて見るが、やはり何だかなつかしいのだもの、しかたがないわ、どこの奧樣でも皆こんな考なのかしら、そりやどんな人だつて、自分の夫を意氣地なしと思ふ人もないでせう――、又醜男子と思ふ人もありますまい、何とかすれば、あばたもゑくぼのすゝなりといふ諺さへあるのですもの、それで以て始めて、天下太平なのですわ、一旦夫となり妻と定められたからには他の人がどんなによくつても、仕方がないのですから自分の夫は立派だ、自分の妻は美人ぢや、と滿足してればそれで雙方幸福なのですわね。


瓦斯應用の臺所

「奧樣御晝の御飯が出來ました」

嫗の聲にびつくりして時計を見るとはや十二時まあ日の短いこと。

午後はお友達のお宅を訪問して歸ると丁度夕食時、私けふはいゝ研究をしました、清水町まで行つた序だから露さんが此邊に來てらつしやると誰やらに伺つてあつたので、國に居る時分には御互に獨娘の氣儘者同志、姉妹も及ばぬ仲好だつたのが、先年父母君の御轉任に伴はれて、御訣れしてから六年餘り、御結婚なすつて此邊へとの

御談、一度尋ねて上げませう、露子さんどんなに驚きどんなにお悦びなさるだらう、きつと玄關へ飛んで來て、登志さんつて私の手をにぎつて、よろこびなさるだらう、もしか旦那様の御在宅だつたらどうしよう、御ちかづきになりませうか、健兒だつて私のお友達が來て下さると、あんなによろこんで、今晩は是非とめて上げよと、人様の御都合も聞かないで、すゝめる位ですもの、きつと旦那様だつて悦んで下さるわと思ひながら番地をしらべつゝ行くと、やがて北尾といふいかめし御門がまへ、まあ立派なお家ですこと、露さんどんなにお變りでせうと、どきつく胸をおさへながらおとなしく「御免遊ばせ」取次に出た女中に名刺を渡すとやがて靜々と足音がして露子さんが、――あら登志さん、よく入らして下すつてね、どうぞお上り遊ばせつて、いふ内にも何だか沈んだ調子、あの活潑だつた人がなぜだらうと思つて、後ろについて行くと、一寸あちらの室で手をついて、お姑様とし子様つて私の里に居る時分に御心易くして戴いた方が御尋ね下さいました、お二階のお座敷へお通し申ても宜しう御座いますか。

まあ面倒くさい事をする人だわ物を貰ひに來たといふぢやなし、人が親切に尋ねて上げたのに、通らす座敷までも尋ねなくつてもと思つてると、何といふにくらしい聲でせう、イーエお二階はいけません、今私は此座敷を明けますからこゝにしなさいつてぼつ〱と縫ひかけた仕事をおたゝみになる、次の



母親の留守

間に立つてる私の手持無沙汰此上もない、茲に於て始めて露さんのやせた理由が分つた、可哀相にたま〳〵の舊友の座席さへ自由に定められぬ境遇、私はほと〳〵同情せずには居られませんでした、而して其樣な姑樣に仕へて居られる友の氣兼を推察しては、一分時も悠々と遊んで居る氣持がしません、ああ來ねばよかつた、とんだめいわくをかけたと思つたが今更引返す譯にも行かず、なつかしい舊友と久々振に會いながら、何の談をする事も出來ないで、いやなおばあ樣に睨まれて、此節季の日にうろ〳〵と遊んで居る馬鹿者とでもいはれそうな心持で、早速お暇しました、すぐ其足で夫の同僚の御宅へ御伺すると、奥様の御妹君の緣談の御話、私は第一に申して上げました、お金は世界のまはりものです、富や位に眼がくらんではいけませぬ、何はなくとも夫の人格と氣樂が第一、私、けふは僅かに五年の壽命がちゞまりましたよと。



玉つきの眞似

　あゝ淋しい留守も今夜丈。

　明日何時に御歸りになるかしら早くから御掃除もして、髮も結つて、御化粧もして、花も生けて、御馳走もして置きませう、旦那樣今頃は旅宿のベットに家郷の夢を見て入らつしやるでせうか。今度の御土產は何かしら、又可愛らしいお人形さんかしら、九谷のお茶碗、それもいゝわ、早く〳〵明日になつてくれゝばいゝ。

世はさま〴〵、人はいろ〳〵、此せち辛い世の中にこんなに呑氣に、氣樂に、夫の愛を一身に荷つて、幸福に暮らせるのも、單に慈愛深い御兩親のたまもの、此上はます〳〵德を修め、身をつゝしみて、夫を助け內助を全うし、他日は旭日東天に昇る勢をもて家名をあげ、今日の幸福をして、ます〳〵幸福ならしむるやうに務めませう。

何私の理想‖‖それはありますわ、無理な事は望みませぬ、丈夫な男の子二人と、可愛らしい女の子一人とをまうけて、而して旦那樣は農商務大臣か、日本銀行の總裁か、でなければ外國の支店長、そうして子供は皆丈夫で賢うて、此間の松方樣見たいに、金婚式をあげたう御座いますの。されど一國を望んで一郡を得、一郡を望んで、一村を得ると申しますから之位の望だつたらば、まあ私設會社の社長位が關の山で御座いませうかね。


愛嬌滿々

正月日記

二日といふもの私は眞向からあびせられる奥樣といふ言葉にとそにそまつた頰は尙更火かついたやう、はづかしさに聲がふるへた。今日はどうやら年始の客もすくなくなつた。長い裾を引いて歩くのがおさへつけられるやうに歩きにくい。去年と云つてもふた月前の菊の美しい日人妻といふ名によびかへられた。

奥庭でつく羽子の音がまだ押へ切れない少女心をそゝつて、私は戸棚をさぐると實家からもつて來た羽子板とつて、裾を引あげて庭に降りた。

日南のお緣に並んだ盆栽の梅が小さい蕾などひらいて、脊の低い福壽草の黃がまばゆい程パッとさいてゐる。突き初めると初が「若奥樣電話でございます」緣に膝をついて云つた。受話器をとつたら實家の姉樣。「あすは家のカルタ會よ、みよ樣も靜樣もおつれで、お二人はきつとゐらつしやい。それから丸髷ですつてね、翌日もそのまゝでね」笑ひながら切つた。面はゆさにそつと赤い手柄の初丸髷をなでた。

（白百合）



國母と申し奉る事

近頃世に、目前の事を記すに、往々國母陛下の語あるを見る。初は、怪しみて、今の皇室に、國母と申し奉る御方はおはしまさぬに、と思ひて、よくよく讀めば、いづれも、皇后陛下の御事を申し奉るなり。國母と申す語を、何と心得てあるにか。國民の母の義となど思へるにか。國母と申すは、古くより歴史に見えて、國帝の御母の稱と解すべきものと思ふ(中略)

今鏡、二、やへのしほぢ、

このみかど(崇徳)の御母きさき、(鳥羽中宮)十九と申しゝ御年、この帝をうみたてまつらせ給ひて、御子、位につかせ給ひてのち、二十三の御年、后の位をさらせ給ひて、待賢門院と申す、同じ國母と申せど、白河院の御むすめとて養ひ申させ給ひければ、ならびなく榮えさせ給ひき、

(中略)一時、座右の書を見るだに此の如し。倘いくらもあるべし。且、國母と申し奉るは、正しく皇后の位に立たせられ、其御實子の帝位に即かせられ、而して、皇太后とならせられたるを申し奉る御稱なり。昔も、假名書きの平家物語などに、「こくも」と見え、其外の書にも、「こくも」と振假名したる多し。

右の如くなれば、今上陛下の御嫡妻を、御母と申し奉るは、不都合の至ならずや。物識る人は、苦々しく思ひてあるべし。(大槻文彦氏)

床の間の飾り方

座敷で一番大切な所は床の間である。其床の間の飾りの眞髓は何かと言へば、三具足即ち香爐、活花、燭の三つを以て正面の幅、即ち神佛を祠ると言ふ意に外ならぬのである。夫で先づ昔の普通正式から言へば、神佛の幅を二幅なり三幅なり懸け、中央に家に相應な香爐を据ゑ、右に活花、左に燭、あとの色紙卷物の類は皆是等の次ぎ次ぎに好尙に應じて置けば宜い、此幅と三具足が床の飾りの中心に成つて居らればならぬ。

それで昔からの諺にも「三位以上が來れば床の間の上に坐らせよ」と言ふ事がある通り、床の間は客に對する馳走でなくして、上を尊とぶ意から出たものである。それで禮法にも客は床を後ろに坐らせる樣に成つて居るのである。今日では其本意を失つて、山水花鳥の掛物を物物しく掛けるやうに成つたが、本式から言へば彼れは間違つて居るので、山水花鳥の掛物は掛けるなら、室の横手の方に掛けて置くがよい。さすれば客にも見えて眞の飾りにならうと思ふ。

そして三具足も活花ひとつに略かれて了つたのである。然し私は敢て之を悪い事とは思はない。又今日の場合之が普通に成つて居るのであるから、別段之を正式に復せと言ふのではないが、唯床の間と言ふものはかう言ふものと思ひ込んで居るのは間違ひで、正眞は斯く〳〵のもので有ると言ふ事を呑み込んで居てほしい。さすれば之を何の様に崩すとも、餘り法に叶はぬ様な事は無からうと思ふ。

又此頃西洋間のストーブのそばに、御厨子黒棚などを置く様に成つたが、之は面白い事だと思ふ。日本間では現今御厨子黒棚は互ひ棚と變化されてある。互ひ棚は昔の御厨子黒棚の變化したものであるから、此處には先「香」の道具とか、其他珍らしい置物など主人の趣味好尚に應じて置いてよろしい。又其下には碁盤など置くのも亦面白いと思ふ。

（小笠原清務氏）

櫛田撿挍の四季の壽

櫛田棊清翁は、山田流箏曲の家元にて、生前、畏くも皇后陛下を始め奉り、竹の園生の方々の御前に演奏して、幾度か面目を得し程の名家なりしが、翁逝きてこゝに六つの年を數へし此頃、故人が秘藏の手箱の底より「四季の壽」と題する壽唄の現はれたれば、翁が家元を繼げる　田ひろ子女史が節附をなし、目下其の試演中なりと云ふ唄は左の如し

年月に、關守る人のなければや、あけてうらゝにてりわたる、初日の光くもりなく、君が千とせを祝ふなる、ひくつま琴の音も、すて唄ふこゑ〳〵おもしろや、四季なり〳〵のそのながめ、春はまづ咲く梅の花、宮の鶯めづらしき、初音は御代のしるしかな、彌生の空はうちけぶる、霞のおくはしられぐら、見ゆるかぎりは櫻花、吹き來る風も香にそひて、いとゞ心もうきたつに、花なき里に住みながらふ、雁は越路にこれは亦、こその古巣のやどりなば、尋ねてくるや飛ぶ燕、いつしか夏も梢の、かをる軒端に時鳥、さやけき聲におとづれて、姿ははや三重かされ、扇のかぜのそよ〳〵と、秋涼しき秋くれば、雲井の空に澄みまさる、月に風情はありあけの、心盡しの思ひ川、思へばゆかし駿河なる、田子の浦波打いでて、見れば富士の根いつとても、山のすがたはかはらねど、あきて三冬になりぬれば、うき世のうさも白雪の、積り積て眞白なる、景色は筆につくすべき、裾野に續く三保の松、榮えは淸しいつまでも、變らぬ色はいつ久方の、天津少女が羽衣の、袖たほやかにうちふりし、そのふることも偲ばれつ、今日の祝ひにとりそへて、壽なるゝ鶴龜も、あかぬ心にまかせつゝ、しらべと共にながく榮えむ。

入浴の注意

入湯すると血行が盛んになるので、勞働した後とか、遠路を歩いた後など、四肢の痛むやうな場合には、一局部に停滞して居た血液を他に誘導するから痛みも去り、疲勞を恢復し、何となく爽快を覺ゆる。併し非常に疲れた場合に湯に入れば、氣分が好くなるから疲勞も全然恢

復した後に黒ふけれども、實際は新陳代謝を盛んにする丈それ丈、體内の物質を餘計消耗する勘定だから、浴後は寧ろ疲勞するのが普通である、毫も疲れて居ない時に入浴して、後で身體がグニヤ〳〵になり、筋肉が緩んだやうな氣持がして、ガツカリして了ふなどは我々日常經驗する所である。だから何もしないで遊んで居る人が、運動の爲めに入浴するのなら、朝であらうが晩であらうが、少しも差支はないが、今日これから大に働かうといふ人が朝湯に入るのは元氣を幾分無くする基で、餘り宜しくない運動の選手が運動會のある前一兩日間は、湯に入らないで居るのも、理窟に叶つた方法である。常に活動する人間は朝湯よりも晩湯が宜い。一日中の汗を流し、固くなつた筋を緩るめ、精神を爽快にして樂しき晩餐の膳に向ひ、軈て明日の活動の準備の床に就くべきである。但し多年の習慣上、朝湯に入らなければ其日の氣分が悪いといふ者は此限りでない。

湯ざめのしないやうにするには、湯から上がる際に、冷水を十分全身に浴びれば可い。すると生理上の原則により、皮膚の血管は收縮して、血液は内部に向つて進み、體温を内に保有して放散せしめないから、後ではポカ〳〵暖かくなる。湯上り後風邪を引くやうなこともない。朝起きて直ぐ冷水浴をし、或は冷水摩擦をやれば終日身體がポカ〳〵して温かいのも此理窟である、湯上がり際の水被りは、啻に湯ざめを豫防するのみならず、皮膚を鍛錬して、之を强固にする効がある。

湯に入つて垢すりで擦ると鼠の糞見たやうなものがコロ〳〵出ることがある。普通の人は之を垢と思つて居るが、これは垢ではなく、表皮が剝離れて出るのである。つまり大切な身の皮を我から剝ぐと同じ事でそれを垢が出ると喜んで居るのは、情けない次第だ人間の垢は脂肪だから、「垢すり」では迚も落ちない、却つて皮膚を荒らすばかりだ。一番能く垢の落ちるものは石鹼である。石鹼でさへ洗へば垢は悉皆落ちる。石鹼といふ調法なものがあるのに猶は古い「ごろ」の布などで造つた「垢すり」を用ふるのは非文明の甚しいものだ。

それに錢湯は隨分不潔である。朝の内は幾らか宜いが、夕方になり、夜になつて浴客が込んで來ると非常に黴菌が殖える。健全な皮膚ですらも病毒を擦り込めば感染する位だから、況して「垢すり」で擦り剝いた皮膚を其儘黴菌の多い湯に入れるのは、危險な話である。極熱い湯なら黴菌は死ぬけれども、人間が入る樣な温度では、死ない黴菌が澤山ある。併し湯から上がる際に、清潔な湯を十分被ぶり且つ今一度石鹼で能く洗つてから出れば幾分か黴菌を少なくすることが出來る。石鹼もカリー石鹼なら消毒の効があるが之を使ふと冬は皮膚が荒れる。普通の石鹼はナトリウムやグリスリンが混て居るから、大して消毒の効はない。（醫學博士緒方正規氏）

鏡の變遷

石器時代や土器時代には無論鏡は無かつたが、水面に映する森羅萬象は軈て鏡といふ器物を案出さるゝに至つたので、我が國では天照皇

大神が天の岩戸に隱れさせ給ふた時、石凝姥命が天の香久山の土を採り天のかね山の鐵を採つて鏡を造つたと言ふ事が見えて居る。之が軈て八咫の鏡と成つたので、其の形に就ては種々の說があるが、八咫とは此時代には「八」といふ字は大なるもの丶形容に用ひられたので、例へば八千尋とか、八束穗とか云ふのと同樣の「八」であつて、大なる鏡と言ふ意味になるのである。

支那の鏡は何時より作られたかは不明だが、秦の時代からと言つてゐる。然し何んでも周の頃から漢の代頃には確かに用ひられて居た事は明である。此時代の鏡の模樣は龍や十二支であるが、下つて後漢の時代にはペルシヤ方面との交通機關が開けたので、模樣も唐草模樣を用る樣に成つた。之れが彼の海獸葡萄鏡である。日本鏡の發達して來たのは奈良朝の時代からで、正倉院の中には形では八角花形等、彫刻模樣では花鳥、海獸葡萄、又七寶鏡と言て眞珠珊瑚をば鏤めたもの、及び漆塗りに金銀の蒔繪等をしたものを用ふる樣に成つた。然し此時代迄は未だ全く支那の鏡を模したに過ぎなかつたが、藤原時代に及んで始めて我が國特有の形式や模樣を造り出す迄に藝術文化が進んで來た。即ち花鳥にしても雀とか鶴とか山吹の花などを描く樣に成り、之に紋を着けたりしたので、今度は支那や朝鮮が之を模して同樣の物を造る樣に成つた。

鎌倉時代を過ぎて足利時代に、鏡は又一大變化をした。從來は懸けるにも持つにもうしろに紐の通るつまみが有つて、それを摘んだものだが、此頃柄の付いた鏡が造られるやうに成つた又此頃鏡のうちに「天下一品」と言ふ文字を入れる事が盛に行はれた。之はやがて信長が嚴禁し、德川に及んでも此文字を入る事は許されなかつた。

扨て鏡は其姿を映すと云ふ事によつて一種不思議なものといふ迷信を自然に抱かせらる丶傾がある。古から之に關する信仰や迷信が種々ある即ち五寸以上の鏡を持つて歩けば惡魔が近づくとか神體として祀るとか又昔關白道長が大和の多武峯に法華經を埋めて經塚を建てた時に、其經管の蓋に用ひた事などもある。そんな事から懸佛と言つて鏡に佛の肖像を彫り之を懸けるやうにも成つた。

之を裝飾としたのは宇治の平等院や東大寺の塔の天井に之をかゝげた事であらう。斯くして明治に及んで迷信も解け、又之を硝子で造り用ふる樣に成つたのである。(大學助手紫田光慧氏)





私の考へてゐる青春時代

與謝野晶子

○普通に女の青春時代と云へば娘盛りを指すのですが、わたしの考へてゐるのは少し違ふのです。わたしは之を三つの時期に分けて、第一期は小娘の時分、第二期は娘盛りの時分、第三期は結婚後年齢で申せば三十六七歳までの間と、斯う致したいのです。此結婚後までを青春時代に加へる事は世間に異論があるでせう。併し世間の考は何うでも可いとして、わたし自身は現に三十を少し越した實感から正直にお話致すと、然う考へてゐるのです。わたしは未だ自ら華やかな精神生活を實行してゐる。何うも未だ質實な、重味と澁味とのある中年時代に這入つたと云ふ自覺は起つて來ないのです。世間によくある、十八九でお嫁に行つて直ぐに中年者じみたりお婆さんじみたりするのは、何う云ふ心持なんか一寸わたしには解釋に苦むのです。

○家庭の事情とか何とかで結婚が遲れたり、高等師範とか女子大學とかを卒業したりする爲に二十七八になると、もう世間では老孃だと云ひ、本人も亦老孃の樣に思ひ込んでうら寂しい氣持になるのは無殘な事だと思ひます。二十七八を老孃だなんて世間の思はくは兎も角、自分では其樣な僻んだ量見を持たない方が善いでせう。そんな事を想ふのは德川時代の舊臭い考がこびり附いてゐるのですよ。ずつと古代の女は奈良朝でも平安朝でも二十七八と云へば娘盛りであつたぢやありませんか。源氏物語で光の君に並ならぬ戀をせられる朝顔の宮の主人公も、薫の大將がはげしい戀に陥る宇治の大姫君も、共に二十七八から三十歳位の婦人であり乍ら、若々しい姫君として書かれてあります。

又和泉式部にせよ、紫式部、清少納言にせよ、其戀をしたり宮仕をしたりして華々しい青春時代の生活を樂んでゐたのは、何れも三十歳前後の事なんです。わたしは一概に昔を尊がる者では無く、寧ろ何事でも八分までは今の方が善いと考へてゐるのですけれど、古い時代の事でも斯う云ふ自分の身に都合の好い事は今日にも大に學んで好いと思ふのです。成るべく永く若若しい心持で居ようと云ふのに實際誰も異論は無いでせう。と申して一般の若い婦人達に之をお勸めするのでは無い。お勸め致したからと云つて、人には色々の異つた境遇と性情體質とがあつて、一樣に然う云ふ心持に成れる譯のものでは無いのですが、一部の婦人達には之をお勸めして成るべく萬年新造で居られる樣にと望んでも好からうと思ひます。殊にもう二人三人の御兒さんを持つて入らつしやる若奥樣の御參考に特に此の事を述べたいと思ふのです。



△二十七八を老嫗だなんで——世間の思はくは兎も角、自分ではそんな僻んだ量見を持たない方がいゝです、そんな事を思ふのは德川時代の舊臭い考が、こびり附いてゐるのですよ……。

○話が少し傍徑へ這入りますけれど、文明と云ふものが一切の人に新しい自由と新しい幸福とを與へる事は勿論ですが、中にも久しい間不幸な位地に忍んでゐた女に取つては、文明の恩澤が染々と難有く感ぜられます。理想を云へば切りが無く、まだ〳〵婦人自身に不滿足と苦痛とを感ずる事は多いのですけれど、若しお互が明治初年の女に生れて居たなら、どんな精神生活をしたか、どんな物質的生活をしたかと考へると、現

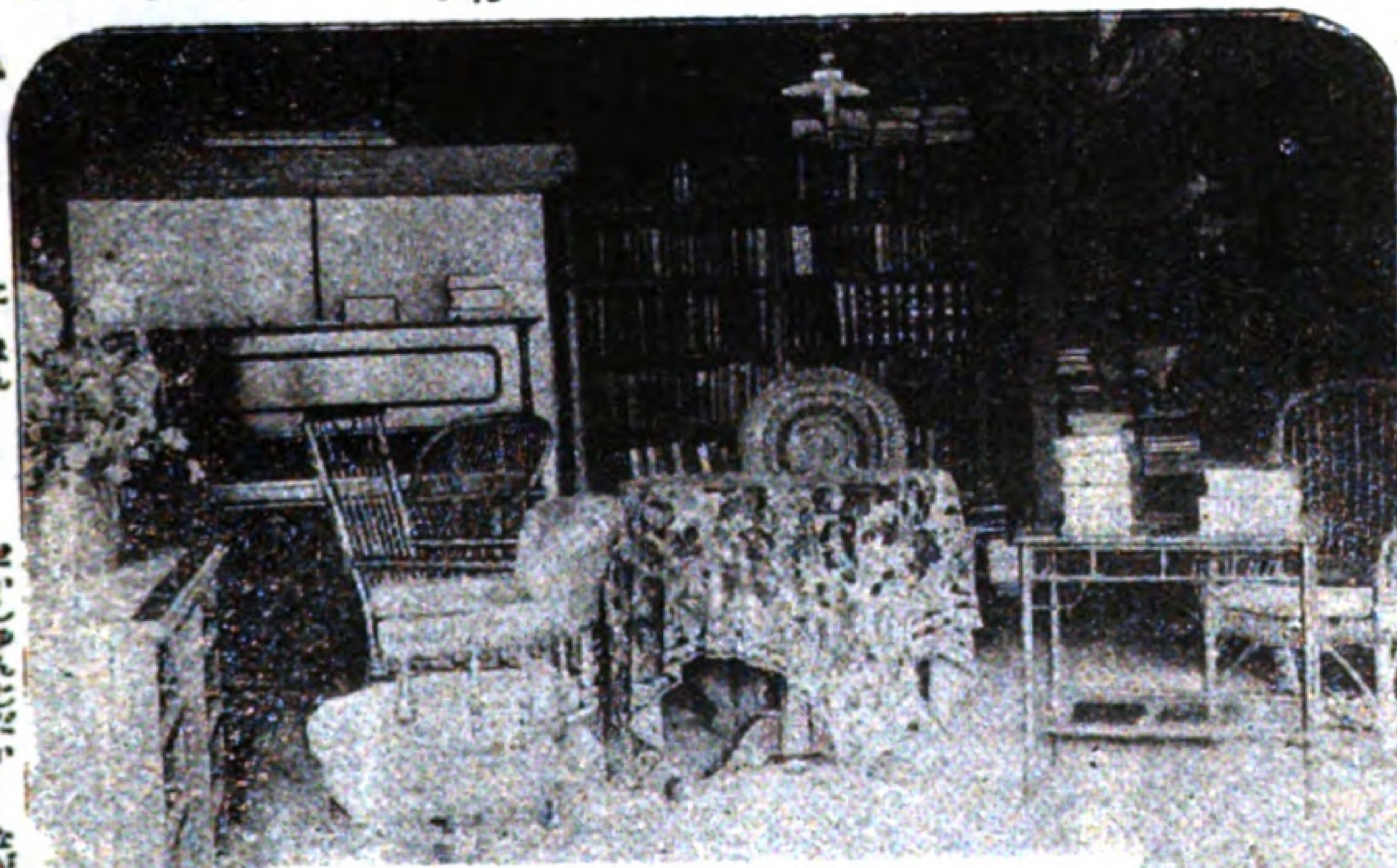
代の若い女の仕合な事を誰も感謝せずには居られないでせう。従來の女は思想感情、意志何れにしても大へんな繋縛を受けて居ましたが、今日の娘達は兎にも角にも其固陋な繋縛を半分以上解かれて居ります。例へば女子教育の普及が其れです。平安朝の娘が如何に學問と愛情との自由を得て居たからと云つても、其れは纔に京の貴族や官人の娘に限られて居ました。今日の様に娘自身の執心と父兄の希望と財力とさへあれば、身分や位地の障壁無しに學校にも學ばれ讀書もせられ自由に如何なる高等の學問技術をも修めて、男子と對等の智識情操を味ふ事も出來るのとは比べ物で無いのです。



△元祿時代の婦人——がどんなに派手な時世粧を競うたといつても、それは江戸大阪の狹斜の地に限られた、ほんの一部分の流行に過ぎませなんだ、とても一般に行き亘つた今の婦人の贅澤とは比べ物でないのです。

〇物質的生活に於ては精神的の方面よりも更に偉大な贅澤をお互はして居ります。衣服にせよ、装飾品にせよ、食物にせよ、お互の母や祖母達の知らない新しい贅澤な品を、どれ位平氣で當り前の事の様に今の若い婦人が使用して居るか知れないでせう。元祿時代の婦人がどんなに派手な時世粧を競うたと云つても、其れも亦江戸大阪の狹斜の地に限られた、ほんの一部分の流行に過ぎませなんだ。とても一般に行き亘つた今の婦人の贅澤とは比べ物で無いのです。之を見て、昔の貧乏な儒者氣質を保存してゐる一部の吝臭い人々は「女子の虚榮」など丶云つて非難やら警告やらを致しますけれど、自然に推し移る

新しい文明の大勢は頓着なしに、精神、物質の兩方面に若い婦人の自由と幸福とを擴げて行きます。虚榮と速斷するのは輕卒な又淺薄な考へで少數の優れた人々の文明は一躍内心から開け、其れに次ぐ多數の人々の文明は先づ形から修めて掛ると云ふ人間進歩の自然な段取を大觀する人から云へば、物質的の文明は少しも憂ふるに足らない事でせう。古代の蒙昧な世の中では物質的の驕奢の爲に國を傾けた事もあつたでせうけれど、今日のは大分に譯が違つて、單に物質的文明の進歩ばかりで無く、其裏面に立派な精神的文明が裏書をして居ます。何が爲に若い娘が美くしく着飾るかと云ふ事を、敎育された智識と感情とが鄭重親切に指示して居ます。日本の若い女は未だ然う云ふ高度の敎育を受けて居ないかも知れませんが、併し世界の進歩した婦人が其敎育を受けて居ます。日本がもつと、もつと世界の文明の善い部分の感化を受ける樣になれば、日本の婦人も然う云ふ徹底した敎育を受けるでせう。其れは決して遠い事でも無いと思ひますが、其れまでは多數の若い娘達に形から修めさす積りで今日の贅澤を大目に見て於て好いと思ふのです。殊に昔と違つて今の若い男女は、四圍に順應する必要から自然經濟上の智性を鍛錬せられ年齡の割に何れも金錢には打算的で底に締りがあるのですから、他人が心配する程の危險の無い質のよい見え坊なんです。



理想の書齋

○話を前へ戻して、わたしの謂ゆる青春時代を永くすると云ふ事も亦、新しい文明の恩澤をお互婦人が成る丈餘計に享得したい。與へ

られた自由を出來る丈理窟に合ひ實行の可能なる範圍で多く利用し、飽くまで幸福な精神物質二面の生活を遂げたいと望む爲に外ならないのです。其れで前に分けた三期に就いて猶わたしの理想を述べますと、第一期の小娘時代と云ふのは十二三歳から十六七歳までを指すので、花で申すなら稍ふくらみ掛けてほんのりと赤味を帯びた蕾ですね。此時代には父母とか兄や姉とかの監督者の下に嚴正で且つ鄭重な監督と保護を受け家庭教育と學校教育とを平均に並び行はれる様に致したいのです。わたしは此時代の娘の心持を専ら純潔に保たす爲に、物事の善く解ッた父兄や母親が、白玉をあつかふ様に、又修道院の尼君をいつきかしづく様に



△學問技藝に至るまで――其素地は家庭にあつて父兄の言動を見聞する間に會得させたいのです。

其娘を尊重し大切に育てて欲しいと思ふのです。其れから今の様に學校教育に任せ切りで無く、反對に家庭教育を主とし、倫理を初め學問技藝に到るまで其素地は家庭にあッて父兄の言動を見聞する間に自然會得される様にし、其補助として學校教育を受けさせると云ふ位に致したいのです。然うするには父兄自身から先づ教育して、どんな職業は營んで居ても其心持と所作とは文明の紳士淑女である資格を作ッて掛らねば成りません。此時代の娘の讀物には勿論わたしも制限を加へたいと思ふのですが、家庭さへ善良であれば制限を加へなくても如何はしい讀物は娘の目に觸れないでせうし、よしや家庭以外で目に觸れる事があッて、、平

生の嚴肅清淨な薫育の感化で、油に水を投げた如く其汚らはしい物を撥ねとばして仕舞ふに違ひないと思ふのです、此處でわたしの例を言ふのは不遜な樣ですけれど、多くの雇人の出入するわたしの實家では、色々な野卑な話を常に耳にしましたけれど幸ひわたしの祖母や父が讀書の樂を少し許知ッて居た人でしたから、わたしは其感化を受けて、十一二歳から父母に隱れて庫の書物を拾ひ讀みし、枕草紙に一條の皇后が清少納言に向ッて、「第一の人に第一に愛せられる人となれよ」と仰せられた詞などに興を催して、自分は清淨な女だ。自分は飽くまでも大切にせねば成らぬ。あの雇人や宅に出入する人達とは階級が異ふと云ふ樣な自尊心を持ッて堅く身を守りましたから、意外に周圍の惡い影響を受けずに濟みました。


△自分は清淨な女だ――あの雇人や宅に出入する人達とは階級が異ふといふ樣な自尊心を持つて堅く身を守りました。

又此少女時代を完全に敎育する爲には、もッと今の幾倍かの實學を修めさせたいのです。今日の女學校の敎育は空虛な學課に非常に多い時間を費してゐる樣ですから、其時間を活用してもッと程度の高い書物を澤山に讀ませ、もッと進んだ智識、感情、意志を授ける女學校が出來ねば成らず、家庭の敎育も其方針を採らねば成りません。其れでないと只今の樣にお嫁に行く年齡になッても、未だ其智識の程度は男の中學卒業生に匹敵する事も出來ない樣な慘めな狀態に止ッて居ねば成らないでせう。澤山の高遠な書物や優雅な音樂、（日本の女學校では未だ何處にも眞實の音樂を授けて居りません）其他の藝術を授けたならば、其方の秀で

た興味と繁忙と丈でも、いやらしい誘惑を被むる餘暇は無い譯です。又此時代の服裝などは矢張物事の解ッた監督者が質素にして淑かに美くしい物を擇んで用ゐさせるが好いでせう。今の地方の女學生が着てゐる女の劒術遣の様な質素一方の無骨な服裝も厭ですが、東京で見受ける様な度を越えた華奢な服裝にも及ばない、すべてに清淨と上品と優美とを失はない様に躾けて欲しいのです。

○第二期の娘盛りと云ふのに、十七八歳から廿六七歳位までの間を指すので、此時代の教育は男子の高等學校程度より始めて大學程度と匹敵する位の高等教育を學校で受け、一方では家庭の監督から脱して隨意に百般の物事を自修する様に致したいのです。前の少女時代の教育で十分自分を尊重する事を知ッて居るのですから、現に男子の同程度の學生を父兄が解放して置く様に適宜の行動を許しても大した過失は無からうと思ふのです。一人で歩ける者を縛ッて置けば反抗的に繩を切ッて危險な道にも踏み込むでせうが、父兄が其娘の一人前の人格を尊重して一人歩きを許し、唯遠巻に保護して居れば素直に正しい道を歩み、自然に自分の感得した規律で自分を制して行くに違ひないと思ひます。此時代は半開の花とも云ふべき匂やかに奥ゆかしい時季ですから、其學んで得た思想感情が生々と若々しく多種多様の刺戟と興味とを持ッて内心の裝飾を美くしして居るのに合せて、服



△日本の女學校ではまだ何處にも眞實の音樂を授けて居りません。

装其他の外面の装飾も出來る範圍を盡して美くしくするの自由と幸福とを與へて遣りたいと、物事の解ッた父兄ならば屹度考へる事でせう。

わたしの考へでは、此娘盛りの時期に於て成るべく娘として處女としての樂しい生活を十分に味はゝす樣に致したい。從來の女には此娘盛りの期間が非常に短かッたのですが、わたしは事情の許す少數の婦人達に限ッて、廿六七歳までは美くしい娘盛りを續けて行ッて差支へないと思ふのです。併し之は結婚を嫌ふ風習を作れと申すのでは無いのですから、良縁があれば廿二三歳で次の第三期に入るのも結構なのですが廿六七歳になッて結婚しても決して晩婚では無いと云ふ心持を持つ樣に致し度くて申すのです。然うしてわたしの理想通にすれば、良人の撰擇は娘自ら社交界に遊ぶ自由を利用して擇ぶとも、物事の解ッた師友や父兄が先づ撰擇して、娘が更に隨意に諾否を決するとも、何れでも可いと思ひます。敎育を女に施すと結婚を嫌ふなんて云ふのは父兄の思ひちがひであッて、結婚を一概に嫌ふのでは無く自分に不適當な、即ち一生の不幸が豫知せられる樣な結婚を嫌ふので、飽くまでも自己と社會との調和を破るまいとする愼重な賢い考へから然う云ふ事も起るのです。一體敎育とは然う云ふ賢い思慮を持つやうにするのが目的では無いでせうか。



△服装其他の外面の装飾――も出來る範圍を盡して、美くしくするの自由と幸福とを與へて遣りたいと、物事の解つた父兄ならば屹度考へる事でせう。

○わたしは男の子は學資丈あれば可いが、娘の子には學資の上に更に優に獨立し得る丈の財力を與へて置きたいと考へます。獨立と云ふのは獨身で暮すと云ふ事で無く、今日多く行れる黃金の爲に輕卒な卑しい結婚をする樣な事の無い樣に、自分の衣食住は自分で立派に出來る位地に娘を据ゑ、其清淨な上品な人格を確實に保たせ度いと思ふからです。日本の婦人が卑屈になッた一つの大いな原因は、德川時代に入ッて娘に財產を頒けると云ふ制度が無くなつた事で、其れ以來男子の財產に賴ると云ふ卑しい女心に墮落したのですが、古代に遡る程父兄が娘や妹にも男の子と同じく財產を頒けて遣りますから、女は衣食住の生活に獨立してゐる强味で、却々輕卒には男子の求婚には應じないのです。之は平安朝の歷史や文學を見れば澤山に例證が目にとまります。

繪の稽古



○最後は第三期の結婚をして卅六七歲になる迄は、花ならば滿開の花で誠に華やかな青春時代の頂上だと思ふのです。一家の主婦としてのみで無く、わたしの考では社會生活の競爭に良人の相談相手、助言者、介添人となッて働き、前二期で修養した所を盛んに傾ける事が出來たならば、何んなに花々しく愉快な事だらうと思ふのです。然うして此時期が過ぐれば青春時代はめでたく終つて、更に重味と澁味のある中年時代に入ッて、花で無く美くしい實を結ぶ季節となり、小兒も次第に敎育期に入る事ですから母としての職能をも立派に盡さねば

成りません。

○以上はわたしの理想なんです。之は決して一般の婦人に直ぐ行はれる事では無いのですが、或る少數の立派な家庭でならば實行の出來ない樣な空想では無いと信じるのです。兎に角お互に若い心持を失はずに青春時代を永くして、文明の自由と幸福とを飽くまで樂まうではありませんか。わたしは正月の歌に「とこしへに若き我世の證をば春立つ朝に思ひ知るかな」と詠みました。

梅の花としのはしめをことほきて
　雪の中より咲き匂ふらむ　前田利鬯

鶯はしらすやあるらむふる雪に
　ましりてにほふうめのはつ花　黒田長知

春をまつ梅のこゝろもしら雪の
　しらてや花にふりかゝるらむ　千家尊福

白雪のふるえなからに梅の花
　にほひそめけり九重の庭　高崎正風





夢より醒めた女

空想の世界を出でゝ實現の國に入らんとする私の首途

内藤千代子

光榮ある人生の春、一生一度の青春期、再び遭ひがたき人生の春、一刻千金の人生の春、あゝ私も何んだか涙がこぼれて了ひましたのよ。

昨夜も母に、「ねえお母樣、昔の人には一刻千金の人生の春なんて時代はなかつたのでせうね、子供から一足飛びに大人になつちやつて、あの祖母樣なんか肩揚してゝ丸髷にお結ひになつたと云ふぢやありませんか、十五のマダム、今ならまだ小學校の生徒ですものねえ」と申してましたら、どうした風の吹きまはしか、祖母樣が大きな老眼鏡を外づし〳〵、此方へお向きになつて、「祖母樣のお耳は五十町一里の伊勢道どころぢやないのですよ、百町一里ぐらいのレコードなのよ」

「私等の若い時分にはみんな當時の女學生のやうに、口ばかり達者の意氣地なしではなかつた……」

と例のお說法が始まりかゝたんでせう、

「あら、祖母樣お膝のそばをくもがはつてますよ、そら、そら、あゝ、そつちへ行つた、あら、あら」

と體よく敬遠主義でにげて了ひましたが、笑ひごつちやないのよ、あゝいつまで若き少女子の、たのしき夢の我等ぞや、日に〳〵老い行く人の身よ、若きを誇りし我世の春も逝くか、あゝついに逝くかな。

ゆかばゆけ、去るものは追はじ、來るものを迎へよ、とは云へ……あゝ。

あとで一時に年よつてもかまはないから、この十八と云ふ年にせめて二三年小休みが出來たなら、うれしいだらうと思ふけれど、お友達はみんなお父樣になつたりお母樣になつたり、ずん〳〵追ひ越して行くのに私ばかりが萬年娘でもつまらない、どうぞ人も我もいついつまでも靑春の人で、天の甘酒に醉うて居たい：

……………

かへりみれば思ひ出多き、始めて結げた高髷の、頭にゆらぐ十六の正月、ある家の歌留多會に招かれた。

春や今宵、華燈の灯影にはキユピツトひそみ愛の神妬みの神も見て在すらむ。柳さくらをこきませし、若い美しい二十人あまりの集まりでしたが、その時花の中なる名なし草、かへりみる人もなき田舍少女の身をいたく恥ぢて、と共に、このやうな場合、よしあし共にかゝはらず何でも人に、つよい印象をあたへてみたい？とひそかに願ひを抱きました。

その願ひ、神も納受ましませしか、以來、もう少女のプラウドには飽きました。

けれど、けれど、いまこの花の世界を出でて、現實の國に入るのは厭です、口惜しいわ、あゝ靑春は惜しむべし、はげしき心紙にそゝぐペンを傳はる紅の閃きや、理想は高く空の如、想像は自在雲のごと。

何物にも囚はるゝな、とさけびながら私は、私は、意志はともかく境遇は家庭に囚れて居ました、家のため母のため妹のため、三年鳴かず蜚ばずの有樣、やうやうその絆もとけて、近い中に出京ときまれば、今まで思ひもよらなかつた緣談なんぞが湧き上つて、また

新なる煩悶をさせる。

私はもとから賢母良妻主義、結婚を厭ふわけではないけれど、せめて十代のうちだけは自由の心身で居たいと思ふに……。

こんなお多福の何處がよくてか、强ひてと有仰る方もあるのださうです、私縁談のかゝつてゐるうちほど、不愉快なものはありません。



△現實の國に入つた女――今この花の世界を出でゝ、現實の國に入るのはいやです、口惜しいわ、あゝ青春は惜しむべし、はげしき心紙にそゝぐ……。

先日も可笑しかつたの、お見合だつて突然東京の高倉の奥様が高いカラアの若紳士を引ぱつて來ました、あまりの不意打ちに母も面喰つたらしかつたが、私大不平だつたのですそれで云はるゝまゝに、お火とお茶とを持つて出たが、突き出すやうにおいたまゝ直ぐ退却して來て了つたので、母と奥様の氣のもみ樣つたらないんですの、仕方なく今度はチン

と眞正面に坐つてやると、相手はしきりとかたくなつて、無やみにお髭をひねりまはしながら、一生懸命になつて話かけます、私その人達が歸るや否や、ピーンとはね上つてやりましたのよ、○○○出身の人なんか醫者と坊主にならべて嫌ひなんです、さう〳〵、みをつくし樣、のらくら學校つて○○○のこと、ホヽヽ痛快、痛快、私、○○○へなんか行くやうな從兄があれば、はり飛ばしてやるわ。

併しねえ、かつては角帽〳〵と王冠の如く心得て居た時代もあつたけれど、少し親しく接して見れば、大學生だつて人間ですもの、隨分下らない人が多いんです、首尾よく學士になつたところで、高等官の試驗にさへずゐ分落こちる人がある、秀才の聞え高かりし文學士夫人となつた光枝樣も、邊鄙な田舍中學へ行つて四十五圓の月給、お子樣がもうお三人、ときいては一寸悲觀して了ふ。

士官學校は馬の養成所だの、陸軍將校が大きな長靴はいて長いマント着て、劍の先がチラ〳〵顏を出すあれが大嫌ひでよく笑つたものだが、そんな事ばかりも云つて居られなくなつて來た。

弄かひや冷かしは通せぬふりで受け流し、正面から切りこまれても眉根一つ動かさぬ私、みんなはさぞしやあつくな孃だと思つて居るだらう、親類の叔母樣達は、ハイカラ樣〳〵で相手にしませんの。

人におのれを見すかされる樣な氣がして、母にさへ眞情をみせぬ女故、抱く苦悶も人一倍、それは、それは、縋るべく語るべく、なつかしの友、變へじかはらじ永劫の睦みよと誓ひ交した綾樣もある、竹田夫人もあるけれど……双肩に荷ひあまつた悲しいこと、辛いこと、打明けたなら手をとつて泣いて下さるであらうけれど、いまはそんな事して居るべき時期ではない何事も胸一つに秘めておさめて、勇しく戰ひます、恐ろしい未來、たのしい未來、うき事のなほこの上につもれかし、限りある身の力ためさん……。

いたづらに都を花とあこがれて、あまりに母を泣かせ給ふな、と云ふて下すつた方もありますけれど、私

もうそんなやさしらしい子ではありませんの、私等は若いのです、奮鬪して運命をひらかねばなりません。

去年の今頃は血汐の熱い少女であつた單純な胸を抱いて居つた、人の情のうれしくて、やさしい言葉も身にしみた、それがこの頃日毎々々に、我乍ら心の進歩(？)變化のはげしいのに驚かれます。

甘つたるい言いはれゝば馬鹿らしくてたまらず、禮を厚うした○○樣の手紙さへ、男子のくせに不見識にも程があると引さいて丸めて了ひました、今までは手箱に秘めてあつた澤山の求交狀も、みんな手ふき紙に使つて了ひました。



△去年の今頃――は血汐の熱い少女であつた、單純な胸を抱いて居つた、人の情けのうれしくて、やさしい言葉も身にしみた、それがこの頃、日毎〳〵に我ながらこゝろの進歩(？)變化のはげしいのに驚かれます。

利益を打算してかかつたら、戀なんて出來るものではありません、と云つたらまああきれた利己心のつよいがり〳〵亡者だと云はれるかも知れないが、戀の前には理性はない、なんて約婚の女をふり捨て泣かせたり、また勉學盛りの女學生の身でありながらまあ大それた處女の資格を失ふて了ふなん

かより勝でせう。

とは云へ、多感多涙の子、永久に胸にきざんで忘れられぬ御名はかの君ばかりではない、が、一大悲劇のヒロインとして、私はあまりにあきらめが好過ぎるのです、君は高根の玉芙蓉、外交官御志望ときいてから、煩惱の犬は去りました。

こんな風で、かつては足並揃へて進んだ友とも、一時は姉様とまで呼んだ久子様とも、私の心は放れて了ひました。

先刻も綾様のお手紙讀んで、泣かされて了つたのでございます、あゝ光彩陸離たる中に立ち給ふ、玲瓏玉の如く窈窕花の如き君よ、私は親の名もなく地位もなく財もなく身についた學問技藝もなくて……けれどけれど、綾様のやうな方を羨みもしません、努力して得たるものにはそれだけの價値がある、自分の運命は自分でひらく、とは思ふけれど、あまりに崇く美はしい綾様の人格に接する度、おやさしいおん文頂くたび何とも云はれぬ心になりますの。

おゝたのしい日でございました、去にし秋晴れの運動會……あゝ又の日の疾く來よかしと祈るばかりおなつかしいわ綾様、逢ふはうれし、別れはつらし、別れおもへば逢ふは厭……。

袖ふりはへて池畔の逍遙、うつりて燃ゆる夕紅葉、あのゴシックな文科のビルディング、逝く秋の大學構内？

お頭痛があそばすとて、白いおん面の紅なのを、私はどんなに驚いたでせう、水色のリボンがさして、前髪ゆらぐルイサ卷、緋鼻緒の重ね草履重たげに藤紫のお被布姿。

別れを惜しむ最後の握手、指環の食ひ入るばかり握り合つて……。あゝ待たるゝは來らむ彌生の記念祭……。

展覽會へもお供いたしましたのよ、みどり濃き常盤木の間がくれ、楓葉血の如く紅に、小波よする不忍池畔の夕雲や、光るやうな君と肩すりよせて語り合ひつつ……。

それはね、綾様はみんな人がふり返つて行きますの
御一緒に歩いても氣持がようございますわ。

竹田夫人も美人よ、あの華美な紋縮緬のお被布召して、すらりとしたお姿がまだあり〳〵と眼の前にうかびますのよ、静ちやま抱いて少しそり身に、身をゆすり作らお緣をあちらこちなさる時や、そのまた靜ちやまの可愛らしさつたらないんですもの、眞白い和らかなお顏に頰ずりして、笑ひながらあの美しい眼をおあけなさる時や、それよりも〳〵あのさつぱりした書生肌がほんとに氣に入つて了つた、奥様になつたつて滑ます樣な人大嫌ひ、竹田夫人が理想のマダム振りよ。



△竹田夫人も美人よ――あの華美な紋ちりめんのお被布召してすらりとしたお姿が、まだあり〳〵と眼の前にうかびますのよ、靜ちやまを抱いて少しそり身に……。

あのね、竹田夫人達とA樣の御下宿へお訪ねしました時、食後の座興に林檎の

むきつこやりましたの、靜ちやまの父ちやまが一番お上手で、する〱と卷いたものをほごすが如く、こればかりはルビー輝く爪はし淸い奥樣のお指もとても及ばないのでございますの、A樣たらまあゝお可哀想なやうな手つき遊ばして、あまり厚くおむきになるものですから、むき上ると大きな林檎が半分ほどになつちやつて、大笑ひしましたのよ。赤い美しいその皮を、電燈のかさから長く〱ぶら下げました。果物の皮をうまくおむきになる方はいゝ奥樣をおもちになるさうですが、竹田樣はまつたくだと思つてほゝ笑まれました。

花の雲湧く春四月、來年の帝大ボートレースには靑のリボンさして御一緒にまゐりませうねつてお約束しましたの。

コムパやらストームやら、一座は若々しい話しに醉ふて、美はしい八字髭のお口元から、

「醫者の頭に雀がとまる、とまる筈だよ藪ちやもの、

……………………

「オール持つ手にヨー、月がさす……」

なんか始まるさわぎ。

それにつけても殿方は羨しうて、ことに〱學校生活？

その上京の折のことでした、降るやうな星月夜の晩、散歩にと一高の横通つて彌生町の方へ出やうとした時、私は思はず歩を止めた、何處からともなく寮歌の聲が、反響のやうに響いて來る、それは〱向陵一流の、何物かに醉はされたやうな若い太い美しい咽喉高調な感興にみたされて血のをどるやうなそのしらべ、高い譜、窓もる灯の輝きや、仰げば空にはまたゝく星、夜寒の風に袖を抱いて私は心行くまで立ちつくして居た。

その夜床にはいつてからも、ハラ〱こぼれる落葉の音と、「登る朝日に露消えて、東亞の覇業ならん時、」となつかしい蠻聲は絶えず耳にひゞいた。

有明の燈火寒う、私はついに袖口かみしめて泣きました、悲しい一夜でありました、男子であつたら？と

物狂はしいまで……。

さても汚れし人の世よ、見よ幾むれの魔神こそ、驟馬に鞭ちいろあやの、錦の袖をうち振りて、都大路をはせ狂へ、かゝるいぶせきうつし世に、入るべき山はあらじてふ人に示さんほこりてん、夢安らけき武香陵。

その翌朝、憧がれ心たへかねて、庭口からつひ〳〵足の向いて了つたのは、また例の高等學校の横手、清き柏の白露に、夢を洗ひてよる窓や、上野の森はほのかにて、紅燃ゆる雲の色ふれなば燒かむ熱き血のたぎる胸にも似たらずや。



△牝鷄の晨――する女天下をのぞむわけぢやないが、――家庭においては男子を敬服させるだけの見識と手腕がありたいものです。

けれども私、男子の方は羨しいけれど、女權の擴張なんか云ひ出す事は大嫌ひよ、何も選擧權などあたへられなくとも澤山、帝國大學へ入學は許されなくつてもいゝ、どうせ婦人は男子と同じ道

を進むべきものぢやないんですもの。その代り……牝雞の晨する女天下をのぞむわけぢやないが――家庭においては男子を敬服させるだけの見識と手腕がありたいものぢやありませんか。……そしてしづかに内を治めて、そこに新しい意味を見出せ……なんて申しますやうなもの〻、こんな奥樣おもちになつた方は、それこそ、氣ばかり強くて甘つたれられて…………ホヽヽヽヽまさかねえ。

考へると何が何だか、わからなくなつて了ふのです熱しやすい代りに冷めやすくて、樂天的の方だからいいやうなもの〻、折々は夕べの緣にねざめの床に、逝く雲、散る花、かの人生の不可解に世を早うしたと云ふ藤村樣のことが思はれてなりません。

死は永久の睡眠なり、なんてとんでもない事をさゝやかれる時もありますのよ。

宗敎は弱者の縋るべきものとばかりで、信仰心なんてものはどうしても起らない。

信仰心のないものはけものに近いとあるクリスチヤンは云ひました。

やつぱり私は自己を愛し、自己を信じて、スキートホーム、ホネームーン、ゴム輪の車、ダイヤモンド、晩餐、一高、それ以上考へない方が幸福なんです。

机の上には綾樣の立姿、細面を少し傾けて、涼やかなおん眼をあけて、象牙細工のやうな鼻つき、長いおん眉、おやさしいお口許は拜しながら、何と一言有仰つても下さらず、おん頰のあたり、例のおん笑くぼの在しまさぬが物足らぬ思ひ……あゝ白襟重ねたお胸のうち、綾さまの理想が伺ひたいわ、同じ運命の女と生れて……………。

あちらで足袋つぎをしてゐらつしやる母樣の影が、大きく障子にうつゝて居る。

私が居なくなつたらば、お淋しいであらうけれど、けれど、けれど、少女十八、いつまでかくて空しかるべき、あゝお母樣。

光榮ある人生の春、一生一度の靑春期、再び遭ひがたき人生の春。



少女を飾る賀狀の數々

花吹雪

「人よ若かれ、世よ豐なれ」と初日影鮮に東の御空に上りしより、一日二日又三日、床しき友垣、さては親族の人達より我身の上に賜はりし祝福の聲々黃金の征矢か花吹雪か、光明あたり滿ち渡りて、魂高く霞める空に遊ぶ。

◎

津田樣より(はがき、一日着)

玉椿の八千代をこめて新年のお祝申上げます。

いよ〳〵青春十八ね、初日の光は空に滿ち、希望の光は胸に充つ、お互に新しい樂しい華かな女子となつて新興國の花と咲き匂ひませうね、三日には例の會でお目に掛ります、愉快に話しませうね。

一日　たみ子

◎

渡樣より(はがき、一日着)

年の始の御ほぎごと、句もなく歌もなく、たゞ平凡に申納め候　かしこ

亥の年元日　あや

…………

とはあれど、上部を落着きたる暗碧にぼかして、左の方に五出の金星燦として夜のみ空に輝ける象、まさしくこの君が御筆の跡なり、清新、永遠、こゝにもゆかしき光明溢る。

「平凡を樂しみ得る女子は非凡なる女子なり」とある師の君は仰せられき、されど我等は從來の女子が執りたる意氣地なき平凡主義を樂しみ得る程の非凡人にはならぬ積りなり、韞む香もなく藏むる光もなく、無意義なる平凡の生活に一生を捧げて、悲しき

平和を謳ふのみが女子の運命か、強くなりたし高くなりたし面白く活きたし。

◎

伴さんより（はがき、一日着、十五歳の人）

お目出度ございます。

今年も一層の御慈しみを願ひ上げます、明日から兩親に連れられて鎌倉へ參りますの、一週間程ゐて歸つてからほんとの御年始に伺ひます、あなたが御好きの大佛樣をよく拜んで參りませう。

……………

春の潮の緩かに太平を奏でことほぐ七里が濱、それに近く、慈悲愛憐のお相好いや尊き、端然不動の御佛が姿、少く可愛き人はいかにおろがみて、いかなる御教や受け給ふらん、そゞろに床しや。

◎

小村樣より（お使にて、二日）

今晩宅でかるた會の準備をしましたなるべくお早くお出で下さい。

但、男子の方が四五人ゐらつしやいます、例のお手付け專門の從兄も參るでせう、是非花々しく戰はうではありませんか。

別に姉と二人で考へた勅題料理の御披露も致します御批評は何分御手軟に　かしこ

◎

三上樣より（封書、二日着）

謹んで新年の御祝儀を申納めます。

當年は繪葉書を止しました、何處を尋ねても寒月梅花や豚の先祖の猪殿、平凡な〳〵御話にならないものばかり、なぜ日本の美術界は何時までもかう幼稚なんでせう、氣に入つた繪葉書一枚出せないとは新年早早悲しいぢやありませんか。

私いよ〳〵繪畫研究に一生を捧げると極めましたの三月に學校を出たらすぐ專門家に就く積りです、あなたはお歌、私は繪、品こそ違へ諸共に美神の愛兒となつて、日本女子の新光明を琅玕一枝の筆の花に發揮しませうね、眞面目ですよ、競爭ですよ。

亥の年の始め

ちか子

怖ろしき挑戰狀かな、されど新しく胸そそられて、かかる友垣一人持てるがいといと嬉し。

◎

松枝様より

（封書、二日着）

（上を省く）暮にお餅燒をした日から風邪を引きましてね、とうとう床の中で新年を迎へましたの、入學以來一度も缺かした事のない學校の式にもそれで缺席したんです



なにもう癒いんですよ、今朝なんかお雜煮を祝つて健啖嘗に倍すです、ホヽ御安心下さいね。

新年式は如何でした、皆さんが新しく艶々しいお顏の輝を床の中でじつと想像してゐましたの、校長先生の式辭を當てゝ見ませうか、皆さんと共に光輝ある新年を祝します…今年は一層の進歩を祈ります、それから…エート銀髯拈つて…男女混合のかるた會に出席すべからず…ね、當つたでせう、極つてるわ、さう

ちやなくなつて。

ある意味に於ての侮辱ですわねエ、そんなに男子が怖いものでせうか、栄螺見たいに蓋ばかり堅くして岩に咬み付いてゐるのが青春處女の誇りではありませぬわ、碧く透けた春の海に自由自在に游いでゐる蛸や鯛が私は好きよ……ホヽよしませう新年早々先生の攻撃なんか、いくら口の裂けてる位は先刻御承知の私でも……（下略）

◎豐橋なる兄より（封書、三日着）

賀正

併せて　陛下の御稜威かしこき扶桑帝國の新女子としての向上を祈る

若き女は須らく華かなるべし、櫻花の如きよし、梅花の如きよし、たゞ輕佻なるべからず、浮薄なるべからず。

因循を敵とせよ、活動せよ、出來得べくんば穏にして堂々たる活動を試みよ、而して常に輕快にそれ自身の春を讃美せよ。

好んで聞苦しき議論を吐くなかれ、女の議論は金米糖なり、いかに稜角多きも所詮は甘さに堪へざるを如何せん。

要するに高き情操の人となれ、清き趣味の子となれ眞摯なる實行の女子となれ、修養なき女は一生涯を安時計の如くなりて送らざるを得ず、修理又修理、而して遂に壞れて塵芥の底に葬らるゝ呵々。

元旦　恭助記す

……………

醉筆淋漓、皇國の干城、陸軍歩兵中尉の面目潑剌として紙上に躍る、嬉しとも嬉しとや云はん、さては「……本性違はず」とや註せん。

軍務のため去年のやうに御歸省の事なきこそ恨めしけれ。

◎横濱なる姉より（封書、三日着）

（上を略す）皆樣御健かに樂しい〳〵初春をお迎へで

せうね、大層好いお召衣が出來たつてね、‥‥お母様から御手紙でした、隱したつてだめ‥‥若く瑞々しい人生の花は生涯一度しか咲きはしませぬ、十分美しく樂しくお暮しなさい、私などはしみ〳〵とお前が羨しい程のお婆さんになつて了つたの、もう四年で三十ですわ。

隆が丸々と肥えてね、もうタアタヤト、が云へるの、今朝「お前は三つ」といつて聞せたら頻にチユッチユッて發音します、可笑いでせう、人の母となつては身體はその子の犠牲です、元日如平日、流行者の新調などは夢にでも見て濟まして置きませう。



丁度私が當家へ嫁たのが十八の春でしたね、當日の朝起きて縁へ出たら、窓前の白梅に銀絲のやうな雨が靜に降りそゝいでゐましたつけ、それからいざ出掛になつてお前が泣いて〳〵伯父さんに叱られた事など今もありありと記憶に殘つてゐます、ホヽの可愛かつた可愛かつたお下髪さんがもう十八になるんだもの、自分の老

けるのは悲しいけれども仕方がないのね。

老けるといへば、それでもお父樣お母樣がいつもながらお元氣でゐらつしやるのが何より嬉しいではありませんか、どうか精一ぱい美しく若くチャフルに生活して、春暖かな家庭を彩る花となつて下さい、隆が出來てから親心といふものがやつと解つて來ましたの、ほんとに白金も黄金も玉も何にかせんですお父樣お母樣はどんなにお前が華やかに成人なさるのがお樂しみなんでせう、孝道などいふと大層改まつて聞えますがね、順境に立つ少女のそれは先づ〳〵無邪氣に天與の美質を發揮することが第一義でせう、御兩親はそれと何より滿足にお思ひなさるに相違ありません、一寸これだけ申添へて、幸多き新年のお祝といたします。

一日　姉より

◎上野樣より（繪葉書、三日着）

お互に樂しい春ではありませんか、お遊びにおいで下さいな。

昨夜あなたと二人で旭の光に染められた淡紅花の雲に乘りましてね、高い〳〵青空に上つた夢を見ましたの、何の暗示でせう、覺めてから無闇に嬉しうございました。

しかも初夢ね、秘密にして頂戴よ、獏に食はれちや大變です。

「舊弊な事を」つて仰るの、イ、エ、私は舊弊のあるものを「趣味」として味ひたいんです、御知らせまで、かしこ。

…………

糸のやうなる細き〳〵文字の、紫インキもて記されたるがいと美し。裏は水色地に菫の英ぞ鮮に匂へる。

◎靜岡の從妹より（封書、三日着）

（前を省く）どうしたつて箱根一つ越えると空氣が古びますからね、此方の新年はだめよ、都の春がどれ程樂しいものかつて事は田舍へ來て見て始めて解りました

ほんとに貴女は幸福よ、羨しくつて堪らないわ。

たゞね、富士の大景だけは一度見に來て戴きたいの新年破曉の玉芙蓉、東の空がほのぼの明け渡る頃、あの淸い氣高い雪の膚がほッと赤みを帶びて、暗紫の裳裾末長う引かるゝ大女王の頭には、金冠燦と輝いてまだ靄深い下界を穩に照らさるゝ尊さ、やがて一秒々々にその彩が褪せて、一萬餘尺純白の大圓錐が、足柄箱根龍爪の山々を麓に懾伏させつゝ瑠璃の大空低しとそゝり立ち給ふ御姿には、誰とて無量の威嚴に打たれて魂は我知らず永却の懷に抱かれないものはありますまい。



崇高――潔白――淸麗――富士はどうしても櫻花國一般の女子に向つて常に不言の敎訓を下してゐるのですね、私はこの靈山によそへてあなたの未來をお祝ひいたしませう。

都の初春の御消息、是非々々こまかに御知らせ下さい。

二日の朝　美代より

◎二人の友より（葉書、四日着）

突然の御相談ですがね、明日三人で寫眞を撮らうぢやありませんか、寫眞屋はいつも御贔屓の豊浦としませう。



耀くおもて

橘百合子

我が春の望み

昨夜から降り續いた雪が今朝も猶やまない、之では親則樣からの御文も來ないのではないかしらん、あゝいやだ、折角の日曜なのに、淋しく一日暮さなければならない、とこぼしながら、編みかけの靴下取出し、ストーブの前で、編初めるとお茶の間ではあやが、「御孃樣は此頃東京の御便りと御勉强にばかり御熱心で御召物の御相談など申上ても、御聞遊さず、「母樣の御氣に入つた樣にして置て頂戴なんて仰しやいますよ」といふと母樣が、

困るな、けれど他の事に熱心なのと違つて、まあ結構だから、かまはずに、置く方がいゝよ」と仰しやるのが聞えました。ほんに、私は此頃どうかして居る、家に居ても、學校に居ても、唯親樣の事を考へて、嬉しがつたり、悲しがつたり、するのと、どうか學問の深い清い女になり度と思ふ此二つより他の事を、考へた事がないのですもの。

あゝ親樣今日はどうして暮して御出遊すか私の事思つて、ゐて下さるかしらん今頃はあの御書齋で私にとて筆取つてゐらつしやるのか、あゝ一目でも御目にかゝり度と思ふとなつかしく「親樣、親則樣」と小聲で呼で見ると初めて御目にかゝつた時のやさしい御顔が見えてきて、御一緒に樂しく遊んだ時の事が思ひ出されてたまらない。

此夏姉樣の御結婚で私も御兩親樣につれられ上京した式も濟御兩親樣御安心遊したもので氣やすめがて

ら何處か遊んで來やうと云ふ事になり、あすこ此處となか〳〵きまりませんでしたが、とう〳〵私の望み通り、鹽原に定まりました。

もう其時は九月初なので、私の大好きな白百合はなく那須野が原一面秋の千草八千草美しく咲亂れ秋風蟲の聲うら淋しう聞えて居ました。私共は福渡の升屋に宿り日々散歩や花摘みして樂しく二三日過しました。

「妙さんそろ〳〵倦たのではないのお友達はなし近くは大方見物したし」と母樣が仰しやいましたがどうして私倦る處ではなく、いつまでも居たいと思ひました。

だつて、いつでも散歩に出る毎に前の宿に居らつしやる若い美しい方と出遇ふのですもの。それがほんとに樂しみなのでした。初めて御目にかゝつたのは來た翌日天狗岩の下で母樣に是非此處へ登りませうよ、とせがんで居た時それを聞いて笑ひながらその母樣らしい上品な方と御通りになつた時で、其後どうした事か

私は此方の御姿が心に深く刻まれて忘れられなくなつて仕舞ひました。或日私共三人楓川樓に行く途中その方も御兩親樣と其所へ御出になるとて道づれになりました。お年寄は遠慮のないもの御盛に色々の御話を遊して居らつしやるのをお後から嬉しい恥しい思ひでついて行ながら伺うと此方は東京の〇〇會社の重役の山川樣と仰しやるのですつて、そして先札幌に居らした金田樣とは御謠ひ仲間で大層御心易いと云ふ事でした、すると母樣が「まあ不思議なもので御座いますね金田樣には 私共は御世話になりました、今度歸京致しましたら是非御尋申上ませう」と御喜びになりました、そうして此夏 私 共が上京したのは姉樣の御結婚の爲だとか兄樣が今度文科に入學なすつた事など御話しになりますと、宅のあれもやはり大學の文科を卒業致しましてすぐ、ハアパードに參りまして、こゝを卒業後一年許り歐洲を遊んで此六月末歸京致しましたが、少し身體を損ねましたもので、此夏中は久々で三人がうして遊んで居ります」と、御話遊したので、いまに兄樣と、いゝお友達におなり遊すでせうなどゝ的にもならない事を考へて喜んで居ると「それでは此御孃

樣が御末で御座いますかお優し相な可愛いゝ方でほんに御樂しみで御座いますね」と山川奥樣に賞められたかと思うと、「いゝえあなた何にもわきまへない子で樂しみやら苦しみやらわかりませんで御座いますよ」と母樣は仰しやいました。ほんとに東京の方が御覽になつたら私などお化粧の仕樣一つ知らない山猿の樣な女と御思ひになりましたでせうと、恥しく思ひました。



此邊をさがしても、それらしい家も見えないので、皆で「何處でせう〳〵」と云ひ合うのを美しい方は、楓川樓だから風船のやうに、何處かへ飛んで行たのでせう」と仰しやるもので皆笑ひました。

やう〳〵着いたので、皆御一緒に二階の十疊に通されました欄干によつて見るとすぐ下は箒川の上流綠茂つた山をひかえて、水音どうどうと流れ居る心地よさ身も魂も淸く洗はれる樣でした。あゝ此處で紅葉山人が金色夜叉を書いたのかと思うと懷しく思はれましたが、私宮さ

んは嫌ひお金の爲に替難い愛を捨てるなんていやですわ、いくら顔が美しくつても、女の優しみ暖味のない女はいやです、けれど今の世には「宮さん式」の女も少くないのかと思うと、そのけがれたさもしい心を憎みかつ憐まずにはゐられません。

御中食は御一緒に此所でときまつたもので御献立表を女中が持てきました、皆様あれこれとおきめになり母様が私に「妙さんは何」と御尋ねになりました、から顔を上げると、あの方の大きい美しい目とハタと合つて、眞赤になつて「何でも」と云つて仕舞つた、心と中では鰻の蒲焼をと思つて居たのに!! 御膳が出ると嬉しい事あの方と私とはすつかり同じ、しかも御望みの蒲焼付で。けれど胸さわぎがして折角の御馳走も通らず、御飯も一杯でお仕舞にしたら、山川様が、「もうお仕舞いですか、よくお腹がすきませんナ、」と仰しやると、皆様の視線は、私に集まつたもので、御恥しく、モヂ〳〵して居ると、母様が、「是はあまり頂けないので御座いますよ、子供の時から胃が弱いと見えまして、」と云つて下すつて嬉しう御座いました。

食事をしたお陰で歸途には馴れてあの方とも御話をして嬉しう御座いました。あゝ其御聲御快活な御話ぶり、いつまでも耳に殘つて、忘れられません、御別れする時、「龍化の瀧へもう御出でしたか」ときかれ、

「いゝえまだ」と申上たら、

「それぢやあ明日行きませうか」と仰しやいました、嬉しくつて〳〵て御約束して宿に歸て後も、今日の事を繰返し〳〵考へては、にこ〳〵せずに居られませんでした。そうしてモう一度今日御目にかゝり度いと緣側から見てゐると御一人で、ブラ〳〵私の宿の前を散歩して居らつしやるのですもの、嬉しくつてたまらない癖に、恥しい恐ろしい思ひがして大急ぎて室にとび込み障子をしめて、かくれながらやつぱり見たくてそわそわして居ました。

其晩曇つたもので、テル〳〵坊さん作つて床につきましたが、明日の事を色々に想像して、ろくに眠りませんでした。翌朝向うの番頭が「若旦那様御一方御出

ましで、御嬢様を御誘ひ申す樣にと仰しやいました」と迎ひにきました、

二人ぎりでは恥しいから、母樣に御すゝめすると、「山歩きは御免蒙り度い」と仰しやるし、父樣は「約束したのなら行く方がいゝよ」と仰しやるので、御供する事になり外に出ると、もふ來てゐらして、「昨日は失禮」、とほゝゑみながら御挨拶、恥しくて番頭の後ろにかくれて仕舞ふと、「下駄でいゝですか」、と御氣付きになる、

「大丈夫で御座います」と、御答して、番頭の案内で二人連立て行くのを通る人毎に見られる樣で、きまり惡く、とかくおくれがちに行くのを、ふり返つて、

「札幌と東京と、どつちが好きですか」と御聞になりました。あなたが居らつしやるから、東京がすき」と云ひ度のを「兩方同じ位に好で御座います」、と申上たら、

「東京の方が寒くなく、そうして賑かいでゝではないですか」、と仰しやいました、「私どちらかと申しますと都會より田舎が好で御座ます」と、もふ例の御遠慮なしに札幌の秋は野も山も、すつかり紅葉で美しく飾られるし、冬は眞白な雪に包まれ寒い中にも、スケートなどの、おもしろい遊びの出來る事や、春は、リヽイオフパーレイや、黒百合を野邊に摘に行く事ができると御話すると、

「いゝナ、僕も田舎が好だ、札幌にも是非いつか行て御自慢の、大きい自然の景色を實見しませう」、と御笑ひなすつた。道端に美しいオレンヂ色の花が二輪咲て居のを摘んで、一つは差上一つは自分の髪にさすと、

「まあきれい、何て花?」と番頭に御尋ねになりましたら、「是れは送花と申まして心に思てる人に送るのだとか申しますので、へイ…御若い御客樣など大騒ぎなさいます」、と嘘か眞か云ふのですもの、あて付られた樣な氣がして恥しく花の樣に赤い顔して花を見つめた私を、何と思つて御覽遊した事やら…

白雲洞の隧道を出るとすぐ、夏草茂る山路に登り初ました。鬱蒼と茂る木の下路苔むして濕つぽい山の香

は心地よく鼻を打ちました。
あぶないですよ滑らない様に、是につかまつて、居つしやい」と傘の柄の曲つた所を御出しになり、御自分は先を持つて引張つて下さいました。
　蹬々と水音がして、瀧から來水は岩にせかれ、石に砕け小路に添うて流れて居ます、流れについて、六七丁登ると、先頭の番頭が「瀧に來りました」、と云ふのが聞えました。
　丸木橋を渡らなければならないので、下駄を脱ぎ足袋はだしとなつて、「引いて上ませう」と、親切に云つて下さるのを御ことはりして、一人で上手に渡つた足際の美事さ、さすが北海道で育つた程あると自分で感心しながら、此度は脛まで入つて、ジヤブ〳〵と水中を歩いて、やつと瀧の直下に來した。大きく高いのに驚いてゐると、
「日光の華厳の瀧に似て居と申ます」
と番頭が云ふ、
「ほんとに似てゐるね」、と仰しやりながら、後の山に少し登りかけて、懐ろから畫帖を御出しになり、スケツチ遊しました。こんないゝ御慰みがおあり遊すのですもの、どんなに御樂しみだか知れません私も少し習ひ度などと、羨しく思ひながら、岩に腰かけて、瀧を見て居ると、あたりはシンとして、唯瀧の音ばかり、砕けちる水沫は、顔にかゝつて、いゝ心地で、何事も忘れはて氣ぬけした人の様になりました。
「そろ〳〵歸りませうか」と仰しやりながら、私の傍に下りて居して、立上ると、手を、ギユッと引いて歩いて下さるのですもの、嬉しくて、たまりませんでした。お放しになつて後も温かみが殘つて居やうで、引かれた方の右の手に、何か他の物でも障りはしないかと、心配でソット、口つけしたのを、ひどい事、ふり返つて見て居らつしやるのですもの、ほんとにあはてて仕舞ました。
　山を下つてから、あんまり秋草が美しいので、摘で歸りませうと云と、ぬけ目のない番頭は、「私がいゝのを澤山お取申ませう」と云て、あちこち、走りまはつ

て、集めてくれるので、私共は話しながら、歩きました。

「あなたの名は、妙子さんと云のですか」、ときかれ、「ハイいやな名で御座いますね」、と云ふと、

「いゝですよ僕は好だ僕の名を知てますか、あてゝ御覧なさいと仰しやいました。

「あなたの母様が親さん〳〵とお呼になるから、さうで御座ますね‥‥あの‥‥親正様と仰しやいますの？」、と出駄羅目を云と、



「親正は弟ですよ、僕は親則」、と笑ひながら、仰しやつて、親正様の下にまだ弟様が三人と妹様がお一人この妹様が末つ子で、玉ちやんと仰しやるのですつて、

「十五ですけど、まるで子供ですよ」、なんて仰しやつたよ

「まあ惜い事遊してねおつれになれば、私どんなに嬉しかつたか知ませんでしたのに」と心から殘念に思つたので申上ると、

「お轉婆ですから此所へなど、來くて仕合せでした、ですつて、ひどい兄様です事！！

さつきからホツ〳〵降出した雨が、だん〳〵はげしくなつて來した、昨夜作たテル〳〵坊さんを、今朝流さなかつた罰でせう、と思つて居と、「お入りなさい」、と傘を開いて入て下さいました、とヒタより添つてはゐるもの丶、相合傘のお互に片袖濡るのがかへつて、嬉しう御座いました、御別する時番頭が、

「お花は山で取ましたので御座いますから、山分と致しまして、後程御屆け致しますと云ました、おもしろい番頭だ事、

此日から又一層親しくなつて、二三日は樂しく嬉しく、遊び暮しましたが、父樣も御用多い御身又私とても、いつまでも、學校を、休んで居わけにも行きませんから、いよ〳〵明日歸京と定め前晩山川樣に御別れに行くと、

「それでは、私共も歸りませう、もう見物も大方すんだし、お連がなくなつては淋しいから」、と御話が出來ました、

嬉しうてたまりませんでゞした。さて翌朝馬車では親樣と私と向ひ合せ汽車では、ならんで腰かけました。

車中は外國でのしくじり話など、遊して、散々お笑はしになり、おもしろふ御座いました、宇都宮で、父樣が、バナヽを買て二つ附着たのを親樣に御渡遊し、私には下さらないのですもの、

「固く附着てゐますね」

と放しながら仰しやつて、一つ私に下さいました。恥しくて、だまつて居と、「美味ですよ」、と仰しやるから急いで食ましたが、他の乘合の手前恥しく、赤い面のやり場に困つて、横の信玄袋から女學世界を出そうと先上にある、日記帳を取出したら、父樣が「一寸それお見」、ですつて、是は大切な物で御座いますからいやと思はず口走つたら、親樣まで、御笑ひ遊すのですもの、…大急ぎて袋に入て雜誌を出し、開いて居ものの、どうして讀でなど居れませう？　心は親樣の事ばかり思つて、本は唯お飾に過ぎませんでした。

汽車は、電燈まばゆい、上野ステーションに着ました。いよ〳〵御別れと思へば、小さな胸は、血しほの

波にさわがれて、楽しかった越方思ひ出で、ぼんやり沈で立て居と、

「御歸なさるまでに、是非御遊びに居つしゃい、待て居ますよ」、と親様の御聲、ハッと我に返つて、

「いづれ御禮に伺ひます」と、申上、とう／＼御別れ致しました。

其夜叔父様の家に歸り、床に付て後も、なつかしい思出に、よく眠りませんでした。ほんとに、私は如何したのでせう、今までに、お友達も多く持ましたが、親様程に心を引いた友は、一人もありませんでした。其後二三日は何だか淋しい悲しい心地がして、暇さへあれば、ぼんやり考へて居るのを、従弟の利ちゃん、行ちやんが、姉様元氣がない／＼と云ひました。



三日目の夕方金山奥様が御出になりました、私も御目にかかる様にと、母様が、御呼になるので、久々で御目にかゝりました。何ですか、ひどく御急ぎの御様子で、折角差上やうと、叔母様が、御

用意なすつた御食事も遊さず、御歸りになつて仕舞ました。

其夜奥の間で、

「妙や一寸」と父様が御呼なので、行くと叔父様も叔母様も、そして、いつの間に居したか、兄様まで來て居つしやいました、そして父様が、

「今日金山奥様が御出になつて、山川の息子様がお前をお嫁に是非ほしいと仰しやるさうだ。で今も相談したのだが、あの人なら實に立派な者と思ふ、しつかりして居し、又非常に優しい、そして平民的な事の好さうな人だ、と思ふ金山奥様も云ひなすつたが、家柄も家庭もよい、弟達は多いが、皆いゝ人ばかりだとの事あすこにおあげなされば御雛様は、お仕合せな事は、きつと受合ますと、あの奥様が受合なさるのだから間違ひはないと思つて居る。お前さへよければと思うが如何かねえ」、

御話の中葉までも聞ない中に、私はもう耳はなる目はくらむやう夢ではないか、、思ひながら、嬉しうて嬉しうて、難有くて恥しくて、顔は火のやうに熱くなり、父様の御言葉の切れるとすぐ、逃出して仕舞ふと後では皆様の笑ひ聲が聞え、やがて叔母様が御出になつて、

「いゝのでせうきめますよ」

だまつてうなづいて顔を袖でかくしたら、「ねんねだ事」と笑ひながら行つお仕舞になりました。

皆様に遇うのが恥しいので、早く床に入つたが、嬉しくて一睡もせず、一夜月にゑみ明しました。

翌日は大騒ぎ朝父様は山川様に御出遊し、すつかり御話を御まとめになりましたつて、そして明日日がいいから、結納で、夜は、こちらに皆様御招き、翌日の夜は、あちらの御招き、弟妹方に、御ちかづきになるはずといふ事でした、式は明年私が卒業してと、きめたよ」と仰しやる、

母様は、「まあ何て早く御話かきまつたのでせう、困つたな買物が間に合うかどうか、とこぼしながらと御嬉し相に、にこ〳〵遊しながら。午後は三越に結

納の御袴地と七子を求めに居らつしやつたし、叔母様は、明日の御馳走の事で西京屋を呼んで、色々御相談父様は金山様から姉様の處其他所々へ御知せに、嬉しまぎれに御出まし私は、どうしていゝやら、立たり坐つたり唯うろ〳〵にこにこして、他の人から見たら、馬鹿の様で、嘸をかしかつた事でしたらう。

翌日結納もすみ、御客となつて、お盃も重なつた頃親様が立て金山奥様と私の前におすわりになり、エンゲージリングを私の心臓に續いて居るといふ左の薬指にはめて下さいました、其時の恥しさ、指がブル〳〵慄ました。

後で姉様が「妙さんの前髪がふるえて、顔が赤くなつて、大きな目ばかり光つて居たよ、」と御笑ひ遊すのですもの、ひどいわ、御自分だつて、そんな時があつたくせに!!!

向ふの家に行た時には、少しは落付て、可愛い玉子様とも色々御話をしました。

歸りがけに山川御両親様が、「折角嫁と定つたのに、すぐ別れなければならないのですから、せめて此地に御出の間だけでも、毎日遊びに、よこして下さい」と仰しやると、

「ほんとに左様ですね、それでは明日も伺はせませう、」と父様が御約束遊しました。

翌朝行くと、女中が「先刻から御待ち兼で御座ます」と云て奥の御両親様の、お居間に案内されました、

初秋の日かげを受て、きれいに光つて居縁側に親様新聞を見て居らしたのに、足音に立上つて、にこ〳〵しながら、迎へて下さいました鹽原の御話が出で大笑ひした、後姑様が、「家中見せてお上げ」と仰しやいました。親様の御案内で拝見しましたが、廣いもので何だかよく覺えられませんでした。

一番終りに拝見したのは、西洋館の二階の奥の室で澤山の本箱には、洋書がきれいに並べてありました。「此處が僕の書斎です。まあおかけなさい、」と仰しやつて、二人ソフアーに並んで腰かけ、見ると壁には御自筆といふ書額や、ロダンの彫刻の寫眞が懸られスト

ープの横には、マンドリンや、楽譜の箱が置かれ、御机の上の小さな古代ギリシャの土器らしいものに赤いバラが唯一輪挿れ、白い、レースのカーテンは、そよ吹秋風に、ゆら〳〵と、ゆれて優しい想を起させました。

「僕は實に缺點の多い人ですよ、けれど心の、どん底から、あなたを愛してゐる事を誓ひます。あなたの父様は、あなたも僕の様な者を愛して下さると仰しやつたが、あなた自身の口から聞なければ安心ではないのです、どうぞ眞實を云つて下さい、今ならまだ如何でもなるのです、もし嫌ひなのに無理に望んであなたを一生悲しませる様な事があれば、僕にとつて是位苦しい事はないのですよ。」と熱心に云れ、どきまぎして、しばらくは聲さへ出ませんでしたが、「あの‥‥私の様な者でも、御氣に召したのなら、何卒いつまでも‥‥」とやつとの思で云ふと、「難有う嬉しいですよ、」と仰しやつた。それから御机の上にあつた伊太利の名畫帖を御見せ下さいましていろ〳〵御批評下さいました、けれど私はぼうつとして何事も覺えませんでした。

「お食事で御座ます、」とお行儀よく小間使がおじぎをした時、我に返ると、やはりなつかしい人の隣に腰かけて居るのでした、

梯を下る時

「あゝ今程あなたの顔の美しくなつたのを見た事はなかつたのですよ、頬と耳とが、ぼうつと櫻色になつて涙で霞んだ大きな目の瞳がすつかり開いて、少し開いた唇は眞赤に燃て居るのですもの、眞實にエデンの園でビイナスを見た様に思ひましたよ、あなたはまるで夢中で居たやうでしたよ、」と仰しやいました。

ほんに其時私共は淸き美しい花園に遊んで、花の甘香に酔たのでした、あゝ二度とはない、私の春に眞の淸き尊き愛を味つた自分を喜ばずには居れませんでした。今思ても此小さい心の器の血は跳り、かうして書くのも、惜い様に思ひます。其後三日目に私は歸朝しました。

ほんとに私は‥‥オヤ郵便が來やうだつた、と思う

聞もなく、シヅが、御手紙で御座います」と持てきました見ると待こがれた御文「難有う」と云か云はずに封切て取出した長い〳〵御筆跡うれしくて〳〵〳〵よんで見る。

「朝霜白うまがきに屋根に降りぬ洗面室に至れば寒氣身にしみて身わなゝくを覺えしがやがて空晴て心に懸る雲もなくすが〳〵しう萬象空明悟れる人の胸懷の如し今朝君が文來りぬ、毎日必ず君が書來りて、我を慰むる嬉しさよ、君の書は、悉くわが机の中に收めあり、書見に疲るゝ毎に思案に沈む毎に、君が彼書此書取出さるゝなり。取出し見る毎に、文字中に新らしき若き意味あり、聖書若し愛を語るの書ならば、高く清き愛を語るの書ならは、君の文はわが聖書なり、實や君の愛に潤ひてより、われは生れて以來知事なかりし清き涙を見ぬ、かの二階にて君が流し給ひし其涙を、われいつの世にか忘れ得んや、われは知、彼時に君は命をもわれに與へんと決心し給ひしそ、われも亦、君に劣らぬ熱き涙を流しぬ、歡喜にもあらず固より悲哀にもあらず、かゝる涙を何と名く可や、君よそは愛の涙なり、此冷たき世に石の如き人生にありて、暖く清き涙ならずや、げに我等幸多き者なり。

君よ、よくも氣付き給ひし、實今の我等は夢の中にあり、理想の中にあり、樂園の中にあり、されど遠からずして我等も亦、現實の世界に降り行かざるべからず、身を挺して世と密接の交渉をなさざる可らざる時あり、其時に失望は來べし、落膽は來べし、樂しき夢の破るゝ時ある可し、麗しき樂園の醜く見ゆる時來るべし、されど此時にこそ、我等が愛は火と血とに煉るべきなり、其時こそ我等の愛の深さは知るべきなり、「弱き花をたすけ惡しきをもあはれみて……」、何等尊貴の君が心よ、君よ、われはわが心を君に委ぬべし、われを愛しわれを勵しわれを導きてわが此足はぬ身に一生を捧げて、わが人類同胞の爲に何事か爲の榮譽を擔はしめよ、あゝ妙子!! 我等が道は遠し、君の云ひわれの欲する所そ、行はんが爲に、我等多くの犧牲を要し、多くの迫害を甘受せざるべからず、君ハわが愛

の爲に必ずそを忍び給ふべきを信ず、然り、人は其一面に於て、必ず强固熱烈ならざるべからず、是なくんば人にあらず、男にあらず、女にあらず、一事を貫徹するの生涯、然り、是我等が希ふべき生涯にあらずや君の愛ぞわれを勵ます、君の愛を思ふ時われは世の如何なる事をも爲し遂げ得べきを思ふ、

妙子！　あゝ妙子!!!

夜はふけぬ、さらば此宵も君の上に安き眠りと暖き思ひとあれさらば！

わが淸く香はしき、

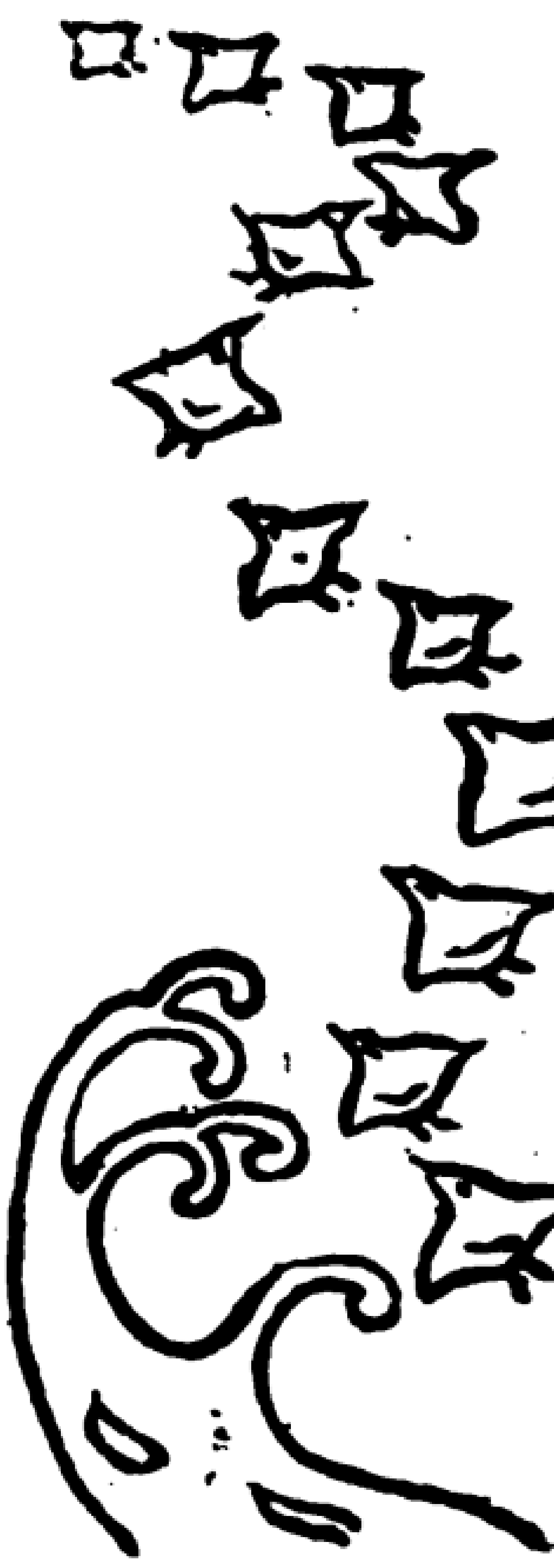
白百合に、

幾度も繰返して讀だ私の目は涙ですつかり曇りました、あゝ何たる貴き此御文でせう、眞實私共の辿る旅路を思う時に、いつも心は固くなり、そうして人と生れた以上、立派に世の一員として、歩み、又此小さな肩の重荷も美事立派にしよい立てゝ行かふと思ひます、そして大なる希望と決心は、心にあふれて、此世が美しい樂しい光ある神の花園の樣に思はれます。

花園の中には天性花の美しいのと、醜いのとあり、又大なのと小なのとありますが、それは、花の運命で仕方ないのですが、どれでも種子から咲匂ふまでには寒氣にも、雪にも、雨にも、日でりにも、遇たでせうし又いくら美しい園にも、雜草や、害蟲が居りませうが是等に打勝て花相應に苦しんでこそ、春になり、美しく月にゑみ、園をかざり、人を喜ばしめるのです、人も花と同じ事、色々な目に遇ても、常に感謝し、淸く高い望みに向つて、少しづゝでも歩いて行けば、苦しみや、迫害は路邊の小石位の小さな物に思はれるでせう、こんなものにつまづいたり、きずついたりしては、いけませぬ、又そんな人があつたり雜草や害蟲の樣な人があるならば、是等を憐みて、よきに導いて、花園の樣な此世界を、なほ〳〵美しくしたいと思ひます、それにはまづ第一に、妻として立派な者とならねばなりません、妻は從順なのはあたりまへですが、たゞハイハイでは、いけないのでせう、或時は、母の樣にいたわり、或時は、子供の樣になつて、甘えたり、また

害にならないだけのだゝをこねるも必要でせうし、身づくろいなども、折々は、色々に取りかへて、いつも夫に美しく思はせるのも、大切でせうが、眞面目になつて話し合ひ慰めあつて、學問上の話も御相手が出來るやうになり度いと思います、私には親様に、つり合ふだけの學問はありませんが、少しでも、御話相手、（學問上の）になれるやうにと、此頃は思つて居ますがそれには一通りならぬ修養を要するでせう、母様は「妙さんは親さんにつり合ふだけになれるかどうか、案んじられる」、と仰しやるが、かぎりしれぬ愛のあるかぎりつり合ふだけになれるでせう、なりませうと心では信じて居ります。





春の曲

紅梅

…………長生殿のうちには…………春秋をとめり…………
不老門の前には　月の影おそし

弘徽殿の細殿に　たゝ住むは誰れ
おぼろ月夜の内侍の督　光源氏の大將
…………………………

「マア大變好くおうつりなさいますこと……」
白ヤラコの髪かけを除けて鏡臺の前を離れた時、お千代さんはかう云つて私の高髷をつく〴〵眺める。

襟元にぞつと寒さが染みるやうだ。
「ホヽヽヽ實際にもつと早く結へば好かつたのにねえ、どんなに大人しくつて好いか知れやあしないよ。桃われや束髮もいゝけれども、此の方がぐつと見立てがあるからねえ」
母樣つてば御自分のお仕度もなさらずに私の頭りにばつかし氣を取られて被居る。何だか嬉しいやうな恥しいやうな、逢ふ人毎に物珍しげに見られるやうでうつかりお轉婆も出來さうもない。
「サアもうお風呂も沸いたやうだからお前先に入つてお出で、愚圖〳〵して居ると直に皆さんがお見えに成りますよ、私も直に後から行くから……」
「ぢやア母樣お先へ……」
乳母やが出してくれる石鹼箱と手拭もつて湯殿へ行く。恰度いゝお加減……凝乎と頤まで浸して恍惚と霧のやうな湯氣を吸つてゐると、散々待ちくらした今日の樂しさが絶えず胸の中をさ迷ふ。萬事華美好きな父樣の思し召しで宅の新年會といふと、いつも諸藝人を

集めての藝づくし、其れに御親類皆樣方のかくし藝も出る、私たち初め、出入りの者に至るまで、一日無禮講で命の洗濯をする事が出來る日だ。幕の中に籤引で御親類中へそれ〴〵御題を廻しておく、それを今日宅の大廣間の舞臺の上に、各自に面白く趣向をして出すのが吉例で、世間では眼の廻るほど忙しいかぞへ日でも、宅では寄るとさはると此のお話しで持ちつ切り：：：。

何だつて宅の武兄樣のお輕に濱町の精兄樣の勘平、それに赤坂の伯父樣の伴内で、淸元の道行が一幕出るんですつて：：二十日許りといふものは、皆樣詰めつきりのお稽古なのよ。それでも振附が踊りにかけては名うての〇〇家さんだから、どうして却々馬鹿には出來ない、本物になりさうだわ。澤々した文金の鬘も一昨日大勝から仕上つて來てゐる、衣裳も皆樣大凝りの自慢物：：オホヽヽヽ、武兄樣のてば、あの美しいお髭を持て餘して被居るのよ。仕方が無いから、油で一本一本にねかかして置いて、其上を白粉で塗りつぶすんですつて：：マア大變だわ、此の鹽梅ちやア胡蝶園と特約でもしておいて、船で運んで貰はなくつちやアねえ。けれども、これは未だ誰にも知らさないのよ、默つて居て、不意にアッと云はせる趣向なんですつてさホヽヽヽ。

すうと戸が開いて、お脊中をお流し申しませう、と乳母が入つてくる。裳を一寸端折つて袂のはじを口に咬へ、お湯を汲んで後へ廻る。平常よりぐつと出したタボへ櫛をあてがつて、兩鬢へはびん上げをさし、うつ向いてすつかり生え際を洗つてもらふ。雪白の大タオルに半身包んで、例もよりは濃めにお化粧をする。

濡れ手拭で耳の中を拭き〳〵、お部屋へかへると、何時の間にか、濱町から二人ともお出でになつて被居る。マア姉樣のお服裝のいゝこと：：珍しく品のいい束髮にお上げ遊ばして、同色で御紋を縫つた消炭の無地御召、裾の方へ目立たぬばかり草花が繍ふてある唐織の丸帯を心もち胸高に、白金を交へた黃金鎖がキラリと光る。

まづ明けましてお芽出たう、舊年はいろ〳〵……の御挨拶がすむと

「マア富美ちやん！　お頭りが大變好いわ」つて、突然姉様は私の肩を揺ぶる

「アラ……私何だか頁くつて仕様が無いのよ、姉様可笑しかあ無くつて？」

一寸簪へ手をやつて見る、桃割れと違つて高いから却々届かない。

「イ、エちつとも可笑しいことは有りやアしないわ、好く似合つてよ」

ほんとか不知……お世辭とは思ふけれど、逢ふ人毎に褒められて見ると、満更厭な心持もしない。マアひどい事、自惚だなんて仰しやるのは何誰？



△娘時代の誇り――わたしはかうして金扇をひらめかす時自づと湧きいづる微笑を禁じ得なかつた

其のうちに赤坂から、伯父様と伯母様が、お車を連ねてお出でに成る。一通りの御挨拶がすむと

「オヤ、富美ちやんの好いお髪だこと……お仕度はまだなの？　さう、

久し振りで伯母さんがお手傳ひしませうよ」つてもうお立に成る。

時色絹のしごきを解くと、後から母樣が、白で千羽鶴を飛ばした紅匹田の長襦袢を、フワリとかけて下さる。乳母はその上から、ふち鼠地に金や褪紅色や白茶で菊むすびを大江戸褄に現はした、笹りんどうの紋付の二枚揃へてきせ掛ける。後に伯母樣が帶を二つに折つて待つ……また〻く中に、前の大姿見には、品の好い白羽二重の襟にダイヤの光まばゆく、はこせこの縫も燃ゆるやう、袖口も振りもしつくりと揃ふて、綴錦をきり〻と立て矢の字に背負つたかげがスラリとうつる。後樣を揃へ、グッと拔いて肩を辷らすと、好い格好に成つた。

肩上げこそあれ、少女十七歳の春姿、艶々と結び上げし初島田に銀高彫の挿込み重たう、大振袖に長う曳いた裾の歩めばチラと紅を散らす。お〻今日——晴れの舞臺に立つて、我れ金扇をひらめかすの時——を思ひ見ては、自然と湧き出づる微笑を禁じ得なかつた。

「おう、美しく成りました、すつかり見違へて了つたよ」

母樣と伯母樣は、右左から嬉しさうに見上げ見下してほ〻笑まれる。

仕度がすむと、伯母樣は例のお氣質でぢつと構へては被居らず、私のエプロンを濃鼠地のお召物の上から帶止へはさみ、其所にある艶拭布で、お茶器や煙草盆を拭き〱。

「富美ちやん！　お仕度が出來たら、皆樣がもうお見えになる時分だから、奥へ行つて、お火でも直して置いて頂戴！　今日は貴女方の方が御亭主役ですから、其の心算で居なくつちやア不可ませんよ。……ア、それから縫や！　お前此所はい〻から、一寸お電話で川田樣や北野樣へ、お仕度がお宜しければお待ち申して居りますから何卒お早くとお掛け申してお呉れ！　それが濟んだら、奥に被居る稻垣樣の奥樣に、先刻のお預り品をお屆け申して來な！」などゝ、頻りに采配を振つていらつしやる。

仰せに任せて、母様と私は廣間へ行く。

三間ほどのお座敷を、間の唐紙はづして、假舞臺を正面につけた左右には、ふつくらしたお座布團に添へて、さくら炭ほのかに匂ふ桐胴の丸火鉢がズラリと並んで居る、川田様林様、岡本様、と奉書を短冊に切つてお名前書きをした札が、其下に主待ち顔に布れてある。

まだお客様は幾人も來ては被居らない。花瓶の寒牡丹にお冷水を足して、一寸形を直しておく。



モウお師匠さんもお見えに成りさうなもの、明日は九時迄にと、彼ほどお約束をしておいたのに、若しや急にお加減でも惡くつてちやア無いかしら……まさか其様な事もあるまいけれども、何だか氣に成つて成らない。

その中にポッポッお客様がお見えに成る。サア私も斯うしては居られない、一々御挨拶を申上げては、お茶やお菓子を持ち運ぶ。茶の間まで、冷いお廊下を小走りに行く途中、パッ

タリ！　仲惡の賢様に出逢つた。

「ヤア、富美ちやん！　素敵だねえ」なんて、突然滅法界な聲を出す。

「知りませんよ！　今日は忙しくつて、賢さんなんどには構つて居られませんから」つて、つけ／＼言つて遣る。あッ！　しまつた！　今日だけは眞面目に御挨拶をするんだつけ…と思つたが、モウ晩い。一體私は如何して斯う此の人とは氣が合はないんだらう。人が頭痛で寢て居れば、いゝ氣に成つて、頭の上で、習つて一月經つた許りのヴッキオリンを、鋸の目立てのやうにゲコ／＼やらかすし、自分で種を卸して、やッと咲いたダリヤは、何時の間にか見つけ出しては、牛蒡拔きに引つこ拔いて了ふ。厭がる事つていへば何でもしたがるといふ妙な性分の人だ。何所へ行つたつてはちかれ通し、まるでキシヤゴの生れ變りみたいな人よ。今日の服裝だつてなあんだ、改つて袴羽織こそつけて居るが、拙者は近眼で候と云はない許りの金々した二度の眼鏡に、御進物の鰹ちやあるまいし、頭髮を油でテカ／＼光らかして居る工合なんか、却々猛烈だ！　跡でうんと冷かしてやらう！

「エ、富美ちやん！　いくら滿艦飾だつて、さう澄ますもんぢやア無いよ」

かまつて居ては限りがないので、モウ相手にせず、ずん／＼と通り拔ける。

茶の間の火鉢で冷え切つた手を溫めて居ると、サヤサヤと衣摺れの音がして、白襟に紋附の盛裝をした、お歌さんお藤さんおさよさんお治さん、知らない顔も二三人交つて入つてくる。敷居越しに並み居る人をクルリと見廻して挨拶をする。

「オヤ、お愛で度う…待つてたんですよ。お忙しいところを好くね…さ、他人ッこは止してズッとお入り…」伯母様は例のお調子で馴れたもの。

二個許り宛がはれた火鉢を圍んで、言ひ合したやうに、紅紫種々の煙草入れを展開する。

すうと襖が開いて、霧のやうな煙りの中に待ち兼ねたお師匠様の白いお顔が浮いて出る。

「マアお師匠さん！」走りよつて手にすがれば

「オホヽヽヽヽ何だねえ富美ちやん！・お行儀の悪ごと……」伯母さんに笑はれる。

親くなつて口の中に御挨拶申上ぐれば輕く受けて

「マア大層お待たせ申しましたねえ……おう好くお仕度が出來ましたと……」

「あら、お師匠さんですか？　お愛で度う……」と後からも聲がかゝる。



△オヽ、お愛で度う……待つてたんですよ、お忙しいところな好くれ……ここに、

「マア、厭ですよ、皆さんが大變お靜かなもんだからつとも……先づ明けまして……」と向き直つて、淑ましく挨拶をなさる。誰でも反らさずに如才なく話しかける處などは、伯母樣と好い對照！　お話しの仕方だつて、一寸眉をひそめたり、目を瞬つたり、表情も却々お上手！　御商賣柄とは云ひ乍ら花やかに物馴れた取りなし振り、二つ年下の母様よりもグツと若やいでお見えなさる。感

心して見上げるお髪の、例も乍らふつくりとマア好い格好！

不意に玄關の方でドッと笑聲が起つた。

何だらうと思つて居るとはた〳〵と足響が近づいて障子が開く、マア厭だ、並み居る人達と共に、私は思はず失笑して了つた。初めは誰だらうと迷つた位、鶍家のお女將さんが、モウ六十に近い年で十二三の雛妓振り、華美な衣裳に大きな帶をお太皷に結んで、髪はといふと、入毛をして愛らしく取つた前がみに、くるりとした桃割れの若やぎ姿、肩上げさへ取つて居る。

「やう〳〵、御趣向ですね」と皆さんが笑ふ。

昔取つた杵づかとやら言ふけれど、何てマア暢氣な人達だらう、眞面目な者から見たならば、とても正氣の沙汰とは思はれやアしない。

「あの娘や！　是を其所へ持つて行つてお食り」伯母樣が、半紙を布いた高つきへ、紅白の切山椒うづ高く盛つて出せば「あい〳〵！」と調子に乘る。

何がさて、お重のやうに年許りかさねても、寄ると障ると騒ぎたい連中が寄つたのだから堪らない、お治さんの發起で、へうたん遊びが初まる、らかん廻しをやる、今度は皆グルリと火鉢を取り卷いて、お歌さんが、讃岐の金比羅大權現と兩手を握つて鼻の上へ重ねて見せる、お治さんは前へ大きな輪をかいて、狸の寝床八疊敷と叫ぶ、およさんが、彼の兒の巾着八丈縞で腰へ巾着の形を拵へる、三人でグル〳〵云ひ廻して居るうちに、終ひには、彼の兒の金比羅だの、狸の巾着だのつて云ひ出す、傍に居る者も、お腹を抱へて苦しがる、思はず知らず釣り込まれて、夢中に成つて遊んで了つた。

さうかうする中、モウお客樣もお揃ひあそばした、オヤ！　父樣が呼んで被居る。

「富美！　此方へお茶を一ついれてお出で！」樂屋のやうだ！「はアーい。」薩摩の急須に、細くよられた宇治の緑葉をすくひ入れ、チン〳〵沸立つてゐる鐵瓶を下してサアと注ぐ。

母樣の出して下さる栗饅頭添へて八疊へ……。

此所からは、中庭を隔てゝ障子越しに、廣間の方が好く見える。一寸覗いて見ると上手から一人二人、三人……オヤ〳〵、彼所はよく〳〵もア、肩書附が並んだもの、先づ、芝居なら書出しとでもいふ處に、例の黃金佛が御座まし〳〵て被居る。アラ、黃金佛つたつて、萩花さんのお書きに成つた、A組の岩瀨さんのやうなのぢやアなくつてよ。十八貫目と評判の肥滿したお身體を、ダイヤの輝きやら、白金黃金の光で包んで被居る、半白く成つたお髯と、眉毛の長い方……此の方は歌澤の名人、今日のお題は慥か、柄に無い助六とかうかがつた。

次はダボハゼ……何ういふ所から奉つた稱號なのだか、私は知らないけれども、よく皆がかう呼んで居るお隣りが肥つて居る方だのに、此方がグッと痩せぎすで被居るから、此所から見ると、とんとソマトーゼを呑んだ人と呑ま



△さうかうする中、モウお客様もお揃ひあそばした、オヤ！父樣が呼でいらつしやる。

ぬ人のやうだ。
次が川田樣！　お題が廿四孝とあつて、一月許りの急稽古、今日はわざ〱合三味線御同行とやら……嘸かしお骨の折れる事であらう！　昨夜つから生玉子許り、二十六も呑んだんですつて、オホヽヽヽまさかねえ、胸に卷く晒を何反買つてこい！　なんて、怪俄人でも出來たやうな騷ぎ、まるで、落語にでも有りさうな若旦那！　衣紋竹といはれてるだけに、寸分も流行に後れぬ御粧ひ、惜むらくはモウ少し御風采が……とは思ふけれど、兎に角りうとして被居る。
次が、いたづら小僧の賢さん！　其れに續いて林樣！　此の方はお目が心持ち突出して居て、お色の黒い細そりして被居るところから、目高だの、出目ちやんだのつていふ綽名がおあり遊ばす。
お隣りは伊勢昇の御隱居樣！　相變らず有り難い和尚樣のやうに、白い首卷を遊ばして、お頭りを猛烈に光らして被居る。
かう並べ立てると、滿足な方は一人もお出でが無いやうだけれど、見渡したうちには、却々お立派な、美しい方もある。兄樣と御同級の磯樣岡本樣、お二人共きつとしたお姿にも似す、却々の愛嬌者！　いろんな滑稽談もあるけれど、今はお預けとしておいて、三枝樣や稻垣樣なども、人格からいつても、お服裝から申しても、天晴れ理想的當世紳士で被居る。
五藤樣も小田樣に對等するだけのお體格、少しも厭味の無い、面白い方だけれど、鼻下に倘ピンとした美髭があつたならばと思ふだけ……。
何時も一際抽んでゝ、御風采の揚つて被居るのは、向つて左から三番目の、吉津屋の忠樣といふ若旦那！　大理石のやうな美しい鼻筋から、濃い眉、長い睫毛、優しやかな中にも何所やら凜々しくて男らしい方！　お服裝も極く澁いおつくりで、お好きなものは歌澤に袋物とやら……お母樣が大切の〱秘藏息子、純日本式のお羽織とお袴がよくお似合ひ遊ばす。
この間も千代樣が、富美子さんの趣味は下町式で被居るなんて被仰つたけれど、私何て云はれたつて好い

わ、武兄様のお友達にだつて、いくらも角帽姿勇ましい方もあるけれど、私には矢張り、ひさし髪で馬車で風切つて歩く奥様よりは、算盤や前掛に親しむで淡さりと粹に結んだ丸髷姿のお内儀さんぶりの方が遙か理想に合つてゐる。其れかあらぬか一度忠様のやうな方が好き！と何氣なしに云つてからと言ふものは、皆がいろんな事を云つてはからかふ。ほんとに油斷も透もあつたもんぢやア無い。今日も藤やが聞さへあれば傍へ



きて、忠様々々と私を呼ぶ、叱つ！と止めても聞かず耳をふさいでも止さない、父様のお耳にでも入らうものなら大變だわ、ほんとうに困り者！

「富美や！ 千代子様が入來しつたよ」

つひ後で母様のお聲！ お玄關へ駈け出て見ると、マア嬉しい、八重様も：：：。

「マア、お揃ひでよく：：さあ此方へ：：：」

お二人とも、勝り劣らぬ御新調の御紋附！ 丸タボ

の束髪に遊ばして、お揃ひにとてか白ばらの美しいのが櫛の根に小さく匂ふてゐる。先づ改まつた御挨拶がすむ。

「實際によく入來しつて下さつたのね！　お寒かつたでせう？」お火鉢をすゝめ乍ら見合す顔……。

「マア、富美子さんの好いこと……」凝乎と頭を見て被居る。

「あら！　厭ね、初めてゞ可笑しいのよ、だつて母様が何でも結へ〳〵つて被仰るんですもの……」云ひ譯けし乍らお茶を侑める。

「皆様もお揃ひ遊ばしたから、彼方へ御案内申し上げたら……」と伯母様のお言葉に、私はお二人を定めのお席へ御案内をする。

お座敷へ入ると、ヤア、おめで度う！　お愛度う！と彼方此方からお聲がかゝる。

伯母様も被仰つた通り、今日は私達が御招待申上げる側なんだから、例ものやうにちんと皆様と並んで香箱つくつて許りも居られない。其れからそれへと御挨拶に忙殺されて居ると、間も無くお膳部が出る、取巻の人々が杯洗やらお銚子やらを運び初めたので、自分も何時しか活動裡に卷き込まれて了つた。

一順お盃の廻つた頃、改めて父様から皆様に御挨拶があり、其れが濟むと愈々餘興は初まつた。

先づ、岡安連の賑やかな鶴龜が濟んで、幕が引かれると、小田様の助六といふ御趣向！　例の身體を重さうに、ノサリ〳〵と搖り出でゝ

「私は助六といふお題を頂きましたが、手前、かういふ事には馴れぬ方で、何か好い趣向は無からうか？彼れか是れかと、實は頭痛鉢卷で考へて居つたところふと、友達が見えまして、君！　頭痛には江戸ざくらが利くぜと申されましたので……」などゝやる。景物としては江戸櫻と、河東節を利かして袋入りの鰹節を並べ、拍手の中にお席へつく。

次は北野様の妹脊山御殿！

「……皆様へお三輪と存じまして、只今橘町で求女て參りましたが、此の折の中に何が入つて入鹿と明けて

見ますと、オヤ〳〵、三笠の山に鹿の子が遊んで居ります」としやれる。官女に見立てた水引をとつた折の中には鶯餅と鹿の子が積まれてある。

吉野様は車曳といふ籤をひかれて、美しい花車の上にのせた牡丹籠へ、梅と松とそれに造花の櫻をあしらつて遠州流の腕をふるはれる。

お席をはづして。茶の間でお茶を頂いて居ると、後から賢さんが入つて來る。



「オヤ、富美ちやんも居るの？ 恰度宜かつた、君に是非頼みたい事が出來たんでね：：實は僕が大物の籤を引いちやつたんだがねエ？ 勸進帳さ！ 長唄でゝも出さうと思ふんだがねえ一つ君！ 立て三味線を彈いて呉れ給へな‥‥」

おう厭な‥‥貴方の糸は懲り〳〵よ！

又お口取の

いゝきんとんの味でも變ると不可ませんから……と、遂ひ口へ出かゝつたのを、母樣に稻光りを頂戴したので、ヤット呑み殺して了ふ。

「私なんか、とても彈きこなせやアしなくつてよ、岡安さんがお出でゝすもの、彼方へおかけ合ひ遊ばせな。」と、珠數さら〳〵と押し揉んで、急々如律令と引き下る。

だつて、いつか惡口屋の三浦樣が、賢樣の長唄も好いが、甲所と來た日にやア、御嶽山で狼が深呼吸をするやうな奇聲を、遠慮も長く、人並はづれて高い鼻頭へ打つ突けるので、とんと大森細工の唐人笛のやうな音が出るつて云つたけれど、全くよ！　折角お運び下すつた皆樣に對しても、野菊さんぢやア無いけれど大に人格に關するわ……。スルト傍からお治さんが、橡肥りの膝を乘り出して

「マア、貴方の勸進帳？　好いねえ！　是非伺ひたいわ、お孃樣の替りに私では不可ませんか？　何も功德ですわね、私も一つ若返つて返り花を咲かせて見たう御座んすもの」なんて、電車線路の曲り角同樣、ふんだんに油を掛け、辰巳上つて浮かれ出す。

ほんに捨てる神あれば何とやら、蓼の蟲へ面あてでもしはしまいし、賢樣の立てを彈かうなんて、お治さんも中々茶心がある。其れにしても彗星の尾は長いもの——今年へかけてまで此樣な凄い事があらうとは……と私はつく〴〵感心して了ふ。

お座敷へ入ると、餘興はもう二三番濟んで居た。

岡崎樣の文屋は、お首を振り廻すところが龜井戸のお土産宜しく、間をかまはず駈け出す工合つたら、トンと號外賣りのやうだ、けれどさすがはお藤さんの撥の冴え、乘りかけた船の事とて、例の負けじ魂の手前さしもの早瀬の煽りを喰つても事ともせず、見ん事に乘り開いて了ふ。

お席へ返るや、彼方此方から祝盃？

「實際にお上手ねえ！　調子にかまはずお唄ひなさる所なんか、全く息もつけない程旨いわ！」

「イヤ、上げたり下げたりピッコの提灯、賞められて

るのか貶されてるのか、さつぱり我輩には譯が分らん！」なんて云ひながら、岡崎様は大の御機嫌！　平家蟹をお味噌和へにしたやうな顔を撫で廻し撫で廻し納まり返つて被居る。

那須先生の吉野落を伺つて居ると、不意と後から目かくしをされた。和い手を徐かに除けて、誰？　と振り向けばマアお師匠さん……



直に貴女の番ですから、彼方へ行つてお仕度でもなさいといふ。今更のやうに浪立つ胸を押へ乍ら八疊へ行く。

乳母やが撫でつけて呉れた後を銀高彫の縁をとつた手鏡斜に翳して、そつと押へるうば玉の雲の鬢よりほのかに見える耳の根も、燃ゆるやうに成つて居た

母様が出して下さつた金扇ゆるやかに取り上げて姿

見の前に立つ。

「しつかりお遣り遊ばせよ！」

お師匠さんは、キュッと指を握りしめて力をこめて云つて下さる、お顔を見上げて我知らず嫣然！　誇は胸に高鳴りつ。

お火鉢の炭を眞赤に燃えて居るけれども、私は何だかドキ〳〵して、寒いやうな氣持もする。

ナニ是しきの事に……かつては家元の納め浚ひに、花やげる衣裳のかづ〳〵いく度も脱ぎ替へて、大好きな道成寺の舞ひ振りに、並み居る女のはれの、羨みの妬みの的とも成り、そゞろに若い男の血を躍らせた事もある、今日を晴れの舞臺に立つた時！　天晴美しく舞ひ納めて、滿場の人の心を思ふが儘に醉はさねば……此の日！　この誇り！！　唯強かれ！！！　と兩の袂を胸にたゝむで眼を閉ぢた。

「お仕度が宜ければ、といふ知らせに、私はお師所樣に手を取られ、戰く足を踏みしめ乍ら舞臺へ上る。

一面に松竹梅を畫いた板戸を脊にして、下手の緋毛氈の床上には、お治さんが燃ゆるやうな朱房の根緒かけて、かすみと銘のある秘藏の三味線を前におき、江戸褄の裾を割つてにこやかに控へて居る。その隣りがお藤さん、上調子がおさよさん、唄をお歌さんと富士江さん、二人とも扇を握つて待つて居る。後見が伯母樣とお師匠さん、後向きに突膝をしてゐると、よう御座んすかといつて伯母樣が後へ目配せをする、私は掌へ八といふ字を三度畫いてグッと呑む眞手をした。

すると縮緬の幕が絞られる、何時の間にか四邊は靜まり返つて居た、心持のいゝ程高調子の絲の音が、美しい掛聲と同時にトーンと胸に響く。

霞の衣……………………………袂ゆたかに…

……………

いゝゝすつきりした歌につれて、何事も忘れた私はたゞ心ゆく許り、夢の國花野にあそぶ胡蝶のやうに成つて舞ふた。

チラと見た客席に輝く多くの眼ざしに交つて、父樣や母樣や乳母やなどの嬉しさうな顏が、瞬きもせず眤

と此方を見つめて居る。

松の位を見返りの‥‥で反り氣味に外八文字を踏む

日々に太平のおしをすゝむる蘆原のくに安國と舞ひ

納む

所も心の儘に出來た、三下りに成る時後を向くと、伯母様が御園撫子で急いて顔を直して下さる。

‥‥‥‥‥‥‥‥

‥‥‥‥‥‥‥‥

‥‥‥‥‥‥‥‥

‥‥‥‥‥‥‥‥

‥‥‥‥‥

お歌さんは冴えた糸の音につれて美しい咽を恣に弄ぶ、舞ひまふて行くうちにも、私は其の憎いほど水際立つた歌の中へ吸ひ込まれるやうな心持がする。



歌が終る。扇をたたんで一寸頭を下げた時、徐かに幕は下された。

ホッとして立つ耳元へ霰のやうな拍手の音！

「おう〳〵御苦勞でした」と伯母様は溶けさうなお顔をして上氣した顔を煽いで下さる。

何時のまにか母様と乳母やは後に立つて居た。

「マア富美子さん！　有り難う、大變見事でしたわ」

廣間へ行くと、千代樣と八重樣と、右左から言葉をかける。

「一寸、何て好いスタイル……」

「好い加減になさいよう！　モウ厭！　其樣な事被仰つちやア……」

父樣の前へ淑ましやかに危座れば、皆樣四方からお世辭やら何やらを厭といふほど浴びせかける。

父樣は押へ切れぬ誇りの色をお口元に浮べ乍ら、前にあつたお盃を指して私に目配せをなさる、平常から餘り召し食らぬ方だのよ……。チリン〳〵と杯洗にたゝようお盃の緣底を、お箸ではさんで差上げればお歌さんが陶をとつて波々濺ぐ。

綺麗にお干し遊ばして

「富美！　父樣からの祝盃ぢや！」

「あれ……」袂を翳して其の蔭で厭々をすれば、

「ぢや、眞似事にポッチリお酌を致しませう！」とお歌さんが無理やりに侑める。

青梅でもかむやうに、眼を閉つてひと口に――おう變だ事、何だか咽があつうく成つて來た。

床は今、越後獅子の曲中……越路がたお國名物は種種あれど……と、しつとりした力のある聲がきこえるそれが濟むと川田樣の二十四孝！　肩衣から見臺から中々凝つて被居る。内々頭痛膏を用意した向きもあつたやうだけれど、これを又意外!!!　さすが滿座の中で語らうといふ意氣込みだけに、柄に無い幅のある聲で急稽古にしては危げの無い見事な出來榮え、好きこそ物の上手なれ！　節廻しと來たら素人ばなれのした本節なので、聽衆一同別段むし嚙にも障らず、ヨウ〳〵惜しい物だな……。

奇聲に次ぐ蠻聲とも〴〵、能劍舞につゞいて、歌澤やら三曲やら、小さんの猫久も幾度か聞くけれど、つひ笑はされて了ふ。

灯が點いた。四邊は更に輝き渡つて、皆樣のお顏もモウ好いお色……口上が濟むと、待ちかまへて居た道行の幕は開かれた。床は清元連中、前には梅の枝を一面に下げて、武兄樣のお輕と精兄樣の勘平が、見違へ

る程美しく扮つて現はれる、見る人は思ひもうけぬ事とてヤンヤと手をうつて喜ぶ。ふつくりした武兄樣の頰には、女のやうな靨が見えた、すらりとした勘平は凛々しい眼ざしが生命だつた。

明瞭と輪廓のとれた白い顔に、高髷が品よく移る、立て矢の字に脊負つた帶、赤い丸ぐけの帶止め、ハコセコ、御殿模樣の振袖、白羽二重の厚裾を重ねて高く端折つた褄のあたり、美しい人は紅緒の草履を淺くはいて舞ふてゐる。伯父樣の伴内が向鉢卷に襷がけの異裝をして、五六人の配下をつれて出る。

床で、さくら〳〵の唄に成ると、各自に櫻の折枝をふり翳して勘平に打つて掛る、それを右ひだりと受け流しての立廻り…唄ふ人も舞ふ人も見る人も夢のやうに恍惚となる。

花やかな見得を、包むやうに徐かに幕が下りた時、群集の響音を後に私は樂屋へ走つて行つた。

宴も半を過ぐる頃福引は初まつた。

ビール一打を抽いて惠比須顔の川田樣！　玄冶店の籤で洋傘を當てた岡本樣、舞臺へ上つて五人男の勢揃ひ然と高く翳して、よろこんで被居る、イヨウ、ハイカラの助六さん！　と誰やらが叫ぶ、千代樣は大きな紅提灯八重樣は犬張子、美しい花車は岡崎さんの手に渡された、武兄樣は鹽鮭一尾下げさせられて少からず弱つて居る、私も籠釣瓶の籤で、仲店の八つ橋を籠に入れたのを頂戴する、ヤア富美さん、大當りだネなんて遠くから磯樣が聲をかける。其の騷ぎてつちや無い。

一番お終ひに御祝儀として、お師匠樣が歌澤の白酒を舞はれる、しつとりとして品の好い、鮮かな舞ひ振りに、宜い景物だと皆樣は大よろこび、再び父樣から御挨拶があり、樂しかつた今日の會も愈々たゝまれて了つた。

稻垣樣のおかへりですよ、林樣のお履物、小田樣のお供さん、甲走つた聲が玄關に起る、私もおふたりを送り乍ら玄關へ出る。門内にはズラリと並んだ車の灯がいく筋か小砂利の途を走つてゐる。

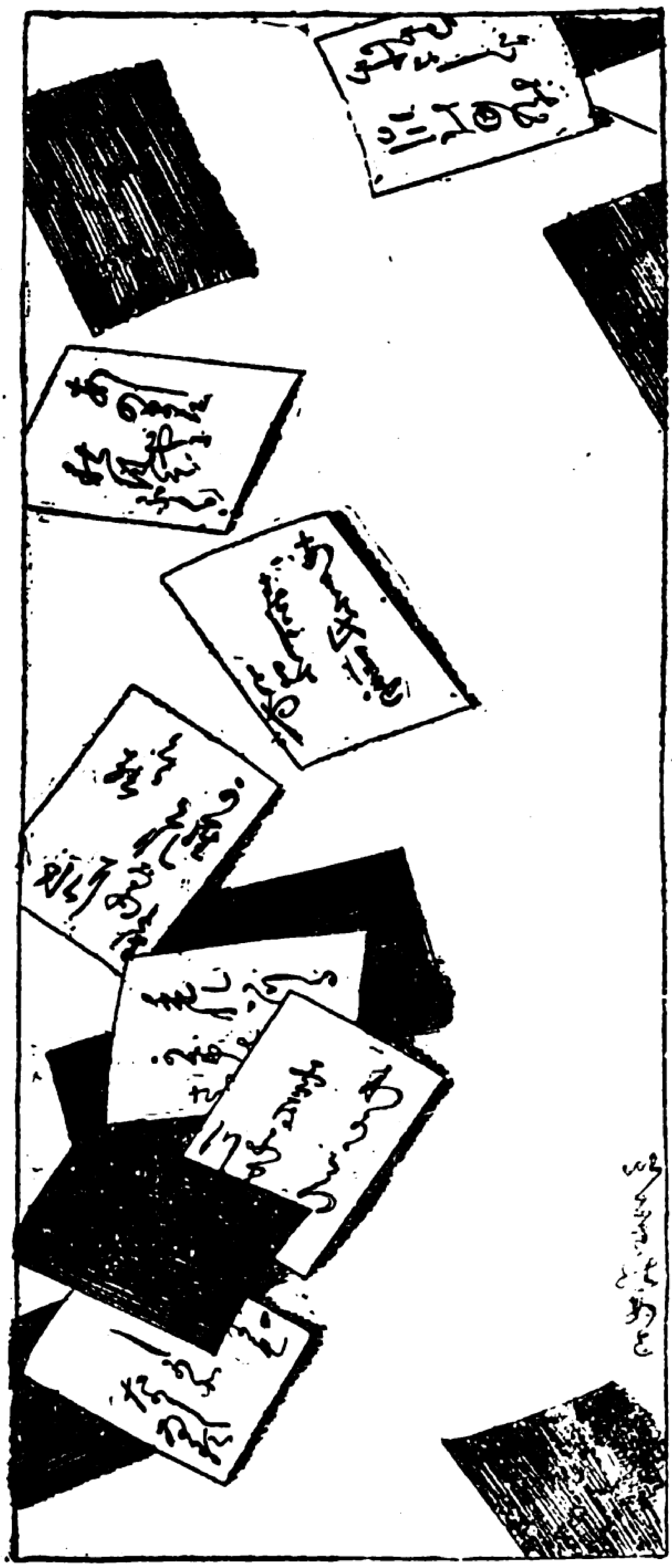
「お蔭樣でほんとに今日は面白う御座いましたわ、富

美子さん！ 貴女から皆様へ切望宜しくね！」
「エヽ、どう致しまして、折角のお出でに却つてお窮屈にばつかりおさせ申しましてね、又御ゆつくりお出で遊ばせな！」
「エヽ、有り難う！ 又是非よらして頂きますわ！」
コートの上から絹マフラーを遊ばして下り立つ八重様！ 並んで立つ千代様は紅提灯をぶら下げて……。
御きげん好う、お宅へ宜しく、女達は左右に居流れて一齊にお辭儀をする、パタリ！ と下した幌に二つの車は夜露に光つて門外へながれて行く。
「富美さん！ どうも失敬しました！」
「今日はいろ〳〵有りがたう！」と磯さん……。
「あら、磯さん！ おかまひも申しませんで……今度の日曜日には治代さんをお連れあそばしてね、お待ち申して居りますよ！」
武兄様も傍から
「君！ 是非やつて來給へ！ 富美ちゃんがうんと御馳走するつてさ！」
「ヤ、それは難有い！ ぜひ伺ひます、切望又甘い物を澤山御用意なさつて置いて下さい！ ねえ岡本君！ 二人で大いに頂くとしやう……」はつ〳〵と相變らずの大元氣！
マントの肩揺り動かしつゝ、見返り〳〵門を東へ……。三十分も經つ中には、あらましお引取りに成つたやうだ。風が一頻りヒユーと渡るとお庭の竹がサヤサヤと鳴る、寒い月かげはくまなく照して――おゝ、明日も霜がさぞひどい事であらう！
オゝ寒む！ 首をすぼめてお部屋へ返る。
茶の間では未だ中々賑やかだ、お治さんの空わらひの高さ！
初めて御酒を口にした故か、ポッと上せたやうで、窓から來る冷たい風が何ともいはれぬ程心地よい、思へば夢のやうに過ぎた今日の一日、オヤ、何所からかほのかに梅の香りがする……アゝ好い匂い……忠様は梅がお好きかしら、私は……わたしは……アゝ瞼が重い故か頭がゆら〳〵する、何だか眠たく成つて來た。

其のまゝ窓ぎはへうつ伏して——大好きな彼曲を心ゆくまで口ずさんで見た。

…………………　…………………
…………………　…………………
長生殿のうちには　春秋をとめり
不老門の前には　月のかげおそし

弘徽殿の細殿に　たゝ住むは誰れ〱
おぼろ月夜の内侍の督　光源氏の大将
…………………　…………………
…………………　…………………
…………………　…………………
…………………　…………………



理想の夫に配せる歡び

濱千鳥

勇躍せる私の心

今日召して被入る洋服の上衣の塵を拂つて居ると、「オイ、之を引張つてくれ」とヅボンつりふら〳〵させながら、目の前に身體をおよせになる、ほんとにまあ、朝のお出かけの忙がしさ、何から何までお手傳ひしなくちあ、ならないのですもの、時には首まきまで、さあつて、首つきだして待つていらつしやる、眞實に世話のやける大きな、お坊樣だこと、

毛皮の付いたオバコート、おかけ申て衿を揃へて居る私しの顏を、八字髭なぶり乍ら鏡の中から笑つて默つて見て被入る、

敷島に火をつけて一口吸ふて直ぐ御出かけ遊ばす、

朝日うらゝかに照り渡つた大空は、今日も能く晴れて深碧の見渡す限り綿雲一つ浮んでゐない、朝風に送られて庭の菊の香、幽かに此處迄通ふて來る、

ぬぎ捨ての不常着を、日向の可い緣側のソハーの上に廣げて、散らかつた物を片付け、洗濯物は其々花やかに渡して茶の間に坐る、

此處からこうずつと見ると能く片付いた八疊の座敷が、馬鹿に廣く成つて見える、新婚の記念に頂いたあの油繪が明るい部屋と調和して、眞實に近くで見るより之位離れて見ると何とも云へない、あの燃ゆる様な花瓣の色、如何すればあゝ云ふ色が出るのだらう、

茶の間はまた大きな机や私しのタンス、外にも何かごた〳〵置いてあるものだから餘り狹くて身動も出來ない樣、此火鉢の傍にゴロット寢轉び成さると危くて歩かれやしない。

今日は花を相手に道具の置場所でも變へて見やう、序でに座敷の飾も取かへてお歸に成つたら驚かして上やう。

大分亂雜に成つて居る夫の机の中片付け樣と引出しあけて見るとまあ何だかどれも〳〵一ぱい、呆れて見

廻す中に不圖目に付いたのは大阪の伊藤樣からの御手紙だ、伊藤樣は夫の竹馬の友、無二の親友である、此方のお噂はもう何遍も伺つて居る、大分長いお手紙だ如何な事が書いてあるか知らむと、秘とあけて見ると

「噂に聞けば新夫人はなか／＼才色兼備の御方の由、實に君が爲め双手をあげ大盃を引いて萬歳を唱う、我我友達仲間の妻君には隨分振つた者許し居るが、君のは特別」、まあ厭だ、「何れ其内上京の節親しく御目もじ新夫人にも君にも萬々御祝儀申上ぐる……」なんて一體まあ誰れが此んないらないお世話成さるんだらう惡戯にも程がある、お目にかゝつたら二度吃驚されてしまふわ、あゝくすぐつたい樣な氣がする、

外には夫が讀んで聞かして下すつたのもあるどれもどれも皆御祝ひの其許し、何だか嬉しい樣な恥かしい樣な氣がして、獨り顔が熱く成つて來る、其夜の樣がありありと眼に浮ぶ、眞實に早いもの、河島樣の奥樣に手を取られてあの野菊の大きな浮き出た樣な裾模樣に金茶地鳳凰の帶胸高に矢の字に結び、首からかけた金の鎖、雪を欺く衿の眞中に輝くダイヤ、花簪重き高髷氣遣ひながら、そゞろ心にあの席についたのも、其夜から直ちにのぼつた新婚の、旅の宿に、蜜の如き君が愛を恣にし、初めて許せし紅の燃ゆるが如き熱きに、思はず胸ときめかしたのも、つひまだ、昨日の樣に思はれるのにいつしか夢と過ぎて早くも五月、僅かの日數ながら新しき生涯の事々に、胸とゞろかした其れも今は早や、新夫人と云ふ美しき名の許に、重き責任を、かよわき此双肩に荷ふて、此年月折にふれ、物につけて懇におさとし受けた御兩親のお敎へ、且ては師の君の仰せられしお言葉など、心に占めて、清く美しき家庭作らんと、希望多き將來を夢みつゝ此處長阪の物靜かなる地に新居を構へたのである。

「祖先の家風と云ふものもない、吾々がもとなのだから何事も之から作り上げて行くのさ」とあの松吹く風烈しき國府津の、雪と散る岸の白浪、碧緑の大海を靜かに縫ふて行く白帆の行衞眺めながら、月を浴びてそぞろありきした其夜のお言葉！　眞實に此先家庭の平

和も未來の成功も、唯私等の努力如何に依つて得られるのである、此お言葉を伺つてからの私しは、いよ〱重き任務を感ずると共に又、新しき前途の望に此少さき胸はみちみちたのである、私等の前途には希望と光明とに輝いてゐるもとより安逸にして快樂を得樣とは夢にも思はぬ、力の限りをつくして榮えある前途の今日を、一歩々々形づくつて行かねばならぬ如何してゆけば常に家庭を樂しく愉快にする事が出來るだらうとは、誰しも處女時代に於て考へる事である、唯其理想のゑがき方如何によつて他日、人の妻の實



伊勢大神宮

際に成つた時、失望もし落膽もするのである。

何と云ふても家庭は主人が根本である萬事に主人の意をうけてやつて行かねばならぬ、いかに家庭は悉く妻にゆだねられてゐると、云ふても、少しも夫の趣味や嗜好に頓着せず何事も自分の勝手にのみ振舞ふは傍から見ても餘り見よいものでもない、又、家庭の平和を保つ上から云ふても、決して可い事とは思はれない。夫妻の間には何より愛が大切である、其が根本である、されど又其愛の中にも敬有りてこそ、初めて秩序ある家庭の平和は得られるのである、家

庭の人にして一家の平和を得られない位、人生悲慘の極みはない。

富にも位にもかへがたき、憂も樂しみも唯此君に依つて感ずる妻の身は、何より夫の心一つである。

身には綾羅をまとひ、大厦高樓に住つて、山海の珍味にあき、出づるにも入るに、多數の人にかしづかれて、榮譽榮華心の儘なるべき人も、百年の苦樂を共に分ち、偕老同穴の契をこむる我夫の、吾をおきて心を外に仇人に、身は孤閨愁然、錦の夜の物に涙を注ぎ、夕雲の行衛にも悲しき想の止めがたう、春の花と秋の月も只涙の種と成る樣では、女として、妻として、此世に生くる慰めは何處に有らう、人里遠き深山の奥も、月もる軒の露茂きに着る衣さへうるほうとも、あたゝかき夫の御手に抱かれ、淸き御情の限りなく深からば、そこに幸福は有り希望は湧く、

此間の夜、此部屋に、火鉢圍みながら何くれと行末の話に耽つてた時、俄に戸や障子が恐ろしい音がして時計のセコンドは止る、棚の上の物は落ちて來る、果は身體までユラ〳〵動いたと思ふ其瞬間、餘りに驚いた私しはたゞ眼を見張つた許しであつた。

其を可笑と思召てか、微笑みながら、

「ナーニ地震さ恐い事はない、可いじやあないか死なば諸共だもの……」と、つと寄つて痛い程手を握り占めなすつたが、まあ眞實に感情の鋭い方！　情緒の濃やかなる君！

不束な身をうとましとも思ひ給はず事々にいたはつて下さる、思へば私しは限りもない幸福の身である、あゝよろづに足らはぬ私しは何を以てか此溫き夫の眞心にお答へしやう、五尺にならぬ此身此心、捧げつくしても猶ほ足りぬ我が思ひ、なつかしき君よ、慕はしき我が夫よ。

愛に輝く淸き瞳、靜に仰言るけども强き印象の殘る君が聲音、仰ぎ見伺ふ度に我が胸はをどる、そして悲しい樣な、なつかしひ樣な、思ひがひし〳〵とこみあげて、我知らず熱き涙がハラ〳〵とこぼれる。

あゝ君が半生の悲慘なる歷史のあとの偲ばれて、

男子立志郷關出、希望多き將來、光明に輝く前途を夢みて、大臣大將何の其と、勇みに勇む青年が青雲の志を抱きて故郷出づる其時は、誰しも此決心を以てゆくのである。

されど、天下幾十萬の青年の中、眞に此意氣を以て初一念を貫く人は稀れである、其多くは中途にて挫折し、遂には墮落の淵に沈みあたら春秋に富む世を、自づから浮ぶせなき人となつて終る者が多い。

夫は幼きより逆境に育たれ、其上數多き兄弟の中とて學資も思う樣に得られず



御殿場の富士　(初夢な見ぬも夢なり不二の山)

高等學校時代からはもう獨力で、父上の助をかり給はず、あらゆる苦學をなして遂に十年、倦まず撓まず屈せず怠らぬ其堅き決心に、最後の光榮ある法學士の月桂冠を得られたのである、親から學資を仰いで卒業しても人は皆立派な者だと云ふ、それをまして、帝國學府の最高たる大學を獨力で最後までやりとげられた、其不撓不屈の意氣、精神、あゝ我夫は全く意志の人である、君が今日迄の歴史を省みれば實に奮闘の生活である。

苦學十年、其幾春秋の星

霜の中、いかに堪へがたく苦しき朝夕のおわしなむ。

食するに米なき時も、人の手前それとなくまぎらして空腹を忍び、ほしひと思ふ參考書幾冊買ふ事も出來ず、試驗前勉强しやうと思つても其勉强する時間のなかつた時なぞ、ほんとに之位、苦しいと思つた事はなかつたと、先の夜も色々話の末に仰言つたが、まあ眞實によく其辛らひ、慘めな境遇に打勝つて最初の決心をつらぬかれものだ。

私しはお話伺つたゞけでも、餘りお氣の毒やらおいたわしくて、思はず其場に泣き伏して了つたが、此堅實なる精神、此堅固なる意志ありてこそ、初めて今日の身とはなられたのである。

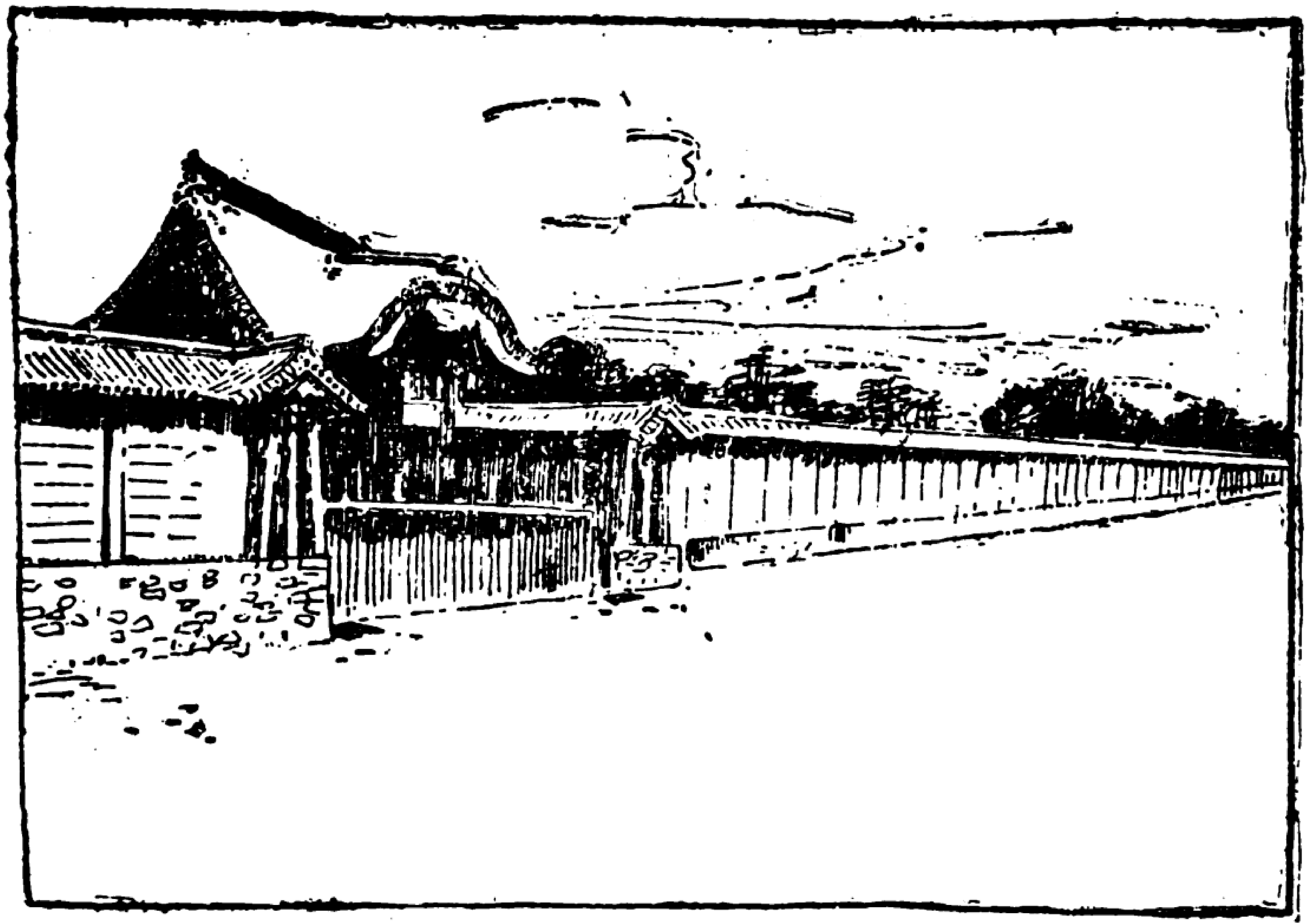
思へば嫁ぐ其日の前夜、父君のお居間にひざまづいた時、

「お前が嫁ぐと云ふ人は、斯々の經歷をもつた人である、實に今の世には珍らしひと思ふ、此意氣精神をもつて世に立つて行く人を、お前が一生の夫とたのんでゆくのは實にお前の幸福と云はねばならぬ、いたずらに花にたわむれ月にあくがれる樣な、浮薄な考へをもたず、あく迄も堅實な心をもつて、此夫の妻として恥かしくないだけの覺悟を極め、富めるにも貧づしきにもたゞ誠をもつて仕へよ、今日を限りお前は此家を去つて、夫の家の人となるのであると、慈愛あふるゝお顏おごそかに、吾が行末を思はせられての、最後の御敎訓うけた其夜其時の感！

前途多望、色彩美しく歡樂多き泰平の御代に、此希望に輝く人を夫として終生を契り、愈々活社會に立つてわれと我力で、一家を經營してゆく時、果して私しは此君の妻として、内助の功を全うしてゆく事が、出來るであらうか？　學足らず世才にとぼしく、姿醜くき私しは、果して夫の愛を永久に得る事が出來るであらうか、二十年來雨にも風にもあてられず、溫き慈愛の御手に育くみそだてられし身の、明日よりは俄に變る境遇の、其に伴なう不安の念と、愈々此せちがらき浮世の旅に船出して、波のまに〳〵たゞようかと思へば、處女時代を去る痛切な悲哀の念も自づから湧

き出で、萬感交々至り、何とはなしに胸せまる心地されたものであつたが、其も皆、今日と成りては幼き杞憂に過ぎなかつたのである一夕の夢と消えうせて了つたのである。

今や苦學十年、漸く其初志を貫ぬき、社會の旅路にさをさして、大に雄飛しやうとする今日の、此時に當り此君と、將來の苦樂を倶にし君が今日迄の苦學をして、よく其終を全たからしむる、あゝ思へば想ふ程私しの責任は愈々益々重大である、從がつて其れに伴なう前途洋々、春海の如き限



京都御苑　叡慮にてにぎはふ春の庭園）

りなき希望は、我胸にみなぎる。

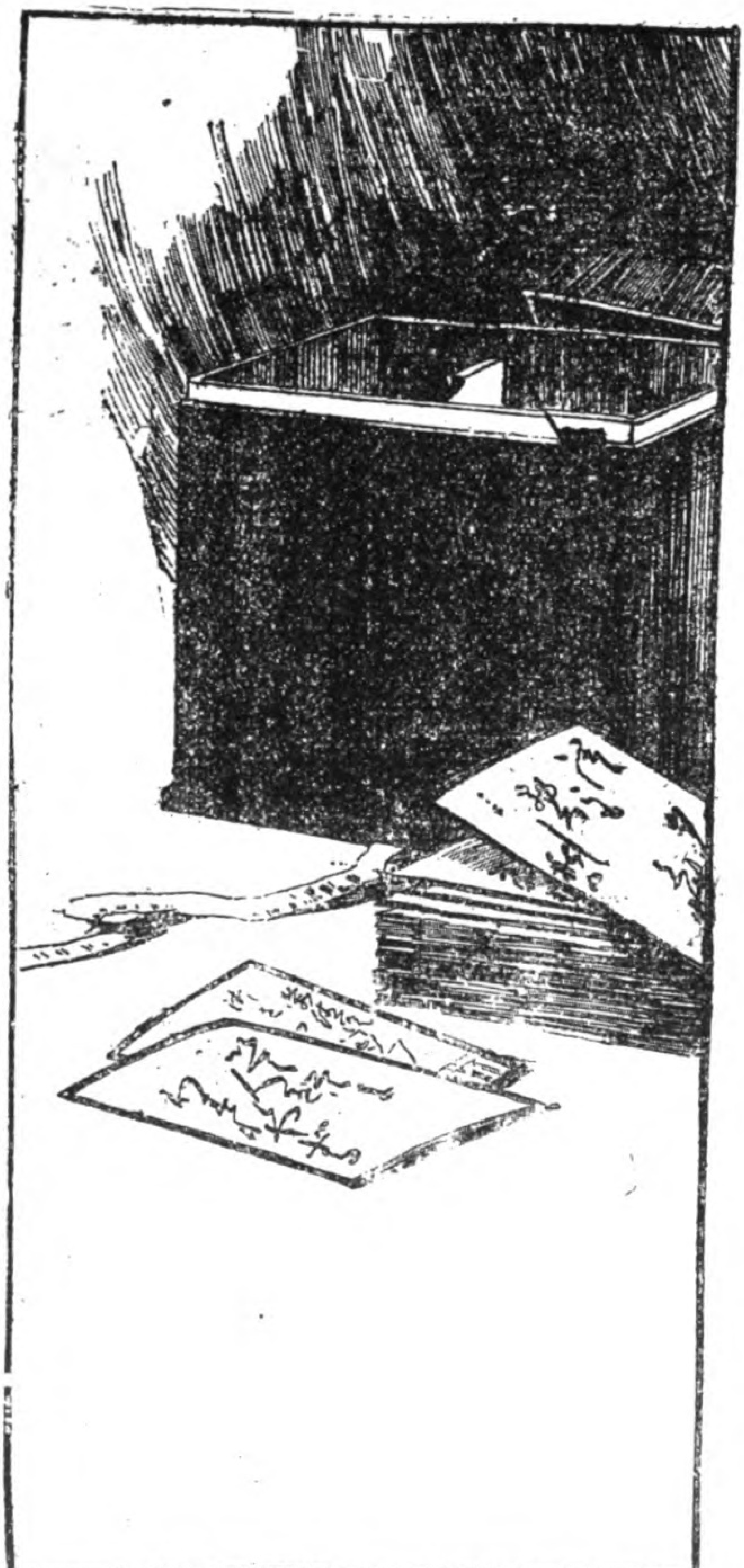
月々に出る女學世界の、何時の卷にも有益な事はかし、精神上にはた處世上に之によつて私しの得た處は數しれぬ、讀む卷々のすべてはおよばずともせめて、胸深かくきざみて得忘られぬ其節々だけでも行つてゆくなり。

噫！　くめどもつきず、日に新たなる夫の愛を一身に集め、おぼつかなくも、多年、胸にゑがきし其想の一節を、今や實地に行ひ得る、此樂しく自由なる天地よ、實に此朝夕こそいまだ

かつて知らぬ歡樂の時代なり、希望に輝く人生の春なり、花わらひ鳥歌う我世の春である。

極りなき天地の循環はやがて又、夏去り冬ゆかん時、萠え出づる若草、色香ある花鳥の音に彩どられて美しく樂しき春の限りなく、永劫にくり返へさるれど限りある此人の世の春のみは、いかに惜しみいかに戀ふとも、一度逝けば永久に、また廻り來る時なきを！

あゝ、光榮ある人生の春、一刻千金の人生の春よ、再び遭ひがたき此黃金時代を、頰の紅のあせやらぬうち、青春に燃ゆる胸の血潮の冷ぬ間に、いざ、心の限り思ひのまゝに……。かくして人の世に微力を盡し御國に恩に酬いまつらん。



梅のかをり

春の夜

德島　天野貞子

夜ふけぬともたれか知るべき。入り亂れての歌合戰今や酣なるに、情なうも迎ひの車打つゞく事よ。まゝならば夜明くる迄ともと思へど詮なし。さらばよとて盛に美しき諸將は立たせ給ふ。餘りの名殘をしさに、又の夜もなど語りつゝ門邊に送りいでまゐらすれば、もえ〳〵し頰に心地よき小夜風。折しも「お梅が香」。さけびしはたれ君にてやおはす。勇ましく歌よむ聲にや謗はれけむ、いまだ固かりし立枝の梅の三四輪。めづらしとも嬉しとも。寒月只獨知らぬ顏にもさえたる哉。四方に散り行く車のわだち送るともなくたゝずめば。

「にほはずば……にほはずば雪にまがはむ……」後にていとひくう口ずさませ給ふに、姉上とかへり見まゐらすれば、振の御袂胸に疊みて、奢深く歌想はせ給へり。（秀逸）

或る日

仙臺　照子

やつと雨だけはやんだが、空は相變らずどんよりと沈んで居る。朝夫への手紙を書き、小包と共に差出す。午後から、小道具や雜誌やらの見分けをつけたら、行李に一ぱいも不用物が出た。中には惜いと思ふ物の無いでもなかつたが、かう云ふ折に見切りをつけなければ一生涯片附きつこなしと思つてあきらめた。夫の許より手紙來る。新婚初めての封書なり。新しき生涯に入つた自分はまだ夢心地で居る。片附物を濟し義子を連れて花岡さんへ上る。折悪しく不在。いづれ淺草へでも行かれた事と思ふ。夜、空漸く晴れて、薄々ながら月影も見られた。父上吉川樣の披露會に行かれ、夜更けて御歸宅。雨又降る。（秀逸）

親子の情

東京　夕顏

花子の誕生祝にとて、美くしき切地御送り下され、難有く御禮申上げ候。早速仕立てゝ、祝日には其似合ふ樣を寫し、永しへに御情の香を殘し申すべく、出來次第御目に懸け候。

花子も近頃は漸やく獨り立ちするやうに相成り申し、早く步く樣に早く物言ふやうにと他處目には少しも趣味なき事も、親の身に取りてはなかなか樂のしみに御座候。あの武士堅氣の頁人まで、散步ごとに玩具よ菓子よと求めて參り、「ソレお土產〳〵」と與ふる親、貰ふ子、其のよろこび互ひに劣るまじく見受けられ候。燈を圍みて共にそを味ふ樂しさは千萬金にもかへ難き心地のいたされ、お襁褓の洗濯にて手に皹しほのにじみ出づるも意とせず日を送り居り候。

御兩親の御膝下に萬事華やかに過し給ふ貴女樣、「それで世の中は持つた物」と御笑ひ下さるべく候。（秀逸）

馬車の中

長野　戒能すみ子

我が十二回本業生の新年同窓會は、いよ〳〵今日新月亭で開かれる事となつた。朝からさわいでやう〳〵九時頃家を出た。廣小路のたまりからがた馬車に乘る。私の向ふには七ツ程の友染の被布きた嬢ちやんと、

四十近い乳母風の人とが居る。私が入つてから無言で畫本に見入つて居た嬢ちやんが急に口を開いて「乳母や御母様は何日御歸りなさるの」と云ふ。乳母やと呼ばれた人は何故か双の眼に涙一ぱいためて、「奥様ですか、嬢様が御宅へ御歸り遊ばして大人で居らつしやるとすぐ御歸りなさいますよ」と答へた。嬢ちやんは「さう」と力なく云つて又本に見入つてしまつた。私は何だか胸が堅くなつて下りてからもしばらく立つて見て居た。雪がチラつき出したので後ふり返りつゝ新月亭の門をくゞつた。

微笑

京都　野村もと子

空は水色に清く澄み、珍らしく二寸餘も積つた雪が、和かい日の光に消え初めて、樋をつとふ水の音が一入肌寒う感ぜらるゝ。晝過ぎ郵便が來た。倫敦の兄さんは又轉宿せられた相な。美しい繪端書に、「此度の家は露佛人同宿にて、其路に拙なる小生は平素の多辯にも似ず不得止終日沈默を守り居候云々」とペンの走り書。御苦境推せられて思はず微笑んだ。お母様は嫁がれた姉上の處へ年始にと行かれた。

大いそぎで

四谷　櫻子

つうちやん、何してゐらつしやつて。今日ね、家の御餅つきなのよ。朝早くから大さわぎ。私もたすきがけで御手傳ひしてゐるの。なあに？貴女の御手傳ひは口の方でしようつて。まあそんな事云はずに御きゝ遊ばせよ。夫でね今つき立ての柔かいので澤山あんころができたのよ。そこで弟や妹を相手にしてたべるのも一向趣味がないから、一つつうちやんと一しよに趣味ある會食をと思ふて今大いそぎて此手紙かきました。えゝ母様も承知よ。すぐいらつしやい。至急々々大至急。おしやれなんかなさらないで裏庭づたひ、例の通りはなれへずつと一直線に。餅の出てゐる柔かいのを二皿ならべてまつて居升。いゝ事、すぐよ。さあ〳〵。

初島田

京橋　伊東幸子

初日影麗かに門の松竹に照り添ひて長閑な元日である。廊下に立つてテーブルの上の名刺や年賀狀を調べてゐると、事務室の方で、御年始にゐらした皆さんがお呼びになるので、何氣なく行つて、「お目出度うございます」と頭を下げた時、島田に氣がついてハツとする間もなく、岸さんが「島田が素的によく似合ひますね」つて、山中さんたら「いよー催促醫」つて有仰るんですもの。あらつて袂で顔をかくす。小川さんがノートを出して何やらお書きになつたと思つたら、一枚破いて下さる。見れば「結ひ初めを娘恥づかし高島田」だつて、まあ!!お嚢からお琴の先生の處へ御年始に行く。まあ〳〵つて無理に御座敷へ上らせられる。お屠蘇を頂いてたら、「いつものハイカラより此方がお人柄で宜しうございますよ、きれいなお嫁様が出來ました」と先生が有仰るので、眞赤になつてうつむいて了つた。

新年の朝

美濃野の花

指折つて數へた時ちやんのお正月は目出度う明けました。時ちやんは今年七つになつた愛々したお下げの私の妹なのです。早う起きて家内中を驚かした時ちやんは、新調の美しい友禪染の被布を着て、もう大威張り。何より大切な羽子板かゝへて朝飯前から隣りの冬ちやんの家へ行か

うとするのを、兄さんに新年早々お轉婆だとお目玉を戴く。

そんなら姉様……と甘えた聲で今、身の支度を終つたばかりの私に抱きつきながら鎮守様へ初詣に行かうとせきたてる。希望に滿ちた愛らしい星のやうな眼、アノ頰の笑靨が際だつて目につく。

「何がさう嬉しくつてッ」と尋れると、「お正月だもの……」とすまして居る。

目馴れた我が家の冠木門には、日の丸の旗が心地よい朝風にそよいで、お下げの時ちやんとマガレツトの私とは手を引き合つて、淡雲が美しうお化粧した鎮守様への一筋道を初新にと出て行きました。空は瑠璃色に晴れて朝日の影も美しい。

外出日記

熊本　二葉

手輕に支度して門を出る。日は空色の洋傘に映えて温かい。

二里の田舍道はいたづらに土ぼこりを捲上げる。電信柱は高鳴りす。

踏切にかゝる時、熊本の方から汽車が來た。一年振りに見るのだと思ふと可笑しくなつた。町に入るとさすがにさゞめいて、瀨戸物のせりに人が集つて居る。

吳服店に給の柄を見ると何れも、縞筋の入つた日黒いの許り。こんなのが流行だと云ふ。小間物屋に一寸立寄つて、後に書店に行く。久しく欲しかつた書物も、小僧は名も知らない。これだから田舍は情ないと思つた。仕方なく繪葉書十枚許り撰つて、時計を見るともう三時。歸途に着く。今日は何だか晴々した。

午後

大阪　淺野八重子

中食後、お友達の許へ手紙を出す。一寸の間女學世界を見る。目錄をづうと眺めて一つ二つを拾ひ讀む。御召の羽織を縫ひかけると、下女がはがきを持つて來た。見ると從兄の淸様から。いつも面白い事ばかり書いてある。お返事は後まはしとして、さつさと縫ふ。仕上に使かうと下女に入れさせた蒸氣アイロンの湯がシユン〳〵わいてゐる。

「お姉さま只今歸りました」と美ちやんが入つてきた。「もう三時ですか」とたづれると、「エヽ」とかあい、口元に笑を含んで被布をぬぐ。母様が持つて來られたお菓子を、みんなで樂しくいたゞく。「今日は夕飯に洋食をしやうと思ふが、パン粉がないのですよつて、お前氣の毒だがこれから美代をつれて買つてくれませんか」と母様の仰せ、「ハイ」と立ちあがつて銘仙のお羽織を出して着る。「そして歸りに、みどりへ立ちよつて美代のリボンを買つてやつて下さいネ」と又つけくはへておつしやる。「早く美ちやん」と妹の手をたづさへて出る。

新婚を友に

淺草　淸水美枝子

御目もじの上御話し致すべきなれど、何となく面はゆく、擇はらぬ筆もて申上候。すれ者と皆様のお噂さの種なる私と、親の命に此の度こそいなむ術をつきはて、過ぐる日結婚の式を濟まして候。去年の春ちりかゝる、櫻の下月もおぼろに君様の眞白き面を照らせし夕、姉よ妹よと神かけて誓ひし其の折を忍び出でて此の僞にうち過ぎて口さがな、或人より御耳に入り候時、無情なりと御うらみを受くるにはあまりに心弱き我が身にこそ。もえたつ頰を窓より吹く冷たき風になぶらせつゝかとは記しまひらせ候。末ながら背の君様へ宜しう御傳へ下され度願ひあげ候。



現實に生きる人と未來に生きる人

綾浪女史

讀書も倦きた、蔦のからむだ圓窓によつて靜かに初冬の蕭條とした庭を眺める、故郷の北の國とは違つて・師走の風も肌を通す迄ではない、昨日洗つた黒髮を思ひきりふくらましてルイザとも何ともつかぬ自己流にあげたが、遲れ毛がはら〳〵前髮にかゝつて、うるさくつて仕方がない、都の君ならばマガレットに紅のリボンを蝶とも宿らすべきを田舍住ゐの悲しさは、たまにお下げにでもして居樣もんなら「チヤ[illegible]」つて囃し立てられたり、中學生の卵はユー、アール、バックなんて叫ぶんだもの。

あゝもう十八の歳も暮れて行く、十八！十八！血の踊る樣な、懷かしい響！青春の血汐の燃ゆべき年ではあるけれ共、私にはこれと云つて深い〳〵涙のしぼる樣な、微笑を禁じられ無樣な印象は殘されて居ない。花やかに暮れ行く彌生の空、寄宿の庭に咲き初めた梅を眺めて、

「ねえ園さん、私等の黄金時代はもういつたのよ、女なんて餘り情けないもんね、男なら中學をへて園さんの大好きな向ケ岡に三年と大學に三年とまだ六年も樂しい時代があるのに、私共は來月から家庭の人よ、家庭なんて隨分あこがれてる人もあるけれど私はいややと夏子樣は淋しさうに細やかな手を私の肩に加へて……

夏子樣は私より二つの姉さん。

「そんな事仰有ると悲しくなつて了ふわ、そりや男に比べたら隨分不平はあつてよ、神も餘り不公平なと思ふ

時もあるけれどそれも自分の心一つよ。夏子さん見たいに悲観しちや駄目、私、自分の黄金時代はもつともつと花やかに榮がなければつまらないと思ふの」

「園さんだつたらね、私にはさう云ふ境遇がないんですもの、家の父様や母様はあんなに頑固なんでせう、だから私は東京に行ける見込もないし……園さん何時迄も忘れはしないでせうねきつとね、たとひ私は家庭に囚はれて了つて貴女は社會に雄飛なすつてもね」私も急に悲しくなつて、

「止しませう夏子さん、貴女と私は弓矢八幡も照覽あれ金蘭の交りよ。あともう十三日きりだわ、唱歌でも歌ひませう、故郷の空？配所の月？」

「まつはる藤の——」と歌ひ出すともう月が出て來た

「あら、長井先生よ」

と夏子さんは十歩許り前の黒い影を見付けると私の手を取つた儘駈け出す。

「先生ッ」一齊に呼ぶと、

「おや園枝さんと志村さん」

にこやかな御笑顔は二人の顔を照して……二人は分れて先生の両手にすがり付いた。月は美しく照つて校舍と寄宿舍とを浮城の様に浮び出させて居る。

「もう十三日きりですね、早く歸り度いでせう？私許り殘されて了ふんですねえ」

と先生は淋しさうなお顔を遊した。

「まあ先生はお痛いこと、私もう悲しくつて〳〵家になんか歸りたかあゝりませんわ」

夏子さんの後について私も

「眞實ですわ、先生とかうやつて此月に照らされるのも……」と云つて俄に先生のお手の冷いのに氣がついて、

「先生のお手の冷たいこと、暖めて上げませう」

強く握ると、

「私の心はこんなに冷たいんですよ、急に暖りませんとお笑ひ遊す。彌生の風はまだ寒い、梅の花は寒月に照されて雪の様、あゝ此梅にももうお別れね、三つの影が長く〳〵池の様なお庭に映つて、

「もう勉強時間が來ます。歸りませう、明日の晩も亦出ませうねそしてゆつくりお話しませう」

先生は舍監室に私と夏子樣は廊下に暫らく月を眺めた。

あゝもう去年になつて了つた。それでも私はこんなにして居なければならない。彼の夜が堪らず懐しい。

永井先生はもう山紫きに水明らかなる畔りに美しき家庭を作つてらつしやるし夏子樣は遂々家庭の人となつて了つた、なんぼ恥しいだつて彼樣に仲好だつたのに御相談もなく、すつと嫁つて了ふなんて、あんまりだと涙の出る程怨めしく思つた。

早速お祝詞と寫眞の請求とを兼ねたお手紙を上げたら一月たつてからお手紙だけ‥‥

樂しきは學校時代、矢張り私の黄金時代は寄宿舍でした、姑も居れば番頭も下女も使はねばならず、筆取る暇なんて一寸も御座いませんの、之が私の運命と不平を起す力もなく毎日朝は暗い中から夜は十一時頃迄も働いて居ます。



△夏子さんはとうく家庭の人となつてしまつた――なんぼ恥かしいだつて、あんなに仲好だつたのに御相談もなく、すつと嫁つて了ふなんて。

新婚の寫眞なんてありませんから何れ其中取つてお送りしますと要領はこんなもの。

記念寫眞は當然取るもの丶樣に思つてた夫も取らず新聞雜誌も見る間はなく前垂下げた人を所夫と崇め、六敷い姑の機嫌を取つてそれで生きた甲斐があるんでせうか、可哀さうだわね、乾度「お夏〱」つて呼れてるのよ、あゝ指きりして姉妹の約を結んだ二人はかくて隔つて了つた。そんなに淡い間ではなかつたのに。

十年後に逢つたら、どんなでせうと眼を閉ぢて考へて見る。

あゝ何うすればいゝんでせう、ミスはなつかしい名だけれどオールドが被されればあの枯れた樣な猜疑の眼の△△先生が思出されて身震ひがするし、ミセスも餘り好ましい響は持つて居ない。此世には神は二つの階級の外、與へて下さらなかつた、其外を望む私が無理なんでせうか。神が無理なんでせうか。

あゝ若き常少女、それは幾ら憧憬したとて得られるもんでもないから、大いに修養して心許りも少女で居ませう清さ若き少女にエ。

「岡枝さんは何が樂しみなんでせう？廿世紀に生れた婦人の面目を傷けるも甚しいわ、しみ見たいな眞似して」

とは時子さんが私を譏つた言葉なさうだ。ホ、彼の人から見たらしみとも古本とも見えるでせう、だけど私には私の希望もある、理想もある、まさか年中何處やらの若樣の眞似してる譯でもないんだけれど……文學は私の生命だもの。

一度は花やかな令孃振りだと感じた事もあつた。何の束縛もなく放たれた小鳩の樣に、自由な空氣を吸つて何處にでも飛んで歩く、美しい丸髷に紅薔薇一輪、若紫の洋傘つとかざして一寸田舍では目に立つ風姿

「時子さんはお幸福ね」

と何時か芳香さんに云つたら、

「さうかも知れないわ。だけど彼の人と親しく交つてる人なんてありやしないわ、內藤さんてあんな人ぢやないか知ら」

と芳香さんは可愛い歯を見せて笑つた。

「でも内藤さんはお書きなさる割に實際はそんなぢやあるまいと思つてよ。時子さん見たいに不言實行の人も居るから」

オホヽヽ、不言實行？　奇拔だわね」

大笑した事があつた、傍痛い程の交際家氣取り、あれで外交官夫人をと望まないとこがまだ殊勝だわ、男文字の手紙の來るは當然の事、そして御當人は平氣なもんで、

「ちよいと園枝さん、面白いもん見せて上げませうか」

なんて松にかゝつたうら紫の思ひ纏綿たる手紙なんか懐から出して見せる、幸か不



幸かお蔭で初めて私は、こんな手紙を見た、只今最も足繁くお通ひ遊すのは顔の細長い所が業平に似たと云ふ評判の佐野の君。

佐野さん理學士なのよ、當世風の輕薄才子、時子さんとは丁度いゝ一對だとのこと。

それで此頃は時子さん非常な理學士崇拜になつて了つて貴女の理想は？　と聞くと隨分だわ。

理學士よ、文學士なんて眞實につまらない、デモ詩人がつて泣言許り並べて何處がいゝんでせう。詩を作つても一寸も利益になることはないし文士の

奥様で寫屋の暖簾くゞらない人つて稀れでせう」

と得意に說き出す。

「そりやね文士の夫人にでもならうつて位の人は物質に憧憬してちや駄目だわ」

「ほんとにね、私見たいな俗人はそんな先生のお守は御免被ります。電車だつて蒸氣機關だつて飛行器だつてみんな理學よ、理學士は末に望みがあるわね」

佐野さんに飛行器發明して貰つて世界漫遊の新婚旅行でも企てる積らしい。佐野さんが空を飛ぶ迄にや世界の文明は太陽迄も及んでるでせうよと咽迄出たけれど呑み込で了ふ。

「時子さんの新婚旅行は無論飛行船でせう」

「知らないわ、佐野さんは乾度何か發明して皆を驚かしてやるつて仰有つてたわ、だから學問のある婦人の內助がなくつちや到底出來ないわねえ、梅子さんがねホヽヽ大執心なんですつて、女學校も卒業しないでねえ、よく恥しくなくつてそんな事が云へたもんだと思つて可笑しくつて……」

誇の色が双頰に紅潮を呈して……私も吹き出し度くなつた、御吹聴を謹聽してるも隨分辛いものね。

「まあ梅子さんが？一寸も知らなかつたわ、で、佐野さんは何う思つてらつしやるんでせう」

「誰が彼んな人、やつと○○物が讀める位ですもの問題になりやしないわ。金縁のお眼鏡かけた佐野さんの傍に立つて似合ふと思つて園さん？勿體ないわ、佐野さんは學問もお出來なさるし交際は甘いし……」

遠からむものは音にも聞け、近くば寄つて目にも見よとの佐野理學士の御自慢、餘りだから返事もしないで、見ると本箱の金文字をちらと眺めて、

「おや園枝さんも樗牛全集崇拜？厭ね縱ら胸の病は氣が利いてるたつて……こんな物崇拜してたらいけなくつてよ、樗牛は瀧口入道一つで及第したつて話よ」

此世に文學の花程美しく芳しいものはないと恰も時子さんの佐野さんに於けるが如き私に對して……柱の上の繪葉書挾みも博士の御肖像なのに餘り無遠慮な。侮辱せられた樣に感せずには居られなかつた。

「隨分だわ時子さん、猿澤池が何坪だなんてそんな物質的な人大嫌よ、靈的趣味のない人は人間の價値がないつて事よ」

と云つてやつたら鎌切見たいに腹立てゝ歸つて行つたそれからよ、い、しみだの超越主義だのつて惡口云ふのは云ふ者には關はず言はしておく、人の口には戶を立てられないから、あら愈々超越したつて？

いゝえね、超越しきれなくつて一寸こゝで惡口叩いて置く次第なのよ。

「海越えて離れ〳〵に別れては夢も通はぬ戀もする哉と龍華寺の畔に兄君と共に眠ります野の人は歌つた、何て悲痛な戀でせう、かゝる戀、將橫笛の樣な生命を賭した戀が何で彼の人に出來ませう。朝に越人を迎へて夕に吳客を送る操なき人と何の違ふ處があらう、あれが明治式なのかも知れないけれど、私は大嫌ひ。「丈くらべ」の美登利はお俠だつたけれど、其戀は美しかつた、眞面目であつた佐野の夕暮、駒止むる類ではない。

「兄樣は眞實にお口が惡い、私以上よ」

「あの女なア文でも理でも法でもお關ひなしな〳〵學士其物が理想なんだ、見給へ、佐野君が學士でなかつたら何うして彼んなにちやほやするもんか」

「まさか」

と云つて見ると、

「誰が虛言を云ふもんか、僕がね君し何學士だつたら佐野君以上もてたかも知れないアハツハ、、、。

「厭な兄さん、時子さんの方から御免を被るわ、着物のおねだりしたら直ぐ拳骨の御見舞だもの」

「園さんも口が惡いね、要するに彼んな眞似するなと言ふ事さ。時子さんだつて二十幾つかなるだらう？

「云ふ風になつちや貰手もあるまいし、お氣の毒の話さねえ」

「あら時子さんは佐野さんにいらつしやるんぢやなくつて？」

「佐野君が、彼女を貰ふ程馬鹿でもあるまい。彼奴なんか嫁つゝ、玄海灘の波高しだらう險呑々々、何うし

たつてお繕ひは華嚴もんだらうて」

此夏、夕顔棚の夕涼み、團扇片手に仰有つたつけ。ホ、、私が「あゝ常少女」なんて憧憬れてるの兄樣に聞かれたら一大事、どんな拳骨が飛んで來るやら、藏前男兒の腕は鐵だもの、馬だか犬だか知れないライスカレー丼をパク付て嬉しがつてらつしやる兄樣は蠻殼。

兄樣今頃襯衣一つで汗まみれになつて、コツ／＼機械作りでもしてらつしやるんだらう、よくね、團子レースやさゝら踊りなんかのお話を聞かして呉れます。

同じ父母から生れた兄妹が、かうも性質が違うつて不思議だ。一高は無邪氣だつて云ふけれど、兄樣だつて眞實に羨ましい時もある。夏子さんではないが、男は德なもの、だと云つて今、男にしてやるなんて云はれたら眞平だけど、

兄樣の奥樣は雲岳女史見たいに押しても叩いてもビクともしない女でなけや遣りきれない。私は熱烈な人が好き。「ハイネは我が爲に不幸なる友なりき」。「月の夕、雨のあした、我ハイネを抱きて共に泣きしこと幾度か」なんて云つたら、それこそ一喝されて了ふ。

選手は大分もてるさうだけれど、大男總身に智慧が廻はりかねの方が餘計ではないんでせうか、お隣の慶太郎さんなんかいゝ例よ、「家の慶太郎にも困つて了ふ運動會では一等賞牌貰つて來ない事はないけれど何時でも成績がビリとは情けない、ほんとに何うする積だらうつて、小母さんがこぼしてらしやつたけ。思想なんか單純なもんだもの。

母樣はよく「お針をなさい／＼」つて仰有るけれどお針なんか一通り出來さへすればいゝと思ふ、こんな急がしい世にはミシン位で一時間、何枚と縫つて了ふ樣でなくつちや駄目。項羽は萬人の敵をうつ方を習ひ度いと云つたさうだ。「寧ろシャツを縫はむ」なんて澄まして居られない、決して嫌ひと云ふではないけれどそりや縫つてたら面白味が出て來るには極つて居るが……私なんか單衣物縫つたら二日もかゝるんだものオホ、、それよか勉强した方が、どんなに爲になるか知れない、若い時に再び來ないんだもの、あんな胸ご

屈めてチク〳〵縫つてられやしない、幸子様もさう仰有つた。あゝ九月に停車場にお送りした事が思ひ出される、紫のもすそ長う佛蘭西形のお靴をギウ〳〵鳴らしてぐつと反身のお姿が眞實に羨ましかつたこと。目白の奥でバイロンやゲーテに憧憬してらつしやるでせう。

　幸子様の兄様は早稻田の文科、御兄妹揃つて詩の子。でもよく私幸子さんと喧嘩するのよ、早稻田と藏前の優劣を爭ふなんでオホヽヽ、藏前なんか餘りいゝ事もないんだけど稻門蛙の御自慢が烈し過ぎるんで、つひ意地から：



：兄が蛙で妹が目白つて云つてやつたら流石の幸子さんも怒つたわねえ、兄様からは「御苦勞様」なんて冷笑されるし、私許りつまらない。

「處女時代はね、歷史を持つもんですつてと幸子さんは云つた。戀の歷史——さぞ鮮かな都の君の：：：時子さんなぞの頁は多いでせう、目覺しいでせう。宛かも緋縅鎧うたる若武者の只一騎、雲霞と滿ちた敵軍の中に悠々堂々として駒を進むるが如く：：そして佐野理學士の名は殊に異彩を放つて：：だけど

史篇特筆の姓名もこゝに至つては餘り香しい事もあるまい、ダンテがビアトリス、ポーチナイに於けるが如く美しい詩となつて現はれるんでもないし、私は私の歴史の頁が眞白く一つの汚點をも止めない事を光榮とする、私の希望は凡て未來の二字に籠つて居る。私の全身の血を盡して咲く美しい花は未來!!!

「私芝居なんか一寸も見たいとは思はなくつてよ、老いてから見るもんだと思ふわ」

と云つたら美枝子さんは、

「老いてから? 私はさうは思はないわ、若い中、血を躍らして見るんでなくつちやつまらないわ、私老いてからなんか何も見なくつてもいゝわ」

あの星の樣な眼を熱心に注いで仰有つた。美枝子樣は貞奴崇拜者なの。

「園さんのは見ず嫌なのよ、歌留多だつてあんなに面白いものはないのになさらないし餘程貴女は變挺ね」

不思議さうな眼をして仰有る。

「不思議でせう? だつて私の今迄の教育はさう云ふ風だつたんですもの、今ぢやアね大分醒めて來たんですけど習慣は却々治らなくつてよ、良妻賢母主義! それに女學校の四年間は當てはめられて來たのよ、其時分は譯もなく盲從して居ました。けど私だつて自覺して來ましたわ、そら男が入つた歌留多會に行つたら罰する、やれ何雜誌を見ちやいけないのつて隨分御苦勞樣なお世話を燒かれて來たんでせう、今でも其教育が頭から拔けなくつてお芝居を見たり、歌留多したり、男子と交際なんてそんな事恐ろしくつて出來ない樣になつちやつたの、今、私の歌は所謂過度時代なのよ、美枝子さんなんか私より自由だつた丈御幸福よ」

と説明する。眞實に私の四年間は無意味であつた。

「貴女の學校、そんなに嚴しかつたの? でも時子さん見たいな人、出てるわねえ」

「あんな人も隨分あつてよ、私のは性がいゝ方だつたんでせう、あら自慢ぢやなくつてよホヽヽヽヽ、お君さんなんか時子さん程ぢやないけど矢つ張りさうでせう? 良妻賢母主義も當になりはしなくつてよ、これか

ら又何う代つて行くかも知れないけど、今ぢや着物も芝居も何にも入らないわ、飽きる迄學問して見たいの」

「私だつて學問はしたいけど、處女時代は享樂すべきもんだと思ふわ、園さん見たいに未來〳〵つてたら死んだら、それつきりでせう？」

「えゝ、それつきりよ、希望に死ぬのは満足だわ、羽田先生なんか男の癖に餘り小さな希望ね、花やかな夕日を浴びて安樂椅子で詩集を讀んで居たいなんて一寸ハイカつてるけどねえ、南極探檢でも遊したら如何つて云つて上けたかつたわ」

「オホヽヽヽ」

矢つ張り私の未來主義が勝つた譯だ。



「嬢ちやん嫁はんだつせ」

お向ひの内儀さんの叫び聲は、私の長い〳〵冥想を破つて、現實に歸つた私は

「母様〳〵お嫁さんよ早く〳〵」

と聲かけて何時か下駄引つかけるや外に出て居た。澤山の人に圍繞せられて花嫁の駕は一歩に一休み見よと云はぬ許りに徐々と進んで來た。藤色縮緬の何枚襲ねやら、根の高い島田にまばゆくさした簪美しくきらめいて人形の相乘り。皆のぞく樣にして眺めても十二の御衣程重ねた襟元搖ぎもせず是でも息が通つてるんか知ら、こんな有樣ぢや日本もまだまだ開けない譯だ、西洋なら柳眉逆立てゝ人權問題でも

引起すだらうに。こんな物體視せられて。「綺麗な嫁はん、えらい荷物やなア」なんて聲が聞える。

「あゝ現實に生きる人よ、永久に現實の榮を續けませ」と私は心の中に叫んだ。

彼方に光子夫人だ坊ちやん抱いて立つてらつしやる去年の丁度今頃だつたわね、お嫁入りだつて此町中を騷がしたのは、艶やかなお髷にお定りの赤い手柄をかけて美しい夫人振り、あの人ももう二十年後には家の母樣見たいに六人も七人もの子供に纏はれるんだと思ふと身震ひがして來る。よくも椒房なんて付けたものね、山椒の實の樣に瘤を澤山付けて一生樂みもなく自由もなしに葬むつて了ふと云ふ神樣も餘り御胴慾な。

どんな勞働も勤勉も厭はない、私の未來をして榮あらしめ、靜かに意味ある生活を營み度い許りである。

「姉さん、私お嫁に行く時にはね、あんな駕になんか乘りやしないわ。自働車に乘つて洋服きてねえ姉さん」瀧ちやんは甘える樣に私の手を握つた。



水天宮の鳥居前

若き婦人の心理解剖

野菊女

春こそ老いたれ、名殘りをとむる花片の、あゝ恨み
多き我身のそれは語らじ……
青春の想を語る、少女子の胸の清さよ……羨やまし
さかな若き光……妬ましきかな燃ゆる瞳……げに春は
花。いざ見にごんせ、色のとりどり……

危ふく心の紐を解かんとせし娘
一步を誤れば溝谷に落ちん

おなつかしい叔母上樣！

樂しいお正月も、もうすぎてしまひました。私ほんとにつまらなくつてしかたがありません。

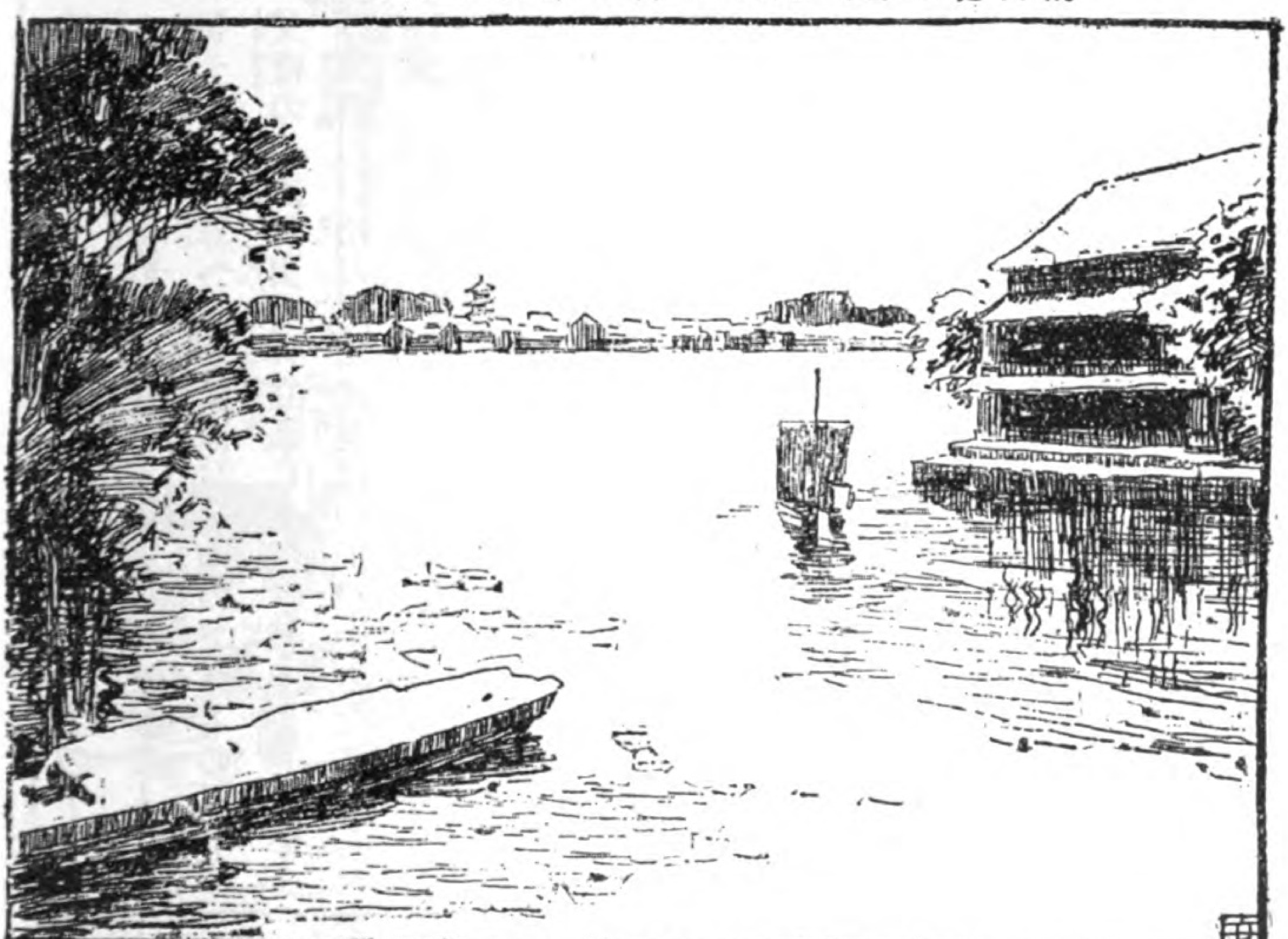
叔母樣、ことしの門松はね、ほんにお目にかけたいやうでしたのよ……千年をこめた濃緑の七蓋にはつた枝振……それはきびきびしいのを立てましたの。質素な母樣は、あまりお立派すぎやうと、反對遊ばしたのですけれど、今年は私が、なつかしいこの十代を送るべき其年の初めですもの、泣いても笑つても、來年はもう「廿」と算へなければならぬのですもの……やつと父樣のお許が出て、立派に立てゝ戴きましたの！

其嬉しい松の門に注連はつて、かるたに暮した樂しい日も夢のやう……きのふ淑子さんをお訪ねした留守の間に、綺麗にとり片附られてしまつて、あはれ名殘りのみどりばかり、杭跡の穴に淋しく突さゝれてありました！　淋しいわねえ叔母樣……もう大盤張りあげて、かるたとるのも氣まりが惡い……だつて季節外れは變ですもの……是から先のかるた遊びを人生にたとへて見ると、まあ初老の人……ちやうど宅の母樣位の方が若かりし日の思出なつかしさに……といふやうなものねえ。どうしても、あのやうな遊びは、うら若い胸の火が盛に燃えてる人のすることだわ。あゝお正月もすんだ。月日は水の流るゝやうに、一年や二年はゆめとすぎゆく……我等人生の春も、うかうかしてると、何の印象も殘さずに、漫然と逸しさつて、ふと氣のつ

く頃は逝く春の落花の恨み……活氣のない聲で「花の色は移りにけりな……」「ハイ、我身世にふる……ここに厶いました」「おや貴姉、それは我身一つの秋でせう……世にふるながめは、彼方に見えるやうですが……」なんて、一勝負つく時分には、新橋發の急行は、もう靜岡へついた、なんていふ樣になつては、夫こそ鳧ですわねえ……ですもの私だつて、苟くも此新時代に若き生をうけてながら、唯穩順しく凋落し去るのもあんまりな……盛年再び來らず……今の内十分な修養もつみたし、憧憬もして見たい、今！　物質上にも精神的にも、充實した春を樂しみたい、思ひきつて華やかな、生氣のある行動をとらうかしら……と、思ふ事もありますが、叔母樣、私は矢張、氣が弱いんですわねえ、お友達の皆樣は、淸き交りだとか、文學の友だとかつて、一人。二人の友を持たない方はない位ですのに、私にはどうしても、さういふ事は出來ませんの……」

淑子樣などは、叔母樣のお從妹、叔父樣の御緣に連

隅田堤の雪（一人づゝ降り隱れゆく雪見かな）



なる私ですもの……ちよい〳〵お訪ねもしたいとは思つても、彼宅樣には精樣つて方がゐらつしやるでせうだから、いつも若い男の方が集まつてらつしやるので……私どうも氣がをけていけませんの！　ねえ叔母樣！．淑子樣が私の方へ度々お遊びにきて下さるやうにお傳へ遊ばして下さいませね……。あゝ私にも兄弟があつたなら、こんなに心細くはありますまいに……ほんに淑子樣はお羨ましい……御存の通り、宅では母樣が消極的な退嬰主義なんでせう、ですからね、松枝もこの厄年もすませば、何れ相當な養子も迎へなければならないのに、いつ迄お前……そんなお轉婆な聲を出して、かるたとりなんかしてゐられますか、バイオリンだつて、お琴だつて、忘れてしまつてはいけないけれど、もう、そんな事にばかり關つて居てはいけません琴、持出すよりは先裁板を……流暢な英語を話すよりはも、少し優しく物言ふやうに心がけねばなりませんなんて仰います。夫でも父樣はね、まあ、餘り干渉せんで、松が自由も通してやれ、若い時は二度とはない何でもやりたい事をやるがよい、と仰しやつて下さいます、そりや私だつて、女學校も卒業したんですもの人樣に後指さゝれるやうな事は「せよ」と仰しやつたつて、出來はしませんわねえ。とはいふものゝ叔母樣人間は餘り自由が利過ぎますといけません、つまり不知不識放縱に流れていつしか大變な事になるもんですよ、世間の御方の中には心さへ清ければ〳〵と言ひつついつしか濁つてゆく人もありますから斯ういふ事は中々油斷は出來ませんです。まして、あらぬ浮名でもたてられては、それこそ、どんなに口惜しいでせう…噫、君子は危きに近よらず、矢張母樣の仰しやる通り堅固な道德的羈絆の下に、陽炎もゆる長閑な春を樂しんだ方がいゝんでせうと思ひますよ……靑春季の光に憧憬するなんて事は矢張りいけまんのね。かしこ

若き叔母樣へ　　あさみどりより

決心の臍を堅めし健氣な少女

克己耐忍の模範

横濱海岸通の雪景



水鶏刈る科野の奥も春は來て、谷間の氷、やゝに解けゆき、山懐の暖かきには、梅の初花淸く笑初めて候を、都近き武藏野の御住居、かの古城址の南曲輪には、早若紫の目もはるらしう、菫、たんぽぽ、艶を競ひ候御事と、御なつかしう存上候。

代々住みなれし故里、花ちる夕、涙と共に、さすらひの旅に出て候てより早くも五とせ‥‥姉樣お床揚のお祝の席に、琴彈じたる十三の少女は、ことし十八の春を迎へ、弟もとつて十六の中學二年の終期に御座候

さても山國の生活にも、稍慣れて、一同無異、父は變らず瓢逸なる聲に簞瓢屢空し、草顔淵が巷に繁くなど吟みつゝ、痛ましや羊羹色の古洋服きて、きのふもけふも、役所へ出かけ候へ共、母はさすがに女氣の愚痴も出て候て、落魄の身をのみ、かこち居り候。先頃もいとゞ冴ゆる寒明の冷々しさ、持病の神經痛に惱み給ふるやうなるに、せめては温かく、柔かき物きせ參らせんと、古葛籠の底、探りて、昔を語り顔なる花紅葉、友染や羽二重などの小切、接合して、眞綿

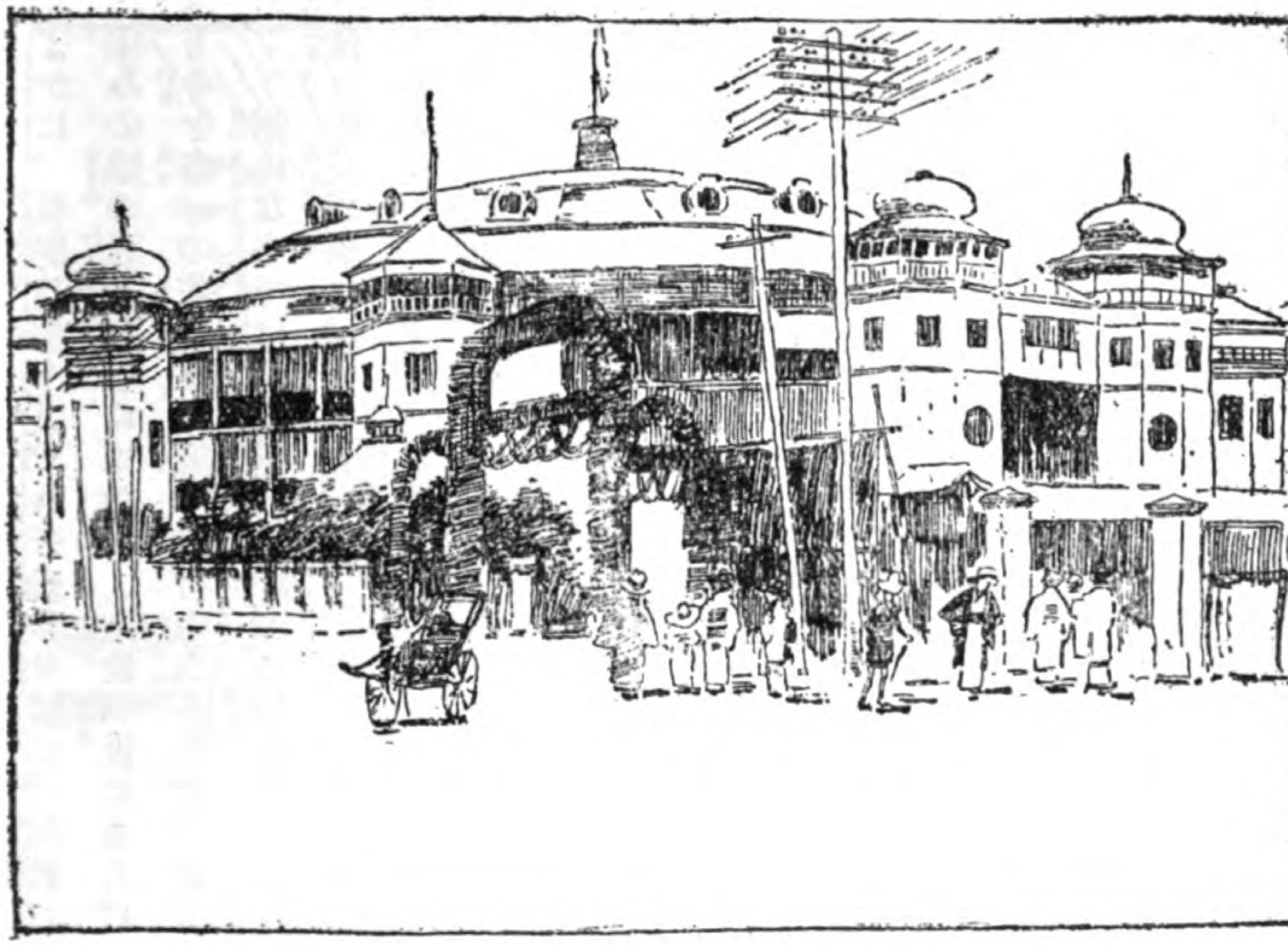
ふくよかに、長胴着造りて、きせ參らせ候に、勿體なや、生みの娘の私を拜まぬばかり……世が世にあらば汝等も今を春べの花盛り、噫、流行の衣もきせたきものを……絹地ならでは肩張る心地したる我身さへ、今は此接々の長胴着に、ありし昔の俤偲ぶ、運命拙き身にもあるかな、など、繰言申さるゝ御心の中、察し候ては、何と慰めん言葉も知らず、母と子と、冷たき手をとり合ひて、涙に袖をしぼり申候。

それにつけても、か樣に侘しき中にも、私等姉弟の敎育を忘れ給はぬ親の御慈悲！ 只今の境遇としては殊更、勿體なき次第……難有き御心、あだに致し候ては、天罰の程も恐ろしからめと、弟共々常に戒め合ひ申候、私、性來のおろかしさ、ともすれば亂れんずる心の駒に鞭うち〳〵、入學以來、幸に首席を占領いたし候て、此春はいよ〳〵、卒業といふ瀨戸にさしかゝり申候。

さても之より後、溫室の如き此花園を出でゝ、冷たき荒野に旅立べき身の上を思ふては、心細さ、うら悲しさ、やる方もなう存候。よしやみ情厚き父母のみ袖の蔭はありとはいへ、せち辛き浮世には黃金の楯もたぬ程、憐れなるはなしときくものを……とやせまし、かくやと想ひ亂れては、隙もる風に梅が香の冷たく通ふ曉かけて、ねられぬ夜はも度々に候。師の君方も甚く御同情下され、御懇の仰せも之あり候が、つまりはさし當り小學敎師となり一二ヶ年の奉職の間に獨學を續け、さて徐に中等敎員の資格を得るが、萬全の道ならんとに之あり候。不肖の身へ、御親切なる御心添へ嬉しさは胸に溢れて候へ共、私いかなる故とにもなく女敎師といふ務め、性質に相應せずと自覺いたし居り候、殊に其職にある人の多くが、追々に男性化して、女らしき溫味を失ひ候か、或は思ひきつて、ヒステリツクの面地に、嫉妬らしき御眼鏡光らし給ふなど、見參らせ候ては、淺ましう涙さしぐみ候位なれば、到底其職を樂しみ候事は不可能と存候。

母は又、ありし昔の榮華の夢に憧れ候にや、卒業後の數年間は、都に上りて、舊華族樣方の姫樣附ともな

國技館（松に吹風さへ祝ふ子の日かな）



り、優しく女らしき御躾戴くが宜しと主張致し候へ共、こは、勿論父も反對の意見に候、元より私とて、光榮ある少女の身、靑春の血は人並に溫かうも候へばよし思ふが儘なる若き誇りに燿くを得ずとも、せめては高島田美しう、振の袂の紅艶に薄化粧して、三つ指優容なる、お侍女風…姫樣とか、五位樣とか、繪に見るやうなる境に入り候は、さこそ華やかに、面白からむと存じ候得共、さる上流の御躾頂き候ても、小さき私等の家庭には置所もなかるべしと存じ候。

さりながら、このまゝ、此山里の村娘と伍して、白粉つけて紅つけて、紬の紋附きで某が嫁つ子と成果候も、あまりにつらく、生がいなき事…と、種々屈托いたし候末いよ〳〵かうと思ひきめ候、行手の道…昔に變らぬ姉君の御厚情に甘え、御助力仰ぎて、一途に進まんと、覺悟致し候次第一通り御聽取下され度候

そは、別事にも候はず。かねて承り及び候赤十字…燈火もてる手弱女の尊き心、淸き涙より創められきときく其赤十字看護婦たらんの願ひに候。御姉樣、御

親友におはす○○様、其病院の重き役目にあらせ給ふと、承るこそ幸ひなれ、いかにもして入學いたし度と存候。

御承知の如く、弟は亡父の業をつぎて、刀圭の道に入らんとの志望にも候へば、姉たる私の行動としてはさまで、ふさはしからぬ事にも之なかるべくと存候。さ候はゞ、學資の心配もいらず、自分心かけ次第によりては、好める方面の研究も出來、將來弟を助けて家運を挽回することも得申すべきか、又一には、か弱き女の身ながらも、些かは世の爲、國の御爲となり參らする日も之あるべきかと存じ申候。今青春の、只花やかなるべき少女の身の、色ある衣を脱ぎすてゝ、唯精神的に生きんと希ふ私の心中、御察し下され候て、姉君の御扶け戴きたくと念じ申候。尤も、この志望の次第は、父は賛成いたし呉候へ共、未だ母へは打明申さず確定の上は、之も姉様より、とくと會得の參るやう御話し頂き度と存居り候、指折り數ふれば、もはや廿日餘りにて、此校門を辭すべきの期に候。同級の誰樣かれ樣、けふも南の窓の下にて、卒業式の着服はかう…袴は何…リボンはお對に求めんなど、樂しげに語り合ひ給ふをよそに、我身の前途思ひつゞけ候へば、心弱くも落つるは涙の露に候。嗚乎姉君！　來るべき卒業式の其日、紅黃白紫、五彩燦たる花少女の群の中に、紫紺カシミヤの古袴つけて、褪黑色の木綿の紋附きたる一人がみすぼらしう、交はり申すべく候。さあれ、かたちこそ深山かくれの朽木なれ、心は花になさばなりなむ…四十の卒業生を代表して、答辭よむべきは、その憐れげなる一少女の役目と、けふしも師の君より仰せ渡され申候。

研かば光るべき心の眞珠、いよ〳〵怠らず磨き申すべく候まゝ、何卒、此後共御見捨なく、御助力給はり度いつもながら…自分の事ばかり、くど〳〵しう申上げ恐入り候。先生へも姉様よりよろしく御傳への程願ひ上げ參らせ候。かしこ

みすゞ子

初島田印象記

野路の雨

大きな鏡に私の姿が映つた時、羞恥と歡樂とが入り雜つて、徒に胸がときめく。

初めてにしては根加減もよく、金元結掛けた髷も至つて上品、浮彫りの平打ちがキラリと光つた。

「もう年頃だもの、餘程其方が似合ふよ」と母樣はハイカラが大のお嫌ひ。

全體去年から結ふの結はぬで、さん〴〵爭つた島田だもの、私には隨分手數のかゝつた髷である。"私見たいなお多福が……」と一言の許に貶しつけたものゝ、扨結ひ上て見れば何だか妙に心嬉しい、矢張り燃ゆる血潮と、多感なる情調と、而して少女てふ名を呼ばるる限りは……。

地は青草に萠え、諸々の花の現はるゝ季節に似たる吾が人生の春 闌に、處女が理想はそろ〳〵と根ざしそめる、殊に此頃の天地がよく私の心と調和して居る。

復活を意味した新年は、よし荒涼たる人心へまでも少しの光明は與へるものだ、門松の色町内飾りの藁の香は、白頭の翁が灰色した胸中にも暫く、冥途の一里塚なる感想を忘れしめると思ふ。不平らしく年をとるのを呟いても、矢張り可いのはお正月で、かうした世間のどよめき、薄藍こめた大空、冴えた空氣に鳥追いの糸の音や、町内獅子の太鼓の音は、年々變はらぬ單調な音律を踏んで居るけれど、それがどうやら太平樂の音樂と聞え、新らしく人の心をそゝり立つる。

私は今非常に愉快だ、前途は美妙なる調べが波うつて、わが行く道は溫い光が、眠むたくなるまで輝いてる樣だ。

希望に生く少女は、よく枯衰した老人を慰藉するものと見える……と云ふのは、私の島田姿が恐ろしく家内中を賑はせた、母樣は先づ晴れやかな笑顏を遊ばして、大きな私を立ちつ居つ御覧んになる、お仙も來た

谷川のお老爺さんもやつて來て「いやもう立派な奥様で御座いますサア、途で逢申しちや何處の奥様かと思ひますよ、奈何も早や、これまでのお新さんの御丹精はね……」と國なまりのアクセントで皆を笑はせる、

「まあねえ。這麼にお美しくお成り遊ばしたのを旦那様が御覽になつたら……」お仙はほろ〳〵と涙を溢す。

私は何だか羞痒くなつて、自分の部屋に退去しやうと、玄關脇を駈出す出逢ひがしら、

「おや〳〵」と頓驚な聲を出して、式臺を上つて來たのはK様だつた。はつと度を失なつて、部屋の中へ飛び込み様上氣した頰を押へた。今のK様の吃驚した顏何も私が島出に結つたからッて、さう驚かないでもいい、彼處で一番警句を吐いたら、倘々五尺の男子を仰天さして了つたらうが、私はさう近代的の女性ぢやなかつた。

父はなくとも家は貧しくとも、十有餘年を母の手一つ深窓にかくれた私、第一異性とは滿足に口をきく術さへむづかしいのだもの。

流行の琵琶の音色も滿足には知らない、歌留多會の興味も知らない、無味乾燥な女かも知れない、けれど又私には相應な誇もあるものだ、誰しも青春の光に浴して、花やかな周圍を渴仰せぬ事はないけれど、私は一定の輪廓から脫して自由を想ひ、野の胡蝶が花にさ迷ふ放縱な思想をもつ事が出來ぬ、人より親より與へられた、線の中を脫する事は出來ぬ、然しさう云つて自分を悲觀するのでもなければ、自由の天地に遺憾なく青春美を發輝遊ばす、方々を攻擊するのでもない、那麼事は奈何でも可い、吾が光榮を歌ふのには、差當り不必要な件だから……唯鳥渡私の性格が云ひたかつなので、

ソロモンの雅歌に、

わが愛するものは白く、かつ紅にして萬人の上に越ゆ、其頭は純金の如く、其髮はふさやかにして黑き事鳥のごとし、其目は谷川の水のほとりにをる鴿の如く、乳にて洗はれて美しく、嵌れり、其頰は馨しき花

の床の如く、香草の壇の如し、其唇は百合の花の如くにして、没薬の汁をたゝらす……。

　して私も此樣に讃美さるべき、少女の部であろうか私の情調は張り切つて居る、身體には若々しい血が循環て居る、障らば直に感動し安い性は、森羅萬象に一とつ一つ斷片的な思想が組織され、其處に一閃の光明が起つて、そゞろ春を歌はねばならぬ、賞美せねばならぬ。私等が思ひを一がいに空想と退く勿れ、此空想が又轉じて堅い志望の源となるが故。私はそつと髮を撫でた、油の香が強く匂つて、一筋の亂れ毛はなく荒い櫛目立つた鬢の具合、又新らしく微笑まれる。黒髮のめでたからんこそ女は月やすかるべしとか、髮結ふ事も又女の命かも知れぬ。おゝ若い命よ、春の光にぬくみたる私の體よ。いとせめて心行く限りの快樂を慰へ、今こそ力の限り活動すべき時ではないか。

　夕の星影燦然と理想はまたゝく、而して行く道は彼方にも此方にも横たはつて、抱負は正に無盡藏である。

　あゝ若き誇ぞ何處へやらふ。新家庭の生活に及ぼさうか、それともあの近松や西鶴の書く樣な、大時代の戀に耽らうか……要するにそれは夢想だ、でなくとも未だ現在を放れた將來の事だ、私は今痛切に此鮮かな血を以て、思ひのまゝに處女の心髓を發輝したい。

　茫然天井を見詰めて考へていた、外ではカン／＼と羽根の音が聞える、玄關に誰やら來た、取次ぎはまだ出ぬ樣だから、私は仕樣ことなしに出た。兄の社の人だ相な、縞羅紗のオーバコート着た、私の見知らぬ方が恭々しく「毎度伊藤君には色々とお世話樣になります、何分宜敷」と餘り丁寧な御挨拶に私は少しくまご付いて「いゝえ奈何致し升て」とお辭儀ばかりして了つた、後で聞くと私を兄の細君だと思つたのか、島田に結つた故かどうやら道理らしく見えたのだらうと、母樣は大笑ひ、まあそんなに大人びたかと驚くやら、恥しいやら……。

　それはさうと、初島田の印象を一人で味はつて居た處で詰らない、一つ伯母樣を驚かせやうかしらん、

春着と云つて自慢も出來ないけれど、お召の格子縞退紅色の裾をさばひて、ぞろりとした桔梗色、羽織を着乾き切つた大路の砂をパッパとけりながら、得意然たる、自分のスタイルがなつかしい、矢張女だもの：：：。

幾歳になつてもお化粧と着物の事は忘れられないのが眞情、それを責めるのは、小乘の數理で人間を抑すくめ、却つて生れ故郷を放れしめるのと同じ樣だ。

お艶裝も無論程度問題だけれど、許す限りは美しい衣華麗やかな、風情が可い、けさうじて香に染みたる衣着たる心地は、古代も現代も同じ感想である。

閑話休題、私が伯母さんの前に立つとする、まあ好い着物が出來たね、峯さん、お前の家も一切りは危なかつたが、でもう安心だねえ、いゝえ善い色氣だよ、何華麗なもんかね、ねえお喜代や」と太つたお顔をにこつかせて從姉を省る處が、ありノ\と見える。

ある勝利を意味した會心の笑を私は禁じ能はぬ、私の一家が浮世の波に危く傾かんの刹那、冷酷なりし一族に對して、これが私の期待した結果だもの、虛飾？虛榮？でも私の精神上に強く勝利の聲が染み渡るのだ、私は這麼事を又一つ春の光榮の中に數へねばならない。

何にしても私等は凝としてる時ぢやない、榮達の扉を開く鍵を見出すのも今ではないか、けれどさう焦慮つても仕方がない、ゆるりと吾が春の光を一滿に吸ひながら、樂園の境に進んで行かう。

春子樣の御宅の新年會に呼ばれた、廣間は今餘興の最中、此次には峰さんとお勝つちやんとで喜撰をやる相だ、そつと拔け出し仕度部屋へ這つて來ると、いづれも知つた顏ばかり、清さんお千代さん波さんなどが火鉢を圍んで居た、衣裝つけを手傳つて居た、しづさんと松子さんが此方を向いて莞爾となさる。

中硝石の障子から・風雅な赤松引いた庭が見える、岩の樣な黥土の間から室咲きの梅が香つた。

部屋は櫻炭の暖氣と、香水麝香の匂ひが入り雜つて宛ら花の溫室へでも這入つた樣。小豆色やお納戸備衜

色の衣がちら〳〵踊つて、ブローチ、リングの輝き、高島田もあればマガレットに水淺黄のリボンを大きく結んだ、令嬢振り、皆さんのお顔は醉ふた樣に、ポーと櫻色して居る。花室とは善く云つた、實際春秋の名花が咲き揃ふたかの感がある。

憧憬と花やかなる感情が、各々の心を一つになつて貫通し、それがもう一擧一動に喜悦がほとばしる、燃えたつてる精力の火氣はよく集中した歡樂と飽和して、迦陵頻迦が舞ひ遊ぶ天上界に昇天したかと疑はれる。

座談數刻、高らかな笑聲はいつまでも〳〵絶えなかつた、若い同志が斯うして集まつてると、全で五彩の霞に包まれて、ギオリンの響にそゝりたてられる如き樂しさが春雨の降る樣に胸に沁みる、そして其れが知らず識らず電流と同じに傳はる、本當にかうした有樣は老いて再び捕へる事は得難いであらう。思へば三春の行樂餘り短きが怨めしい。何卒此心持を永久に忘れしむるな。

衝立の蔭で誰やらが三味線の調子を合せ始める、腰衣つけた、可愛い顔ひ付きたい樣な喜撰法師と、お雛樣見たいに美しい茶汲みとが、手を組みながら茫然して被入る。あゝ早く見たい、あの、彼處、もしやとみすを仰ながら、喜撰の花が茶の給仕で、かうお勝つちやんが峰さんを見上る表情！考へても胸がをどる、すると突然に皆さんから、

「鳥渡、大に振つて頂戴よ、」

「二人ともよくつて？！」

と盛んに應援の聲が掛つた。

おゝ、吾春よ盛長かれ。

○

大切の島田はそろ〳〵と亂れ初めた。

如何にも名殘惜しい、輕い哀愁を感じつゝ、今浴室を出てゝ鏡面に對した。

湯氣の香朧ろの宵である、遊び疲れて、ぐつたりなつた身體の肌押脱ひて、掌に白粉を溶きながら考へた。

私の肌は今何の被ふ處もない、而してヨルダンの洗禮にさつぱりと、六欲の皮に垢摺をかけて來た、湯上りの心地は本當に可い、けれど亂れた髮と、暫くの歡樂を放れた自分は、もしや吾青春の美を損ねては居まいかと、不安になつた、そと見やる肉はまだ〳〵衰へて居なかつた、ふくらかな乳房、うす紅さした手首、未だ〳〵少女てふ名の逝かざるを喜んだ、

思ひ切つて遊べ歌へ、人生の花一時と其光榮を、たとへば空中樓閣を畫くといつた風でも、何でも前途に種々なる希望又は、快樂を心に記すれば、爲る事なす事に興味を感じる、それが興奮劑となり、吾々の處世上の光輝となる、萬事活動すべき折柄を、悲觀の結果可惜命を縮むるなんて、厭な事、私はもつと榮ある生を招きたい、どうかして此から先、丸髷に結つても、白髮のおばこと變つても、私が島田なりし現在の心地を忘れたくない。

少女――島田何といふ可い對照だらう。少しく傾いた髷、はら〳〵と亂れ毛は私が額を撫でゝ、丁度今、晩春の空を仰いでる樣である、甘い悲しみが夢と漂ふて、花より靑葉に移る當時の季が忍ばれる、明日明後日、この髮がこはれると、吾が初島田の第一着の形は消える、惜しい實に惜しいけれど多少の印象を殘した事を感謝せねばならぬ、

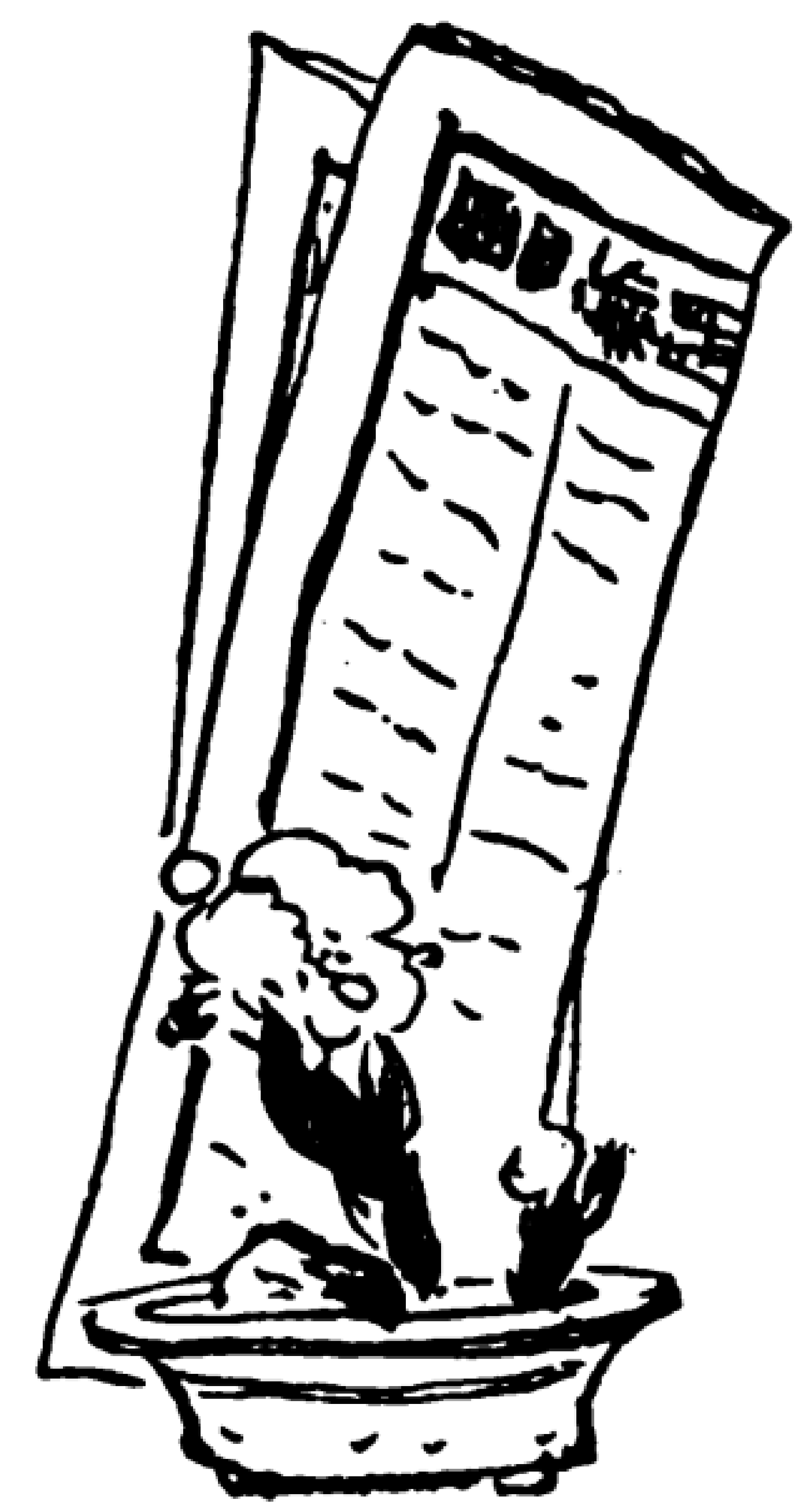
いざさらば、島田髷よお前に一度別れる、が、間もなく私は第二の髷を結び上て、又春の幸を探つて步かう、和らいだ光のあらん限りは…。

「善く遊び善く働く」とは若い人に相應した語だ、まだ〳〵私は云ひたい事が澤山あるのだか、正直な話、もう現はす事が出來なくなつた。汲めども盡きぬ谷川の水、廣大無邊の自然の懷、抱かれたる私が夢よ安かれ、

私は再び少女の讃美を續く――

北風よ起れ、南風よ來れ、わが園を吹きて香氣を揚げよ、願はくばわが園に佳き果を結べよ――と。

偶と仰げば、外の庇合には澄み渡つた寒月が大きく現はれて居た。



晩餐哲學

河岡潮風

▲避人旅行主義▼

急に思ひ立つて避人旅行と云ふものをして湯河原に來た。避寒旅行、避暑旅行は猫も杓子も之を爲す。しかし無理算段をしての避寒避暑は往々、その反對なる迎寒迎暑の結果を生ずる事がある。僕のは日常の複雜なる應接と、流行の奮鬪主義が、人間を機械的、馬車馬的にし、かへつてその活力を鈍らすものなるを考へ、寧ろ寒よりも人を避けて、別天地の別生活に、想を錬り、静かに思ひ、宇宙に書かれたる文字ならぬ文字を讀まんと志したのだ。旅行の新らしい刺戟は新らしい活力を與へる。僕は誰にでも避人旅行をおすゝめする。

暮の二十四日、都の教會には今宵のクリスマスの準備に忙しきその朝、晴れたる空に、白妙の富士の懸るを見て、新橋を出た。兩三日滯在の目的で、醫科大學の高松君が同行した。心のおけぬ友達だから別に避人旅行の趣旨に觸れない。中途で色々の故障あり夜に入つて湯河原天野屋につく。無事延着仕候の六字を大書して諸方に出した。(十二月二十四日)

▲臺所の小天地▼

午前落語界の一奇才「小せん」君が尋ねて來た。矢張脊髓が惡くて此宿に出養生してゐるのである。初對面であるが、かつて岡村柿紅君から話があつた事とて同病相憐れむと云つた次第で、舊知の樣に物語つた。同君のは原名ターベス、僕のはカリエス、原因と經過は違ふが、症狀は似てゐる。氣分に變りはないが歩け

ぬ。この一年ばかりは主に屋内ばかりに燻ぶつてゐるのだ。小せん君は會ふ人毎が御不自由でせうと云つて呉れるが、外出もいよ〳〵叶はぬとあきらめて仕舞へば、四疊半にも溢るゝ樂しみあり、決して羨ましくない。この答へをすると痩我慢だとけなす人があるけれども、その痩我慢ならぬ事は健康な人にわかりませぬと語る。僕も同感だ。それにつけても一年中臺所を天地として、殆、門を出でざる主婦の單調と、不滿とを想像してゐた僕は、之れも習ひ性となつては左程の不愉快でもなく、寧ろ、おさつの煑ころがしでも食つてゐた方がいゝ人もあるのだらう。世の中はよくしたものだと獨り心中にうなづいた。（二十五日）

▲腕白なセドリツク▼

中庭に面して三つ部屋がある。二十一號には法學博士田中穗積氏と令息、二十三號には野本海軍少將夫妻と、令息令孃各々陣を占め、二十二號は僕ら二人だ。田中博士の息、和夫君年弱の七歳、頗る怜悧、そして活潑、誰でも可愛がらずにおけない好少年である。星の眼ざし、林檎の頰、冴えた聲、奇警なる言葉、何となく評判の名著小公子の中のセドリツクを想はす。然かし僕が感服するのは、此の和製セドリツク氏のなかなか腕白な事である。野本少將の十歳ばかりの令孃に水をかけたのも、ブランコの邊で石を投げたのも、芝山から團子の樣にころがつておりたのも、吠えつく犬を棒切で擊退したのも、みな今日の午前中の出來事だ。而かもその中に云ふべからざる愛嬌があるので、事々物々悉く親愛を增す種となつた。腕白は少年の特權、腕白をしえぬ少年の將來はあまり伸びぬとおもふ。たゞ家庭の敎育がよろしいからして、忌むべき惡戯は一つもない。

午後南緣に日を浴びて、父君なる博士と語る。博士の斷片の一節に

「私は新聞雜誌に何々夫人談などゝある中に、自分の家庭は放任主義だ、思ふ儘に振舞はせてゐる。外國流だと云ひ合せた樣に述べて居るのを見てその眞意を疑

ふ。外國の家庭は放任主義どころではない非常に嚴格である。英國では荒物屋に鞭を賣つてゐて、子のある家は是を一つづゝ備へつけてゐる。何か叱るべき事でもあると、それを指さして、申し聞かせる。單におどかしばかりでなく、時には他の見る目も氣の毒な程、臀を打ち叩くのである。又た折には禁食の罰に處して二度位は知らん顏をして濟ます。腹が減れば臺所へ追ひやるので、パンとバタより食ふ物が見つからぬ。外國の美風と云ふべきであらう。下女下男迄此時はわざと知らぬ顏をして捨てゝおく。決してケチ／＼コセコセ小言は云はぬが、叱るべき時に叱るのは當然で、子供の頃にこの鞭を用ふるを忘れた親は他日必ず後悔するであらう。私は放任主義は大嫌ひだ。」云々。

この父君あつて、この令息あり。決して偶然ではない。和夫君が小さい乍ら自覺心と責任を持ち、其癖にひねくれず、眞の子供らしく、振舞ふもあながち天稟の然らしめたばかりと云へまい。かの小公子のセドリツクの如きは一脈の氣慨を缺いて、右顧左眄人の顏色を見て事を爲すの風がある。よしや善良溫厚なる紳士となり得るとも、よく計り、よく斷じ、よく進み、よく爲す二十世紀的の活動的人物にはなれまい。世の父母たるもの決して、鞭と涙の使ひ別けを忘れてはならぬ。（二十六日）

▲臺所天地は矢張不可也▽

昨夜は一時過まで、高松君と色んな話をした。凩に打ち落さるゝ木の實が、トタン屋根に鳴る音と、風のたえ間／＼に、遠く瀨の音の響くを聞いて、何とも知れぬ一種の感を催した。

早起すれば、今日も快晴。ブランコに乘れば、冬の山は搖れ動いてお早う／＼と云ひ顏。湯の宿の年の暮は又なく靜かである。

高松君は朝の間に歸途についた。小田原から國府津に出て、神戸行の汽車に乘るのだ。

急に話敵を失つて、裏庭へ杖を曳く。岩あり高さ七八尺、その上は半枚敷あまりあらう。よぢ登つて、

坐禪を組むだ樣に坐り、岫を出づる白雲と、風に動く林の枝とを見て、三十分ばかり過した。

そのあとで、讀書した時の頭の明晰さ！執筆した時の筆の速さ！全く我乍ら驚いた。こりや矢張臺所の守ばかり勉めてゐる主婦連からは賢い子が生れぬわい。

（二十七日）

▲湯あがり放言▼

▲今日は思つた儘をかきつける。

▲溫泉へ子供を同伴するはよほど考へものと思ふ。惡い事は覺えても、よい事は覺えまい。先頃も佐々木代議士の令息は上州の溫泉で、ねぢ鉢卷、腕まくりして、俠客のタンカを切る態を眞似する樣になつたとやらで、父君いさゝか閉口の體であつた。シカシもつと有邪氣な事を知る子もある。浮雲、浮雲。

▲客輻輳して、湯槽少なきに過ぐ。朝など一寸寢坊をすると、一足違ひの事でなか／＼入れなくなる。この一歩の差は多く床をぬけ出づる決心の遲速から生じるのだ。ナポレオンは戰爭で最後の五分間を耐へ忍ぶ者は勝つと云つたが、機を制するのでは、最初の五秒間に先手をつけるが勝つ。而かもその床を拔け出す如きは、その決意はホンの轉瞬の間にある。機は微に潜む。微を逸する者は、大小の事悉く人後に落ちるものではあるまいか。

▲情に脆い人は一生の中にどれだけの損があるかも知れぬ。敢て鐵面皮を奬勵するではないが、薄面皮もまた困り入つた次第だ。花嫁樣は薄面皮なるが故に家政が切つてまはせぬ。姑樣は多く鐵面皮なるが故に敬遠される。薄面と鐵面の使ひわけられるのが、世話女房の誇である。薄面皮の人々はよろしく折を見て鐵面の稽古をすべしぢや。何あに秘訣は？わけはない。心の眼をつぶつて、口の中でいろは四十八文字を適當な速さで云ひ切るまで我慢をするのだ。云ひ切る時分には事件はもう濟むでゐる。

▲宿の女將は中々人をそらさぬ上手者である。よしや噓と知つても、世辭と知つても、耳への響がよろしい。家庭の主婦は權威のあるもので、チヤホヤを卑ぶ

べきではあるまいが、夫れでも多少お天狗の駄々つ子を扱ふ術を心得ねば理窟はのけて、事實上の敗者となる恨があるではないか。（廿八九日）

▲除夜の眞感▼

また大晦日となつた。

借もなく貸もなき身は年の暮
　いでゆあびつゝ氣ものどかなり

とは高田博士が去る年の除夜吟だ。移して以て僕の今日の感じとする。

歳旦は陽氣ゆゑ、事みな淺薄に流れざるを得ない。歳暮は呑氣と云つても何となく深刻の氣を醸す。「來年こそ」と力瘤入れた人々も、靜かに考へて見ると、冷汗が流れるだらう。一年三百六十五日、眞に笑ひ、眞に事を爲したる日は少くして、また一年空費して仕舞つたと悟る時、こゝに弛緩せる人心は、一度び引き締められるのだ。除夜の心を忘れずば、其人はその翌年の除夜に回顧して、よくやつたと自ら許す事が出來やう。でなくとも、後悔する事もあるまい。

僕は今年不思議なる奇病にとりつかれて、思考、執筆、讀書、演說以外に、あらゆる行動を束縛されたから、比較的に多くの事を爲し、こればかりはやゝ思ひ通りになつた。禍を轉じて福とするとやら、世上病人も少くなからうから、自讃乍ら此事を書とめておく。湯からあがつて寢る前に、床の間の鏡に顏をうつして見た。アッチユー。これが廿四歳の僕の見收めである。

鐘鳴れば二十五となる悲しさに
　鏡にうつす二十四の顏　（卅一日）

▲元日は活動始め▼

昔、槍の名人は元日から槍の稽古をしたといふ。また大倉喜八郎君は、金儲けに元日晦日無しと云ふ主義で屠蘇を酌むでゐる最中でも、よい買物の話を聞けば杯を投じて驅け出したといふ。男にあれ、女にあれ、聊かでもズバ拔け様とする者は、此の精神がほしいで

はないか。
此故に僕は、持論として、二日事始め、三日元始祭とするならば、元日を四方拜「活動始め」と云ふものにしたいのだ。この樣な譯から僕は元日から活動した。箱根屋に滯在中の坪谷水哉、小島精一の二氏と馬車で熱海へ行つたのだ。高田、坪内、奧田の諸博士を訪ひ共に記念寫眞などうつして歸ればすでに黃昏。
宿では、乃木大將が來られたのを、主婦が夫れとは知らず、斷つたとてガヤついてゐる。旅順を開け渡さした猛將も、湯河原の宿屋の一間に手古ずつたとは、逸話の好材料たるを失はぬ。

（四十四年一月一日）

▲湯治場のコメディ▼

某新聞の理事の某代議士が、近所の某館に來泊と聞き込むで、夜暗く、かつ不自由な身體なるもおして訪問すると、代議士倉皇ひおりてきて、お世辭たつぷり、今は食事中だ。後ほど君のお宿へ伺ふから、一寸御引きとり下さいと、押し出さんばかりにする。口と手とが反對だから、いさゝか煙に捲かれて歸つた後、いくら待つても來ない。よく調べて見ると、新橋あたりのと御同伴とやら。さては〳〵！！
矢張其夜である。
代議士が來ぬなら橫にならうと蒲團をとらせた處へ「御免」と、威權ある聲づくり。誰かと思へば隣室の大久保利和侯である。不意の事とて大いに驚いて、ソレ片づけろ。脇息をと、ゴッタ返す。一書生の部屋へ、侯爵の夜襲、これも湯治場なればこそ。
侯は小一時間四方山の話をして歸つて行かれた。

（二日）

▲百年の計と女▼

今日は歸京すべき日だ。馬車を備ひ切つて小田原まで行かうと云ふので、早朝宿を立つた。同行は坪谷氏と小島氏。
宿の女中や何かは四時半からおきて仕度をして吳れた。迎と送とに力を注ぐは宿屋政策の妙を得たるものであらう。すべてもの事には始と終とが大切なもの。

小田原までは車上の行程約四里。磧の石を嚙む仇浪水車、里の童など見つくして山路に入る冬嶺に孤松秀で、碧空澄み、コバルトの海見えつ、隱れつ。變化をきはめて心地よき初旅であつた。

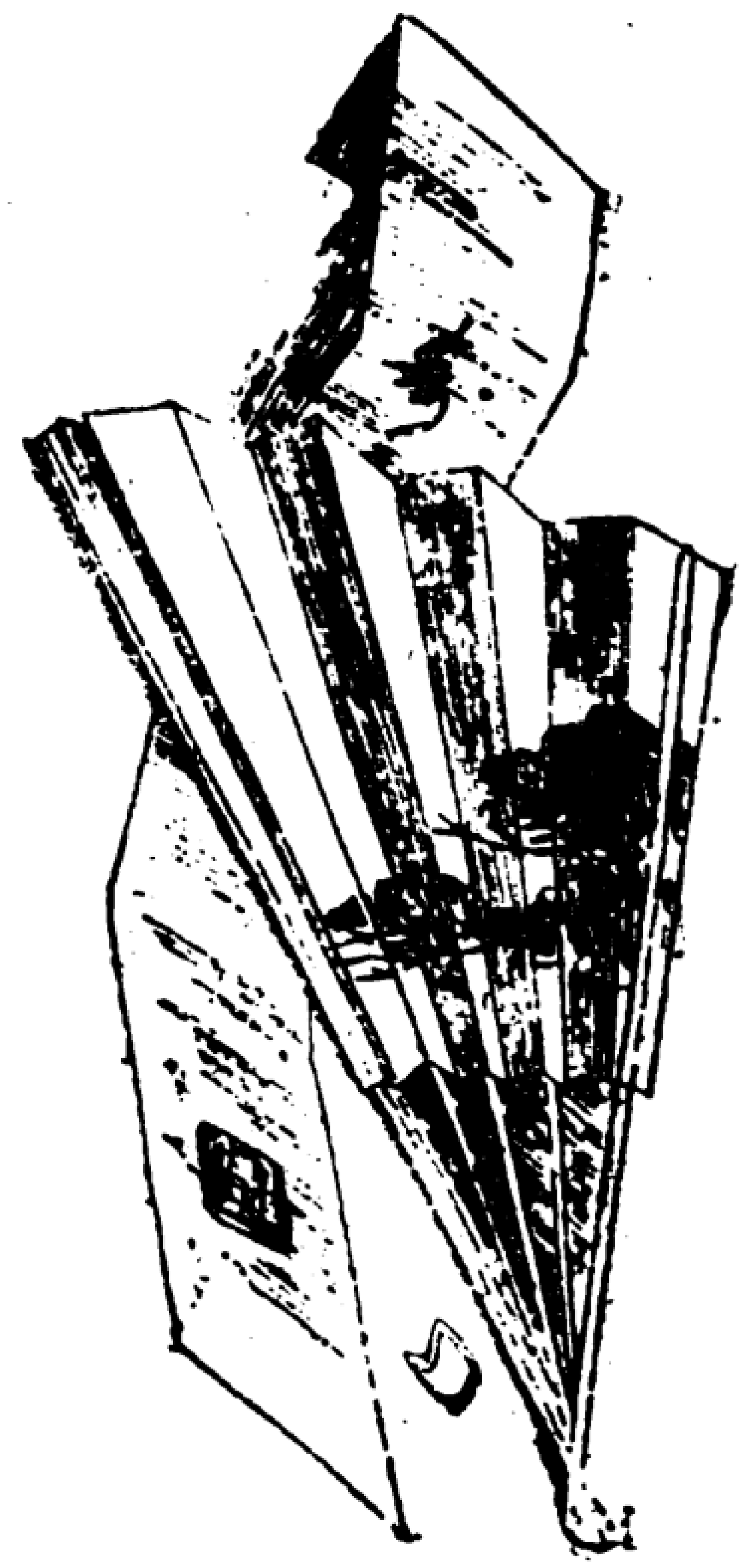
坪谷氏は山林經營の趣味と利益多き由を語り、小島氏は百年の計としては子孫訓育に如かずと言ふ。僕おもふに、財を利し、富を興すは男の役。子孫をして豚犬に終らしむるは、寧ろ女の役ではあるまいか。忙しい職にある男ほど家庭の團欒と子女の教育にたづさはる事が出來ぬ。留守居勝ちの不平をならべる女、子供の世話を邪魔がる女は、進取的活動的の男の配偶者にはなれぬではないか。



こんな事を考へながら四時間の道中無事に小田原へついたのである。（三旦）

海濱の正月

濱路



東天紅と曉告げる、鷄の音も、もどかしう日頃、寢坊な私も、今日のみはいと早う、急ぎ床を片づけて、目出度こゝに明治四十四年の初春を迎へた。

手拭片手に脊戸の、井の傍に立ち寄つた、若水汲み上げ手水をつかつて、ふと見下す水の面、水鏡にくつきり映る高島田、やゝ亂れてか、鬢のあたりの黒髮、三つ二筋後れ毛が顔にかゝる、ちよつと梳き上げて母樣に斷つて、濱邊へ行く、ざく〳〵と砂踏みならしながら、磯邊にたつてじつと、海の面を眺めた空には一點の浮雲もなく、今日はさすが年始だけあつて、沖合遙かの漁舟も見えない、照らす旭日に射られてか、金色の樣な女波男波、渚に寄せる浪靜かなる、瀬戸の海、浦曲につゞく、こゝ須磨の浦、はるか向ふの淡路島は、はつきりと浮き出して、墨繪の如く、

つと目をそらして見上る連山、高取、ひよどりに、續く山々、思はず襟許かき合はせて、遙かの東都の方を伏し拜むだ、大君の御代萬歳を祈る心、次は天地八百萬の神々に、今日のみは几帳面に、拍手の音高く、うや〳〵しく三拜した。

あまりいゝ景色なので、うつとりなつて、……？

急に急ぎ足で家に戻ると、もうちやんとお祝の支度ができて母樣が待つてゐらつしやる、今日ばかしは、丁寧にご挨拶する、爺も眞面目でいつてる、目出度お雜煮を祝ひ納めて、姿見の前へ坐つて、お化粧に約一時間程かゝつて、紅白の絹紐打ちかけて、一毛亂れぬ、高島田匂ふばかりの白梅の花簪、高まき繪の塗り櫛根元深う差し込んだ、金簪がきらりつと光る。

茄子地色に若竹の雨傘模様、花菱つなぎの唐織の帯、緋縮緬の長襦袢、金の帯止め、これは父様母様からの、贈り物、押し頂いて着る、二枚襲の振り袖が、しつくり合つて、手を上げる途端、はらりつと紅の、襦袢の袖が見えて、我ながら美くしい、すつきり出來上つた令孃風、鏡の前にたつた。母樣はたちつ坐りつ、眺めてゐらつしやる「ほんとに濱さんのお仕立……よく出來てゐますよ……」といつて下さる。

全體この衣裳を仕立やに、頼むとしやうと仰しやつたのを、無理に私が四日かゝつて、仕立てたのだから、母樣の滿足より、私の方が餘程大滿足だ。

これからお年始の禮廻りをしなければならぬ。母さまに、「今宵は歸宅つてきませぬが、ご心配遊ばさぬやうにねえ、實家で泊まつてきます……から」とお斷りして玄關へたち出る、手活けの松に葉牡丹を、あしらつた花瓶に緋の段通黒塗の貴名受にはゝや、年始状が幾通か這入つてゐる、ちやんと揃へられた今下したての履物、何だかかう新らしづくめで……

絹子さんは「お姉さま……お早くお歸りなさいませ……？」

と藤と一緒に停車場迄、おくつてくれる。

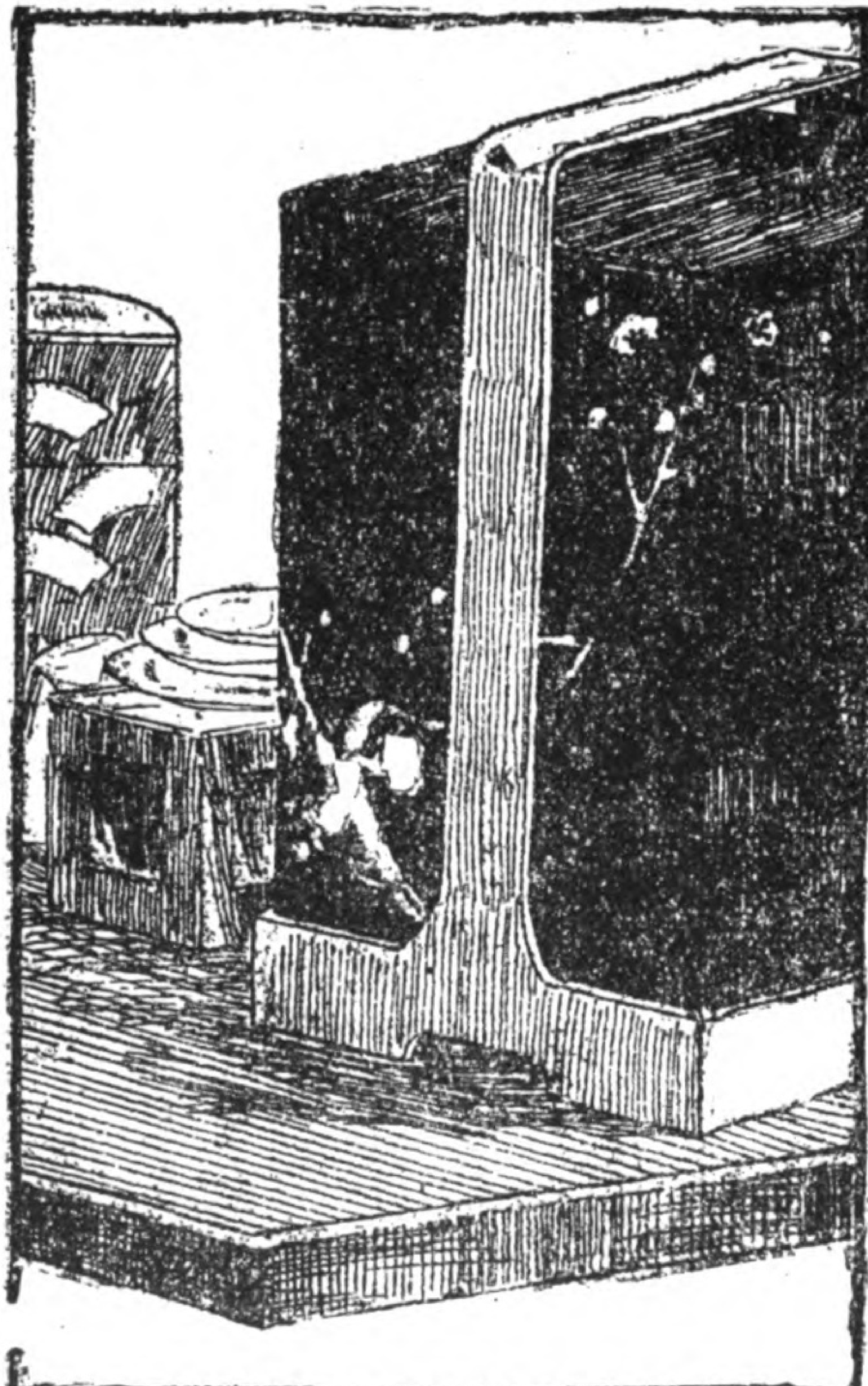
まだ春淺くふく濱風、肌えに沁む、須磨ステーションも、別莊に行く人、本宅に歸る人で、賑はしい、すぐ、汽車に搖られて、……神戸による心算だつたが……後廻しにして、……。（春咲く花の梅田より……と謳はれた、浪花の梅田へつく、さすがこゝ名にしおふ、

關西一の大都會たる梅田驛は織るが如き有様、人なだれ打つ間を、くゞりぬけ市街電車に乘る。車窓より眺むる町並、日の丸旗を交叉なし、幔幕引き廻らし、七五三繩門松の飾り美くしい、まづ一番にお針のお師匠様の許へ行く。

「まあお濱さん……珍らしい方が見えて……さあ〱あちらへお通りつ……？」といろ〱仰しやつて下さるのを、お年始で、切角お休み遊ばしてるのを、お邪魔しては……と思つて、お玄關でお話してゐると、すきなお茶に結構な、組菓子、先程から電車にゆら

れてか、咽喉が一度にお茶を、請求する、早速お茶碗とつて頂く、ぷうんと高い玉露の香、座敷でかるたでもとつては……とすゝめて下さるを、さきを急ぐ身體故、と辭退して次へと急ぐ、琴の師の君の許で晝食、頂いて……あちらこちらでお菓子いたゞくので……まるでお菓子貰ひに出掛けてゐるやうだ。

一番終に宗匠のお宅へあがると、まあ今日が初釜だ、いつも二日だつたから、その心で行くと、今年は、元日にしたと、仰しやる、おやく\だ、



「お濱さん……御機嫌よろしう……」「まづ明けまして……お目出度う……と禮の如く、年始のお挨拶する。久方振りなのでどこへいつても大持てだ、宗匠は、まづ一服、と無理に、席をすゝめられるので、仕方なくお次へ坐る。先生は「お濱さんが、大きくおなりで見違へてしまふた、村雲尼公殿下の、御前へお茶の、お給仕においでだつた時分は、稚兒髷姿の、稚いお子だつたが……はや高髷のお令嬢におなりだ、ほんとに早いものだ、自分もそんなに、年老つたか知ら……はゝゝゝ？」、なんて奥様とお二人で、仰しやる、ほんに宗匠のお頭りも、奥様も大分に、

お白髪が殖えたやうだ、御述懐遊ばすのも、無理はないと思ふ……？ふとお手前役の、お琴ちやんを、見るとまあ、吃驚りした、私が教授になつてる、時分は、振分髪の七八つ、たけに餘る振りの袖、重さうにお茶道具のお運び、しておいでだつたが、ほんにはや稚兒姿、美くしい今年、二七の少女振り、……私の顔みて、ニッコリしながら、帛紗さばきも、いとあざやかに、茶筌持つ手もさら〳〵と、一服と、差し出される、……お加減結構と、會釋する、あまり上田さんや、遠山樣、徳堂さん、なんかゞひつきりなしに、お話し遊ばすので、お相手して、放心人力車を、待たしてあるのを、忘れて催促うけた。

おゝ今日は紋日、急ぐのも道理と、うなづきつゝ、皆樣がせめて、夕餐を食べてお歸り、といつて下さるをお辭退して、お手前中をお斷り中坐して、門に出づると、退屈相に車夫の、欠伸一つ……？

お待遠だつたのねえ……？」轅棒上げる、と皆さんが、一樣に、左樣ーッならーウ」……あゝ、勿體ない、……おくつて頂いて……）まあ私あんまり、あわてゝ……お道具の銘伺ふのも、お釜も拜見しなかつた、只目についたのは、應擧の松鶴の圖と、子俵、書院の飾り、割蓋の水差しに、手瓶のあつかひだけ、あまり間がぬけてる、と恥かしかつた、膝の上に載せたる色紙、短册、先生お自詠の、和歌が認ためて、あるのを、頂戴いたのだわ。漸うにたそがれ頃、神戸につく大急ぎで家に入つた、父樣、繼母樣にも御挨拶する

こゝで樂しく夕餐のお膳に、向つた店の者が、眞面目に祝詞を述べたてる。ほゝと輕ろく受けて、門に出ると、お向ひの船井さんも、お隣りの十合商店も、皆門戸鎖して、休業神戸目拔きの、元町もさすがしんとして、只人力車や馬車の、往來のみいと繁い、折から吹きくる一陣の風、おゝ寒い、と思はず首、すくめて家に入る、店の者は夕食すむと、すぐ何處かへ、いつてしまつて、父樣かあさまが、猫相手に、新聞なんか見て、ゐらつしやる、私も所在なさに、初刷の雜誌なんか見る、明日は初賣だ早々床に入る

二日

まどろむ、と思ふと早、初賣の聲に、夢破られて、急ぎ飛び起きた、店ははやも美はしく飾られて、華やかなる瓦斯、電氣、客待ち顔に、つるされて、店の者は急がしく、客に應答してゐる。

すぐ初風呂に行く、さすが元町は商賣所、道々は何れもはなやかなる燈の下に、初賣の景氣賑はしう、小走りに湯屋に入ると、天井一杯に子供の好きさうな紅提灯、年始年末にやつた、祝儀の金高記した、びら隙間もなしに、張りつけてある、浴室の障子あければ

はつと立つ湯の香り、まだ早いので、入浴して、ゐらつしやる方も三人四人、手早くあがつて、家に戻ると、電燈も消えて、もうちやんと、店もしめてある、初賣がすんだのだ。



皆お湯から歸ると、大勢でお雜煮頂く、屠蘇の機嫌の廻り加減か、今日も店の者は、羽織着流し、三々伍々、遊びに出掛ける、お化粧して・・・・今日一日遊むでお歸り、と仰しやつて下さつたが、今宵松方樣の、歌留多會、是非參りたいので、又參じます、と初やに送られて、この度は電車にのつて、我家に歸る。

とお午餐前、お飯食べて、絹子さんと追羽子する、

今日はお年始廻りは妹がしてくれたので、助かつたあちらでも、かあちんこちらでも羽子つく音、さしも舊暦は去年より、お廢止となつたので、頑ぐな爺さん連も、日の出るお正月を迎へる樣になつた。

向ふからお宮さんがやつてきた。「あらお濱さん……まづ明けましておめでたう……」「今年も相かはらず、御交際を願ひます……？」「ご同様ですわ……？」

と二人いひ合つて、顔見合はせて、「おほゝゝゝ」

「これが初笑だわ……」と、またもニッコリ、ことしお宮ちやんは、私とおなじ二九の春迎へたのだ、小紋縮緬の二枚襲に、袖珍の丸帯胸高に、髪は愛らしい大桃割れ、お揃の福壽草の花簪、紅い手柄がおぐしの間から見えて、美くしい、こんな潮の香高い所に、似合はぬお色の白さ、と弓ちやんが羨やんだ位の、

須磨名打ての美人、お家の稼業もこの人のために、二割餘計にご繁昌、とやら……いはゞ看板娘……どうしてどうして、十八と見るものは、ありやしない

まあ二八の花少女、あゝこの人も萬年娘かも、しれない……、あゝ萬年娘――わたしも萬年娘で暮したい

「お濱さん追羽子しませうか……あら弓ちやんが、きたわ……教盛塚まで行きませうよ……ねいゝでせう……」正月早々から、墓詣りでもあるまい、と思つたが遂々、弓ちやん宮ちやんに、誘はれて行く、歸宅たのは、四時頃夕餐をすますと、さあかるた會だ

ご招待狀を眺めては、獨りではゝ笑んで、母様や、絹子さんに迄笑はれて、了まつた、大島絣りの二枚襲に、小紋ちりめんの羽織を、着流し後歯利休に砂ふみわけながら、ぶぢに送られて、お玄關に立つと、若奥様やお宮ちやんが、待つてゝ下さつた、十疊の廣間に、案内せられた、床には探幽の幅がかけられて

つり花瓶には寒梅の一輪差し、扁額は故伊藤公の筆……さすが大家は違つたもの、來合はしてる方々は、大方は知らぬ方が多い、明るい電燈の球を數へて、

ゐると君子さまのお引合はせで、こゝに改ためて、初對面の挨拶が交換される、お茶が出るお菓子が銘々の前に、並べられる、と奥様は皆様お揃ひ遊ばしましたから初めませう、とこれからかるたの戰ひが、初まつた、陣立てがどう狂つたものか、味方は一度ならず二度迄もの敗戰、顔が熱くなつてきた。羽織ぬいで、又候陣立整へてゐると、

皆様…何もございません
……が？」と奥様お心盡し
のお馳走の數々、よばれて、
又もや戰鬪開始、津山様の
若奥様、蟲も殺さぬやうな
優しいお顔遊ばしてるが
　どうして〳〵、手練の早
業わたしの十八番の、三笠
を槍玉ならぬ白魚の指には
ねとばされてしまつた。
　お宮ちやん孝子さんはいら
いらなすつて、やつとのこ
とであちら方の、少女を捕
虜に及むだので、意氣銷沈
の味方も、やゝ景氣回復し
て愈々火花を散らしての、
　戰さ振りこゝを先途とた
たかつた。



二見ヶ浦

其甲斐あつてか、差引一度
こちらが上の勝ちになつた
　夜もやゝ深更に及んだ
ので、蜜柑の汁で咽喉を、う
るほしながら……それ〳〵
供に迎へられて、
　歸途につく、折から打ち
ならす須磨寺山上の鐘の音
さつと吹きくる一陣の風。
あゝ面白かつた今宵のまど
ゐ、綺麗だつた今宵の戰ひ。
昨夜の勞れか、うと〳〵し
てゐると、「よく寢坊なすつ
てねえ……？」と弓ちやん
が、ほゝ笑みながら枕頭で
　まじ〳〵と眺めてる、ほ
ほ弓ちやんに寢相見られる
のは今日が初めてぢやない

けれ共……なんだか、

氣廻りが惡るい、母樣も人が惡るい、寢むでゐる所なんか、何だつてお通しなさつたんだらう、着物を替へて手水をつかひにと、出るとまあ大變な霜だ……

よくこの寒いのにわざ〳〵霜柱踏んでの、弓子孃御來臨だ謝せずんばあるべからず……か。

大急ぎで朝餉すまして身仕舞手早くして、お宮ちやんを筆頭に外三四人お招ぎして、この二日程はお目にもかゝらずまた家にもゐぬので、……皆んなして、

高蒔繪のお重箱のものを平げてしまつた。

トランプ、闘球盤、ピンポンなんか持ち出して散々、遊んでゐると朝から催してた、雪氣の空はひとしほ怪しう途には雪花粉々、と降つてきた、さあ嬉しい、一同勇み出して、これから須磨寺山上へ雪見と出掛け樣といひ出した。弓さん宮さんの義兄樣までも、

引つ張り出して……？義兄樣お二人は同窓の友だからご一緒にそれ〳〵の蛇の目の相合傘、五人組は皆思ひ思ひの聲出して行く。牡丹雪は絶えず降りしきつてゐる。漸う山上に達した、見渡す限りは白銀の光り、

「あゝ絶景だ……」と、義兄樣はさした傘、すぼめて思はず境内の板間にうづくまる。

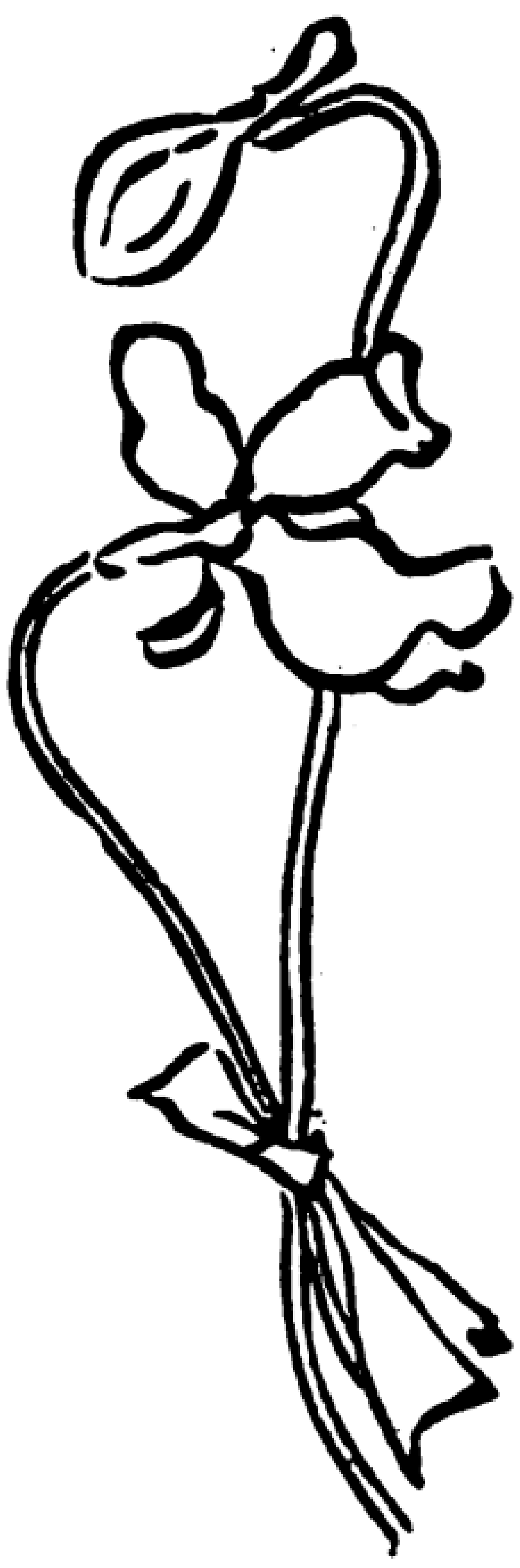
お宮さんはつもつた傘の雪をはらひながら、

「佳景だわ……」といふと、「全くよ……佳景だわ絶景だなんて……」と、兩人とんだ所で文法の、理窟をいひ出す。お松さんと藤とが持參した、お鮨しを食べるやらお菓子ほゝばるやら……して？

ゴーンとつき出す、入相の鐘の音に、一同打ち揃ふて、歸途につく。

夜に入れば、卍字巴と降りしきる雪、折々お庭の若竹につもつて、ばさつとおちる音のみ、

徒然のまゝ書店からついた、女學世界の封切つて讀んでゐると、九時半のタイムがなり渡る。母樣に挨拶して早々に床に入り枕邊の、燈フツト消せば忽ち黒闇、暗々……として……私は平和なる夢路につく。



花のあつまり

都の錦

此處は小石川原町の鶴香女塾、四十五歳の今日迄獨身で押通して來て後指一本指されなかつたのみか現在では敎育界の信任を集めて居られる村田女史の懇篤なる薫陶を受けながら妙齡の人六人孫嬉々として此處に樂しい生活を送つてゐるので御座います。

チンチンチンチンもう四時、ガラガラガラ格子の開く音、どなたかのお歸りだなと思つていると、「只今」と云ふ威勢のいゝ三保樣、風に吹れて來たので頰を林檎の樣にしてゐらつしやる。「先生も皆樣もまだ？　隨分お遲いのねえ。」つておつしやりながら鈴の樣な御眼をいとゞお張りになる。お年は十七、丸顔だがお脊はスラリと高い、フサ〳〵と黒いお髪をマガレツトに深紅のリボンを一文字にかけていらつしやる、お袴を取ると、紅入友禪縮緬の帶をきちんとお太鼓にお結びになる、派手な紫矢ガスリ銘仙のお袖の丈はたしかに八寸五分位は有る、なんて可愛いゝ御樣子なんだらう、此方は塾中の最年少者ではあるけれども一番無邪氣で皆から可愛がられていらつしやいます、學校は學習院、お宅は京橋邊の豪商、なにしろ一人娘で御兩親があまりに御大切なさり過ぎるとかで、それではかへつてかけがへの無相續娘の心身を害する樣になると云ふこの大身代を一代でお築きになつたと云ふ御祖父樣の御心勞から其敎育者を選びに選んだ末、此處の先生に御託しなされたのです。

其中に皆樣ドヤ〳〵とお歸りになる。

四時半、お八ツ、こんなに大きくなつても此時が一番一日中で皆樣樂しい時、知らせのベルが鳴ると、語

りつ笑ひつ皆食堂に集まるのです。今日は青柳の栗まん一つに桃山二つ、それに見事な蜜柑が一づゝつく。お茶を啜りながら、通學途中や學校で起つた四方山の御話が出る。

多賀樣「が私今日電車の中で眞實に吹き出し度くなつたのよ」つておつしやる。皆が「どうして？」つて伺ふと「だつて今日登校がけよ、電車の中で私の眞直に一高の方が一人乘つて居らしつたの、其方がね初めの中は小聲でしきりに寮歌らしいものを歌つていらしつたのよ、それが切通し邊迄行くと、だん／＼興が乘つていらしつたものと見え、聲はだん／＼高くなるし、足でバタ／＼調子を取り出したの、私ふと其足を見ると、どうでせう、靴の先が底と上皮と離れてぱつと大口を開いて其處から五本の指がすつかり出てるんですもの、まさか吹き出す譯にも行かず全くどう仕樣かと思つてよ」つてお話なさる。皆樣も之を伺つて大笑なすつた。

多賀樣御年は十八、第三高女に御通學です、お宅は埼玉の豪家、兄樣がお一人居らしつてこの方も京都に於て帝大獨法科に御在學中です。

今度は由良子樣、此方のお宅は横濱の大きな貿易商です。學校は虎門で外交官夫人が御志願ださうです。來年邊御卒業の筈

お脊の高い體格の立派な方、お髮はいつもローマかマガレットにあげて納戸色カシミヤの袴裾長におはきになり小さな佛蘭西製の靴先輕氣にお歩きになる姿は隨分人目を引きます、そして又お色の白い事はすき透る樣なお顏に深い笑くぼを二ツお寄せになりながら流暢に會話をおあやつりになる處等は外交官夫人としての貫目は十分におありでいらつしやい升、この方の今日學校で有つた滑稽話、少し尾籠になりますがこんな西洋風を眞似する學校等では隨分起る事だらうと思ひます。

Ｋさんとおつしやる由良樣の級で評判のそゝつかしやの方が床にお入になつていらつしやる處へ外から戶をコツ／＼とたゝかれたのださうです、Ｋさん何程そ

そつかしやだからつて間違へるにも程があらうにいきなりカムインとやつたので他方の方も餘程急いでいらつしつたと見え其答を聞くが早いか、入つて行らつしつたんですつて、Kさん怒るにも怒られず大まごつきだつたさうです、此話がすむと又も食堂は破れる樣な笑聲、いつも此時はこんな話で持切つてお腹の皮をよらすのです。

これから夕食迄三時間程はピアノの練習をなさる方、お花を生けて御覧になる方、編物をなさる方本箱の整理に他念無い方等樣々です、けれど明日の日曜をひかへているので書物を繙く方等は一人も居らつしやいません。

今晩は土曜會、七時から先生の



お居間に皆集まるのです。

お室は八疊敷、一間のお床の間には水盤に、南天と寒菊を生けたのを置かれてある、掛物は鐵舟の書一方の隅に置かれた黒檀の書棚には和漢の書がギツシリつまつている先生は青いラシヤをかけたお机の側に黒紬のお被布を召してよく肥えたお體を黒モスリンの大座蒲團の上にどつしりとおのせになりどんな時でも絶えた事の無い笑をニコ〳〵たゝよはしていらつしやるお髪はまだ黒いけれど短くざん切に遊ばしてゐらつしやる。

今日は貞操と云ふ事に就て一條の訓話があり後は自由遊びで好き嫌ひ、指環送り、世界一週

なんて云ふ遊戯が始まる。

鶴子様御自作の好き嫌をお讀上になる、この方は栃木で屈指の豪家、御兩親は元より八十に近い御祖父母様迄お壯健におそろひになり五人の御弟妹を持つ一番のお姉様とお生れになつて和氣靄々とした圓滿な家庭に人となつた方です、お年は十八お脊はあまり高い方でなく丸々とした悪氣の無い方、いつも滑稽をおつしやつては塾中を賑はしていらつしやるのです。

作氣の少しもないお腹から丸出しのお聲でお讀み上げになる、「一番、先生は春(下女)のほくろがすきと云ふ二番、妙様、黄金佛が嫌ひだと云ふ、三番、三保様、鶴(御自分)の櫻島の大根然たる足が好きと云ふ」なんて云ふのばかり、それに一々(と云ふ)をつけてお讀みになるので丁度三世相でも讀む様で一しほ滑稽に聞える。

指環送りではあてられた人が何か一つ藝をする事に定める、誰も彼も逃れ様として大さわぎ、とう／＼白羽の矢は妙様に立つた。皆やんやと云ふ大喝采。

妙様は子爵家のたつたお一人の御息女とお生れになつたのですが、可愛い子には旅をさせよ、と云ふ御兩親の御主義で斯は此處に入つて居らつしやるのです、御性質は一を聞いて十を知ると云ふ位の賢さにかてゝ加はへて同情の深いほんとに女らしいやさしい方、村田先生の御信用も第一等です、お年は十九で學習院の選攻科一年に御在學です、それに又御容姿の美しい事は學校でもあまり類の無と云ふ程あつて御姿なり御顔なりほんとに申分の無位です中でも其御目、二重まぶちの切長の黒味勝で星の様にかゞやきのあるまなざしでぢつと見つめられると誰だつてもチャームされて仕舞ひます、東都の或一部の軟骨男子連は妙様の毎日學校の往復に乘つていらつしやる電車を花電車なぞと呼んでる相です。

妙様困つてもぢ／＼して居らつしやると皆様是非獨唱をとの御希望なので終にお立ちになつた、妙様ピアノは一つ橋の分教場で夙よりお學びになつて居るが聲樂の方はちつともなさらなかつたが一日ピアノの教師

の米人が試に歌はせて見た處が、天性の美聲に、其表情巧なる等專門家も及ばない位全く天才だと云ふので其時から評判になつたのださうだ。

今晩お歌ひになつた曲は（ホエレウイルユー、カムエゲン）と云ふ短いのだつたが、すき透る樣なお聲に情をたつぷり含ませてほんとに堪らなくよかつた。

三保樣なぞ曲の終つた後もあまり感心して今更ながらと云つた樣な顏付で妙樣のお顏を見つめて居らつしつたのは可笑しかつた。

樂しい會の終つたのは九時頃先生にお寢遊ばせつて御挨拶して皆室に下る。



床に就きかけに多賀樣、鶴樣、三保樣等の年少者が、家庭の圓滿家庭の圓滿）つて云ひながらキャツキャツとおもしろがつていらつしやる、何の譯かと思つたら、先刻お勝樣が手紙を書いて居らつしやるのを氣を附けるとも無に氣を附けてゐたら、前の方は如何な事が書いてあつたか譯らなかつたが家庭の圓滿をはかり度と迄お書きになつて其後が一寸お出にならなかつたと見え口の中でしきりに家庭の圓滿家庭の圓滿といつ迄も云つていらつしつたんですつて、きつと戀しい旦那樣にでもお上げになるんだらう、それがをかしいとのこのさわぎだつたのです。

お勝樣は他の人とは少しわけが

異つてこの塾に入つていらつしやるのです、お國は先生と同じ島根縣お宅はなかなかの豪家ださうですお年が十八の時縣立の高女を卒業なさるとすぐお嫁きになつて御良人と二年ほど同棲なすつたさうですが、どうも常識が足り無いとあつて、御良人のお里のお父樣との御談合の上暫く此處の先生に仕込んでいたゞくためにおあづけになつたのださうです。

この方一人ミセスだものですからやゝともすると皆の冷かしの中心とおなりになるのです、お年はまだ二十一にしかならないのに奥樣となると責任は重くなるしなにやかとほんとにむづかしい、皆が時々ダンスの話等しているとお勝樣も處女時代の自由だつた生活をなつかしく思出して（私も隨分カレドニアンだのランサースだのつて云ふと夢中になつた者よ私のセットする時のスタイルは隨分評判でしたの皆が敎へてくれなんて云つて來たものですわ）なんておつしやる事もある。御自分の姿が評判だつたなぞと眞面目でおつしやる樣な點がこうして先生のところへ來ていらつしやる原因かも知れませんが、性質はほんとに正直で却々親切氣のある可愛氣のある方ですから皆にお勝樣お勝樣つて云はれていらつしやるのです。

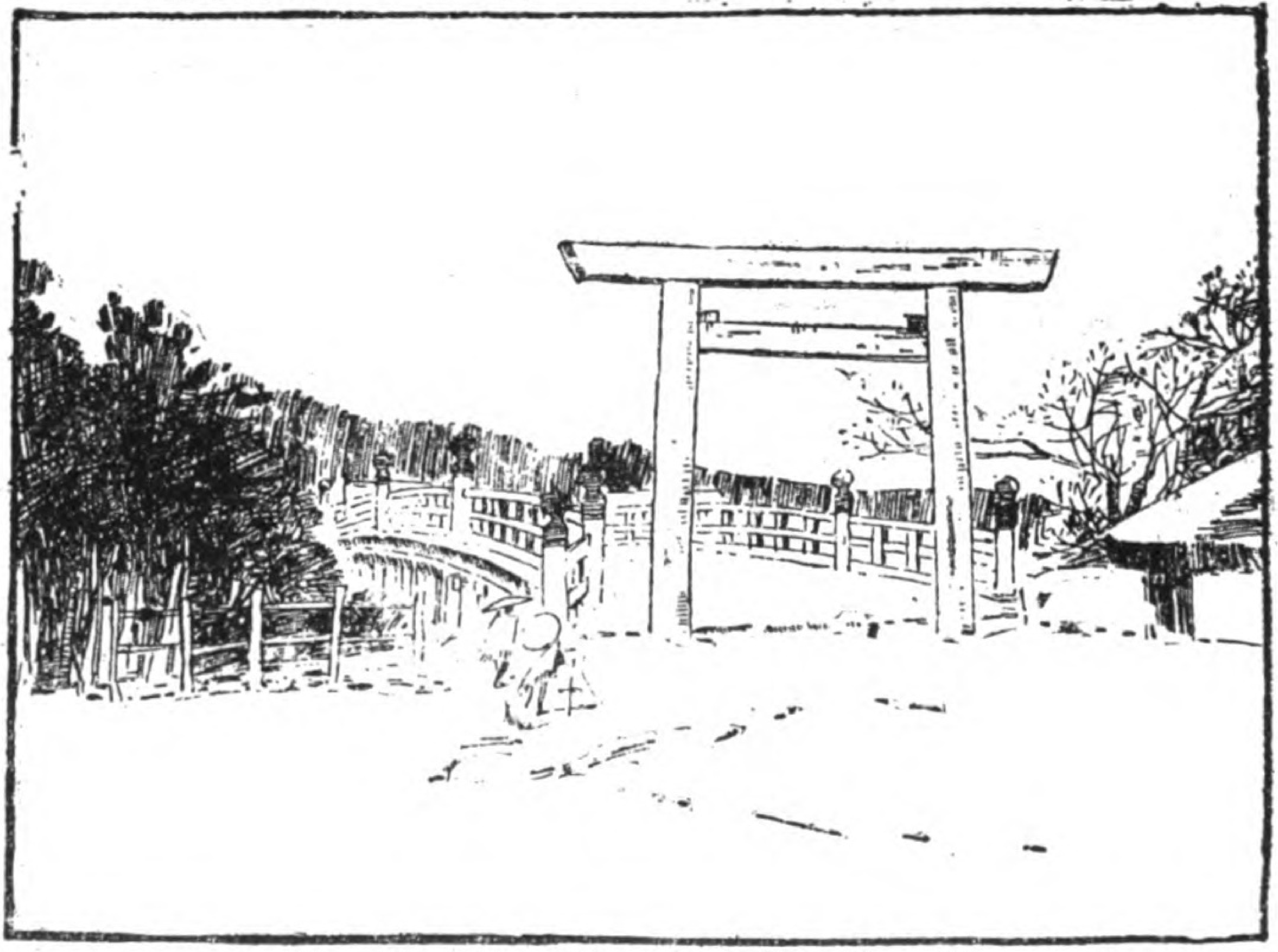
日曜、この日は休日だからと云つて少しでもゆつくり等と云つて床に入つてる人はありません、樂しみぬいている外出日ですもの、却つて平日よりは早起な位お室のお掃除を分業的に大勢でどし／＼濟まして仕舞つて朝飯をいたゞいて仕舞ふと皆御化粧やお仕度で大さわぎです。

一番に三保樣晴々しいお顔をいとゞいそ／＼なすつて「ぢやア皆樣お先へ行つて參ります」つて手をおつきになる「おやモウお出掛？澤山お母樣のお乳を召上つて行らつしやいまし」つて云ふと「まア」とおつしやつてニツコリなさる皆矢ガスリお召縮緬の小袖に藤色紋羽二重のお被布、この方は一たい紫がゝつたものがよくお似合になる。

今度は襖かスートと開くと春が手を付いて「アノ妙子樣お屋敷からお車がお迎へに參つて居ります」と取

次ぐ、妙様はお仕度が出來上つて何か机の上を整理遊していらつしつたが春の方をおむきになつて「アッさうですかどうも難有ふ御座いましたつておつしやつて會釋をなさる、妙様は誰にでもこの通り、女中共迄妙様でなければならない様に噂するのも無理ではない、妙様もすぐ「皆様お先へ御免遊ばせよ」つておつしやつてお出掛になる。

スラッとお立ち遊ばしたお姿、今日は又特別なお美しさ、漆黒のお髪は一糸亂れぬルイザ巻になすつて、左にダイヤ入りの飾ピン一



伊勢内宮の宇治橋

本おさしになつた、小豆色地立縞お召縮緬のかさねに白茶地に墨繪に葛の模様有るゴブラン織のおみ帯胸高にプラチナの時計の鎖を目立ぬ様に左の胸にちらつと見せていらつしやる、ハラリとおくれ毛おかき上げになる左手に閃めくはダイヤ入のエンゲーヂリング、眞實に振い付き度様な御様子だ。

今日は妙様特別にお樂しみなのだ、それは先週の木曜日に海軍中尉のお兄様（未來の脊の君）が佐世保から歸へつて入らつしつたのだもの、つつしみ深い方だから、露程だつて色にはお出しにならない

けれど、御心中ではどんなに今日の日を待遠しく思召ていらつしつたでせう。

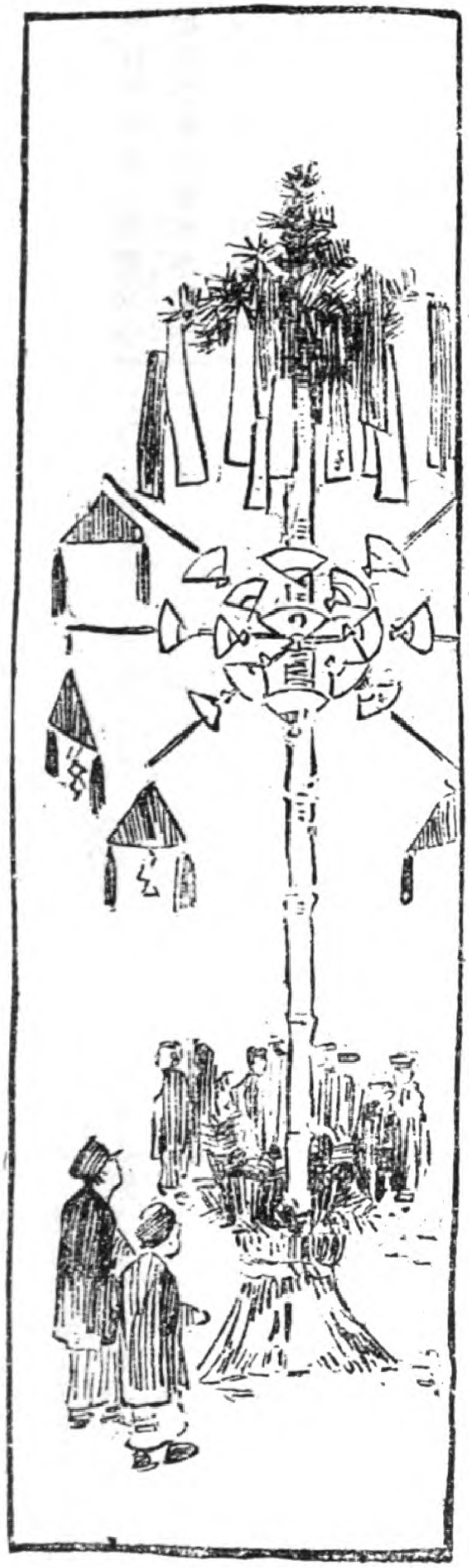
由良樣もつゞいて麹町のミスリードの宅の茶話會にお出掛になる。會は午後一時からださうだが日頃極懇親にしていらつしやるのでリードを助けての接待役にお頼まれになつたとかで朝から行つていらつしやるのださうだお髪はローマになすつてむろ咲の白ばら一りんおさしになりお召は藍鼠色の紋お召お羽織は花色紋縮緬と云ふ出たち、由良樣日頃鍛へた腕前を今日こそと思召てお振ひになる事であらう。

多賀樣は兄樣をお誘ひになつて大森の伯母樣のお宅へ、兄樣には支那料理私には十二ヶ月のお汁粉が待つているんですつて」とおつしやつていそ〳〵とお出かけになる。

お勝樣と鶴子樣は東京にも近郊にもお知り合の方が無いので、いつも休日には先生がどこぞへおつれになる今日は午後から卅の會へ、

皆樣お出かけの後のお室は、糸くづ一つ見あたらない樣にかたづいている、机上の一りんざしのむろ咲の紅ばらや、ヘリオトロップの香一ぱいに立罩めて、今迄の賑かさに引更へ主待つ間の花のさゝやきさへ聞える樣にひつそりとして居る。

▲諸國正月風俗――小田原地方では　正月十三日から十六日まで、竹を立て、眞中へ扇を三つ丸くし、中へ表はカカメ裏は瓢の假面を付け、中心より左右へ竹を縛りつけ、其先へ橙を連れ、先へ扇を下げたものを幟のやうに立てます。





奧様方のさま〴〵の理想觀

みちぐさ記す

私に理想をはなせつて？今更？まあ、あきれた花子さんね。

あゝさう〳〵御免なさいな時子さんのは御かたづきになつたときの立派な御理想を只今は實現なされつゝある所でしたけ。

はあ何とでも、あなたこそ學校出のほや〳〵のあこがれ式の理想時代とはちがつてそれこそ大家の御門もくゞつて御いでの事ではあり定めし立派な理想やら抱負やらを御もちでせうから今日はそれを拜聽したいものね、ついでに其まゝ女學世界の懸賞にうけ賣りしてさきがけの功名を得ますわ。

まあ、さつきのかたきうちなの？ 二三年あはなかつたうちにめつきり御口がお惡く御なりなすつたのね、それは口も惡くなりませうよなか〳〵御つき合には一骨折りしましたからね、此點に於てはミスの花子さんよりは一段上だと自覺して居りますの、オホヽヽヽホヽまつたくですわ、實際理想の何んのつて口ではよく立派な事をいつてゐて其實如何はしい方も多いのですもの、やつぱり方々あるいて其地方々々の奧樣方とお交際するのもまた自分の修養の導きともなりますでせうね。

なか〳〵花子さんおさとりのいゝ事。

戲談はぬきにして私の參考と覺し召して奧樣方の理想でも聞かしていたゞきたいわ、矢張どこも同じの威勢がりたい主義が理想でせうね。

皆ながさうだとも斷言出來ません、其人の性により

けりですからね。

丁度私共の近所に入らつした方の奧樣が其威勢がりやの一人でしたよ、私共御互に幾分心の修養につとめつゝあるものには到底解せませんよ沒常識といふのでせうか衣裝氣狂とでもいふのでせうか、まあ何にしても其方の理想は一口に申せばうつくしい衣裝さへ着て居れば事足れりとでもいふんでせうよ。

「いつも着物にこつて流行におくれないのが私の理想よ御金があれば皆着物にするわ」

つてね、まアあきれるではありませんか、それですから朝から御自分の御つくりに浮身をやつして入らつしやる始末、旦那樣や御子供衆の事はほをりばなしです朝から呉服屋が出入しましてね、玄關に日向ぼつこの猫までが呉服屋が來ると「ニャッ」と奧へ知らせるつて位ですからね、オホヽヽヽ、あとは推して知るべしでせう。わかりもしない女中をつかまへて今の新柄はどうの流行はどうの色合はと詳しい御說明、昨日いらつした何々の奧樣の召し物は一世紀もあとのものきつと娘時代のを其まゝだらう、何々の會にいつたら、流行おくれの色合が八分通りだつた帶はどうの、桃山はどうの光琳はどうの御批評、せわしいのにわかりかねる女中はしようことなさに唯へい〳〵と氣のない返事心は御臺所に働いて居る樣な始末だものですから、奧樣じれつたがつてねすぐ神經を尖がらしなさるんですつて、それだけならまだいゝんですがね、あとですぐさま、何を愚圖々々して居るの、まだかたづけがすまないのかへ、意氣地がないね若松屋へ連れてつてあげるつていふのに、と槍玉を御くわしになる、有難迷惑なのは女中ばかり。

「人の事ならきゝたし見たし、兎角己が事隱したし」。

つていつも女中が歌つて居る相ですがね實に眞理ですわ、それでも奧樣ちつともお氣がおつきにならないんですからね。

それで居てなか〳〵の威張りやでね宅の主人はどうの高等官はどうのつて飛でもない所へ高等官風を御吹かしになるので出入の誰彼皆眞實をつくすものがない

相です、少し見すぼらしい人でも來ようものならさつそく一昨日來いといつた樣な鹽梅で、あとで鹽をまかせるなどほんとに沒常識の甚だしいものですね、ですから女中共に對しても愛憎に偏して居て一つ御氣に召と其女でなければ夜があけぬとおつしやるんですつてしかし其んな方はまたあきやすいものですからね却つて女中共は表裏をこさへ果ては井戸端會議の仲間へ話題を蒔くのですよ、近所の神さん達・はそれこそ聞きたがりやばかりですからたまりません針少棒大の譬にもれな



くなりますわね、何でも御金の出納の事までもね吳服屋の拂ひが第一だなんてね、いくら法性寺入道式の肩書ある旦那樣だつて收入には限りがありますもの內輪には火の車が轉つて居る相です、それにしても鼻下長の旦那樣ですよ少しも御小言は御いひにならす唯奥樣の言葉に諾々たるものですつて、奥さんの人格も茲に至つて零ですね。

女中の理想が振つて居るではありませんか。

「私夫もつなら茲の旦那樣の樣なやさしくつて着物を作さへてくれる人をもつ

わつてね。

△

私のよく御つき合して居た今ひとりの奧樣はまた見あげたものよいつもね、人樣は私の理想はどうのかうのと實に立派な事を御言ひ遊ばしますが其裏面は汗の出る樣な御振舞なさる方があります、私は出來ぬ事を理想とするのが大嫌ひです、空想は申したかありませんもの、たゞ自分の力で出來るだけの事をして其內に修養もし　勉強もして參り人に後れない樣にして參るのが私の理想です」、つてね、其方はまた其通りの實行家なのよ、それは



（那珂川の雪景）

それはよく御務なさるんですよ女中相手によく御働きになつてね家內の整理は勿論ですが園藝やら養鷄やらね、つまり無駄な時間が少しもない樣につてね雜誌はもとより新刊物は御見逃しになりません、それこそ御自分の理想通り其まゝ實現して入らつしやるんです。

夕飯の料理に自分の丹精になつた水々しい御野菜の手料理を嬉しがつて食いてくれる主人の顏を見るのが何よりの樂みだつてね、今時の若い方にはめづらしい位ですよ。

それですから自然身體の運動にもなりますからいつもいき〳〵して血色のいゝ事、それこそ

眞に皎々たる胸憶が現はれて居るといふものです、つまり自然美ですねさして目だつて御化粧もなさいませぬが晴れの場所へ御出でになつても少しも見劣りはしませぬ人工的のよりもいやみがなくて數段と上ですそして何となく心持ちがいゝものですね。

それでまた御ひまには小鼓を御習ひになつてね夕方旦那樣の謠曲の御相手といふ、ほんに良い畫題ではありませんか。

凡てがそんなですから、出入の誰彼と申すまでもなく近所の神さん達も、よく出來た奥さんだ、つて申しますよ。



雪の銀閣寺

△

人は百種百色でね見榮も外聞もあつたものでない、御金さへ貯ればいゝ、主義の方もあります、つまり御金を理想として居る方なんですよ、あまり突飛で今時の者の考へられない樣に思はれますよ。

日常の副食物其他凡て何でも御金がからぬ事を心がけて入らつしやるんですそれは主婦たるものゝ心得べき一つには相違ありませんがね身分相應といふ事がありますわね、それにいく

ら價が廉いたつて品の悪いものは何にもなりません却つて末々は不經濟ともなるのでせうがねそんな先々の事は少しも御考にならないらしいんです、出入の魚屋八百屋などはいつも、なれた廉いものだと思ふと、これは淺井さん向だよ、などゝ笑つて居るさうです、悪いたつて廉くさへあればいいんでさあ、て申すんですつて、隨分極端な方ですよ、それからあぬか常も御家には御病人の絶えた事がないさうです、頭かくして尻尾かくさぬ蚤の様だつて近所の者は笑つて居ますさうですがね、萬更病人をほつて置くわけにも參りますまい、いくら經濟家だつて根と葉との區別が御つきにならないほど無敎育な方でもないものをね、女學校も歴どして卒業して入らつしやる相ですがね、何が動機かはしりませんが、御自分では經濟が上手だつて御自慢なさるんですつて、片腹いたいわけね。



毎日精力を御遣ひになる旦那様ですもの、さうさう毎日まづいものばかり召しあがつてはつゞきませんわね、つい召し上つて御歸りなさる事は當然ですわね。

時分時の來客に對しても絶對に知らぬ顔して入らつしやるものですから旦那様が御氣の毒だつて女中が申して居ましたよ、それでも御玄關に手土産らしいものでもあると萬更でもないつてね、隨分現金なやり方ですよ、いつでしたつけ

か或人がね他へ屆けるものがあつたので菓子包位の風呂敷包を玄關に置いて尋ねた處下へも置かぬ饗應振りに其人聊さか面喰つてね、まさか他へのものを、こちら樣へといふ事もならないでせう、そこ〳〵にして逃げ歸つたつて、あとで奥さんどんなにこそ悔しがつて居らるゝかしれないつて、口惡やが申して居ましたよ、

しかし無趣味極まる奥樣ですね。

△

其れからあの有名な勝子さん、あなた覺えて入らつして？

はあ、あの私共より一級上のクラスで以て一番ハイカツタ方でせう、今でもあり〳〵と見える樣ですわ、學校時代には隨分立派な理想を御持ちでしたのね、何でも外交官にかたづくんだつて身裝は隨分派手なものを召して英語にもなか〳〵御熱心でね、交際に於てはクラスのクインだつて自覺して入らした方でしたね。

人の運命つてわからないものね、あの方も御卒業後方々から申込みがあつたさうですがね皆自分の理想に合はぬとかで、長いとか短いとかいつて居らしたんですつて、御自分の思考通りだと思へばまた先方に其氣もないといつた樣な破目で、其うち年は段々取るし、といつて思ふ樣な口もない、といふ樣な始末、まさか老孃で一生終らうといふ考はね、いくら理想を通そつたつて、そうまでの決斷も出來ませんわね、とう〳〵我を折つて此春中學の先生へ御嫁付きになつたのよ、丁度私共の居りました土地の中學でしてね、勝子さんにも二三度逢ひましたがね、隨分地味な暮し方をして入らつしやるらしいんです、いくら我を折りなすつたつてねもと〳〵しかたなしといつた樣な結婚ですから御良人と思想の衝突とか何とかでね、あまりスキートホームでないとかつて伺ひましたが、身から出た錆の樣なものですが思へば御氣の毒なわけね。

それから見るとね、いつも勝子さんに輕蔑されて入らつした年子さんねあの方など口では立派な理想だ何だつて御言ひなさりはしませんでしたが、何でも立派な方に御嫁付きになつて趣味ある家庭を作つて入らつ

しやる相ですよ。
眞實口ばかりの立派な理想は何にもなりませんわね、花あり實のある理想でなくてはね、御互に美しい情緒が動いて居ればね、ぶまな目にも逢はないかと思ひますよ。
まあ私とした事が、地方の奥さんがたから飛んでもない御友達に及んで、しかも惡るいのばかし御話しいたしまして花子さん食傷なさりはしなくつて?オホヽヽヽ。
いゝえ、どうして〳〵、多くさん伺つてほんとにいゝ事しましたわ、人の振り見て我が振り直せつて言ひますものね、どれだけ私の心得になつ



たかしれませぬ、時子さん感謝いたしますわ、
花子さんの樣によく聞いて下さると私も滿足しますわ何も人樣の惡るい事は吹聽したかありませぬけれどもね、花子さんなんかはこれからといふ時ですから消極的かはしれませぬが御互に參考ともなるかと思ひましてね、しかし貴女のを伺つてうけ賣りします所を之ではうけ賣りもなりませんのね。
其かはり私がうけ賣ししますわ、貴女が出したんだろつて奥さん方がうらみなさるでせうか。いえ、どうせ沒書だから大丈夫ですよ、オホヽヽヽ。

自覺せる醜婦の心理

村雨女

隠れた悲しみ

私は性來感情の強い上に、負け嫌ひで、醜容色でムいましたので、それが爲に私の感情は益々強くなつて來て、僻んだ拈くれた女になつてしまひました。些細な事の爲にでも非常に強い刺戟を受けるので、我と我が身を持てあますことが度々ムいます。例へば他の方が談話したり笑つたりして居なさる處へ、私が行くと遽に默つてしまはれたりなどする時がムいますが、そんな時には、私のことを云ふて笑つて居たのではあるまいかと疑がおきて、不愉快な感がいたします。私の心が僻んでるからだと我身を譴めてみても、不愉快な感はなか〳〵消えません。恁んな時、誰方か機轉きかして、わつさりと他の事でも談話をつゞけてくれたらどんなにか心持が好からうにと情なくなることがムいます。これも私の容色の醜いために、自然こんなに心が僻んで來たのだらうと思ひます。

負け嫌ひだ傲慢な後には、きつと自分を反省する性質がムいます。ですから私は他人の長所や短所を見ると、半ば無意識的に我が身を反省して見て、相對照して居ります。そして或時は無上に得意になつてるかと思ふと、すぐ失望して、自分ほど不束ない者はないと思ふ時がムいます。殊に得意になつてる時に『私は醜容色だ』と氣が付いた時の悲しさ……急に深い淵の底に沈んで行く樣に感じます。

皆樣が京都にお越しになつたら、屹度尼僧さんを澤山ご覽になるでせう。そして非常に美しい方と非常に醜い方とがあることにもお氣がつかれるでせう。私のお友達で、或る事情のため京都の尼寺に修業して居られる方のお話によると、その醜い尼樣の多くは、皆自分の醜容色なのを悲んだ末、尼樣になつたさうでムいます。私は我が身に比べられて、慘ましい樣な感がしてなりません。私も幾度か尼法師にならうとしたか解

りません、唯餘りに此の世の趣味を知りすぎて居た爲に出家することが出來ませんでした。

私は幼い時からいつも「お前の樣に醜容色では……」と兩親から云はれて居りましたから、幼な心にも自分は醜容色だと信じて居りました、そして他人が醜容色な人の話でもする時には、子供心にも恥づかしくて、穴へでも這入りたい樣に情なく感じました。外の事なら誰にも負けずと勉强をしますのに、幾ら私が藻搔いても齒がみしても私の顏は變へることが出來ません。

娘心がついてからの苦悶は、同じ經驗を持つて居なさる方の心の中で泣いて頂くより外に、何とも申し上げ樣がムいません、何彼につけて自分の醜容色を嘆かぬ日とてはムいません、ふと眼醒めた夜半の悲しさ、夜着の襟かみしめて泣いたことは幾度でせう、晴着こしらへた時の嬉しさに引きかへて、姿視鏡の前に立つた時の悲しさはどんなでせう。昔、鏡を砕いた醜女の心が、しみ〴〵と思ひやられました。氏なうして玉の輿に乘らうなどいふ野心は一寸もムいませんが、せめて他人に厭な感を起させないだけの顏になりたいと希うて泣きました。「容色々々と云ふのは僅の間、それよりも精神が第一ぢや」と云はれて慰められて居りました。「私は男の奴隷に生れて來たぢやない、男の爲に裝ふ女を笑つてやらう」と我と我が身を勵ましたが、ああそれも束の間の慰でした。胸の底に抑へられて居た「醜容色」の聲が、不意に出て來て暴風雨の樣に荒れ狂ふ。

何と云ふても女は矢張り容色が第一ですもの、先日も教會の牧師が來られて、教會内部のお話の末「精神ぢや魂ぢやなんて云つたつて、矢つ張り容色の好いのが先に賣れますからねえ、魂は腐つてゝも顏が好かりや嫁に取るからねえ」と慨嘆して居られました。「あゝ僞善を裝へる耶蘇教信者よ」と云ふてやりたかつたですが、事實は矢つ張り事實ですもの、お嫁入した後でも醜容色なために、平和な樂しい家庭を作ることの出來ぬ例は、到る處にムいませう、あゝ醜容色な女は唯死を待つより外はないのでせうか。

ゴーリキーの短篇の中に恁んなのが厶いました。一人の醜女があつて、今まで誰からも愛せられたことが無いのみか、男からは怖がられて居たほどの醜容色でした。度々隣りの書生さんに頼んで、ラブレターを書いてもらつたそして遠い處に居る戀人から來た手紙だと自分で想像して、毎日樂しんで持つて居るといふ節のものでした。どうした憐な女でせう。同じ女と生れながら、なぜこんなに不幸に生れたのでせう、運命はなぜ恁んなに殘酷なんでせう、神はなぜ恁んなに不公平なんでせう。お金と結婚したい男子はあつても、醜女と結婚したい方は厶いますまい、どうしたら良妻になれるのでせう、如何にして賢母となるのでせう。



恁んな苦悶を明白にお友達に云はれませうか、親や兄弟に云はれませうか、若い狹い傷み易い處女心の一つに明け暮れ悶へて居るのですもの、悲觀に陷るのも、厭世に陷るのも少しも無理はないでせう。世の人の思ひ遣りのない、醜女が、せめてもの慰めの悲嘆の淚や厭世の

樂しみをまで非難する。
何で人中が厭なものですか、容色が好かつたら、恥づかしがりつゝも得意になつて歩きます。然し乍ら、鏡に寫つた自分の醜い顔を思ひ出しては、どうして人中に出て行く氣になれませう、我知らず遣瀬ない涙が流れてゝ、せめては人里離れた深山の庵か、磯邊の海人が小屋に住みたいと空想に憧憬れて慰められて居るばかりでムいます。

慰め

世の中の人が私を顧みてくれなくても、慈悲に富んだ眞の神樣があつて、私を愛しみ給ふと敎へられた時私の心は非常に感動されました。唯信ぜよ、疑ふ勿れと敎へらるゝまゝに、幾年か敬虔な思を以て神と基督とを讃美し此の日此の夜を安らかに守らせ給へと祈を捧げました、僅な心の罪までも非常に怖ろしく感せられて涙と共に罪の許を希ひましたが、あゝそは若い女の空想で作らへた神でした。私とは何の關係もない神でした。私に取つては神は苦痛の重荷となつて來ました。多數の信者も、神を信じた態をして、半ばクラブか寄所にでも行く樣な氣で敎會に行つて居ります私は再び慰なき荒野にさまよひ出ました。

人に感情がある故に、恁んなに悶へ苦しめられる、一想此の世を夢と思ふて、無情の尼僧にならうかと幾度も思ふてみたが、あゝそれも無駄でムいました。尼になるには餘りに此の世の趣味を解し過て居ります。

こんな淋しい世の中で何に慰を得たら宜いのでせう私は勉强と趣味に慰を得て居ります。

勉强して新しいことを覺える嬉しさに、外のことは一切忘れて居ります、勉强は岩間を洩る泉の樣につきざる慰を與へてくれます、私から勉强を取り去られたら、もう死を願ふより外はムいません。

文學の書を讀む時には、なつかしい先生や、お友達に逢ふたやうに思ひます、離人や騷客の涙に勵まされたり、文學者の温い同情に慰められたり、或時は人世には深い意味が潜んで居る樣に驚かされて、幻のやう

な一道の光明をあたへられます。それよりも、もつと嬉しいことは、美しい空想を養ふてくれることです。我を忘れて恍惚と、夢のやうな境を辿つて行く時の樂しさ、皆樣も屹度御經驗が厶いませう。

自然の美しい景色を視ると、私の浪立つた感情は柔げられて、靜かな柔い悲哀に包まれます、そして屹度、お友達が戀しくなつてきます。然し乍らその悲哀の中に、言ふに云はれぬ快感と慰とを得て居ります。私は月夜などに、靜かな湖が光つてるのを見ると、その中へ這入りたくなつて仕樣が厶いません。

繪畫や音樂や、高尚なユーモアーなどにも少からず慰を得てをります。



然しながら、一度都會の生活をしてきた私には、種種々な欲望が起つてきて、苦しめられます、また幸福なお友達が羨ましくなつたり、悪者が勝つて善い者が負けて行く此の世の中の矛盾が悲しくなつたり、私の爲に心を傷めて居られる母樣のお顏を見て悲しくなる時などには、早速西洋史を繙いて見ます。太古から、幾多の民族や英雄が興つて、榮華を極め、殘虐を恣にしたが、私が讀んで行く束の間は、皆かげらうの如く滅んでゆくのを見て、大きな氣分になつて來ます。泣いた者も怒つた者も、富に誇り美貌に誇つた者も、し

ばしの夢と消えてゆくのを見て、此の世の果敢なさに慰められて居ります。

さりながら、悲しさ遣瀬なさが、こみあげて來て、暴風のやうに荒れ狂ふ時は、あゝ自然も歴史も文學も何の役にも立ちません、唯誰も居ない處で、小兒のやうに大聲あげて、心行くばかり泣きたう厶います、泣いて泣いて泣き勞れたら、胸の暴風は收まります。

あゝ涙こそ醜女の眞の慰でした。

▲諸國正月風俗左義長――越前福井市にては、正月四日火祭りとて各町の入口に左義長及び太鼓小屋を建てまして、青竹に男兒は書初め、女兒は縫初に作りましたものを結び付け、夜になると、若者等は其の太鼓小屋に集つて太鼓を打ち乍ら

「長や〳〵、長のなかにお松さんと御幣さん、來年もおんなさい」

と歌を歌ひ、七日に至りまして此れに火を點じて燃やします。



未來を樂む處女

文子

今朝の寒さは、ほんに厳しう御座います、などと云ふ婆あやの聲を聞ゝ捨てに、戸外へ出たのは、未だ薄暗だつたけれど、殘月の光に筒井の滸り、おく霜の色さへ眞白に見えて、水汲む女の吐く呼吸が、凍つてしまひさうに空氣が重い。まあお若い方つて足袋も召さないで、とちよこちよこ婆あやがやがてきた。寒かあないよ風の子だもの、と云ふと、オハヽヽヽと仰山に大笑ひする。こんなに大きい聲お立てゞない、皆様がお起きなさるからと、手で制しながら、二階を見上げると、燭が漏れてる。もう起きたのかしら、誰方だらう、林さんぢやあないかしら今日試驗があるものだから、勉强してるに違ひない、氣の故か頁を繰る音がするやうだと、聊か氣にかゝる。新呼吸をやつて、勝手へ行くと又も婆あやの十八番がはじまる。曰く、お若い方は羨ましい、當番だつて苦になさらないから。成程彼樣によぼ／＼になつては私達か羨ましいだらう。聞くにつけても、年寄にはなりたくないものだ。里芋の皮が剥き終つた頃、千村さんが起きて入らしつた。長さんはもう當番になつて入らしつたの、私朝寢すぎてすみませんでした、何うしても貴女の早起きには叶ひませんです。と、滔々降参なすつた。ホヽヽヽ私勝利者ね、學科だと仲威張るんだけれど。それはさうと、二階で御勉强なすつて入しやるのは誰方と聞くと、何時と目を圓う。今朝も暗い内から。ホヽヽヽ誰方もしませんのに、却々お嫉妬なさるんですね。あら嫉妬ぢやあなくつてよ、今朝たしかに燭がついてたの、と云ふと、あれは私よ、髪が結へないで一時間も掛つてしまつたの。道理でよく出來ましたと冷かしてやる。やう／＼溜飲が下つた。朝飯後千村さんと、お琴のお復いをする。松竹梅は、間違つてばかり居て人柄が惡いから止めにしてしまつた。

人形の着物へ火熨斗を掛けて八時半登校す、第一時間は英譯で苦しめられた。一時間の午休みに、裁縫室へ行つて人形の着物を縫つて居ると、皆さんが寄つてたかつて批評なさる、運動家で文學好な長さんにも似合はぬ手すさびよ、などと仰しやる友も二人や三人ではない、其樣に私は武骨者？と反問してやると、いゝえだけどと口籠る。だけどでは矢張武骨なんだらう、私だつて女だもの、情もあれは熱もある、見掛は何うか知らないけれど、弱いと云ふ女だもの、女らしい處はある筈だと心中大に威張つて居ると、長さんようと覗き込んで、あら可愛ゆい事。歸省のお仕度ですね、と仰つたのは懐つかしい文學の友千代野さんであつた、何うしてつと無意識に問ひ返すと、妹御さんへの御土産にするんでせう……、よく當つたでせう、としみ／＼と友禪メリンスの中形を見つめて入らつしやる。はづかしさに、私の顔はぱつと眞紅になつた。嗚呼何うして、内職の手すさびだと思つて下さるお方があらう。私の慈母、私の家を知れる人は、私が寸暇を割いて賃仕事して居ると知つた

ら、定めし驚きなさるに違ない。自己の主義とは云ひながら、眞に人竝ではないと思つた。下校の際、仕立上げた可愛ゆい着物を持つて、ミスカーリン宅へ立寄ると、ゴイが尾をふり〳〵足元に纒る。玄關の鈴が鳴ると、直に笑顏を見せるカーリンさんが今日は待てどもまてども出て入らつしやらない。

何うしたのかと、奥を覗けど影も形も見せない。誰か取り次いでくれさうなものだと、傍を見廻すと、見た事のある制帽が、三つ釘にかけてある。あら、今日は間の惡い處へ來た、誰も出ないのを幸、このまゝ歸らうと思つた處へ、老婦が誰方樣でと例の手をもみ〳〵同じやうな事を云つてる。あゝ長さんで、遂お見反れました」と云ふ。毎日〳〵見反れない事はない。今日はおけいこで御座いますか。いゝえ一寸お目に掛りたいの。左樣で御座いますか、先生は只今來客中ですから少々お待ち下さいませ、御書齋へ入らして、と云つてさつさと奥へ引込む。

仕方がないから、上履きを突かけて、廊下傳へに行くと、應接室の話し聲がよく聞える。早く私もあの位に英語が話せればよい、と視線を反らすと、三人の學生を對手に、カーリンさんが圓卓を圍んで頻に會話をやつてる處。幾つかの目球が、ちろり此方へ輝く。視線と視線がハツシと出逢つた。狼狽てゝ一禮して二階へ上つて、ほつと書齋の椅子にもたれて、小さくなつていろ〳〵な事を思ふ。家事の時間に、建築について和洋の利害を問はれた時、盛に其折衷を主張した自分も、今の失敗で日本造りの硝子戸はつく〳〵嫌になつてしまつた。と同時に机上の空論と云ふ事を悟つた。今更のやうに室中を見廻す。英雄ナポレオンの母の畫像と、キユーピツトの置物とが一番目につく。折柄女中が人形箱を持つてきたので、仕立てたばかりの美しいお召を着せて帶までしめて一行李の中へ入れる。これも遠からず萬里の異郷へ贈られて行くのだと思ふと、妹でも奪はれるやうに、氣がぱつとしてしまふ。また二三枚材料を受取つて室を辭した。彼の學生は歸つたと見えて、玄關には私の、、クツばかり主人待顏。カーリンさんに會はずに歸るのかと下りた時、長さんと妙にアクセントをつけて出て入らしつた。人形着物サンクユーと仰しやる、話し掛けられるとドギマギして逃れるのが私の常なので今日もすぐ中座ばかりのグードバイ。傍から見たらさぞをかしからうけれど、子供だものかまふものかと、馬鹿に子供氣取で門を出た。可愛ゆいレデイーと口ぐせのやうに仰しやるのも、強ち侮つてではあるまいと、肩を聳かして道を急いだ、今日買つてきた筆のしづくを先生にお目に掛けると、讀んでも良いとの仰せ。嬉しくつて〳〵本箱へ入れたり出したりして見る。本の殖えるのは何より樂しみなもの。殊に獨力で買うた本は一入の光彩を放つて見える。

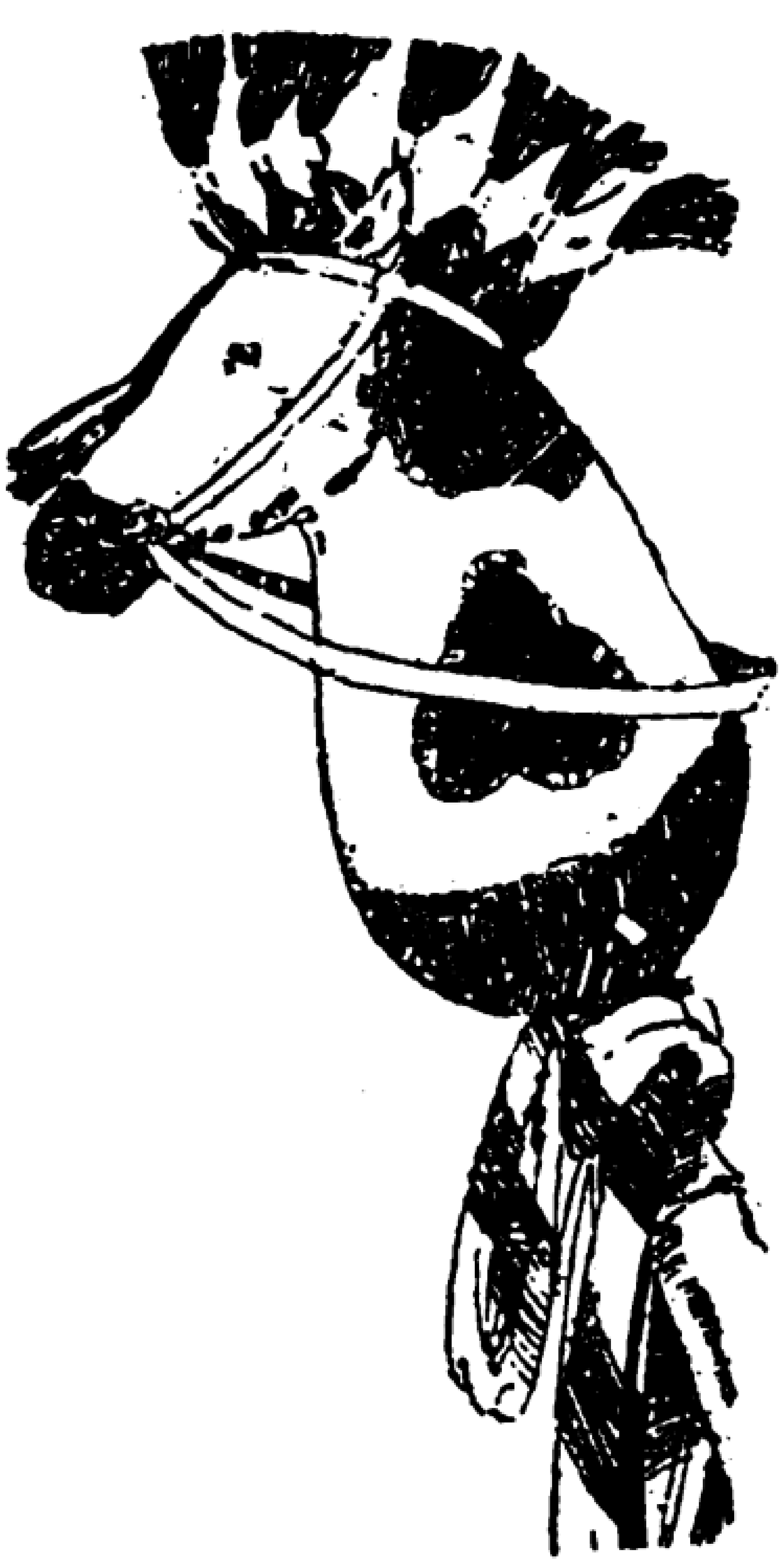
お化粧道具には金錢を惜しまず使つても、本一册の代價を儉約する方の氣が知れない。實に惘然に堪へぬとでも云はうか。夕方皆さん食後の散歩に庭へ出られる。私も雪月花手にして、讀みながら庭を歩くと冬の神樣が、大手を擴げて襲つてくるやうに肌が冷つく。倉の向ふで又私の批評でもして居るのであらう、進取的の人は違ふはなどゝきれ〳〵

に聞える。

室へに入つて、燈をつける時、つく〜故郷懐つかしく母様恋しくほろり落した涙。それも友の荒き足音に消されてしまつた。三人机を列べて一時間は無言。鉛筆を走らす音さへ五月蠅さい。諸習も終へて友に床を敷いた。私は縫ひかけた縮入があるので、それを縫ふ。何時やら小さき友が、具さんは、工風するのがお上手だと云つたら、有る方ならそんな工風も出まいけれど無いからだ、と云つたお方があるさうな。成程御尤なお判断。永き四年の通学中絹物着た事のない私だもの。否一人前になるまで決して着ないと強情張つた私だもの。前途の光明未来の幸を、共に明して楽しむ友を持たぬかなしさには、人の驕慢を拉ぐべき、武器を持たぬ。同じ流れの水とならばそれまでだが、勝気な私は無念でく〜わけもなくないた。ないてないて果は自分の弱點を悟り得た。せめてもの心やりにと、手文庫深く秘めたうつし繪をとり出して心ゆくばかり眺めた。

今春、母様が無理やりに撮らせた己がうつしゑを……。三枚重ねのすらつとした襟で肩の邊りから、帯が少し見える邊。一番気に入つて撮れたダイヤの光つて居る指は私のではないやうな気がする。彼人から……否伯母さまから賜つたのはこれである。学生たる私は、またネン〜なる私は、これを平常光らせてる権利がないのかしらと左手を見つめた幾度か取りては見つ、置きては見つゝ嗚呼この私こそ遙々江田島まで行つて、暖かき肌へにすがつて居るのであると、得も云はれぬ得意に二三度キッスして又ふかく〜秘めた。決して他人には見られまじと。夜更て音する風もなく、世は恰も私のために沈黙を守るやう。海山へだつ二人の姿を世に出して下さるは伯母様と母様であるといとゞ感涙を禁じ得なかつた。物事辨へぬ田舎娘のこのまゝではさぞや世に立たん夫君の心引かるゝ事であらう。いでや母様の仰せに従ひ学び卒へた時には、都の御館とやらへ物見習ひにゆかうゆかう、と楽しくもまた案じられる。無心に運んだ針は早やわがために筒袖の衣を縫ひ終へた。これを着る私はまだ若い。

夜々の夢は、百花咲き匂ふエデンの楽土に飛ぶのである。



樂みのまとゐ

愛らしき顔

山形　阿部英子

納戸地に大きく、紅葉の模樣のある二枚重ね。是が芳ちやんのお正月の晴着。裁つてやう〳〵縫ひ上げた。「芳ちやん」と呼ぶ。「ハーイ」と可愛い聲で返事をしてバタ〳〵と小さい足音。ばつたり止まつて障子が開いた。圓いふつくりとした可愛い〳〵顔をみせる。

「着て御らん」と針をぬいて衿を兩の手で持ち。くるりと後向く其低い肩にふわりと掛る。袖を通してやるとちよこ〳〵と歩み出した。「前をむいて御らん。」「そんなに下を見ると分らないよ。」「又後を向いて歩いて御らんよ。」私は飽かずながめ入る。綾縮緬を着せたより私は嬉しい。黄金を山と積むとも得られぬ寶、ほんとうに子供は可愛い者。私は何たる幸でせう。(二等)

令孃日記

東京　ゆき子

相かはらずの上天氣、外にはヒユー〳〵とから風が荒むでゐる。今年ももう今日明日きり。指折りかぞへしお正月〳〵と待ちこがれた時代がなつかしい。午前御餅きり。母樣と兄樣と私が切り役。妹と弟とはまんべに新聞紙の上へひろげる役。少し切つてゐる中にいつのまにか兄樣は茶の間へ雲がくれ。とやがて御餅のやける音がプンと鼻をつく。私も出かけ樣としたら「島田の嬢さんが、何ですれ」と母樣に叱られた。二時頃やつと切り終つてお友達へ年始狀かく。忙がしい最中なのにすまして新年御目出度うなんてほんとにをかしい。夜母樣と買物に行く。顔がきれさうに寒い。仰げば月は高く御空にさえて、師走の町を忙しげに行き違ふ人々の影法師さへ氷りつきさう。(秀逸)

留守居日記

松山　露子

昨日主人は出張なすつた。一週間は平穩だと喜んだ。お留守中の仕事は、洗濯と、妹の着物二枚仕立て小包に出す事と、山中樣をお伺ひすることとなり。洗濯は昨日皆濟ました。今日は十分乾き切つて仕舞ふ。山中樣の訪問は明後日でよいから、今日は一つ松子樣と留守事をしませうと思つて車夫を賴んでお迎にあげた。

お琴とバイオリンの合奏獨奏。何時の間にお稽古なすつたか松子樣の謠曲には驚いた。俊一が歸りましたら是非にといへば、秘中の秘だから此隱藝を仰しやつたら天罰たちどころだと仰しやる。

夕飯にはお好の茶碗蒸。夜は火鉢を圍んで樣々のお話をした。(秀逸)

新年

岐阜　野菊

軒端に匂ふ朝日もいとはなやかに、門松の若みどりに千代のためしのほの見えて、御旗に御國の光あらはるゝなどいはん方なきに、羽子つきかはす少女の聲はらうたけにて優しく、凧揚げんと走ろうなゐごの姿は雄に勇まし。暁告ぐる鳥の專行と呼ぶも、軒に物曳る雀の忠々と囀るも、實に文化の象なり。見渡せば治まれる御代の初霞に長閑けき空に立田山、あはれ夜半にや年の越えて來にけん。

初春の朝

長崎　都地しま子

「ほゝ萬千子さん御目出度う、こゝへゐらつしやいな」と涼しい聲、嗚鸞して振り向くと、姿は見えず、麗しい初日影にお姉樣の高島田が、大きくお座敷の障子に映つて居る。「あら御目出度う」と、につこり微笑むで、私は立ちよつた。すうと障子を開くれば、床に活けた水仙の香り、床しうも鼻をついて、お姉樣はいそ〳〵と、「さあ、お屠蘇酌みませう」外には笑ひさゞめく少女達の聲が、樂しさうに初春の空氣を振はす。

寫眞を送られし友に

三重　あそやぎ

英子さんありがたう。數年來お江戸の水にて木磨きをおかけになつたマダム振りさすが〳〵と感服致しましてよ。スツキリとした、振ひつきたいやうな御立姿。この田舍で生葉をおわけになつた方とはどうしても思はれません。ほんとうにお羨ましい事。一年有半、日夜まちにまつた根も、美くしいお眼、なつかしいお聲のもれ出しさうな、お口元のゆかしさに、すつかり忘れて仕まつて、久しぶりで拜顔しました。うれしさ、よろこばしさをのみ、取り敢へず御禮申し上げます。

弟の入營

島根　松枝子

「身體を大切にねえ……」今しも勇ましき數多の干城を乘せて發車せんとする列車の窓口にて、たゞ一人の最愛なる弟に與へし是ぞ最後の別辭なりき。雄ゆしき軍營の門を潜りてこそ、男子と生まれし甲斐もあれと、今が今まで自ら慰めもし、又人々にも誇るとにはあられど、榮えがましき事のやうに思はれしに、さて愈々之が暫しの別れかと思へば、僅二年の間ながら今更別れの惜まれて、何若萬歳と弟の爲に、双手を擧げて叫び給ふ人々の聲さへ悲しう聞えつ。思はずほろりとしぬ。

一聲の汽笛を殘して高崎聯隊に軋り始めたる列車の窓に、笑みを湛へながらも弟の瞼の赤かりしは、思ひは之も同じかりしにや。

茶の湯

京都　竹村花子

皆樣、ずらりときれいに並らんで、じつと瞳を据ゑる。四疊半の室内はしんとして宗匠のおてまへの、わずかな音が冴える。何とも云へない美くしいお手なみ。殿方で、よくまあれ丈に。あゝ私も早くあんなになりたいとつく〳〵じれつたく思つた。皆樣も同感だつたとみえて、濟むとほつと優しい溜息をお吐き遊ばして、「さすがねえ。」「ほんとによくまあおゝおきれいに。」などゝ、今更の如に仰有つて、につこり笑みをお交しなさる。

ふうちやん

牛込　輝子

「お伯母ちやんお目出度う。」と可愛いゝ聲を先に、ちよこ〳〵と机の横に座つたのは、お隣のふうちやん。「ふうちやんお目出度う、あなた幾つなつたの」「妾れ五ツ」「おや、ふうちやんは去年も五ツでせう、お正月が來たのに、まだ五ツ？」「ア、妾忘れちやつたわ、六つになつたの、來年になると姉樣の樣に、學校へ行くの嬉しいわ」とお下げの首を少しかしげて鈴の樣な目を見はりながら、につこりとした其顔の愛

らしさ！　妹が居たならば、丁度此樣にと思ふと、私はたまらなくなつて思はずひしと抱きしめた。

寒き夜

松山　小夜子

外にはおり／＼思ひ出した樣に雨が降つてゐる。火桶片よせ縫ひかけの袷をつゞくる。それも厭きて雑誌よむ。いつも興が湧かない。いやに淋しい人こひしい日だ。こんな時にはと思ふが、誰一人尋れて來れる友もない。所在なさに早く臥床に入る。ふと目が覺めた。枕時計は恰度二時を指してゐる。臺所では鼠が何かかぢつてゐる。セコンドを刻む音のみ妙にさえて胸にひゞく。寝がへりを打つ度に島田の根ががつくりとして、ほつれ毛がうるさい。目を閉ぢても却々眠られぬ。

母の慈悲

東京　コスモス

裁縫から歸ると、いつになく母樣が燈の前で御自分の小紋を せつせとほどいてゐらつしやる。まあ何と思ふて今頃ほどき物な んか遊ばすのだらうと見てゐると、「れえ露」と御ふりかへりになつて、「これれ今度拔き染にはでな小紋になほしてお前のにし樣と思ふ、家がこんなで何にもできないから、せめて是でもなほしてお正月着にしたられ。毎年同じのばかりきてゐるのもお友達の手前みつともないだらうから……。ナニ母樣はこんなお婆さん、どんななりだつて叶はないよ。」あゝすまなかつた、友達から私が辰子樣や芳樣がいゝ物がど ん／＼御出來なさると話した時、母樣の御心はどん なに痛むだ事だらう。あゝ勿體ない。母樣御心配かけてすみません。思はず熱い涙がはら／＼とこぼれた。

春の少女

信濃　菊香

稍に殘つた淡雪が照る朝日にはえて晴々し い。昨日結げた初島田氣にしながら六時頃起床。暖い御湯とらせて念入り に手水すます。今日は花樣が琴を合せに御出で遊ばす筈なので、白いものうつすりはいて置く。新調の重れスラッと着ながし、厚板の帶高く結ん で、姿見に向ふと、さ程に思はなかつた裾の模樣が此上なく美しい。思はず笑ん で部屋に歸る。十一時頃花樣がお見え遊ばして。同じ髮に同じ帶。並んですわつた身の丈も、袖に上せた手の大きさも同じい。徐ろにかなづる千鳥の曲、庭の雀も音に和して、ゆるくせわしい。

獨身の麗さんへ

本郷　笹山千代

麗さんお互ひに又飾を一つ取りま したれえ。貴女はやつぱり「かくて古り逝く我身」なんて詩人じみた御手紙を方々へ御出しなすつたでせう。私なんぞはれ、急がしくつて何が何んだか無中で飾を取りましてよ。まるで人形のやうになつてれ、姑さんが指圖なさる通りハイ／＼と云つて働いてゐます。麗さんに云はしたら、自意識がない女だの、自覺しない女は哀れだのと笑はれるでせうが、何んとでもお仰い。千代はもう人妻の名のもとに囚はれて姑さんのお仰る女らしい女になりました。麗さん！何んぼ聞えて暮してもやつぱり一生よ。それにしても人形になつて暮して行く之からの私の一生はまあ、何と長い事でせうれえ。



處女時代の誇り

若草

鬼も十八何とやら、若草もゆる十九の春、田舎娘のわたしだとて夫れ相當な理想もあります。

皆様の前でこんな自分の顔の批評なんか書くのはまあ隨分なと仰つしやるかも知れぬけれど、これも娘の自信です。先づ分解的に云へば、髪は烏の濡羽色、せつ子さんは何を髪につけるのだらう、と云はるゝけれど、別に變つた手入れも仕ないけれど何時も艶よく光つてる。

額はかりがね形ち鮮に。

眉は引の長すぎる位の三日月なり。

眼は餘りくり〳〵と大きくはないが、黒目勝の露カたれさうと叔母さんが何時でも仰しやる。

鼻の格好も先づ申分なくふつくりと優さしく。

口は顏の道具の中で第一等の上出來、餘り薄唇でなくて、きちんと締つて何時でも友達が紅でも付けてるのだらうとの蔭言聞くけれど、添へ色なんかはせぬでも薔薇色です、子供の時轉んで傷めた、糸切歯の、金の入れ歯が、笑ふときちらりと輝くのが美しくて、却々愛嬌だと、鏡にうつる自分の顏を見て微笑む時も有ります。

肌の色はすき通る程白くはないけれど、活々した血が通つて、如何にも愉快さうだと人からも云はるれば自分でも活氣の有る色澤だと思ふて居ます。

脊丈は五尺一寸、婦人としては高い方、スタイルは無論當世式。

己惚れの自分廣告も、先づ是れ位でやめに致しますが、實際私の住んでる○○町の美人の番付には、何時

でも右か左の大關に書れてるのです。うそにも褒めらるゝのは餘り惡い心地のしないものです。

己惚か、自負か知らぬが、默つて居つても隨分世間では騒いで呉れます、嫁すべき處の極まつてるのを知らないと見えて、嫁にと云ふて來た人は、今年の一月から七八人、夫れを父樣や母樣が、宅の娘は何れにも上げる事は出來ませぬ、もう極まつた處が有りますからと、仰せられて斷はつておいでのを、蔭で一寸聞いたり致しました時も有りましたが、隨分こんな時は少女の誇りとでも云ふのでせうか、敵に勝ち得た樣な心地がして、云ひしらぬ愉快を感じます。

かうしてさんざ眼尻の下つた人等に氣をもまするのも面白いと思ひます。

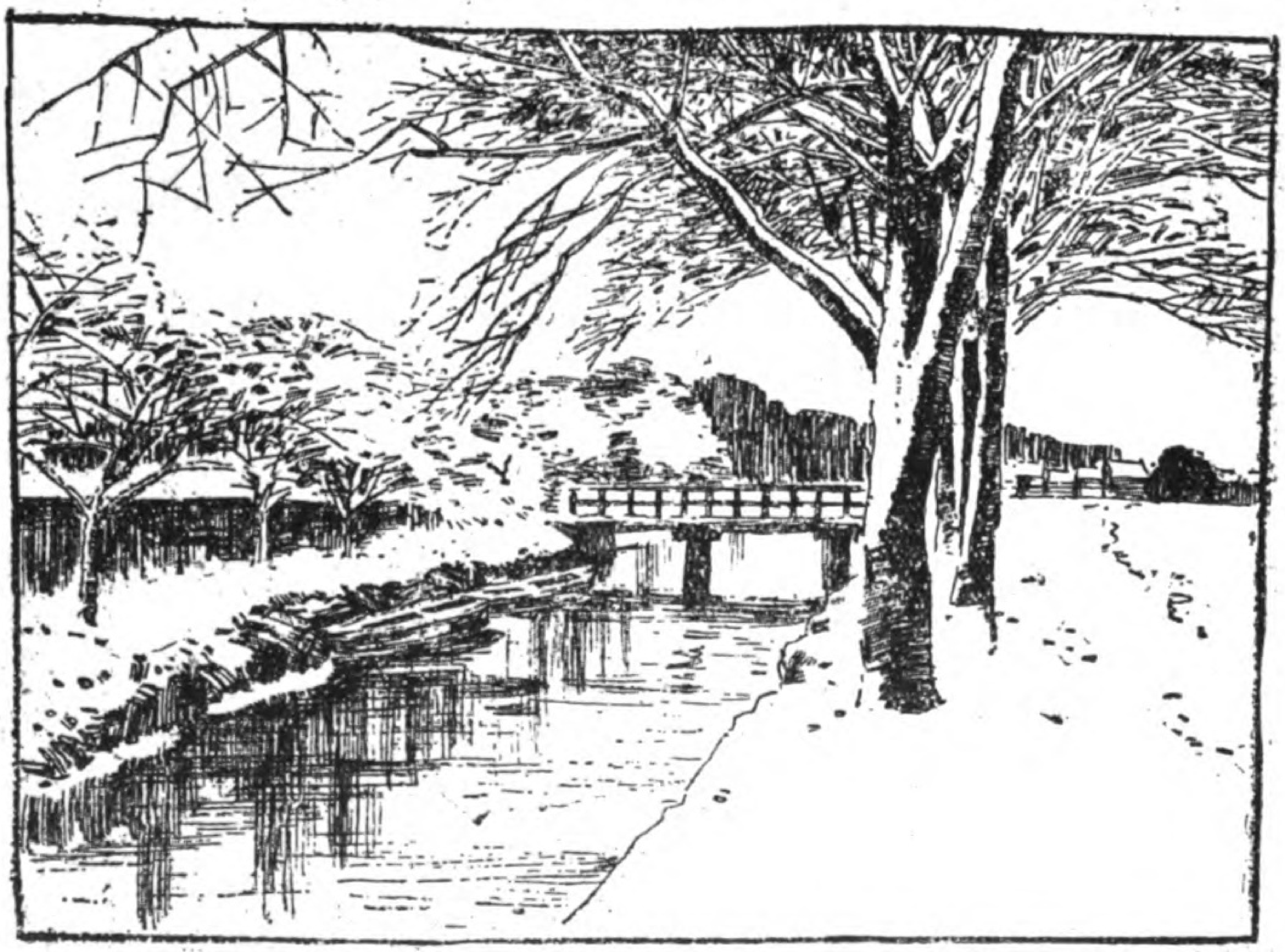
心靜に思ふて見ると男子と云ふものは丸でダークの人形見た樣だと、可笑しくも有れば、心にもない表情に、煩悶さすのが罪な樣な氣もする。

夫れに可笑しいのは私が下手な和歌でも作ると、新聞屋迄が麗々しく書き立てるから可笑しい、是れで怪我の功名で、もしや勅題の當選にでもなつたら、どんなだらうと夫れこそ田舎娘の寫眞が都の新聞迄にかゝげられて、花を咲かするだらう、さう云へば今年の勅題は寒月照梅花で有る何か奇拔な趣向を捕へて明年の歌界を驚かして見たいが、夫れは駄目、出來る事ではない、不可能事で有る。

田舎者の藪鶯、ほうほけ經も片言交り、馬子の歌のみ聞いて居る私でさへ、隨分大きい考へをゑがいたり夢の樣な空想に耽つたり致して居りますもの、花の都の水道の水で洗ひ上げ、磨き上げ、新教育の光を心の花に競ひ咲かせつゝ有る令孃方の抱負は、どんなだらう、心の輝はどんなだらう、何れ理想は月の世界に胡蝶の舞、浦島の龍宮遊びを、そのまゝの愉快を夢みてるのでせう。

然しなんぼ花の都だからとて、皆がみな虚榮の憧憬にのみ浮き〳〵してる者許りも有るまい、質實な理想を抱いて、未來の世話女房の仕度に、習へる理科、數學をうまく應用して、天晴好い花嫁樣よとの賛辭を浴び

柔かき若草のかをる野に、胡蝶の舞ひ狂ふ樣な長閑かな平和なホームを作り、やがては膨脹的日本の相續者たるべき國民を、見事敎育して家を整へ、身を修め、模範的賢妻良母となりすまさうと思ふてる人も、澤山だらう、如何に傲慢な自負心の強い人でも、虛榮に憧憬れてる人でも、質實の考へを抱いてる人でも、婦人は婦人ですもの、十人が九人迄は、人妻になるのでせう、十人十色、定めし變つた思想の人が有るでせう其異なつた思想をかゝげらるる女學世界の臨時増刊が早



江戸川の雪

く見たい、而して新敎育に守り育てられた婦人の胸中の輝やき方が伺ひたいものだと思ひます、何れ二十世紀の活舞臺に、輝やき給ふ婦人方の、光榮有る希望、田舍娘の私共から見れば、寢言か空想としか思はれぬ事を、ゆめでもなく空想でもなく、實現せらるゝのでせう。

私も御多分には洩れぬ、虛榮心の強い我儘ものですけれども、二千五百年來受けついで居る、西山悊治先生の御說の、大和女魂の血が廻つて居りますから、貞操、優美、柔順と云ふ婦

德の軌道を逸する樣な、そんなふらつきでは有りませぬ、如何に田舍敎育をうけ、世間知らずでも、物の道理は少しは辨へて居ます、婦人は花に比すべきもの、美しく艶で有りたいのは誰しも望む處で有りますけれど、夫れだからとて只容貌の美しい許りが完全した婦人とは云はれますまい、心の鏡に一點の曇りなく、うるはしき輝きを示して居るならば、ちつとやそつと顏かたちは醜くとも、心の床しさで補ふ事が出來ます、許りではなく、末かけて賴もしく世に飽かるゝ事は有りますまい。たとへ容貌に申分なき人でも、常識を缺いたり、餘り不謙遜な人は、永く同席するのも否になります、況して永い交際などはとても出來ませぬ、そんな沒常識な人に接して見ると、他人樣の事ではないよく／＼自分を反省せねばならぬと思ふ事が度々有ります。

私は世間知らずでは有りますけれど、母が或る藩の儒者の娘で、子の曰くの敎を朝から晩迄聞かされて育てられた女です、其母から婦人の職分、婦人の踏むべき道は、寢物語りのかち／＼山の話の末にも、何か昔話に事よせて、飽く程語り聞かされて、十九の今日迄動かぬ心の礎を築かれつゝ居りますから、好い事を見ても惡い事を聞いても、すぐ自分の身に引比べて見もし、物にふれ、事に當りて顧みがちに、常識の修養に心を注いで居ります。

私は米國風の女尊男卑の樣な風習は好みませぬ、女は何處迄も優しくて、其內に犯し難い威權を持つて奧床しく有りたい、千尺の松の大幹に、無限の趣を添ゆる藤の花や、蔦紅葉の樣に、床しく美しく淸く有りたい、自己中心よりも、矢張あるものを代表して、優しき內に隱されぬ、天職の輝きを示したい望みです。

今日も新マダムの仕度の爲め、生花茶の湯琴の稽古に行きました、先づ生花の先生の處に行きますと、先生が天地人三才の釣合を失なはぬ樣にと注意されますのを聞いて成程枝の風姿より、第一天地人の釣合が取れてなかつたら締りのない花になつてしまひます、私共も是れから社會と云ふ活舞臺に出て働かねばならぬ

身心の釣合を失へば、沒常識と笑はれます、二十世紀の活働婦人となるには、餘程修養致して置かねばならぬと思ひました。

茶の湯はさす手、引く手少しの隙は無いのです、置き双ぶる品は、品と云ふ字の形と申されます、落付いて少しの油斷なく、隙のない妙處を活社會に立つた曉にはよく、交際上に應用し、無駄のない處は引いて、勝手元まつち一本の仕末に迄及ぼしたいと考へました。

琴は西洋樂器の樣に陽氣では有りませぬけれど、餘韻の長い、何とも云はれぬ優美の點は、我大和女魂の麗質にふさはしいと思ひつゝ、かき鳴らしますと、邪念などは何時か拂ひ去られました、麗質修養も、矢張未來の良母の仕度。

僅かこんな稽古ですけれども未來の希望に向つて進みつゝ致ますので、實に愉快で面白く稽古が出來ます。

私も明くれば二十の春、夫になる人は來年高等商業を卒へて、或る會社の外國詰にとの約束も出來て居る

私も來年の秋は新マダム、海波千里話にのみ聞いて居つた上海の風に吹かれねばならぬ身です。

始めはどうせ安俸給の、優な暮しは出來まいけれど夫となる人は抱負の大なる、意志の堅實なる人物だから、行末は屹度相當な地位を占め、必ず一方の雄將となられる事と確信して居ります、三井や三菱だからとて始めから今の樣な勢力が有つたと云ふわけでは有るまい、變に處し機に投じて漸次今の有力なる勢力をなしたのでせう、棒程願つて針程叶ふてもよい、私は良人となるべき人の精神を心によく受け入れて、十分働いて素志を貫きたい考へです。



光榮ある私の體



玉露女

樂師之君

午後からは殊に暖い。緣の障子に南天の影が書いたやうに寫つて居るのを見ると鶯でも來るやうな氣がして十二月にならふとする日だとは思はれない。朝から精だして仕立てたクリーム地、紋縮緬の長襦袢も最早出來上つて半衿をかけるばかりになつた。明日の今頃は……と思ふと胸がをどる、滿場の聽衆寂としてし片唾を吞む時此長襦袢の上へ桔梗紫の裾模樣重ねて。靜かに出て行く私の姿は、あらゆる人の注視の的!!!〇〇先生も御出にならふ。〇〇講師もお見えになるだらう。「何卒々々立派に曲が彈けますやうに……」。オヽ丁度衿もかけ終るから、も一度練習つて見ませうか。

「敵境に入つて傷付ける勇士は敵の館の一間に今や我を覺えずなつて橫はつて居る。敵將の姬は只一人此若人の枕邊に坐して看護して居る。閉ぢたる眼結べる脣。「天晴れ賴母しき武夫よ此人の爲め我軍の幾多の人々は惱まされつ。父君も常に仰有りし彼は敵ながらも畏敬すべき若者よと…それよ常に〳〵かくのたまひき。」と姬は胸に獨言ちて我を忘れて恍惚と眠れる若人の面を見入る。

其刹那の光景を四絃の絲は語りつくして餘韻は人の胸深く流れ入る。「やがて姬は惱める人となつて切なき胸の思ひを其侍女に打明けて物語る…」曲は細く微かなメロデイーの綿々たる情緒を傳ふる……。

夜となく晝となく思ひをこめ心を盡して研究した此曲をいよ〳〵明日の演奏會に出すのである。あゝ光榮ある私の體!!!……ユーズの神樣! 願はくは御力を添へてたまはりませ。

頭上の電燈パツト燈つて時計は今五時近くなつた

時。奥の御座敷から高い笑ひ聲がひゞいて來た。土曜日の夕には大概入らつしやる賴彥樣の御聲だ。賴樣も皆と御話遊ばす時はあんなに御元氣だけれど私獨りになると例の事を仰有り出すので困つてしまふ。賴樣は私理想の海軍士官。兄樣とは御親友だしあの御氣質なり御姿なり男らしい申分のない御方。私はいつでも虞美人草の宗近君のやうなとつく〲思つて居る。けれども〱賴樣は道彥樣の御弟ぢやないか。もし又弟御でないにした處で私は一生獨身生活して「華やかな寂しい生涯」を送るのですもの……音樂さへあればもう私には何よりの慰藉!!! 憂いも辛いも希望も慾も皆音樂を友として樂しんで居る覺悟!!!。賴樣ゆるして下さいませよ。

思ひ起す十七歲の春かるた會の歸り路を一寸と引留めた道彥樣が御部屋の御机から出して入らしつた品!!!「一年前から書いたのですよ」と仰有つてそと賜はつたのを御好な水彩畫でゝもあらうと快く頂戴して家へ歸つてあけて見れば半紙十二枚に細々と思ひもよらぬ御言葉!!!。何にも知らない私の胸は早鐘のやうにとゞろいたが……理想の女常識の私は夜一夜まどろみもしないで考へたあげくが

「若い内は有り勝の。好奇心交りの御仕業であらう。道樣は文學を專攻遊ばすのだからこんな事書くのは御手のものだわ八百屋お七の時代なら知らず明治の今日。戀のために血も肉も燃やしつくすやうな人間がありませうか。」

とその後はその樣な御返事申して冷やかな月日を送らうとしたのに。思ひきや道樣は御病氣!!!。あらう事か帝國文科大學生は戀の爲めに高輪病院の露と消えて御しまひ遊ばした。最後の際に泣きくづれた私の手を取つて。

「蝶樣それで僕は滿足して死にます……」つて。

勿體ない御言葉御いたわしい御志蝶は。蝶は。其日から道樣の妻として未亡人の心で居りますものを。何にも御存じない賴彥樣がまた妻にと御望みなさる世の中は。あゝ世の中は……。

我間ひし戀は谷へで微笑みし
藥師の君の指の細りよ。

折柄近づく足音は。オ、賴様！！泣き顔見られじと電燈消して裏縁に出れば弦月!!!。夜は流石に寒いこと!!!。

初産の妻

今朝は明治四十〇年の最初の日朝から時雨れて來たが暫く晴れて病院内にも春の景色は何となく現はれて居る。



眞白いベットに横はつて居ると獅子舞の大鼓の音や凧のうなりまで微に聞えて寢て居る身も心長閑に微笑まれる。

昨日は年中の汚なしにと出産後初めての入浴に今朝は寢衣ながらも下から上まで着代へたので體の具合も至極いゝので松村さんが……お目出度うと御挨拶なさつた時もきちんと坐つて答禮して平日とちつとも變りがないやうな體になつた。

貞雄ちやんも生後十日目でもう數へ年二つになつて相變らずすや〳〵と寢てばかり居る。午後からお父様も御出になつて貞雄ちやんと御話して居らつしやる。

「ヤアお目出度う。貞坊お目出度う君は二つになつたんだあねエ　お父様は三十になつたしお母様は二十になつたんですよアハヽヽヽ」

「いやだ赤ちやんにそんなお話したつて分りや致しませんのに」と私も笑ふ。

其所へ笠原さんがころげるやうに入いつて來ていきなりお腹をかゝへて笑ひこけて居らつしやるから。松村さんが。

「まあどうしたの旦那様が御出になつてるのよと云ふと」

「大變な事が出來たのよ大事件よ、石川さんがね御産の道具とパンの包みと間違へて車屋に持たせてお産のある家へ送つてしまつたのよ

「アラ大變!!!　叱られるでせうね可哀相に」

「お産が近づいて大急ぎで開けるとパンが連がつて飛び出すなんか振つてますねエ」

「冗談ぢやないわ」。

「毎朝看護婦幾人かの食料として食パン何斤かを一包にして配達して病院の玄關へパン屋が置いて行く其所へ主任産婆を乘せる車夫が來て産婆と産具一式を乘せて急ぐのである其時送り出す見習看護婦の石川さんが今日はあはて初めにパンの包みを車夫に渡してしまつたと云ふ譯。

落付いた物靜かな北島様(産婆)がパンを出した時の様子……。歸つて來られて石川様がしかられる様子なかなか笑ふ所ではない。困つた事が出來たと氣になつて仕方がない。

叔母様お目出度う!!!」と凛とした聲で云つて笑顏涼しく入いつて來た一麿さん。學習院の御歸りと見えて制服制帽の姿は少年雜誌の畫のやうだ。

「今年はお裾持ちは?」と聞くと。

「松平さんと。代りました。」

とはつきり云ふ　去年は元旦の御祝儀の時九重の雲深

く尊き御衣の御裾を捧持した一麿は我姉の唯一子。子の數は只一人でも此樣に美しく此樣に立派な子を持てば何の不足もない筈。貞雄も早く大きくなつて此樣に模範的少年になれよかし。

此樣に大きくならなくとも四五歳になつたらどんなにうれしかろう。可愛らしい衣服着せて夫と二人で諸所へ連れて歩けるやうに早く大きくなつて頂戴よと見返ればいつの間にかパッチリとした瞳をあげて小さな口を動かして居る。庭の方へ御出になつた夫も入いつていらしつて一麿さんに御話していらつしやる。もう晩飯だと見えてお膳部を運ぶ音も聞こえる。赤ちやんのお乳迄はまだ一時間足らずあるから蓄音器でもかけて頂かうと思ふがお隣部屋の御都合は如何と松村樣に伺つてもらつたら結構ですと御喜びになるので早速初めるポン〳〵と鼓の音冴えて梅若萬三郎六郎諸氏の勸進帳が手に取るやうに聞かれる。折々ピーと笛の音の入いるのもうれし



い。

聞いて居るうちに思ひ出したのは昨夜芳に讀ませて聞いた新小說の事。作は泉鏡花題は哥行燈。「夫れ海中に飛び入れば……」と朱唇を開ひて謠ひつゝ藤紫の裾をさばひて靜かに舞ふ銀燭のかげの宴に。霜夜の露路に佇める若き謠の名人は泣いた。其趣のあり〳〵と胸に浮んだ時蓄音器の勸進帳は止んだ。

所へ芳は各々へお膳部を運んで來た。

芳の心づかひから特に預つたと見えておとそにお雜煮まで添へてある。十疊の病室所せまく心ばかりお祝儀ながら皆の顏には春の光榮ある笑が浮んで家にある時と少しも變りはない。次の間に下つた松村さんや芳や笠原樣にもお一つお進めしたれど夫を恥かしがつて御遠慮して御出なさらぬので夫は手づから貞雄ちやんの小さな唇に小のお盃をあてゝ御元旦の御眞似いはひ納めた。

寢衣の上へ重ねた納戸色紋羽二重羽織の裏の緋綸子のあたりを凝然と見ていらつしやる夫に。

「お母樣になつて赤い裏の羽織は派手過ぎまして？」と申上たら默て首を振つて。たゞ。

「何日頃退院出來るの？」と仰有る。

「二十日頃歸ります」と申上たら矢張り默てうなづかれた。

お餅を一心にかぢつて居た一麿さんは突然。

「叔母樣お退院になつたら歌留多會にいらつしやいな僕の家へ？」。夫も私も次の間の者も皆微笑んだ。

(私は今年から子持になつたのに……)



人生の詩の時代

安曇の啓女

光榮ある人世の春――一刻千金の人世の春――。

あゝ、私はこんな文字を見るたびに、言葉をきく毎に胸の血汐は苦しい程沸き立つて、熱い〳〵涙が止め度もなく流れます。

「人世婦人の身となる勿れ――」など〻頼みもせぬ銘うつて憐れんで下さるは御無用、私はむしろ女に生れて來たのを此上なく幸福だと思つて居ます。全く女は人世の花ねえ、子供の時からもう人目の引方が違うんでせう、振分髮の嬢ちやんが華美な友禪の被布なんか着て、追羽子でもして居る處は眞實に抱いてもやりたい程可愛いぢや有りませんか、同じ年頃の男の子が眞黑い手足をして、鼻水垂らしていたづらしてるのとは較べものになりませんわ。

ですものを、十七八ともなれば自然と艶氣が‥‥。出るのは、そして女達が人目に立つのはあたりまへの事ね、一寸道を歩いて若い男にでも擦れ違うものなら其目遣の工合が誠に以つて險呑至極、ほんに誰さんかの云草ぢやないが、電光石火の恐ろしさ、さつと横に走つて了はうと云ふもの。

自惚らしいけど、私にしてからが生れてこゝに十八年、見る人毎に心を悩ませて――と云ふ程の美しさはなくとも、所謂今が青春の花少女、まさか路傍の石つころとばかり、打つちやつても置かれませんもの。

大言壯語は男子の十八番です、彼等の常套語に曰く、女は詰らない者だ弱い者だ、あはれむべき動物だなんて髭喰そらして居ながらも、其詰らない動物のためにお氣の毒な程惱まされて居るむきが少なくない、女に肱鐵砲食はされて人世が不可解だなんて、叫んで悶へ〳〵た末遂に、可惜前途に望多かる若き身を、華厳の露と消え行きし失戀靑年さへ有る。こゝに至れば女も又罪が深い、併し醜婦に生れた私が斯る事をいふ

のはちと僭越ですが美と言れば無論お世辭だとは思ひながらも、何となく胸ときめきて處女の誇を高めます。

此頃は隨分お化粧にうき身をやつすやうになつた、時にはうまく白粉のゝらぬ腹立まぎれに、鏡ほうり出して泣いた事もある、こんな事云へば又淺猿しいなんて笑はれるか知れんけれど、全く容姿は女の生命なんですもの、私がもし目つかちや鼻つぶれに生れたらとつくの昔悲觀してますわ。

容姿ありて人の此世は花なれや
淋しからずや學識をいふ人



つてうた御存じ。何が此世で嬉しいつたつて、若い女が目さむるばかり粧ひこらして、すいと姿見の前に立つて、自分ながらあゝ美しいと感じた時程、心からの喜びは有るまいと思ひますわ。私ね形にも姿にも關はない〇〇〇先生なんか見るたびに、まあ此人達は何がのぞみで此世へ生れて來たのかと思ひます。

とは云ふものゝ……あゝ思へば私も變つたのねえ、一昨年まではツンツルテンの海老茶袴に、腕のによつきり出た筒袖なんか平氣で着て。ブランコよテニスよとはね廻つて居た此身の今日此頃は

紅白粉を好むのみか島田のほつれ毛かみしめて、思ひに泣く夜も少なからぬ。

戀ぢやないかつて！　え〻さうかも知れない、けれと私まだ戀する人が有りませんもの、身も心も捧げてまでもと思ふ人を見出し得ませんもの、え、平田さん、あら厭だ、あの方は大事の〱友達よ、兄様なんですわ、それやね、傍から見たら隨分相思ふ仲かと思はれる事も有りませう。が二人の間は嚴しいもの、いくら親しくとも垣一重はちやんと築いて有るんです。私どう云ふものか平田さんに對しては、兄としてこそ甘えもすれ懐きもすれ、それ以上到底一歩も進める事は出來ないんですもの、どうしてつて――さう、年の違ふせいかも知れない、何だかお爺さんじみて被居る樣でね、ホヽヽヽぢや私の此頃の思ひは！　さうねつまり戀を戀すとでも云ふのでせうか、若い血汐をうづに沸かしてその甘い泉に醉うと云ふ美しい戀を私は戀して居るんですねえ。

あゝ、戀と云へば又も思出さる〻浪子樣の御身の上儘ならぬうきよの義理のため、多年の戀人との仲を斷たれて、泣く〱思はぬ人に嫁がれた。「私―私、實に死ぬる思ひでゆくのよ――」と、ひしとばかり手にすがられた時には、もう〱堪らず悲しくなつて一緒に泣いてしまひましたわ。今頃どうして被居るでせう、さぞや此世の無情を恨んで忍び泣く夜の多からう、ほんとうにお可哀さうな方ね。

併し思ひますわ、浪子さまも餘りおよわい、いくら媒妁人に口説かれたつて誰が何と云つたつて、私なら決して嫁きはしない、とても破らる〻戀ならば、エヽいつそ――一生オールドミッスを通します、尊敬されぬ男にかしづいて此若き尊き血を汚し、灰の樣な冷い家庭に無爲なる呼吸を數へんより‥‥‥失戀の傷に悶へて泣いてやつれて、其ために縮む命なら何惜しみませう、此體――。

え、まるで狂人じみて居るつて！　云ふ事がちつとも要領を得ないつて！　さうでせう、併しどうせ人間の頭だ機械ぢやないもの、要領を得ぬのに不思議はな

い、まして此得難き人生の春に逢ふて衷心の歡喜禁ずる能はず、自から我世の春を語らうとする花の少女の言の葉には固苦しい窮屈なものは無い筈です。私は此の若々しい胸に宿るすべての希望を理想を戀を問へぞ、あらゆる思ひの一切を、感ずるまゝに語らひて、高なるハートのひゞき迄を春の形身に遺しますわ――

　でも狂人とは隨分ねえ、私これだからお年召した方は嫌ひ、底意地の惡いひからびた樣な事ばつかり云つてらつしやるんですもの、御自分が一日々々と人世の秋に近づいて行く淋しい荒んだお心から、小羊のやうに可憐な活々とした青春の少女の胸のゆらぎをきくと、云ふべからざる心細さを覺えざるを得んだわねえ、ね、さうぢやなくつて？。

　おやあいゝ、私がまあ狂人として、こゝに一人お目に掛けたい方があるの、大久保のお時さん御存じない事、そらいつも眠つたい樣なはつきりしない、表情にとぼしい顏してる方よ、もう女で二十五と云へば大抵の者なら「――あゝかくて青春の血は枯れんとす――」なんて悶へそむる年頃だのに、お時さんては少しもそんな事苦にする樣子はない、今だに緣談一つなくつても平氣の平左で至極お目出度うかまへ込んでいらつしやる。無神經なのでせうか、まあ、少々頭が足りないのですねえ。

　一年三百六十五日、雨の朝も雪の夕も一向變化のない薄ぼんやりした顏して、人並々に花を見、月を眺めながらもこれによつて何等の興味を感ずるでもなく、木枯寒うくれ行く秋の末にだつて、春まつ若い執着もなければ、別段の苦痛もなく可笑しみもなく、來ん日も行く月も、裁つて縫つて長持の底へしまつて、洗つて張つて――とこんな仕事に憎らしい程餘念がない、コクリ〳〵と夜舟漕ぐ間はあつても、新聞や雜誌見る隙はないつて言ふんですもの、其世間にうとい事つたらお話の外よ、文學趣味なんか毛の先でついた程も持つちやいらつしやらない、金色夜叉の話をすれば、まあ聞いて頂戴「宮さんが外へ嫁つたら貫一とか云ふ人だつて、他の美しいお嫁さんを貰へばいゝのにねえ」

……なゝ成程、眞理で御座りまする、とても申上げるより仕方がない。

あはれ明治の文豪、紅葉山人が心血そゝぎし一代の傑作も、お時さんに出合つちやかたなしだ。先生きつとお墓の下で泣いていらつしやるわ。

何事にもこの調子で古から若い血の沸く道理もないだがいつそ此方が悲しみも煩悶もなく氣樂でいゝかもしれぬ。人或は是れをしも、生意氣でなく落着いた溫和しい娘だと云ふかは知らねど、私若い女で多少の悶へや憧憬のない者は、一種の不具者だと思ひます、いくら何とおだてられたつて、お時様のやうにばかりは眞平。眞平。それやね、私だつてどうせ未來は人の妻たり母たる身ですもの、裁縫やお料理に經驗を得て置くのも必要にはちがひないけれどそんな事はいくらも年取つてからでも出來ぬ事はない、若い私の胸は今、そんな色も香もない仕事に滿足して居ないんだもの——何と云はれたつていゝ、此の沸き立つ血汐のかれないうちに思ふさき甘い思出を作りませう。

ねえ、人に對する愛の爲めに、神様は女にこの美しい和肌と艶やかな長い黒髪とを賜はつたのでは有りませんか。ほんとにいつでしたか杉浦翠子さまの仰つた通り、狂うとも笑うとも醉うとも翔は自由にとぶ、少女十八の春や今、あゝプラウド多き人世の春——、私はあだに過したくない。或人の詩にこんな句があります此の髪に伽羅を薫らせこの肌に臙脂を彩どつて、胸には甘き蜜を貯へ、あらゆる蝶の君を……云々とえ、私の理想の良人!、ホヽヽヽ大變な事になつたのね、それこそ、秘密——秘密——とても申上げたいところだけれど——えゝ、迚もの序に云つちまいませうか、あのね理想の人はね、軍人よ。

軍人に限ります。

胸豊かな參謀肩章、意氣に氣取つた短劍姿の青年士官、あゝ、此の夏いらしつた岡村大尉の面影が……矢ッ張り獨逸式ね。

あら、軍人だつてあながち武骨一片とは限りませんわ、かの有名な肉彈を著はした櫻井中尉や日露戰爭の

折、甲板の上で尺八を吹かれた八代大佐の床しさも偲ばれるでは有りませんか、私こう云ふ風流なお方を選ぶから大丈夫よ、ホヽヽヽ、何、たまには不如歸の武夫さんのやうに、勿忘草のブローチでもお土産に買つて來なけりやいけんだらうつて？　まあお口のわるい、私なにもそんな、ブローチだのリングだのダイヤだのつて、物質上の榮華なんか少しも望みはしませんわ、唯、良人が美しい武士的精神をそなへて居て優しい愛をそゝいでくれる人でさえ有れば、屹度、淸きホームを作つてお目にかけます。

なんて氣焔をはいて見たところでこれは敢果ない空想、有るとは見えてうたかたの流れにうかぶ水泡の、それにもましてあはれなものには違ひない、けれど其敢果ない影にあこがれ、輝やく前途を夢見つゝ樂しんで暮すうちが私達の花なんですもの。

ある人は「ちと眞面目をかざすぎるから――」と注意して下さつた、其御親切は難有いが、此人世に、さのみ眞面目くさつて利巧ぶらずともあれ、所詮我世は五十年、あゝ花一時、靑春束の間、衰へゆく末の寂寞を思つたら……ね。

あはれ年と共に、色うつくしき若き血の、うすれ枯れ行く心細さを心に悟りながらも、世間の蛙口を憚る吝な了簡から、吾れともなく虛僞の假面に少女の本領を放擲つてしまつて、枯木の樣なみじめなつまらぬ世を送らうより、尊い處女の生命を失はぬ範圍において隨分、花やかな、生活がして見たい。



花の香り

故鄕の母上へ

美作　田鶴子

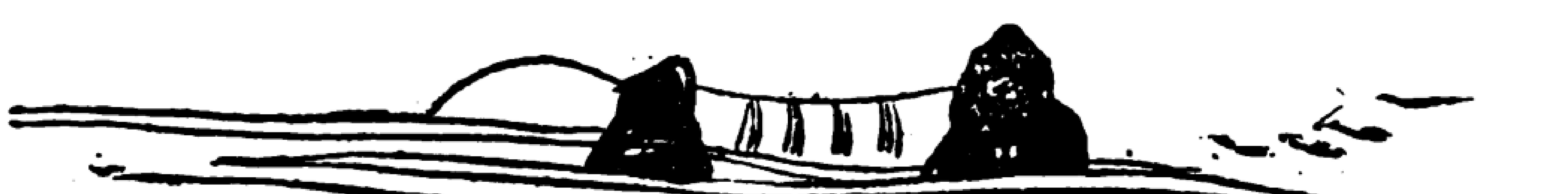
千鶴子はね、始終鬱々としてゐますのよ。ホ、ヽ「ホームシツク」で。只今もね、母様に遂はして頂戴つて私の室に這入つて來て、「姉様美くしい夕映ね、あのあたりにはお父様、お母様も、正さんは何してるでせう？」と可愛い眼の中にはモウ涙一ぱい。千鶴さん程の懷鄕病でも困りますわね。然しこれも家庭を忘れない美くしい心、と思へばそゞろいとほしうも御座いますの。それでゐて級中一の運動のチヤン。千づさんがラケツト持たなかつたらお天氣が變る、とまで云はれてゐますのよ。折柄ひゞきわたる自修の鈴の音に、私の大切な〳〵兩親の御寫しゑを「コレ私頂いてよ」なんて持つていつてしまひましたのよ。けれども明日はとり返してやりますわ。

冬季休暇中、本校にて音樂と割烹の講習が御座います。私學生としては最後のお休。浮々〳〵してゐる時でも御座いませんから、割烹をうけやうかとも思つてゐます。如何でせうか。（三等）

我が子

牛込　平塚白百合

千賀子は畵本を前にして可愛い瞳を一ぱいに見はつて讀むまれ



をしてゐる。私は裁縫の手をやめて見た。もう二年たてば學校へ入れなければならないのだ。松本さんの奥さんはどうも學校へ入れまいと着物の事で又一苦勞でとおつしやつた。私はそんな事で苦痛を求めたくない。私は受持教員の可否について心配してゐる。前の家の〇〇小學校の教員のやうに一寸水を汲んでも片々下駄を外にぬぎばなしにするやうな整理のつかない人の手に我愛兒は托されない。三つ子の魂百迄もと云ふ。美しい芽は美しくのびさせたい。（秀逸）

雪中の梅

德島　三ほ子

「學校に行かないと賢こい人になれませんからね、さ鏡ちやん、早くお包みもつて」、奥様が色々に仰せ遊ばしたけれど、どうしても駄目、御輿ちやまなか〳〵御むづかり遊ばすので、今日もとうとう車で御出になつた。門迄御送りして歸らうとすると小門の所にめづらしくも早梅四五輪氣高いかをりを放つてゐるのが目についた。まあ此雪の中を……ほんとにさきがけとはよくいつたものだ。精は小さいつぼみに包まれてる。花の盛になつたらどんなに見事な事であらう。ふと夏の頃木作の爺やが餘りにひどく枝をかりこむので「可哀相に」といつたら、「こんなにしませんと却つて來春の花の爲によく御座いませんので」といつた事を思ひ出した。あゝひとり梅の木許りではないであらう。

曉の海邊

神田　寺田芳子

此處彼處まばらに殘る朝霜を踏んで、磯傳ひに濱邊へ出た。四

邊はまだ薄墨を流した樣で、澄み渡つた空には一面に銀砂子の樣な星影が輝いてゐる。ポーと乳を流したやうな海面は、遠く遠く遠州灘に連つて、微に一條の白金線で天と界して居る。

朝露の滴る樣な松林を拔けて岸近く步を移した。何處とも知れず船唄が聞えて來る。足下にはザア〳〵と岸を洗ふ男波女波。曉を讃美する天女が樂を奏する樣に、高く低く、起りては消え、消えては起こる面白さ。飛沫は高く飛んで霧を散すやう。思はず讃歌を口にした。

彼方此方には、早や、朝の砂を取る人等の話が聞える。

冬の一日

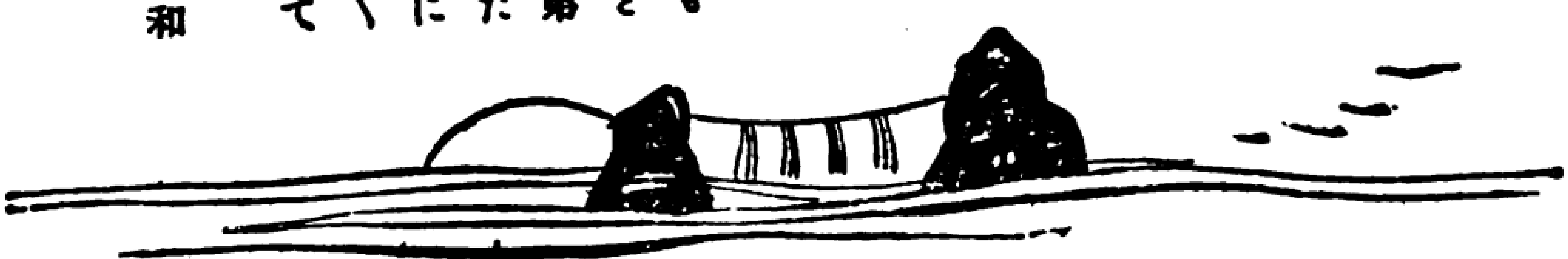
静岡　君子

四日。ひどい寒さである。庭も表も氷つてカラ〳〵してゐる。手水鉢の柄杓が水と一緒に凍りついて動かない。つわぶきの花も葉もすつかりしをれて了つてゐる。「明日の朝はひどく氷るよ」と仰言つた母樣のお言葉がよう當つた」顏を洗つて御飯を喫べ、弟妹を學校へやつてそのあとで次の間で針仕事する。手がつめたい。その中段々と日が昇つて緣側へ黄色な光線が輝く。しまひには部屋へまで光が射し込む。緣側へ出ると、庭の霜がじり〳〵ととけてゐる。かすかな蒸氣があがる。小鳥がチン〳〵と鳴いてゐる。パラ〳〵と羽ばたきがする。何處にゐるかわからぬ。

床の間から水仙の香がしんみりと漂つてくる。めづらしい日和となつた。風もない。

大阪の奥樣

大阪　山田芳枝



高く紫月に梅花をあしらつた動顆模樣踊れの御紋付、帶は糸錦の何とか云ふ派手からず地味からず着つけに似合つた立派なもの。堀越形か筒井形かいづれ當時流行の丸髷形。ふつくりと一毛亂れぬすゞめ鬢に、ひわの手柄もなまめかしう後ろへグツと差し込んだ金の平打はなくもがなと思つた。

「芳子さん、年に一度のお正月ですさかい行つても宜しいやらう」

お手にリングがキラリと光る。嬢樣が週番の歸途、明日の芝居行きを誘つて下すつたのだ。從姉のお蝶さんや安二さんも行くのだからと無理にお母樣にお願ひすると、うれしいお許しが出た。

「ぢやア明日十時までに乾度宅へお越し……」金の入齒をチラリと見せて嬢樣はお居間のお母樣の所へ、あとにはパツとゆかしの香。

外は羽禮者の往來や、追羽子の音で賑はしい。

忘れられぬ日

淺草　村尾みさゑ

電車で品川に行く。南極探檢隊の出發日とて非常な人出。品川灣につながれた開南丸の星旗の飜るを見た弟は「彼の旗が南極に飜るは何日頃かしら」と云ふ。此の壯擧の中に俯向き勝な白瀨さんの家族の方を見た私は、送る人に送らるゝ人、顏は愉快さうに見えても、内は悲哀の色におほはれて居るのを見た。

干潮の爲めに出發は明朝の十時と云ふ事。チヨツと弟は舌打を

した。

象潟より

秋田　萩野みよ子

昨日、飛び鳥の歸帆ながめつゝ當地に着仕り候。象潟の古ろき名のいとなつかしう思はれ申し候。

甘滿寺に詣で申し候處、庭の雨荒れて、とぶ蓮の實にそゞろさびしさを感じ申し候。何所の女にや、面やつれしが、緣結びとか楓の古木に、白紙を結はひ居るをあはれに見て山門をぬけ出で申し候。

象潟の昔思ふや渡鳥

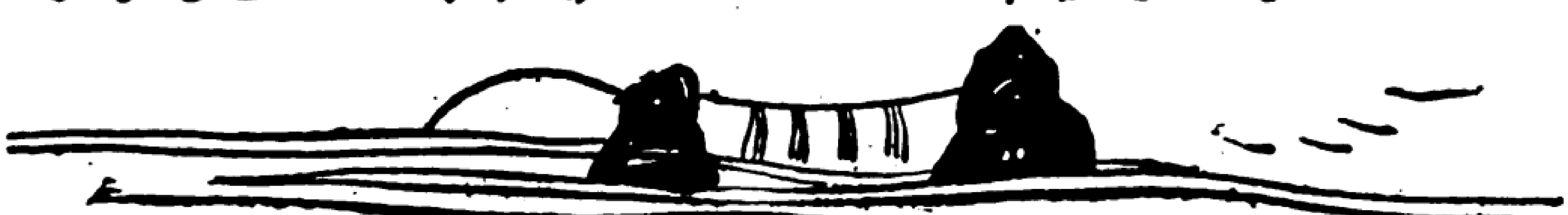
迎春の準備

東京　中村みどり

貞さんの春着をやう〳〵仕上げてホツとした。久々に窓を明けて、二階から往來を見下す。此處彼處の足袋や呉服やの軒先きにひるがへる歳暮大賣出しと筆太に書いた紙の旗。其處いらを行く人、歸る人、暮れの巷は見るもの、聞くもの、何となく忙しい。

門松を山ほどつんだ荷車が石原の方から二葉辻の方へ行く。

養春院門前の電信柱の側に、小川平のたあちあん、岩田さんの俊ちあんや五六人の女の子が集つて、お正月お正月と大きい聲して、お互に遊ぶ相談でもしてるのだらう。餘念もない。あゝ私もかつてはあんな時代もあつたのだと思ふと、幼ない昔が戀しいと共に、年をとるといふ淡い哀愁が胸をつく。



朝鮮の冬

龍山　うすらひ

十八日、一昨日降つた雪が、其まゝ溶けずに、倉庫の陰で白く光つて居る。亞鉛の屋根から長く下つて居た、つらゝが、凍つた大地に落ちてかちんと割れた。北關に御出張中の兄樣は、今頃どんな處でどんな寒氣と鬪つてゐなさるか。

十九日、相變らず寒い。朝車井戸の水汲まうとしたら、鎖がばりばりと音して、氷の粉が散る。

今日姉樣が中野の奥樣をお見送りして停車場迄いらつしたので、お歸り途の寒さを想つて、お襦袢をお炬燵に掛けて置く。朝干した足袋が、堅くなつて、竿に附着いて居た。

女は十七八

金澤　靜子

もはや今年も、わづかとなりました。思へば此の廿年間どうして過ごしてきたでせう。或時は我が身の不幸をなげき、或る時は不運に泣き、都にいますお方を見ればかゝる田舍に生れし身をかこち、又或る時は若い血をおどらせて人知れず思つた事もあるけれど、嗚、夢！、何事も夢ならざるはなく、もはや此の年になつて前後のわきまへなく戀する事もできぬし、いや、できないのぢやない。戀するにはあまりに此の世の裏が見えすぎる。あゝ何と言つても十七八歳の頃の目に現はるゝ世間はうつくしい。それも二三年妻となり母とよばれ姑となると我がたのしみは一つもない

であらう。すると女の眞の淋しみはたつ二三年!!　あゝ。

故郷へ二百里

大阪　千代子

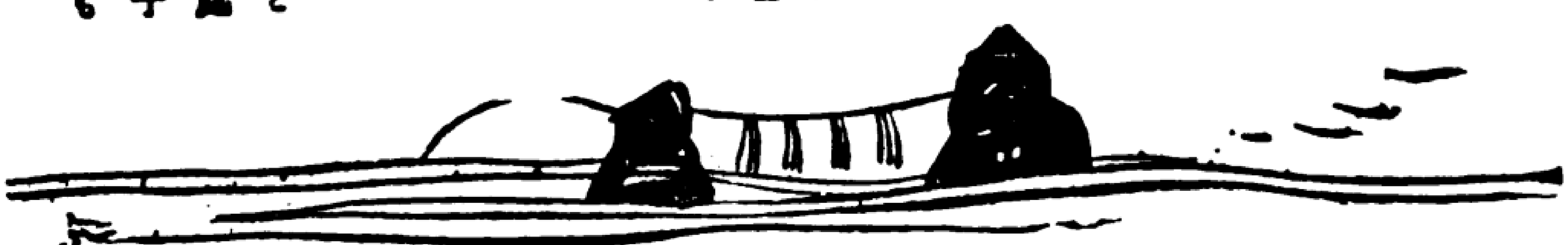
百合さん。私またこゝへ參りました。三年間に三度の轉任、夫は知らぬ所が見られてよいと申しますけれど、私は淋びしくてなりませぬ。行きかふ人も、通る町も、皆知らぬ人知らぬ町、何だか道を歩いて居ても、顔をじろ／＼と見られて居るやうで、恐ろしくてなりませぬ。家へ歸つても、話し相手はなし夫の留守中などは、淋しくつて、侘びしうて知らず／＼涙がこぼれます。あゝ思へばこゝは、郷里から二百里も離れて居ます。近くに居ても顔見なければ同じな、二百里と云ふ聲のいかに淋びしうも悲しく響くことよ。百合子さん、古里は今お正月のこしらへに忙はしいでせう。知らぬ町へ來た私は、侘びしい年を迎へればなりません。何卒々々お手紙下さい。

新年

駿河　若葉

朽ちかゝつた太い柱が二本。右の方の柱には〇〇尋常小學校と書いた表札がかけてある。それももう摩んでよくは讀めぬ。彼處には大きな櫻が二本植ゑられてある。見綺麗な着物をきた女の子が櫻の木を取圍んで大勢何か話しあつてゐる。中に海老茶の袴も見えた。男の子はわい／＼喚いでゐる。

玄關にはさゝやかな松飾がしてある。國旗が力なく垂れてゐる。



年老つた先生が教室から出て來て玄關の所でがらん／＼と鈴を鳴らすと、運動場の子供が急にどよめき立つた。軈て靜かになつて列ぶと先生が二人出席簿をもつて表へ來た。

御旗の光り

岩代　太宰ぬい子

年新たまりて、いつもはやかましく聞く雞の聲も今朝は面白く大空の樣も何となくのどけき心地せらる。

日の丸の御旗も、千代に八千代にかはらざる操の松も、風になびきて今日を祝ふ。町を行きかう人々はよろこび胸に包みきれず、ニコニコとして、知りたる人に行き過へば、かたの如くの御あいさつ聲をけりて歌ふ雀も今日は千代々々と聞ゆ。

運命

芝　松井たまき

「淺草」。「淺草」。聲にびつくりして我に歸つた。上野から數時間を通して永い／＼夢路をたどつてゐたのだ。

やつと此所が自分の下りる驛であるとを自覺して車を下りた。「淺草」。何と云ふ冷たい響だらう。私はふと上野で別れた文子さんの事を思ひ出した。あの優しい文子さんは來年はと涙を流してゐらしつた。あゝ然じ／＼何時になつたら會ふとが出來やう。田舍に人妻として一生を送られればならぬ私の運命。

あゝあの眞黒な山は大きな手をひろげて私を他へやるまいとしてゐる。あゝ果して何時またあの華やかな都に出る事が出來やう。何時またあの優しい文子さんと話るとが出來やう。



いろ〱の實驗

氣を附けて放任せよ

三重 あをやぎ

四五歳から十二三歳迄の男の子は、隨分惡戯の烈しいもので、又それをしない位の子供は一體虚弱で、末頼母しい子とは申されません。大人の眼から見て惡い事だと思ひましても、子供は無心でするので、一々小言を云つては、いぢけて仕舞つていけないと思ひます。

それ故私は「氣をつけて放任せよ」との三島博士の御格言を心として、弟たちを見てをります。又子供は大人も一緒に遊んでやつたり、子供自身の遊戯をするのを、面白さうに見物してやりますと、非常に喜びますから、日曜日など一緒になつて遊んでやります。斯様にしますとよく言ふ事を守つてくれます。(賞)

芋饅頭

和歌山 池田峰子

一つ田舍のお饅頭の製法を申上ませう。材料は薩摩芋です。之を(分量は適宜)皮をむきまして少し水を入れた鍋でゆでます。ゆだりましたらそれを裏漉にかけ、それにメリケン粉を少しつなぎに入れ、それを少しづゝにわけて置きます。それより皆様御存じの並餡をあまり大きくしない樣に丸めて置きます。さて先に小わけしておいた芋を薄く平にのばし、それに餡を丸く包み、それをメリケン粉の中に一寸ころがし、それを蒸籠にてむします。芋は先に一度ゆでた物ですから長く蒸さなくとも宜し。大きさは並の饅頭の大きさで結構です。田舍の事ですからよき物は出來ませんが。一寸おなぐさみに申上ます(賞)

有難くない頂戴もの

松山 露子

或日菓子折を貰ひました。今年七つになる女の兒が頂戴々々と言ふので、これは他家へあげるのだからといふと、内へ貰つたものは皆がたべて他家へは新しく買つておあげなさいと、ませたことをいひました御説御尤と其通りにしました。處が其菓子は大變に黴臭い妙な味がしました。これは轉送物に相違ない等と皆が評議した。其後間もなくまた他から貰ひましたから、早速改めた處、又小さな蟲が上をはつて居る隨分古臭いものでした。こんなものは人に上げ度くないと思ひました。(賞)

今より夏の用意

三河 萩代子

先年或人から、蜜柑の皮をもやすと蚊が逃げると言ふ事を聞きましたから、早くから。皮を干して置いて昨年の夏火鉢の中でもやしましたら、話に違はずもえる間は蚊が一疋も來ませんでした。それに、もえる時、非常によい香がします。私は其香が大好ですから、今年も今頃から皮を干して置いて行はうと思ひます。

炬燵の用心

函館　山本すみ子

炬燵に入りまして一寸立つ時、又は用事のため女中などに後をたのんで出る節、十人が十人、四角をたゝき風の入らぬ樣にして置きますがあれは火氣が中にこもり、一時に大事に至らぬ迄も、布團をこがし、又は手も付けられぬやうに成ることがありますから、あたらぬ時は一方を明て置くことが肝腎です

冷え性のお方へ

秋田　伊藤春子

寒くなりますと老人やお婦樣たちには、ずゐぶん冷え性なお方がおいでふせう。さう云ふ方々は眞綿の中へとうがらしを入れてよく煮ます。それを乾かしてお腰ぶとんや腹まきに綿といつしよに入れますと、大へん暖かなさうでございます。私のお母さんは毎年さう致します。

縮緬の半衿洗濯法

越後　池田きくを

皆さん縮緬の半衿をお洗ひなさると、丈や巾がつまつてお困りでせう。それで私は洗つて乾いた後、之をたゝんで火鉢にお湯を沸かさせて置き、其上にあみの樣な物を載せ其上に先きの衿を載せて、三分間程も置いて、善い加減全部湯氣の通つた頃、之れを兩手で引つ張ります。すると、丈も幅も轡の通りになつて、再び用ゆるに都合善う御座います

風邪の豫防法

兵庫　山本しげ子

風邪にかゝり易い人は、毎朝顔を洗ふ時、兩手に水をすくつて鼻孔へ吸ひ込むのです。すると口へ出て來ます。之は始めの内は大變痛いですが、四五日たてば何ともなくなります。之を毎日續けてゐればもう風をひく事は決してありません冷水摩擦などよりも手輕で効が多い位です。

眉を濃くする法

島根　青々子

ワセリン椰子油を等分に混ぜたものを、指先で朝晩二度眉に塗るのです、其塗つた後を尖端の丸い護謨櫛で眉なりに靜に梳いて、なほ毛の柔い歯磨楊子で撫でます、之を繰返してゐる中に眉が痒くなつても

爪で掻いてはいけませぬ。其樣な場合には適宜に硼酸を浸し、それで洗ふのです。斯くして一二月も實行したなら、屹度滑くなります。

子供にあぶない下駄

長野　あや子

ゆるい鼻緒の下駄は誠に危險でございます。お隣りの六つになる坊さんは友達と鬼ごつこをしてとび廻つて居るうちに、はいて居た下駄の緒がゆるくつて足へきちんとくツついて居らなかつたものですから、右の下駄が左の足のクロブシへあたつて、大變なけがをしまして、廿日も難儀されました、一寸の事でも油斷は出來ません。

子供のくせを直す

東京　橋本空木

私の妹は六つ位まで左利で、御飯頂くにも箸など持つにも左りなので實に閉口致しまして、直すのにそれは〳〵困難致しました、然うすると昨年弟が生れましたが、又指をくわへたり玩具を持つて遊ぶにも總て左なので、種々心配致しました末右の袖口の上に鈴を結びつけて置きました、すると小兒は手の動く度に鈴の音がするので、興味に連れて劇しく振り立てますので、僅の間に何の苦もなく癒りました。

汚點洗濯法

熊本　二葉

布に汚點が付きました時は、其の部分に石鹼を澤山つけて、其の儘日光に晒します。それが干いてから、洗ひ落しますと、よくとれます。

それでも何程か殘つた時は、再び以前の方法をくり返しますと、大抵は落ちます。けれど初めによく其の品質を考へて、致しませんと痛め易い色物だと。其部分だけしらけて、却て見苦しくなります。白布ならば何でも此の方法でいゝ樣です。

鉛筆の筆記保存法

芝區　美園子

ごくよい鉛筆ならばいざ知らず、普通の鉛筆の筆記ものは歲月がたちますと自然にはげます。之を永久に保存するには、酢をうすく塗つて置けば宜しうございます。

明治母の會新年例會

同新年例會は一月二十八日(第四土曜日)午後一時より本郷區春木町中央會堂にて開會、當日は女高師校長中川謙次郎氏幷に松村介石氏の有益なる家庭講話ある由

當選目錄

題	等	氏名
春の曲	壹等	紅梅
晴れたる日の囀り	貳等	高松子
少女を飾る賀狀の數々	貳等	花吹雪
初島田印象記	參等	野路の雨
自覺せる醜婦の心理	參等	村雨女
若き婦人の心理解剖	參等	野菊
光榮ある私の體	四等	玉露
輝くおもて	四等	橘百合子
一生涯の記憶のページ	四等	宇佐川登志子
人生の詩の時代	四等	安曇啓女
理想の夫に配せる歡び	四等	濱千鳥

△處女時代のほこり(若艸)△花のあつまり(都の錦)△現實に活る人と未來に活る人(綾浪)△奥樣方の理想の數々(みちぐさ)△平凡な私の希望(百合香)△おだまき(靜子)△伯爵家の年賀會(玉かつら)△海濱の正月(濱路)△再び來ぬ人生の春(さみどり)△そんな(永代美知代)△夢の樣に過した一年(華枝)△就職難と約婚(こぼれ梅)以上十二件五等

(右五等中掲載洩の分は來月以後の誌上へ載す)

賞金　一等　參拾圓　二等　貳拾圓　三等　拾五圓　四等　拾圓
五等　五圓

(原稿に住所氏名の記載のなき方は至急御通知を乞ふ)



猫によりて得たる教訓

愛猫子

我が家に永年飼馴らしたる愛猫あり。此の猫初め村のドクターの家にて生れたり。我父性來猫嫌ひなりしが鼠の惡戯を改めしめん爲め雇ひ入れたり。二匹もらひたるが、美しき方は短氣なる丁稚に殺されたる也。一枚の衣をも有たずして、ドクターの緣の下より人の懷中に運ばれて人間と同樣する樣になりてより、茲に十一星霜を重ぬ。子孫の繁榮は驚く許りにて、假に一年春秋兩度にて六匹とするも、七十匹に近し。親猫(父)に食はれしもあり。病死せしもあれど、多くは養子養女となり、それが爲めに人間の家と家に親密を増せし事もあり。鼠を捕ふるは勿論、時としては地上に遊べる雀さへも捕へて食する事あり。猫の名はオキンと云ふ。我が母命名者なり。オキンによりて種々なる事を經驗す。以下順を追ふて記さむ。

◎猫はヤッパリ狡猾なり

世に狡猾なる「人を猫の如し」とか、又「猫を被る」とか言ふは至極御尤と思ふ。

魚を料理する時など、初めの程は喰べたさうな顔だけでチット堪へて居り、其の時主人の無言にまかせて物をなでる樣なスタイルで肉を掻かんとす。少さき聲して叱れば、一寸だけ手を引込めて再び引かんとす。勘忍袋を開けて強く叱り、頭の三つも張れば、平頭低身大いに恐縮の體を裝ひて瞑目す。愚かなる人は大概それに油斷して皿など取りに行く間に、猫氏は本能を發揮し盗人根性を現はす。由良之助ならねども晩かり

しなり。

△猫でも居眠をする

凡そ人間が現はすスタイルの内にて一番可笑しきは居眠に如くはなし。

人間の居眠には、隣起し、牛搗、天井眠りなど種々あれども、猫は大抵言ひ合した樣に米搗の方に屬す。猫の之を始むるや、體を支ふる手を外して仆れんとする一刹那の現象は、トテモ下手な活動寫眞などの及ぶ所にあらず。

△猫の頭は叩き易きものなり

易きものか、易からざるものか、叩いて見ればよくわかるはり。猫になりて叩かれし事はなけれども、叩かれて餘り痛くない事だけは保證す。

△猫は春秋に富む

などゝ言へば菅丞相を想ひ出して恐れ多き心地す

猫は春と秋と二度盛大なる分裂式を行ふ。

ハイカラ紳士の家庭にも一年に兩度まで、斯る式を擧げたる事は度々聞ける所なり。されども紳士の家庭の如くに北の方と、南の方とある事なく唯一人なり。而して一回凡そ三頭を下らす。

因に猫の子の胎内に居るは二ヶ月なりと或る人に敎へられたり。

△猫化はあらざる事なり

此の近鄕にて猫の最高齢者は我が家を以て第一とす親切氣のある人より「猫は化る故早く片付けよ。」と度度忠告されたり。三年すれば化ると言へどそれは眞赤な僞なり。天下の愛猫者よ安んじて飼養されよ。度々注意を受けたれども、今更他家へ嫁入りさせやうとて、誰も貰つて呉れる人なく、さりとて殺猫犯は雷が恐しければ、行ふ事も出來ず、往生を見屆けてやらんと家内中の申合せなり。

動物學者の調査に依れば、二十年が猫の壽命なりと

の事なり。さればまだ〳〵前途多望なり。

△猫の舞踏

人間許りがダンスの上手と意張るべからず。否無用なり。轉々たる輕業的のあのダンスには見るもの目狂する許りなり。適切なるマーチもなくもがな。

樂聖ベトーベンよ再び來りて、汝が手と、汝が耳を借さずや。煩はす事を得ば實に幸ひなり。

△猫の告白

茲に猫が物したる一文あり。曰く。

猫とは我輩の事なり。平生人間と云ふ動物を注視するに、人間程道德に缺けたるは、動物中又ある事無し。一日肥大なる鼠を見付けたり。空腹に苦しむ我の喜びニヤンとも言ひ難く、樣々辛苦を重ねし結果遂に勝利を得たり。今や此の珍味に與らんとする一刹那慘忍なる我が主人は來りてそを掠奪せり。かくて鼠を携へて出で行きたれば、金に代へて魚にても買ひ來るらんと待ち構へゐたるに嗚呼哀れ！持ち歸りしは、娘共に食せしむべき燒芋なりき。（後略）

兎に角これは僞のなき事實なれども、人間たる者と心得ざる可からず。

△猫の嗜好品

先づ肉類はその何物たるに關せず、甚しきは油蟲や蚊までも食す。降りては豆腐、數の子、菜の浸物を好む。飯の分量は一匹にて一合もあれば二日は十分なり。之より多く食する猫あればそは大食家なり。

人間と異りたる點は、第一菓子類や果物を殆んど食せぬ事なり。又汁をかけてやらねば決して飯を食せざる之第二なり。

一度分娩するや食と便用の外殆んど詰切りて養育し漸く一猫前ともなりて兒外出後、會々美食を得ば獨得の聲して兒を呼びてその食を食はしめ自ら嬉々たり。要するに猫も人間に似たる所あり、又人間も猫に似たる點を有するなり。

大阪　船場の家庭

小糸

早い物で叔母樣のお宅へ來てから、もう今日で一週間。明日はいよ〳〵閾ふみとやらに、行かねばならぬ父樣も今朝はお立ちなすッた、今頃汽車は舞子邊の松の木の間を走ッて居よう、今宵は私の話で持ち切であらう、只心細くて泪が理もなく、こぼれる、折も折、階下で「露さん」叔母樣のお聲だ、又笑われると否だから、出ぬ聲を絞ッて、ハイ…と云ッた、つもりだが聞えなかッたか、出合頭に「露さーん」びッくりして、思はずアラッと云うと「ホヽヽアノ髮結さんが來てやよッて一寸結ひ直してお貰ひやす、束髮わどムなりまへんよッて」益々心細くなる許り、髮結さんが、「へイ不出來でおますが、」と云ッた聲に驚いて、思はず鏡を見ると、まあ島田とやらに白丈長の、かけ流しじッと見詰めて居ると不知不識泪が頰を傳つて流れる「えらう早よおましたナ」と云ひつゝ這入つていらした叔母樣わ「オヽよう似合てま、ホンマにお瀧さんわ上手や」とほめていらッしやる、やがて叔父樣もお歸りなさッたが私の顏見て、「何とゆう心配さうな、顏して居るのだ皆一度は行儀見習の爲、行くのだから、そんなに、あんじた物でない、ハヽヽまるで島流しにでも行く樣に思ッてる」親切に云ッて下さるので無理にでも元氣を付て居らねば、ならぬ、床に付いたが夢は又しても古里へ。ア、明日わ、いよ〳〵。…

○

早くから目が、さめて居たので、女中が、雨戸繰る音と共に、起き出でた朝餉すませて後、結い習わぬ髮を持てあまして居ると叔母樣が來て、なで付けて下された衣服を着更へて私の好きな褪紅色の帶をしめて居たら「ア成丈け地味なが、よろしいよッて、之にしときやす」ハ、とは云ッたが、又しても冷たい泪が…。思ひ返して手早く着更へ終りイザと、叔父樣に暇乞する色々注意して下さる。叔母樣につれられて行ッたが番頭樣とやらが四五人も並んで居る大きな店先で、こ

こだと云われた時に逃げても歸りたかッたが思ひ切ッて從ひてはいッた、やがて奥から四十餘の上品な方が出ていらして大阪流の長い〱挨拶の上、何卒々々を繰り返して畳ひてお歸りなさつた。此方がお家様ださうで、若旦那様や御寮人様にも、お目にかゝつた、ぬける程お色の白ひ少し丸顔のホントに美しい方。親旦那様は御留守であッた、私は離室附きださうではなれには親旦那様御夫婦がしよッちういらッしやるとの事結句靜で好いと思ッた。十時頃女中部屋に下ッて床についたが、却々ね付かれさうにもないお梅どん（御飯炊く人は）早や高いびき羨しいと思ひつゝ無理に目を閉ぢた。

○

朝起きると直ぐ敎へられた通り先一番に離座敷を掃出し夫から奥、次の間と順に叮嚀に、掃除する、店の間でも、にぎやかに云つて掃除して居る、私が床や違棚をふくと、お梅どんは、臺所をふいて居る、朝の仕舞事がすむと十一時迄針仕事する、番頭さんは三人で丁稚が二人、皆好い人らしい、友吉どんと云う丁稚が傍へ來て「皆好い人だつけど、親旦那はん、えらい癇癪持だつせ」と云う、思はず、と胸をついた、私ははなれ附き、本たうに、どうしたら、いゝだらう、いつそ、いつもお留守なら好い……アラとんでもない事を……でも矢張お留守の方が……。午後本町の御寮人様のお里からお家様がおこしになる、優しうに云ッて下さるので私、初めから大の好き、お歸り際に私を呼んで「明日わ御寮人様がお越しやよつてお向ひにはあんたせひ來ておくれや待つてるさかい」「エ、きつと」思はずお友達にでも云うやうに云つたが、内のお家様にじつと見られて、ハッと赤くなつたお歸りの後迄も何だかお恥はしい、跡でお家様から言葉遣に氣を附けるやうとの仰せ、以後はきつと心得へます」とやうやうお答へして次へ下つて、ホッと、

一息した、九時から先は自分の勝手なので私はソッと日記をつけて床につく少しは心も落附いたらしい。—

○

今朝なんか餘程さむい、友吉どんの門先掃てる姿を見ると本統に寒さうだもう、こんな時分かしら、尤も大阪、寒い處と聞いては居たが、九時頃御寮人様は實家へお越し遊ばす、明晩向ひに來て、と仰しやつた、懐しい雪樣からお手紙下さつたので本統に嬉しい、嬉しいと云へば、今日はお家様のお供で中座へ觀劇に行く筈であるおひる過ぎ小泉様がお誘ひにみえたので急ぎ仕度してお供するまだお供などと云うてした事ないので何だかきまりが

△諸國正月風俗——生剝

羽前男鹿半島では陰暦正月十五日の夜、生剝と申しまして村々の若者共は顔に彩色した鬼面を被り頭には振亂したる海草を戴き、手に銀紙貼りの庖丁を持ちて家家を回はるので、それに切餅を盆に載せて戸の陰より差出しますと摑み取つて逃げ去る習慣があります。



惡くて仕樣がない、やがて、けい氣のよい小旗の中をわけて、はいると早や前幕の岡山實記は中央すぎで、かんじんの處は見なかつた、次の業平東下り此場で祖三郞とやらの爲に御目見え口上と云うのがあつた中幕の曾我の小袖送りに五郞と十郞が蝶と千鳥の模樣ある狩衣つけて出てくると、成駒屋、成田屋と夫は〳〵騷騷しい、お二人も「よろしいな押出がまあ立派や」「口せきがい〻よつて初舞臺とは見えまへんナ」等話していられる上品な芝居であつた切は槍の權三と云うのであつた、好雄とやら、十許りの仕丁姿本統に可愛いかつた果て〻歸つたのは十二時前、直ぐに就床、雪樣へのお返事は又明日の事と……

○

昨夜おそくなつたので寢過しては一心に思つて居たので却つて平時もより早く目がさめた、放れの雨戸開けて居るとお家樣が「オー早い事」とお笑ひなる勝手な物だと私も一人をかしい、午後の九時頃本町から電話で私に直ぐに向ひに來いとの事に急ぎ仕度して帳場から來た合乘にのつて出かける。やがてガツタとかじ棒下したは大きな紙屋であつた車を待たせて置いて内へはいり、お向ひにといふと下女が取次ぐまもなくお家樣が出て來て「ご苦勞々々早よ上り」と無理に座敷へ。私は小さうなつてるとおすしやお作りをおたべと云つて持つて來て下さる、最前からじつと見ていらしたお兄樣らしい方が「本統に露ちやんにそつくりだねお母さん「ほんまに」と仰有つた、お家樣のお目はうるんで居た、露さまてどんな方かしらぬが名迄同じとわ妙だと一人思う、やがて御寮人樣が歸ると仰有るので私もお暇乞して御寮人樣と一緒に待たしてあつた車にのると皆樣が又お越しと云つて、いらつしやるまもなく懷しいお宅を跡に車は、韋駄天走り。車上のお話によると露樣とはお兄樣のお從妹で此春お亡なり遊ばしたとの事、可惜蕾の花をと、外事ならず思はれておいとしい。歸宅したのわ十一時廻つた處であつた。

○

四時起床、今日は茸狩と云うので皆大騷ぎ店には本

日休業の札が、かけられる、急ぎ仕度してイザと難波驛さして、行く、「おくれて殘念」と仰有るわ若旦那樣見るも成程小泉樣からも本町の方々も皆落合ふていらつしやる、やがて六時發の列車に、のり込んだ朝風は面をうつて何とも云へぬ、すが／＼しい、間もなく長野へ着いた、其處で下車して三日市山へと向ふ、道すから赤く熟した柿に見とれて居るは友吉どん、ねぎを棒の先につるして肩にして居るは番頭の忠七さん、惣勢凡そ二十人餘の殿は私と御寮人樣。やがて小さい亭がある處へ行くと早や皆樣わ身輕になつて、さがして居られる私も直に籠をかりて何でもと一心だ、然し肝腎の茸は少しもない、之ではならぬと、ふみ出した足下に小さいのが一ッオヤと思つて木の葉、かきのけるとアラ二本三本も然も大なが、引くとミリッと音のするを取る時の嬉しさ‥‥淺い籠なので早や一ぱいだやがておひるのドラがなつたので皆集る、持參の牛肉に採つた茸で手輕な御馳走、茸飯も炊けてあつた午後からの場所はどうやら植ゑた物らしいので大分不平が出たが兎に角澤山の、えものを持つて歸つたのが八時頃。本統に今日程樂しかつた事はない、國元へ委しく樣子、書いてやる。

新らしき年はいくとせむかへても
かはらぬ御代の年はいくとし
東久世通禧

新らしき年をむかへて祝ふかな
都もひなもひとつこゝろに
綾小路有良



媒介者の見たる新夫婦

浮葉

△妻の方

もう〳〵私は歸へらうとは思ひません、何卒もう其事ばかりは仰有ない樣に、それはもう私だつて爰が死場所だと思つて兩親には立派に暇乞ひ迄して嫁付いて參りました家を出ようと云ふので御座いますもの、何遍も〳〵も考へた上にも考へた後ですから決して後悔は致しません、例令淸次郎が何と云ひませうとも私の決心はかはらないので御座います、何が氣に入らない？とお仰有いますか、何が氣に入らないと申して只今も云ひます通り、あれが氣に入らぬ之が氣に入らぬと云ふ樣な淺はかな事柄から起つた事ではないのです第一に行先の見すゑが御座いません、世間樣から御覽になりますれば、惡い所は見ませで法學士のチヤキチヤキだとか社中での利者だとか、御世じにしろ仰有て下さいます、それは私に取りましては名譽な事で御座いまして、かゝる良人をもちますのは他目にはどんなにか仕合せだらうと云つて頂きますだけそれだけ私は辛いので御座います、何故と申しまして良人は生活に必要なだけの御金を出して呉れません、御恥しい事で御座いますが爰だけの御話だと思つて御きゝ下さいまし、もう月々僅しか持つて歸りませんで、これで生活を立てろとかう申すでせう、私も一生懸命するので御座いますが、どうも足りなくて〳〵困るので御座います、爾して其事を云ひますと大變機嫌を損じるので御座います、まるで私が無駄づかひでもしたかの樣に申すのでせう、だから其後は決して足らなくとも云はないでソッウと實家から借りたり、御話にもならない樣な工面をして居りました、たとへ實家からとは申せ良人に內しよで他家から御金をかりたりするのは、惡い事には違ひ御座いませんけれど、やむを得なかつたらうぢや御ざいませんか、人樣からとやかく申されて見ますればそれ相應の交際はして行かねばなりませ

す、婦人會なぞへも三度に一度は斷りされない事もあります、良人の體面があるものですから私だつてさうさう粗末な風も出來ませんでせう、頂く物だつて朝から晩迄お香の物ばかしと云ふ譯にも行きませず、何やかやとそれはいるので御座います、それを思はないで私のする事は何から何迄惡い樣に申しながら自分は勝手にいくら高い書物でも氣に入ればトン〳〵買ひますし、御酒は頂く、時折には隨分けしからぬ所へも遊びに參る樣で御座いますの、自分の事つてばどんな我儘でも勝手にして置きながら私が半襟一掛かつても、まるで一家の大事かなぞの樣に怒ります、片づきました當座はそんなでも御座いませんでしたが、追々氣むづかしくなりまして此頃のあつかい憎いと申したら、それは〳〵御話になりません、そして貴女腹を立てますると、あらうことかあるまいことか長屋端の者か何ぞの樣に打つたり蹴つたり致しましてプイと出て行きまして二日も三日も歸つて來ません、やつと歸る時分は大抵よつて居りまして又何のかのとくじを繰るので御座います、お酒を呑だり遊んだりなさる御方は得てさばけた面白いものですのに清次郎はちつともそんな事は御座いません、一寸ものを言ひましても痛い樣な皮肉を云つて其上句は手を上げるのです、私だつて、いくら辛抱する氣で居りましても、かう出て行けがしにされましては、何も兩親がないではなし、一生こんな苦勞をしようが爲めに生れて來たのぢや御座いませんから、離縁してもらひます、いくら弱い女だからと申しましても、一寸の虫にも五分の魂も御座います、教員をしてなりと事務員をしてなりと、私の口位は糊して行けますだらうと存じます、内に居つては朝から晩迄良人のとげ〳〵しい顏を見たり言葉をきいたり、同じ學士でありながら姉見たいに幸福な人もあるのを見ますと、一倍なさけなくなるので御座います、いゝえどう仰有いましても私はもう……私はもう……

△良人の方

彼女が何と云つて訴へたか知らんが君まあ聞てくれ給

△諸國正月風俗仙臺地方のチャセゴ

仙臺地方にては、正月十四日の夕暮より、十二三歳までの子供等が晴衣を着し、三々五々家々の軒頭に立ちて一齊に明きの方からチャセゴに來ました錢持ち金持ち寶持ち、こちらの身上は上り餅ちチャセゴにお祝ひなされ、と節面白く謡ひ歩きます。するとこい子供等に切餅一つに謡をそへて與へます若し之を謝絶すれば子供等は口々に錢無し金なし寶無し、こちらの旦那は疝氣持ち、身上はだんだん下り餅、と罵りつゝ逃げ行くのです。さて子供等の貰ひました餅は一先づ神棚に供へまして、翌十五日の朝粥に混ぜて食すれば、一年中腹の病を免るのださうです。



へ、堂々たる男子が、眞面目な顔をして女房の棚下しをするのはきゝ苦しいだらうがね彼女は一體虚榮心が強すぎるのだ、それは女だもの、まるきし虚榮心のない奴もあるまいさだが物には程度がある、百圓とるか取らずの月給取りの家内と先祖代代の財産家とは違ふぢやないか、彼女がいつも引合に出すのは、姉である矢野醫學士の夫人だ、ねえ今日、日の出の醫者の女房と僕等見たいな月給取りとくらべられて耐るものぢやない、姉は來る度々に衣服が

逢ふのに、私にはないの、指輪が二つしかないから人の家へは行けないの、と云ふのだらう、行けなければゆかないが好い、俺だつて何日迄も今日の給料では居りはしない、買ふ時が來たら買つてやる、今暫くの間は貴樣も少し我慢をして呉れと、分る樣に云つてきかすのだけれども、どうしても聞譯がない、僕だつて餘りだからな、腹も立てるさ、怒鳴りもするさ、それにつべこべと口答へをするから遂ぶちもする、そんなと翌日はものを言はないで朝から佛頂面だ、不愉快だらうぢやないか君、僕も凡夫だからなあ、ふら〳〵と出る氣になつて財布をはたいて費つてしまう、だが面白くて呑んぢやないからちつとも浮きやしない、むつとしてかへつて見ると女房のしかめつ面だらう、あゝ厭だ厭だ、朝から晩迄せい〳〵云つて働いて何をするものだと、ます〳〵やけになる、氣は荒む、家庭も何もあつたものぢやない、まるで敵同士の寄合でいつも睨合つてると云ふ風だ、それは僕にだつて色々と不足な點もあるだらうし、彼女の言ふ事にも正しい理窟もあらうがね、要するに今度の破綻は彼女の虛榮心に八分の責はあると思ふ、惡い女房をもてば六十年の不作だと云ふが、たしかに爾だよ、獨身で居る方がどれ丈氣樂だか分りやしない、なむ、當分無妻だ、何！それは駄目さ、彼女が何で歸るなんかと云ふものか、今頃は、いゝ嫁入口でも探して居るだらうよ、エ、さうぢやないと？、いよ〳〵改心すればか、それは君、緣あつて貰つた女房だもの、彼女が自己の方外のバニチーをさとつていよ〳〵從順になると云ふのなら入れぬとは言はない、どうせ僕の樣な人間にあたはるのだから理想的の女の來よう筈がないさ、僕はたゞ彼女にのぞむ、も少し淡白に、も少しおとなしくあれと、爾して自分の身分を自覺して欲しいと、ね、學校敎育を受けた身に似合す料理も裁縫なんぞも一通りの事はやる樣だし、あの年頃としては家政の取り方も先づあんなことだらう、が、理窟上手と、勝氣と、例のバニチーとには實に閉口する、君別に當こする譯ではないが、之から媒介するときにはね、今少しおとなしいのをたの

むよ、え、月給を皆渡さない譯か、それも罪は彼女にあるのだ、あの氣象だらう少しでも餘計にあれば直に時計になつたり、ブローチになつたりするのだからね

僕は一割は內々郵便局に入れてたのさ、後は書物と、小遣と、それと煙草代さ、でも感心に辛抱な男だらうはつはつはゝゝ、

冬の銀杏樹



誌友倶樂部

▲いつもながら床しい、しかも犯しがたい才筆をお振ひ遊ばす野菊様、實に敬慕に堪へません こんなに何もよくお出來なすつた方が　小學校教師の妻なる運命に服從して超然とすましてゐらつしやるところ、模範的良妻とはげに貴姉を申上るので御座いませう。然し御結婚後數年いまだお子様のお出來遊ばさぬのが何よりお氣の毒、良妻之れ賢母、私今一歩を進めて賢母になしてあげ度いのです、一日も早く御妊娠遊ばすやう、心より、祈つてやまないので御座います。(鹿兒島にて、つや子)

▲御なつかしき皆々様よ、月と共に盛なる、讀者倶樂部及び本誌のために祝します、美しき皆様方の御作、讀み行く度に、新らしき寶物を得た心地して嬉しく思ひます、誠にいつもながら御元氣の喜悦先生、私この頃、全然先生の「おころな、働け主義」に感じて、眞の實行者となりました、マア姉様方御試し遊ばしませ。この頃の御寒さも、朝の御掃除、下女と共に活動して、冷水浴した後、御化粧すました時の心持は、昔日の煩鬱と首引、思ひ出してもいやになりますわ。(ちよ子)

▲十一月の本紙も、十二月のも、ほんとに面白うございますのね、新年號はどんなでせう、私樂しみで〳〵堪りませんの、いよ〳〵發展する許りね、暫くお顔をお出しに成らなかつた河岡先生、今度の記事も有益ですわ、併しあまり短くてガツカリ、一月號には長いのを何卒お願ひ致します。(靜香)

▲下野黑髮山の萩芳女様、九月號の此欄であなたのローマンテイツクな御感想を拜見致しました、私も自然を愛する同じ感想で御座いますのよ、色々御話し致し度い事が御座いますから、是非々々御住所を御洩らし下さいませな、實は私も故鄕は栃木縣で御座いますの。(東京坂口)

▲新潟雪様、私も新潟近傍の者ですが、前々よりヴアイオリンを習ひたいと思つて居りますけれど、先生がなくて困つて居りますから、御情を以て何卒御教へ下さいまし、御差つかひがございませんでしたら、御住所御姓名御あかし下さいまし、手紙差上げとうございますから。(越後の敏子)

▲記者様、九月の紙上で御目にかゝりました御花の先生の松榮齋尾崎恒子様は、一目御目にかかりました丈でもまことに御慕しい御方でいらつしやいますのね、私共はあゝいふ先生の御教へをうけ度いと存じますが忙しいので夫れが叶はず、殘念でたまりません、記者様どうぞ先生に願つて何か有益な生花の御話を女學世界の紙上で御紹介成さつては下さいませんか、先日も同窓會で皆様と御花の御はなしが出ました時、皆様が伺ひ度いとおつしやつて御ざいましたからどうぞ。(谷中にて染子外三名)

▲鷄の八聲にあけそむる、君が代の年のはじめの御ことほぎ、幾千代かけて申をさめ候、御自分の手になり候彩色せられたる繪葉書御俳句を添へて御送り下され候へば、私も御返事申すべく候、之を繪葉書俳句集と名づけて贊成のお友達も多く有之候らへば何卒澤山御交換願上候初日さす若水硯にうけてうれしさのあまり一筆取り申候。(大和南高城郡高城村鳥井戸幸田靜子)

▲濱萩女史様の「妻としての幸福な私の境遇」、々星様、大原あや様の御作、面白く拜見致しました、以後も相かはらず御たのみ申します。(廣島露子)

▲皆様の中に、法律で解決の出來る煩悶を御持ちの方は御座いませんか、もし御座いますれば御遠慮なく御相談に御越し下さい、勿論無料です。(芝區南佐久間町一ノ一法學士辯護士奥野お晉女)

▲記者様、地方名家令孃の寫眞を御送り致したら、誌上に御のせになりますか、又御用ずみの

上寫眞を御返し下さいますか。(文子)――淨山お送り下さい。大切に扱ふて、用濟の上は直ぐお返しします。(寫眞班)

▲懐しき皆様。私は女學校を終って直ぐに米國に參り、茲に一年を過ごし、只今は親切なる白人の家にスクールガールを致し居ます。他國の土地にてはまことの友は一つもありません。只一つの友達は女學世界であります。紙上にて皆様の消息を承はるのが何よりも嬉しく存じます。馴染みの方々には色々なる此の地の繪葉書をお送り申しますから、住所お知せ下さい。(辻トミエ。Miss T. Tsuzi. c/o, Mss, Blanchard Santa Paula. Cal.)

▲札幌の恭子様へ、貴女も彼の葉お讀み遊ばして?、おなつかしう存じます、シトシトと山茶花を打つ雨の音お聞き遊ばしながら、友の御上を偲び給ふ御心情の程おしたはしう存じます。(栃木白い花)

▲まだ御面會致さゞる皆様より書面にて米國の事を御尋ねになりますが、誠に無情の様に思はるゝでせうが、私は甚だ多忙の上、手紙を取次いで居ります所はホテルなれば、多く人が出入致し、以前も私の手紙がなくなつた事もあれば、御知りの御方はサンフランシスコの方に御通信下され度、又なるべくは本欄で御話致します、九月歸國なされた元女學院の教師一村女史に北米の御話を御尋ねなされればよく御存じです私は下谷の女子美術學校に居りました稲村北子です。

▲此度女學世界愛讀者諸姉妹中で加留多會を思ひ立ちたれば、神戸市内の方で贊成の方が御座いましたら二月の本欄で住所氏名を御報知下さい、さすれば會所と時間とを當方より手紙にて御知らせ申します、開會の日は二月の五日と毎月二度皆様の都合の好い日に致す事となりました、今は八人ですが皆愛讀者の方ばかしです。(神戸立花君子)

▲待ち兼れし本誌の發行日いつも乍ら夜も短かき心地せられて讀みふけります、殊に增刊の日常生活の教訓、嗚呼眞にひしひしと浸みました私心から記者様に感謝します。(名も無き花)

▲攝津の醒萍様、新年御目出度う御座います、誠に失禮ですが、色々お話し致し度い事が山程も御座いますから、何卒御住所お教へ下さい。(東京本郷區根津八重垣町六一中西方川島菊枝)

▲本號に玉稿を寄せられたる兩崎よし子様の君及び月の雫の君、御住所氏名を至急御一報下されたし。(記者)

▲若し諸姉の中で生活に困るとか或は東京の相當な家庭に小間使とか行儀見習ひに行きたいお方が御座いましたら、二人位なら御世話して上げても宜しいから下名へ。(東京市京橋區彌左衛門町山本芳子)

▲記者様、戸板裁縫女學校へは誰れでも入學が出來ますか、學校の在所地と戸板先生の御住所とを何卒御知せ下さいまし。(備後女)。――芝區三田四國町同校へお聞き下さい。

▲鎌倉書法會は何人にても入會出來ますか、又入會するには如何なる手つゞきをすればよろしいでせうか。(大阪田中君子)――相州鎌倉町笹目谷星野邸内破塵堂書法會へお聞き下さい。

▲記者様、櫻井ちか子先生の女塾は何處にございますか。(麻布富士見町愛讀者)――本郷區彌生町三番地にあります。

▲昨年の增刊で、内藤様の御筆になつた小說「松風」の載つて居る本誌御持ちの方は、何卒御ゆづり下さいませ、御願ひです。(宮城にて美智子)

▲私は洛西は桂川のほとりに住む一少女でございます、何卒以後はよろしく御交際をねがひます、誠に申兼ねますが「マダム振り」、「迷信に囚はれたる婦人」が御不用でしたらおゆづり下さいませ、お禮は京都の名所エハガキお返し致します。(京都府下葛野郡桂村字上野大入木こま)

▲今樣枕の草紙もいよいよ年とともに終りをつ

げましたのれ、長らくあれだけよくも御書きあそばした事！磯千鳥様は一名今清少納言と申しても宜しいでせう、いろ〳〵教訓をあたへられました厚く感謝致します年改りましたとゝもに趣は變りましても、昨年のやうにおふるひ遊ばして頂戴よ、華やかな綾様、千代子様のお筆もよろしいが、磯千鳥様の奥ゆかしいしつとりとした御文章もすてがたうございます、私は大好です。（内藤友千鳥）

▲毎度美はしき文章を御掲載遊ばす内藤千代子様、磯ちどり、若菜の御三名の御住所を御通知下さい、何か珍らしき物御送り致しますわ、自由の風吹く米國の生活も随分面白いですよ、（在北米加州西本靜 A. Nishimoto c/o O. K. O' Brien R. R. No. 1. Calif. Fresno Co.）

▲諸友の諸姉妹様明けましてお目出度う存じます、これまでは不肖な私をもおいとひなく、いつもおやさしくお交り下さいましてほんとうに心強う存じました、淋しい日戀しい折等は皆様の御親切な面白い御手紙を取り出しては心を慰めて居りました、どうか四十四年の新年は以前にまして親しく且つ美しき御交際を願ひ度う存じます（神戸市中山手通り一丁目四十六ノ十四岸本秋子）

▲農業世界増刊植樹案内御持の方はお惠み下さいませんか、代りに女學世界を差上げます、それは四拾年一月より只今迄の内どれとでも御望みの分と御取換へ願ひます（京都市五條通高倉西入安田みつ）

▲姉上様のうち名所繪はがき御持ちの方は當地の名所繪はがきと御交換下さいませんか（秋田市中長町楢崎辰子）

▲朝顔の種子、新年御目出度御座います、さて諸友の皆様朝顔の種子が御入用でしたら女子用の好き書齋か、繪はがき（十枚以上）御送り下されば、朝顔の混合種子お送りしますわ、（大阪市南區天王寺大道三丁目松澤豐子）

▲大和なる神の使女様へ申上ます、私は或る事情の爲日々なき暮して居る者で、それが爲幾度死なうと思つたかしれませんが、近頃貴女様の御親切な記事を拜見致しまして、僅に神の存在を認め、是非貴女様にお願ひ致したいと存じますが、おきゝ入れ下さるでせうか、若しおきゝ入れ下さいますなら、くわしい事を手紙で申上たう御ざいますから、此次の誌上でどうぞ御住所をお知らせ下さいまし（濱ちどり）

▲小崎千代子様の御住所はどちらでせうか、次號で御きかせ下さいまし（みぞれ）——赤坂區靈南坂町十四番地です、

▲水戸の中根雅子様、もしや貴女は下市の方ではありませんか、クラスメートなりし君ではありませんか、御忘れ遊して？安藏蝶子様とならんでいたつる子ですよ、おなつかしいわ（富山縣射水郡小杉町宮城つる子）

▲あや子様、御親切様に早速御返事下さいましてありがたう御座います、嬉しくつてくりかへしてよみました、ムーンライトソナタは歌曲かと存じましたら、そうでないのですつてね、あなたは御好きで入らしやるさうな、御近かつたら何がはして頂くのですが、遠くですからざんれんですわ、私は音樂の素養が御座いませんから、とても自身でたのしむ事は出來ませんが、伺うのが大好きで御座いますの、あなたはおかいの御文が御出來になります事、私ほんに感心いたしました、どうぞ此上とも御勉強遊ばせよ、私の年はもうおばアさんで御座います、でも心はいつも十八九の氣で居ります、又何かおもしろい御歌でも御座いましたら、御きかせ下さいませな、どうぞ御からだ御大切に（神戸富久子）

▲皆様、新年御目出度う御座います、何卒繪はがきの交換を御願致します、又別に私は此愉快な新年から研究の爲め英文の交換會を開かうと思ひます、何卒英語を御學びの御方は御賛成下さい、（東京市芝區新網町北廿番地三浦方河島[illegible]）

子)

▲私は子供の娯樂の爲に各地の名所繪端書を集めて居りますから、同趣味を以てござい〻の皆様と繪はがきの交換を御願み致ます、京都、伏見宇治地方なれば、御好に應じて御送り致します(京都府伏見町四丁目中加壽)

▲皆様の中に本誌增刊叢く手紙をお持ちの方はぜひ御ゆづり下さいませんか、亦御都合によつてお貸し下さつてもよろしいです、御禮は必ず必ず致します(靜岡縣駿東郡富士岡村小澤照子)

▲おなつかしい諸姉様、私は花の都より二十五里ばかしへだつた片山里に母と祖母とで淋しく暮してゐるものでございます、たゞ女學世界を何よりの樂みとして毎號愛讀致して居ります、どうぞ誌上で御交際をねがひます、なを内藤様上原様お筆をお採ひ下さいませ、一月後はたくさんに(上州華江)

▲記者様、原稿紙でも端書でも鉛筆ペンなどで書いてはいけないのですか、又倶樂部は端書にかぎるのですか、(館村芳子)筆で明かに書いて下さい、倶樂部は端書に限ります、

▲叢く手紙お送り下さつて難有う、あの差出人はどなたでせうか、消印に兵庫和用とあつて、しづ子とかいてありますが、どうかお所を明して下さい、(大阪南區鰻谷西ノ町六県江棠奈子)

▲紀州の濱の邊に御靜養中の孤子様、涙なのんで御文拜見致しました、それでなくとも感情深き妾の胸には唯々懸し涙に泣くのみで御座いました　も決してあんな悲觀はなさいますな、病は氣からと申しましてね、折角の御保養がむだになります、それにしても貴女は畫がお好き、露白く夕映へ紅き朝な夕な眺めるスケツチストを慰むなつかしの濱の景色、み筆に染めて御送り下さい、(浪花の北石田愛子)

▲皆様のお内で、若し昨年一月發行の「マダ▲振り」及び「六月號」の本誌を御不用のお方がございますれば、誠にお手數をかけますが、御惠み下さいませんか、其嬢りに珍らしくは御座いませぬが、私は讃岐の金比羅近在ですから、その繪端書でもお返し致します、(香川縣仲多度郡十郷村大西とみ)

▲叢く手紙を御惠送下さいました大阪のはつ子様、其他の方々御住所不明の爲、略儀ながら誌上で御禮申上げます、(兵庫縣若林靜子)

▲實は女中一名入用に御座候に付御手數ながら御世話願ひ度、當方家族四人、中子供二人、官吏年頃十七八より二十歳前後の者兩三名御世話の程御願ひ申上候、(芝區南佐久間町二丁目十八番地信濃屋旅館後高松内)

▲記者様、去る九月號の讀者倶樂部に御座いました麹町のたけ子様の御住所を何卒御知らせ下さい、(麻布仲ノ町熊谷しづ子)

▲横濱の小林はる子様、住所判明せず御返事致しかねました、何本も一度御知らせ下さいませんか、そして皆様の内に昨年六月號の女學世界御持ちでしたら御惠み下さいませんか、大阪の庄田様、岡山の入江様、川越様御達者ですか、ちと昨今の御勵勢御もらし下さいな、(岐阜縣白川今井智惠子)

▲諸姉様の中に、一昨年の夏の本誌避暑號、内藤様のスイトホームの載て居る昨年の四月號及び叢く手紙、世渡り上手御持ち遊ばさば御惠み下さいませ、他の雜誌もていさゝかの御禮申上ます、(茨城柿岡町岡崎しげ子)

▲愛讀者諸姉よ、私は三四年前から女學世界を愛讀いたして居るものでございますが、お差支なくば御交際下さいませんか、御返事差しあげます(日向宮崎町旭通り野井えつ)

▲ゑはがきの交換を願ひます、(愛知縣中島郡父江町字森上松永方靜子)

▲明けましておめでたうぞんじます、(神戸市橘通り四丁目東川鶴子)

▲明けましてお目度存じます、なほ萩香様や上原様よ、ます〳〵誌上にお才筆をお揮ひ遊すよう切にお願ひ致します、(雲の都にて富子)

▲記者樣、今年からなるべく女詩人のを出して頂きたうございます、なほ内藤樣は全く女でせうか、小和日記などは骨格逞しい、何となく男性的の文體ですわ、(そよ風)

▲淺茅のまはぎ樣、私は「おてんば日記」を持て居ります、御望とあらば徒然草文藻抄と交換致しませう、(岩手縣岩谷堂町高橋とみか)

▲私は生れ付き、體が弱いので、誠に困ります御醫者にも相談して色々養生を致して居りますが、更に効がありません、昨年からは冷水摩擦と深呼吸を怠らず實行して居りますが、之れも驗しが見えません、若し皆樣の内に御丈夫に御成りになつた經驗談とか或は何か變つた養生法とかを御存知の御方は、どうぞ御手紙にて下名まで御知らせ下さいませんか、御願ひで御座います(東京府下北豐島郡池袋千〇三七岸野金太郎方賀島きよ子)

▲記者樣はじめ諸姉樣、新年おめでたうございます、本誌は益々盛になりました事何よりよろこばしい次第です、月一回の發行と四季の増刊をまち兼ねる努め日の立つ事を何ともをしまなかつた私も、一年の終となつては少からず驚きましてよ、だけど本誌が多大の慰藉と教訓とを與へて下さつた事を思へば、年なんかいくつとつてもかなしくありません、どうか今年もよろしくお願ひ致します、御禮かた〴〵御願まで(内海友千鳥)

▲愛讀者の諸姉樣、さぞ御幸福なるたのしき新い春を御迎ひ遊ばした事と御祝ひ申上げます私は北海の荒波寄する太平洋岸の漁村に住む一少女です、女學世界を友として淋しい田舍で淋しいお正月を送りますの、親愛なる諸姉樣方、何とぞ不束者ですが御導き下さるよう御願ひ申ます、(北海道の白雪)

▲岸城スクールの夕美香樣、紅香樣、須磨香樣、美香樣、荻香樣、ふるつて御寄き遊ばせな、樂しんで待つて居ますわ、(同スクールにて蘭香)

▲靜岡の寺島いと子樣、毛髪の注意に付き色々御敎へ下さいましてありがたう、麻の葉と桑のはとへ煎じて洗ひました後、水ですゝぐのでせうか、又麻と桑との分量はどの位でよろしいでせう、御手數ながら今一度御敎へ下さいませ、(操洋愛艸者)

▲記者樣、あけまして御目出度う御座います、私は支那人ですから、すべて文字が下手です、それで女學世界の讀者と申すと生意氣な樣ですがでもやはり東洋人の片われですから、道德情には變りはありません、どうか千代八千代迄も御館の榮を祈ります、一月元旦(麻布にて施峰女士)

▲記者樣に御尋ね致します、私は間接に本誌を愛讀致して居りますが、投書しても差支は御座いませんか(大阪府北河内郡甲可村大字南野長谷貞枝)どうか度々なさつて下さい、

▲讀者倶樂部の御盛んです事れ、私も愛讀者の一人です、どうか御仲間に入れて下さいな、米國のスクールガール樣おなつかしく存んじます私不束者ですがお交り下さいませ、そしてお差支なくば誌上にて御處も御知らせ下さい、(大阪にてなでしこ)

▲東京のむらさき樣、御見事なる御詠下され誠になつかしうございます、あの私の姉も西洋畫を學んでをりますのよ、どうぞ御住居をお知らせ下さい、末乍ら戀しき詩友の皆樣おさしつかへなくば御文通を願ます、(茨城縣結城郡岡田村齋藤房子)

▲新發田の白百合樣、御ぶさたのみで御許し下さいな、ちつとも遊びにいらつしやいませんのね、御ひまの時にいらしやいな、(新發田星花)

▲薩摩風俗繪はがき御入用の方は誌上で御住所御知らせ下さい、(薩南つる枝)

▲東京のいと子樣、本誌七月號御送り下さいまして有が度うございます、深く〱御禮申します、御禮を致しとうございますから御住所おしらせ下さいまし、(德島市福井とめ子)

募集（二月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲美　文（二十字詰十五行以内）

▲いろ〳〵の實驗（十五行以内）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△美文、と實驗は用紙は半紙の事△和歌、俳句、倶樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館内女學世界行とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美　文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

△いろ〳〵の實驗（賞壹圓以下）

毎月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）……金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
（定刊數……十二冊 内増刊四回……一、五、九、十一月價格同一）

郵税　一冊　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	二十八圓	二十八圓
半頁（卅二行）	……	卅三圓	廿九圓	十四圓
四半頁	……	……	十七圓	七圓五十錢
一行	……	……	……	五十錢

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

❶本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
❷御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
❸郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
❹總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十四年一月十二日印刷納本　第拾壹卷第貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　二千六百二十番　三千二百二十九番　三千百八十番

通信販賣

博通社特賣品

◎凡ての場合に責任を重ずるは當社の本領!!!

●九重もゝ引



船來ネル製にて、股引と腰巻と附隨し、取はずし自在、幾度洗濯するも伸縮せず、至て御召工合よき實用向の新案股引にて、御贈答品としても適當で有ます

（色合）玉子色、肉色、純白色、鼠色

大形	大人用	市價一、二〇	特價九十五錢
中形	十五六歳用	市價九〇	特價七十五錢
小形	十二三歳用	市價八〇	特價六十五錢

▲送料 市内五錢、内地九錢、臺樺廿二錢、清朝卅二錢

實用懷中時計



時計の如き貴金屬品は、當社の如き信用を重んずる社より御求めに限る
時間正確器械堅牢實用向の逸品

純銀側兩蓋付
器械永久不變
最優等アンクル寶石入
市價十圓

特價八圓

女持十三形、男持十七形、價格均一

▲送料（市内無料即達 地方十二錢 臺灣、樺太 朝鮮・清國各卅錢）

●新案實用 子供腹當股引



暖かきネル製にて、大小便の時にも工合よきよう、巧に仕立てある他に類例なき新案實用品にて、小兒衛生上缺べからざる必要品で有升

（色合）肉色、純白色、赤色、縞物

十歳用	特價六十五錢	四歳用	特價四十五錢
七八歳用	特價六十錢	三歳用	特價四十錢
五六歳用	特價五十錢	二歳用	特價三十五錢

▲送料 市内五錢、内地九錢、臺樺廿二錢、清朝卅二錢

◎精良品を最廉價に提供するは當社の本領!!!

大橋メール、オーダー、ビジネス

博通社

東京日本橋區本町一丁目

振替口座東京五十番
電話本局六百四十番

玄（後付の一）

新春誌壇の白眉にして萬人の

太陽

第拾七卷第壹號（既成發行）大判二百五十六頁 警拔鮮明なる口繪豐富 正價卅錢 郵稅本邦內三錢五厘

最近の歐米觀察

大浦農商務大臣
仲小路遞信次官
尾崎市長
小川代議士
談

第四回懸賞當選脚本小說 喜劇煙筒・肉親

藤公餘影……浮田法學博士
歐洲近世史論
一家の悲劇と下級政治……淺田江村
國語系統の問題……新村文學博士
現代の哲學……桑木文學博士
德川家康……三上文學博士
系統發生と國家……石川理學博士
近世の歌謠……佐々醒雪

小村外務大臣論 三宅文學博士

婦人と思想談……與謝野晶子
劇壇雜感……土肥春曙
倫敦の印象記……長谷川天溪
臺灣の理蕃事業……內田臺灣民政長官
美術會氣焰錄……無名氏
社會主義と日本國民……戶田法學博士
官僚政治論……建部文學博士
國家の價値幾何ぞ……福本日南

支那將棋に就て 廣瀨五段・將棋秘定跡 小野五平

新年大附錄

うらおもて……饗庭篁村
二代景清……塚原澁柿
紀念會……田山花袋

東京 博文館 本町

女（後付の二）

大歡迎を受けたる雜誌

冒險世界

既成發行★第四卷第一號★正價（郵稅）拾五錢（日本内）二錢

◉彩色口繪 火災船上の格鬪◉
珍奇挿繪『南へ消ゆる黑影』石の人猛獅を斃す

■武俠小說 强者と犧牲（讀切）……押川春浪
◉弱者は强者の犧牲たるべし、同時に强者には大責任生ずと言ふ小說◉

■長編小說 飛空潛水怪艇……河岡潮風
◉天にあつては飛行器となり、海にあつては潛行艇となる、不思議々々◉

■蠻地珍譚 人間の眼獅子の眼……巖谷小波
◉人間とライオンが睨みくらして一方は石に化し一方は睨み殺される物語◉

■熱血熱淚 頑强壯漢（完結）……春浪漁史
◉バンカラで人情に厚き英雄的青年の面目紙面に躍る◉

■鏡浦灣頭 開南丸闇中の袂別……潮風生
◉宛然水滸傳中の一節の如し讀むで泣かざる者は人にあらず◉

▼蘇生會の由來　田村江東
▼怪談放語錄　佐々不蒙古王
▼元旦の士官次室（ガンルーム）　阿武天風
▼滑稽なる騎兵練習　髭の少尉
▼サルマタ廢止論　春浪漁史
▼亥の吉出世鑑　潮風案　未醒畫

▼太陽探檢船出發　金子紫草
▼バンカラ書生松の内日記
▼經國美談 美人傳令使　赤鐵魔王
▼大奈翁の大冒險　本田羊村
▼『亥の歲』『廿五』『英雄豪傑』
▼運動各方面近事　二谷水没

▼新年大附錄▲
戰鬪艦潛航艇 卓上海戰遊戲　押川春浪案　小杉未醒畫

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

女（後付の三）

新春誌壇の白眉にして萬人の

中學世界

第十四巻第一號 （既成發行） 正價金二十錢 郵税(内地)二錢半

菊判二〇八頁外國語欄十餘頁●口繪水彩畫ペン畫鉛筆畫寫眞版十餘頁

新年大附録

■東西偉人録（紙數約八十頁）

▼ソクラテス……新渡戸博士
▼信長の性格……田中博士
▼司馬遷……福本日南
▼ダァヰン……浮田博士
▼テ、ロイテル……箕作博士
▼西郷南洲……肝付中將
▼僧契沖……上田博士
▼孔子……井上博士
▼源頼朝……山路愛山
▼龍堂和尚……安部磯雄

女（後付の四）

豪傑論……建部文學博士

なり瓢（歴史小説）……塚原澁柹

寝正月（狂言）……巖谷小波

●動物社會と帝國主義……石川理學博士
●ブロマイト繪葉書の話……鴨居工學博士
●新渡戸稲造先生（人物月旦）……山本龜城
●南極探検記（探検家シャックルトン手記）……
●前世界の物語（怪奇小説）……押川春浪
●雪中の富士登山記……小島烏水
●不可思議なる心靈の實驗……福來文學博士

▼青年諸子に寄す……伯爵 大隈重信

▼Honourを重んずる英國の學生 伯爵 林董

●法制の智識……美濃部法學博士
●海水の話……横山理學博士
●英語の學び方……高島高商教授
●喫烟する當今の學生……林田書記官長
●柳の新芽が出るまで（小品）……水野葉舟
●植物の適應性……三好理學博士
●私の勉强法……鶴見法學士

時評……笹川臨風

從兄弟同志三名物書生……河岡潮風

自治寮風雲物語……覆面子

京都の學校町

懸賞問題

■官立學校入學擬試驗問題提出……獎學賞金金壹百圓

—（應募答案の採點に與かる諸教授の發表）—

東京 博文館 本町

大歡迎を受けたる雜誌

少年世界

第十七卷第一號……既成發行

菊判紙數百二十八頁
口繪、石版寫眞版澤山
正價拾錢
郵税一錢半

（口繪）
▽尚武的服裝……三色版
▽初日の光（大下藤次郎）……水彩畫
◎皇太子殿下（海軍中將の御正裝）◎懸賞當選表紙圖案
◎獨逸皇孫殿下◎北米の我が小學兒童◎空中旅行……寫眞版

新年大附錄 **少年歷史地理双六** 巖谷小波案 尾竹國觀畫

▽ベルリンク小學校……高師小學主事佐々木吉三郎
▽天の橋立見物……井田絃聲
▽デンマークの勇將……山縣五十雄
▽賴山陽……久保文學士
▽梅の話……松村理學博士
▽少年英語……（編輯局選）
▽少年文壇……（編輯局選）
▽少年和歌……（尾上文學士選）
▽少年俳句……（沼波文學士選）
▽少年英語……（少年諸君）

◎少年小說 白梅組……巖谷小波
◎お伽評論……巖谷小波
◎冒險小說 北光丸……押川春浪
◎合作小說 冒險血面兒……武田櫻桃
▽微笑俱樂部……黒田湖山
▽猪國武士の城郭……文學博士上田萬年
▽算術かるた……竹貫直人
▽同誌會の設立……木村小舟
▽戰の話……理學博士石川千代松
▽梶原の花箙……沼田笠峰
▽懸賞智惠競べ新題 金のメタル出來せり





東京本町 博文館

女（後付の六）

大歡迎を受けたる雜誌

正月號大附錄

少女遊戲雙六

巖谷小波案　榊原蕉園畫

▼梅島先生……巖谷小波

○窓の灯……西村渚山

▼花簪の箱……與謝野晶子

○朝鮮物語……武居芳成

▼感謝の心…文學士三輪田元道

○笑顔の研究……黑田湖山

▼手帳の中より…沼田笠峰

○春の光……竹貫佳水

▼魔人宮城……押川春浪

○皇后陛下の御歌……佐佐木信綱

▼少女會館

各室とも愛讀者のために開放されてあります

（表紙）羽子　杉浦非水

（口繪）マンドリン　三色版

（口繪）わか水　丸山晩霞

外に寫眞版豐富如例

第六卷第壹號

少女世界

（既成發行）

菊判紙數百二十八頁

口繪豐富如例

定價金拾錢

郵税（本號に限り）一錢五厘

博文館



少女雜誌の花として、日本女子敎育の光りとして、世に高評を博しつゝある少女世界は、六卷の春を迎ふるとゝもに表裝をあらため、記事を豐かにして、家庭と學校との好讀みものとなるやうに、ます〳〵力をつくします。先づ、正月號のいかに優れてゐるかを見て下さい。

新撰名勝地誌

全部十二冊

田山花袋君編

第一 畿内
第二 東海道西部
第三 東海道東部
第四 東山道西部

續刊
第五▲東山道東部
第六▲北陸道
第七▲山陽道
第八▲山陰道
第九▲南海道
第十▲西海道
第十一▲北海道樺太
第十二▲臺灣琉球

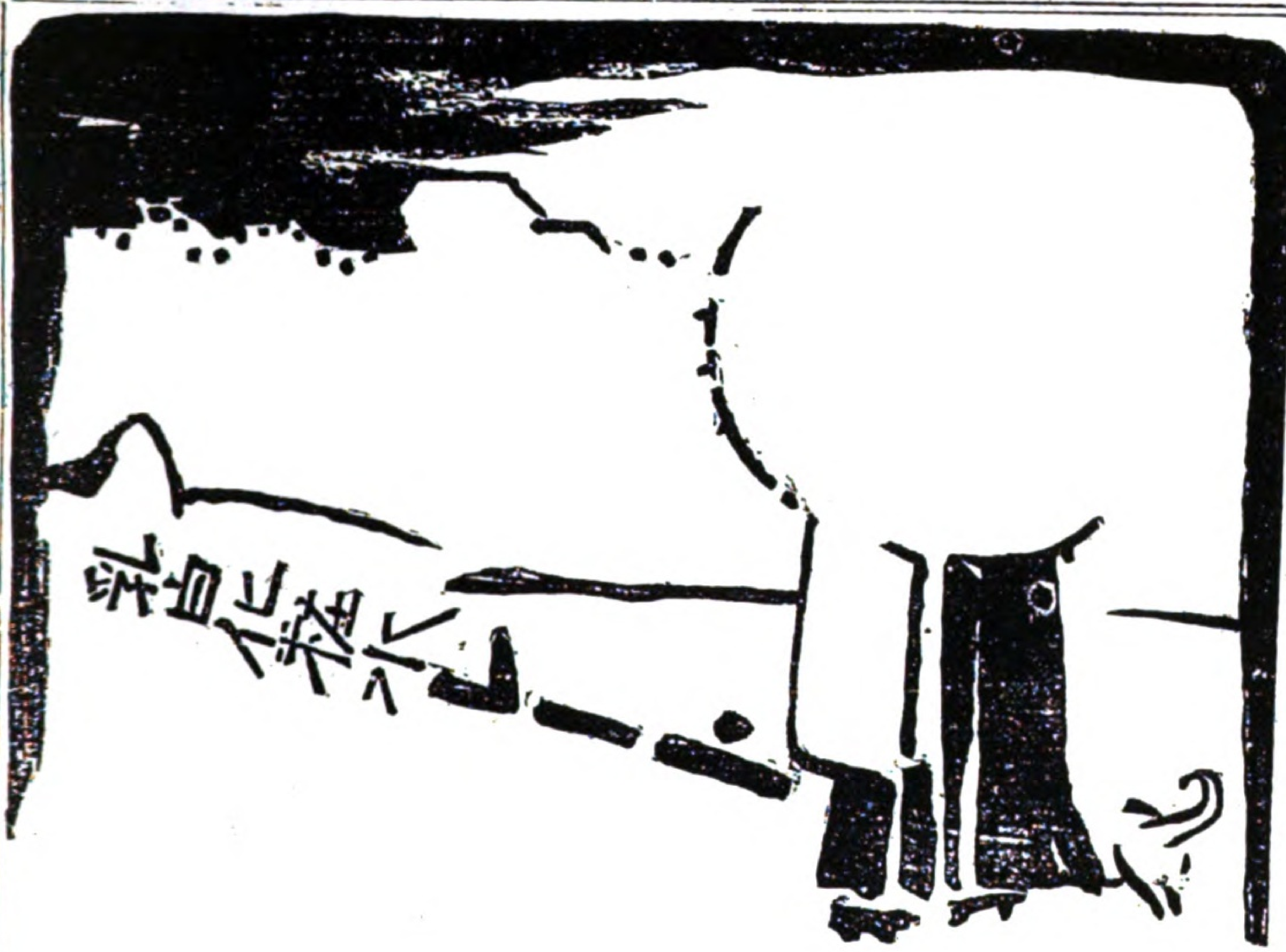
毎編 洋装四六判總クロース 紙數約五百頁 正價六拾錢・郵稅十錢

本書は日本全國に於ける名勝を半ば地誌的に、半ば案内記的に記述せんことを企てたるものにして、全部十二巻より成る。其特色を謂へば、交通路に由りて名勝を記したること其一也、産業沿革にも出來得る限り注意を拂ひたること其二也。ととめて新しき材料に由りてこれを記したること其三也。旅行者の伴侶たらしめんが爲めに紙質を精選し、裝釘を堅牢ならしめたる其四也。ことにその最も特色と稱すべきは、編者の足跡殆ど海内に遍ねく、殘山剩水と雖も訪はざるなく、探らざるなく、從つて其記述と排列と頗る精確を極めたること是也、況んや編中處々に各名勝地の寫眞數十葉を挿入し宛然人をして足其地を踏むの思ひあらしむるに於てをや。旅行せんとするもの、各地の名勝の分布を知らんと欲するものは來つて本書を看よ



發兌元
博文館
日本橋本町三丁目

女學世界
(每月一回廿六日印刷納本)
(明治四十四年一月二十日印刷納本)第拾壹卷第貳號(增刊)(光榮ある人生の春)(明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)



定價金貳拾錢●郵稅貳錢

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑧①
明治44年1月（第11巻第1号、第11巻第2号）

2010年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社マイトベーシックサービス
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3904-0